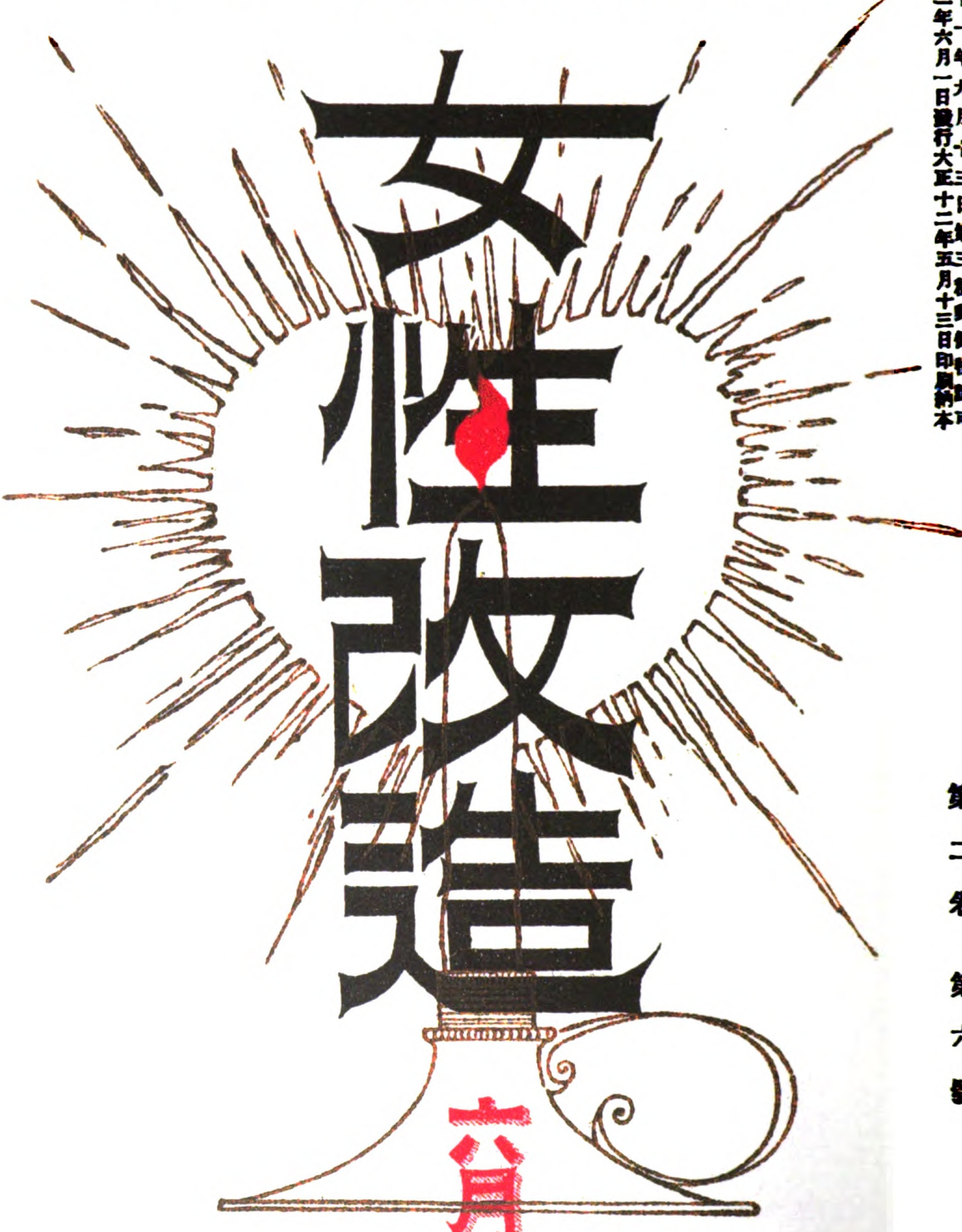
大正十一年九月十三日第三種郵便物認可
大正十二年六月一日發行大正十二年五月十三日印刷納本

THE JOSEIKAIZO

女性改造



第二卷第六號

六月號


ハリキン石鹼
品質が廣告以上に良品なりし時
購買者の喜びは頂點に達します
良品廉價の眞實を認められた。
ハリキン石鹼が非常な需要を喚
起してゐる事は誠に喜びに堪へ
ません益々御愛用を願ひます。
東京・大阪 ハリキン化粧品株式會社

◇一條忠衛著

七版 男女道德論

（四六判最上製 金貳圓五拾錢 送料金十八錢）

（人生の歷史は男女の歷史である
一切事件は男女を背景としてゐる）

（目次の一班）緒論：男女道德の倫理學的地位：男女自覺：家族制度に於ける一妻多夫一夫多妻：男女同權の意義：家と男子：蓄妾と貞操：夫婦財產制：男女兩本位：性と個人と社會：戀愛と性慾：性慾の滿足：性慾の刹那的快樂は果して人生の理想か：姦通と避姙：私生見に對する覺悟：沈默と自殺：結婚の意義：愛情のない夫婦：虛榮結婚：夫の專橫と放蕩：妻の不貞：肉慾滿足說：結婚難：離婚の意義：離婚と自覺：再婚：獨身者の種類と事情：醜業婦の處分：私娼を取締れば良民間に私通：結論……

尾上登良子著

頭註 源氏物語大意（三版）

四六判最上製美本 全壹冊 貳圓五拾錢 送料十八錢

本書は源氏の意を細かに書きくだきて現代の讀者の頭腦に容易に消化せしむる工夫したるもので大意とは云へ文情詞勢語氣などもなるべく原本の儘を傳へんと苦心したる源氏物語手引草と云ふべき書也

—（女性參考書）—

◇井上庄三氏新譯

●性と自我（若き婦人のために）

定價金貳圓稅十二錢 全壹冊

◇羽太銳治氏著

●性慾敎育の研究

金貳圓五拾錢稅十二錢 全壹冊

新刊

◇稻毛詛風新著

反省と憧憬

四六判最上製 貳圓五拾錢 送料金十二錢

人生は創造である。創造の過程は反省と要望とを兩端として進行する。著者今や不惑に近づいて嚴肅に前半生を反省すると共に熱烈に將來を憧憬してゐる。本書は人生の追分に立つ著者の赤裸々にして深刻な感想錄である 多年好評を博せし「向陽臺より」の長篇も輯めて本書にある大創造の抱負を秘めて既に歐米留學の途に上つた著者を識る者は勿論意義ある生活を營まんとする者は本書に就て眞人の眞諦を見よ。

東京市神田 表神保町七 **大同館** 振替貯金 東京八七貳番



女性改造六月號目次

口繪～～髪を結ぶ女……………………(三色版)

無名と有名との話……………………卷頭言

人間主義と超克主義……………倉田百三 二

女子の建設的生活と性の道徳……長谷川如是閑 一九

女性性教育……………京都大學教授 山本宣治 三五

毒婦妖婦……………井上啞々 五〇

父獨歩を憶ふ……………國木田虎雄 五九

島田對舟木事件批判

―私の心持ち……………島田清次郎 六三

―リビドウの原理から見た島清事件の父と娘……………室伏高信 六四

―結婚せしむ可きか？……………千葉龜雄 六八

―過渡期にある現代女性の悲哀……………三輪田元道 七三

佛人 フラマリオン作　高瀨 毅譯

（四六判上製）

定價貳圓　送料十七錢

科學小說

此世は如何にして終るか

忽十版

天文學者の世界への豫言

世界は將に更新の轉機に面してゐる、此のとき我々は將來いかなる新道德に當面し、そしていかにしてよりよき生活を建設すべきか、そして人類文明の極致は如何——、このおもしろい問題を解決せんとした本著者は世界に於て有數な天文學者である、この人が自然科學を經とし、精神科學を緯として人生觀を科學的に斷じて新生への道を豫言したのは全く空谷の跫音である。新時代の青年士女は將に此の如き有價値な小說を讀了して永遠博大の思想を養ひ、そして趣興多き人生の未來に憧憬すべきである。

東京芝　改造社　振替東京八四〇二

近代の戀愛觀

文學博士 廚川白村著

我國ほど戀愛を遊戲視する國民はなく、そして人格的に蹂躙されたる結婚を强ひられて恬として顧みない。玆に憤りを發したる著者は戀愛こそ人間の最高善であり、人生の最高理想であると戀愛至上主義を提唱して全人的の戀愛觀を發表した。此戀愛觀が幾多の因襲と、傳統を排除していかに新時代に奕躍たる巨光を發して居るかは本書のズバ拔けた賣行きに徵して明瞭である似而非戀愛や因襲的の結婚に惱める人々は眞摯にして熱情ある本書を一讀して環境の障害を斷乎として排擊すべきだ。

九十版

◇定價貳圓五拾錢◇

四六判上製◇送料十七錢◇

東京芝區愛宕下町　**改造社**　振替東京八四〇二

ゾラ原作　三上於菟吉譯

獸人

第三十四版

戀愛の十年前の情人をさへ生かして置けぬ嫉妬狂。美女を見れば脂切つた白い肌にわが齒を立てゝムズリと嚙み裂かずにはゐられぬ傷害狂・異性の汚物を拭いたハンケチや汚れた手袋を寶物のやうに崇める愛物狂。盗み侵されはしまいかと强迫觀念に夜の目も合はされぬ隱匿狂。戀の叶はぬ恨から。列車を衝突させて自殺する怖しいはたち娘。妻の財産を横領しようとして蓄積毒殺を敢えてする老人。女といふ女を一目でたらしてしまう凄い色魔なぞが活躍して全篇血なまぐさい殺人や。ねば土のやうな情慾の匂ひで充ちた恐怖すべき大作。しかもそれを裏づけて大ゾラの深甚な人道觀念はまるで潮のやうに凄じく漲るのである。この作者の三十に餘る長篇の中で一ばん人間的な魅力を持つたのは何と言つてもこの「獸人」だ。

定價參圓　送料十九錢　四六判上製

東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二



香水界空前の快擧
四月一日より御買上げの方に
（有名化粧品店藥店にて販賣す）
小瓶二個ニ壹枚
中瓶一個ニ壹枚
大短一個ニ貳枚
特大瓶一個ニ四枚
宛進呈
宮内省御買上品
原料香水
オリヂナル
香水用ハンカチフ
ローン製
優美花模樣入
無代進呈
衛生口紅 カオール 本舗
株式會社 安藤井筒堂
東京日本橋區水天宮前



佛展にて最も評判になつた（髪を結ぶ娘）　ルノアール

の

らゆる表現を美しくするものは解放された魂である。著者は特に此點を高調し、未だ嘗て何人も試みざる新しい方面から、近代の女性を批判し且つ讃美しつゝある

熊谷一彌著

女

定價 貳圓參拾錢
送料拾七錢

白熱的大歡迎!!出版一ケ月に

白熱的大歡迎!!出版一ヶ月に滿たずして十五版を突破す、全國の小學、中學、女學校、高等學校、大學よりの註文殺到す。

第二編 野球 三宅大輔 （五月下旬發行）
第三編 競走 金栗四三 （五月下旬發行）
第四編 籠球 山田浩司 （六月中旬發行）
第五編 水泳 梅澤親光 （七月上旬發行）
第六編 ラグビー 香山蕃 （八月下旬發行）
第七編 フィールド 益田弘 （九月上旬發行）
第八編 トラック 山岡愼一 （九月中旬發行）

發行所
東京芝區愛宕下町
振替東京八四〇二
改造社

無名と有名の話

卷頭言

有名は無力です、有名はたのむに足りない、總ての革新は無名者より。

無名には將來がある、有名には悲慘な殘骸がのこされてあるのみです。

有名は上つ調子を意味し、輕薄を意味す、文壇でも、政界でも有名な人は前途にもう大した事はできない、わたしは有名な人に逢ふより無名の人に逢ふのが樂しい。隱れたる力、現れざる趣味を憧憬する、日本人の病は活字になる病である、有名になる病である、永らく隱忍し、久しく無名で甘んずる人が社會生活に一番たのもしく、且つ一番恐ろしい。總ての轉換機に遭逢している我國に、實際の革新を擔當し得る人は地殼に潜む人でなければ出來ぬ、有名な人では駄目である。

私が敬愛する本誌の愛讀者は有名病に冒されざる人であつて欲しい 活字の上の紳士淑女でないことが好ましい、近來社會の數多い不祥事の、その源をなすものは總てがこの有名病であることをつく〴〵悟つて欲しい。



人間主義と超克主義

倉田百三

我々の精神生活とは生命の超克的努力の過程である。我々が現にあるところの狀態と當にある可き狀態との對立、即ち現實と理想との對立が存在する事は精神生活の豫件である。我々の精神生活は此處から出發する。精神生活とは現實を理想に一致せしめんとして、念々に現實を超克して行く生命の營みの過程である。併し乍ら理想と現實との對立は如何にして生ずるのであるか。此の對立が豫件であるとすれば其れは同時に又與件でなければならない。我々の現實は固より我々にとつて與へられたるものである。然らば我々の理想は此の與へられたるものに對して、未だ與へられざるものであるか。然り、其れは少くとも現實と同じ意味に於いて我々に與へられたるものではない。其れは未だ與へられざるものであるが故に我々は此れを獲得せんとして努力するのである。併し乍ら理想は又異なれる意味に於いて依然として我々に與へられた

るものである事を忘れてはならない。其れは考へ得可きもの、一つの状態として思ひ浮かべ得るもの、我々に取つて現實たり得可き筈のものとして我々に與へられたるものである。「積極道」の中に書いた如く生命の内容をなすものは方向を附せられたる可能性の形に於ける與材である。我々の現實は此の方向を附せられたる可能性を帶びたるものとして、已に理想的要素を具へて居る。則ち當にある可き状態に到達せんとしつゝある一つの状態である。此の可能性と方向とも亦我々に取つて與へられたるものである。理想とは此の與へられたる方向に與へられたる可能性を發展せしめたる究極として、我々が思ひ浮べざるを得ないところの状態である。此の意味に於いて理想も亦現實と同じく我々にとつて與材であり、其れ自身に——其れが到達される事なしに——實在性を持つて居る。此の方向と可能性とを、換言すれば、理想的要素を除外する時、現實とは與へられたる事實でなくして、抽象的概念である。我々の本性が至上善に到達せんとする可能性を與へられて居るならば、此の可能性を認めずして我々の現實と云ふものは何所にも存在しない。我々が如何に醜く、惡しきものであつても、我々の現實は單に醜く、惡しきものではない。我々の現實とは至上善に到達せんとする可能性を帶びたる醜く、惡しきものである。逆に云へば、醜く、惡しき段階に於ける至上善に到達せむとする可能性である。眞に具象的に我々の現實の事實を考へる時、我々は現實に此の理想的要素を含めなければならない。此の理想的要素を認めざる者は反つて現實に徹底せざるものであると云はなければならない。現實主義が如何に徹底しても此の意味の理想的要素を否定する事は決して出來ない。現實主義が理想主義を排斥する事の正當なのは、此の可能性の旣に開發したる段階と、未だ開發せざる段階とを精確に辨別せずして、唯だ其の可能性を强調する事に依つて、其れが恰も已でに開發したるかの如く考へて努力を怠る理想主義を排斥する場合のみである。反對に其れが未だ開發せざる故を以て此の可能性其のものをも排斥し去らむとする時、かゝる現實主義は不當である。何となれば其れは充分に現實的でないからである。我々は我々にとつて現實なる此の可能性の方向を洞察しなければならない。當に開發す可くして、未だ開發せざる可能性、則ち我々の現實の

構成要素として、現實の中にたゝみ込まれて居るところの理想を承認しなければならない。其れは我々の現實の中に眠れる像である。此の像を呼び醒まして、我々の現實なる醜き、硬き材料なる石を、一つの美しくして生々としたる彫像に完成せしめんとして、念々に努力して行くところに我々の現實の意義がある。理想が到達せられたる時にのみ現實の價値があるのではない。現實は念々に價値がある。それは恰も理想が到達せられたる時にのみ價値があるのではなく、到達せられつゝある念々に價値があるのと同様である。何んとなれば生命とは成長して行く過程の全體であるからである。理想も現實も等しく我々にとつて所與である。造化にとつては其の創造のモチーフと材料とである。其一つをも缺ぐ事は出來ない。故に我々の現實は此の可能性の發展の或る段階として悉く其れ〴〵に價値を持つて居る。併し乍ら其の可能性の發展の度に比例して價値の高下の差別がある。其れ〴〵の段階に於いて善であるが、至上善の段階に達する迄は止る事は出來ない。往相の世界に立つ時、（「道心の三つの相に就いて」參照。）善とは至上善の段階のみであつて其れ以外の階段には多少とも惡と醜とを含むで居るからである。故に我々は不斷に現實の狀態を超克しつゝ至上善の狀態まで登攀せむとして努力しなければならない。至上善の世界とは我々にとつて考へ得べき生命の最後の分化發展の狀態である。其時我々の生命は最も豐富に、最も力強く、且つ最も調和したる狀態にあるものとして我々が思ひ浮かべ得る處の一つの計畫、構圖である。故に我々にとつて理想とは一つの試みの下圖の如きものである。併し乍ら其れが如何に下圖であつても我々の人格が最も完全なる狀態に達し得る爲めには、必ずそれに據つて、其通りを實現せざるべからざるが如き或者である。故に理想は未だ實現せられざるものであつても、我々にとつて動かすべからざる價値を持つて居る。否むしろ我々が念々に實現し行く現實は、此の理想に依つて、初めて價値あるものとして允許されるのである。其處に動かすべからざる理想主義の根據がある。故に我々が人格の完成を志して精神生活を營む時我々の興志を以て或る階段の人格を撰びそれを以て安んずる事は出來ない。我々が既に人格の完成せる狀態として或る理想を思ひ浮かべ得る限りは、其の理想に到達せむとして不斷

に登攀しなければならない。素より假令理想に到達し得ざるも、人格はそれ〴〵の段階に於いて其の價値を持ち得、然も其の階段に特殊なる美と味ひとを持ち得る。例へば我々が人間らしさ（ヒユーメン）と呼ぶところの人格の或る階段は、充分に我々を惹き着けるに足る美を持ち且つ其の階段でなければ現はれない特殊な味ひを持つて居る。其れは寧ろ我々に最も親しき（フアミリアー）、其の世界にあつて最も「我が家に在る思ひ」のする、温かき呼吸を感じ、また此のなつかしき地の匂ひのする段階である。我々は其の特殊の味を人間味と呼むで此れを愛する。此の世界に在つては、我々の怒りや、憎みや、嫉妬や、激情や、哀訴や、一言に約せば人間性の缺點も、温かく受け容れられる。我々は人間としてかくの如き缺點を持つが故に、他人のかくの如き缺點にも同情する事が出來る。侮りをうけて怒る者や、戀慕して嫉妬する者や、悲しみに打たれて哀訴するものを見る時、我々は其の心持ちを身にしめて同感する事が出來るが故に、此れを裁くよりも此れに愛を感ずるのである。併し乍らニイチエが「人間性は超克せらるべき或るものである、」と云つたやうに我々は此の人間性の段階を以て滿足すべきではなく、此れを超克してより高き段階に登攀しなければならない。例へば嫉妬して居る自分の相を淺ましきものとして、又哀訴して居る自分の相を弱きものとして斥け、自分の　りに堪へ得る丈けの段階に迄登攀すべきである。此處に我々の超克的努力が始まるのである。我々が此の人間性の段階に終始して、より高き段階を欲しないならば、それは自我感情の稀薄なるものである。我々は時代の或る反動的趨勢や、個人の生長の或る閲歷に依つて、特に此の人間性の段階に惹き着けられる時期があるものである。そして其の時期は確に必要である。少くとも此の段階を一度通過しないならば、如何なる高き段階に於いても、貧弱にして狹隘なるものとなるであらう。即ち超人としては其の洞察と憐憫との對象の缺乏となり、聖人に於いては其の包攝と慈愛との世界の行きわたらぬものとなるであらう。併し我々があまりに長く此の世界に足を留めすぎ、其の味に馴染みすぎるならば、我々の人格は高貴なるものとなる事から妨げられるであらう。我々は人間性の自然を無視する僞善や、地の味ひを解せずして徒らに雲の上の事のみを說く或る時代の思想の潮流に食滯する時、

反動として人間性に無邪氣となり、率直となり、地の味に執着せむとする傾向を生じる。今日の時代を支配して居る現實主義はかくの如き反動の一種の現はれである如く見える。併し乍ら人間性の段階は我々が其れを通してより高き段階に登るべき一つの段階である事を忘れてはならない。それは我々が一度把握して後超克すべき段階である。我々が後に見残すべき一つの世界である。精神の海を渡らむとする者は多くの港々を經て、彼岸に達しなければならない。我々が船出して、一つの港に碇泊しても、やがては其の港を後ろにして航路を進めなければならない。例へば此處に一人の人があつて、自分の醜さや、弱さを隠さずして隣人に打ち開け、或は訴へるとする。其時其人は愛らしく、人間らしく見えるであらう。かくの如き人は又其の人間らしき態度に依つて、恐らくは仲間をつくるであらう。そして其の仲間同志の間に於いては、其の弱さと醜さとは互の同情と親密とを醸し、愛と相互扶助さへも生じるであらう。それは少くとも自己の醜さと弱さとを隠蔽し、防衛する僞善者が虚僞な社交を以て、冷やかに相反目するよりも確かに人間らしいことである。併し乍らかゝる仲間の世界に於いては其處に相互の缺點と弱さとを是認し合ふ卑しさがある。此れを鞭打たぬ姑息がある。其の温かき空氣の中には、かのツアラツストラが極力卑しむだ處の「同情」に依つて、相互の醜と弱とを相殺し、帳消して、一層高き世界に向かつて登攀する勇氣を蝕ましむる一種の黴を含む濕氣がある。例へば、かくの如き人間らしき仲間が火鉢を圍んで親しく語り合つたとする。其處では女の話や、金の話や、其他様々の、常に我々の心を捉へて居て然も高尚ではない處の話が、樂々と話し交はされる。然もかくの如き世界に於いては、眞面目なる話は「氣障」として排斥せられる。女が欲しいと告白する事は欲しくないやうな面をすることよりは確かに人間らしいであらう。然し自分が女がほしいからと云つて、他人も欲しいだらうと忖度し、（假令それが當つて居ても）其の告白を強いるが如き、所謂人間らしき態度は卑しい。自分の内なる肉欲を超克せむとして努力して居る時、我々はかくの如く率直に女ほしさを口にする氣にはなれない。然も我々は女がほしくないのではないが故に、相手に對して反抗するわけにもゆかない。若し反抗すればそれは

氣障なものとなるであらう。故に我々は苦笑を以て（恐らくは己れ自らにも對する）其の仲間を去るほかはない。かくの如くして人間らしき仲間は我々の超克的努力を阻みかゝる努力者を孤立せしめる。又自己の價を低くして、矜りを傷つけて、他人の前に自分の弱さと醜さとを露出して購ひ得る人間らしさは低卑である。其れは或る溫か味と、正直と、愛嬌とを具へて居るけれども、高貴ではない。現代の人々は此の高貴と云ふ言葉に對して、反感を持ちすぎて居る。我々は低卑を離れて高貴を願はなければならないと云ふ當爲を如何なる時代と場處とを問はず、公々然として主張して差支へない。如何なる時代であつても、我々が低卑に安んじていゝと云ふが如き事は許されない。今日極めて不人望な此の言葉は、精神生活に於いて、苟くも人格主義の立場に立つ限り、決して離す事の出來ない概念である。今日に於いては、自分は寧ろ人間味と云ふ言葉に食滯する。若し人間味とは人間として自然に與へられて居る傾好性を現在の段階に於て是認し、それをして其の附せられたる方向に向つて發展せしめる事を遮斷する事に依つて生ずるものであるならば、かゝる人間味は懶惰若しくは偷安である。しかのみならず、それは又不自然である。我々は其の本性に從つて、自ら高貴を願ふやうに造られて居るものだからである。例へば嫉妬や、憎惡や、哀訴をそれ自身に是認するが如き事は許さるべき筈のものではない。我々は此等のものを人間性の或る段階として是認し乍ら、然も此れを低卑なるものとして否定し、自己の人格の矜りの爲に此れを克服せむと努力しなければならない。還相の立場に於いて許さるる此等のものも往相の立場に於いては此れを排斥し、棄却しなければならない。かくして自分の後ろに見殘したる段階として、自分には許さずして、他人にはしばらく此れを許して、自己の觀照と慈愛との對象となさなければならない。人は或は他人に對して自分をより高き段階に置いて、觀照し慈愛するが如き事は僭越であると云ふかも知れない。互に仲間と共に手を取つて惱み、泣き、扶助する僚友の思想を悅ぶ或る種の人々は、かくの如き態度を他人に對して取る事も、他人より取らるゝ事も好まないであらう。併し乍ら精神の世界に於いては階級は嚴存する。一つの段階を超克して、より高き段階に登攀したる者は、自らより低き段階にある

者に對して同悲よりも慈愛を、共に悩むよりも觀照せむとする立場に立つのは自然且つ當然である。人爲的な、經濟的な階級でなく、德に據る階級は排斥すべき何等の根據も存在しない。若し他人から觀照され、慈愛さるゝ事を屑しとしないならば、自ら其の段階を超克する事に依つて、其の傷ついた矜りを回復する事が出來るのである。固より斯の如き　りの傷つけられたる感じは當然なものであつて、それを厭ふ心は正當である。只自ら低き段階に在り乍ら、此れを超克せむと努力せずして、只慈愛され、觀照される事のみを避忌せんとするは無理である。其れは恰も高き山に登りたる者に麓に在る者が低く見ゆることが止むを得ない如くに止むを得ない。聖人が我々に對して憐愍の情を催したからと云つて聖人を責める事は出來ない。若し我々の矜りが傷つくならば、聖人の域まで登高する他はない。ダンテの「神曲」や、スエデンボルグの「天國と地獄」に於いて、天國にも階級がある如く、德の高さに從ふ階級は不合理ではない。一度人間性の味と美とを把握して後、此れを超克したる者は、自ら人間らしさに對して觀照と慈愛との心を起さないわけにはゆかない。嫉妬の苦しみを經て平靜に達したる尼は、戀の女を憐れまないわけに行かない。然も自ら此れを超克したのは其の人間性の中に含まるゝ弱さと醜さとを自覺したるが爲であるが故に、人間性の段階にある人々に對する愛は彼等をして此れを超克せしめむとして勸進する行爲となつて現はれないわけにはゆかない。ツアラツストラが愛と同情とを區別し「其の同情を超へて一つの高處を持たざる總ての愛する者は禍ひなるかな。」と云つたやうに、我々は他人と同悲し、若しくは同じ心になるのみならば眞の愛ではない。眞の愛は其の中に同情を超へたる一つの高處を持たねばならない。故に一つの段階を超克したるものは其の段階に殘存せるものを眞に愛せむと欲する時、其れは手を取つて泣き合ふ同情でなく、鞭打ち、勵ます鉗鎚とならねばならない。此の意味に於いて、自分は彼の仲間若しくは僚友の感じを好まないものである。若し相互の醜と弱とを互ひに是認し合ひ、他人を裁かざる事と引き換へに、己れを裁かれざることの保證を得て、其處に同情と親和とが生じたのであるならば、かくの如くにして生じたる平和は一つの秘密契約に依る妥協であり、此の妥協の上に成立す

る仲間は、恰も悪人と悪人とが其の互ひの悪を是認し合ふことに依つて造るところの結社に似て居る。或ひは相互の秘密を握り合ふ事に依つて、傷物と傷物とが一つに組み合ふ徒黨に似て居る。其れは一種の一致せる利害關係の組合である。我々は自分が罪惡を犯し、其の罪惡を他人に知らるゝ事を怖れる時、かくの如き仲間や、組合に加入せむことを勸誘されるものである。其の間の消息は實に卑しく、且つ恐ろしい。自ら罪を犯す者は他人が罪を犯すことを喜ぶ。其れは仲間が出來るからである。其の仲間に依つて自分の罪惡が非難を免れ、又相手と相殺する事に依つて其れが恰も罪惡ではないかのやうに見えるからである。其處には又人間性の或る哀れむべき弱さもある。誰れか自己の醜くき相を鏡に映して見る事を好む者があらう。我々は自分を糊塗し、僞瞞し、或ひは麻痺せしめて、自己正視の苦痛から免れ度くなる。あのストリンドベルヒの「ペリカン」の中に出る母親のやうに、他人も亦自分の如く罪を持つて居る事を知る事は、せめて自分の心の安息である。かくて罪のおとづれは善のおとづれよりも罪人に取つて慰安である。かくの如くにして我々は自己の醜惡を蔽ひ若くは糊塗せんとする偸安の爲にも仲間を求める。我々は又人間性の段階の美と味ひとをその弱さと醜さとに眼を塞いで、其の儘に是認し、强調せむとする爲にも仲間を求める。其處には最早前者の如く良心の苛責なく、寧ろ一種の道德的興奮に近き熱情を以て、我々の其の弱さと醜さとを擁護せむとするのである。我々が超人的なるものに對して人間的なるものを、キリスト教的なるものに對して自然的なるものを、リファインされたるものに對して粗野なるものを、貴族的なるものに對して民衆的なるものを擁護せむとする時、我々は常に或る道義的に近き熱情を持ち、且つ常に類團を形成する。文藝復興や、今日の民衆運動の如きも此れに屬すると云つていゝ。かくの如き熱情ある民衆に對しては、此れに反對する、若しくは之を超越する者の聲は其の耳には響き難い。彼等には自ら内に恃むところの根據があるからである。然し乍ら、我々はかくの如き類團をも亦我々の眞實の登高を妨ぐる仲間の一種として、卑しむことを忘れてはならない。少くとも卑しみ得るに堪へる丈けの冷靜を持たねばならない。此の超越的態度なき者は眞に獨立せる精神生活を營み得ないも

のである。我々が精神生活に於いて、最も警戒を要するのは「反動的態度」と「同情」とである。此の兩者は我々の眞理を觀る眼を曇らせ、歩みを本道より外らして、迷惑せしめ若しくは徘徊せしめる。共に我々をして主觀的偏局に陷らしめ、客觀的公正を失はしめる。我々は我々に先立つ時代が又我々の住む時代が如何であるからと云つて、其れに反動して自分の態度を偏局せしめてはならない。我々に先立つ時代が現實を無視して理想主義に走りすぎたからと云つて、我々の住む時代に理想を無視して現實主義に走りすぎなければならない事はない。我々の住む時代が地に着きすぎて天を忘れて居るからと云つて、自己が地を忘れて天につきすぎねばならない事はない。其處に時代の潮流に對して敏感すぎる者の偏局がある。精神生活者はあまりに潮の干滿に感じ易き河口湖の如く、若しくは外界の氣壓を感じ易き晴雨計の如くであつてはならない。自己が天地の間に絶對的に追究すべきものを追究し、取り容るべきものを、其の正當なる限界に於て、取り容れねばならない。自分一個に託されたる生命、魂を天地の間に於いて、如何に生かし育てるかと云ふ事が、我々にとつて絶對的に必要なる事であつて、時代と社會とは此の絶對的條件に、正當に影響する權利を有する相對的條件にすぎない。此の意味に於て我々はすべからく時代を超越しなければならない。自分は寧ろ其の人の個人的一生の生長の歴史の上に生ずる「時代」の影響によつて規定さるゝ事を、內面的にして根本的なる精神生活者としての態度であると思ふ。例へば、青年時代と壯年若しくは老年時代とに於いて我々の思想が相違するのは、我々が一つの境地を一度把握したる後に非ざれば、他の境地に達する事能はざる根本的約束に基因するものだからである。自分の如きは自然主義流行時代に形而上主義者であり、人道主義の流行時代に人間主義者であり、人間主義の流行時代に超克主義者となつて居る。此れは自分に取つては反動ではなく、必然的な動機に依つて、內面的連絡を以つて推移して來たのである。我々が年齡の變化や自分一個の直接の環境の狀態に從ひ、思想に規定を受ける事は、その個人的、心理的な點に於て、內面的根據を以つて居る。併し乍ら社會と時代との影響に依つて動かされ易い事は其の生活が外面的である證據であると云つていゝ。其處には可成りなギヤップ

が存在する。社會や時代は素より我々の環境であるが、其れが我々の個人的生活に生々とした靈魂的な關係を持ち、我々の生活の方向を轉換せしむるが如き決定的動機となり得る力は、我々の戀愛の順逆や、肉身の生死や、愛の得失や等の個人的事情と比して、遙かに薄弱であるのが自然である。我々は精神生活の動機をかくの如き個人的事情に持たずして、歷史と社會とに持つ者の心理にはそれが如何程眞實であるかに就いて、可成りな疑問を持たざるを得ないものである。素より社會と時代とを自分一個の問題として生々と感じ得る事は實に尊むべき事であつて、貶黜すべき何等の理由も存在せざるのみならず、自分の如くインマネントにすぎる者は、其れが生々と感じられない事を自己の缺點として恥ぢなければならない。併し乍ら自己の個人的、心理的體驗に對して純粹でなく、神經鈍き者が、社會と時代との潮流に對して純粹にして銳敏なる感受性を持つと云ふ事は奇異なる現象である。それは寧ろ在り能はぬ事である。自己の個人的、心理的體驗に鈍感なる者が、其の空疎なる內面を塡充せむが爲に社會と時代との情熱に藉口せむとすることは卑むべきである。況して其處には群衆心理に依る情熱と景氣とが存在するが故に、其れは自己の空疎なる主觀を糊塗するには絕好の材料である。かくの如くして時代と社會との情熱に憑かれたるものの如く興奮する事は實に空しい。素より時代と社會との情熱は眞理なき處に起るものではない。併しそれはしばしば極めて一面的であり反動的である。我々は「もつともである」若しくは「無理もない」と云ふが如き立場に終始してはならない。此れ精神生活者が「同情」を警めなければならない所以である。「もつともである」事や、「無理もない」事に對する同情は、「併し正しくはない。」と云ふ立場を保留しない時、即ち「此れを超えて一つの高處を持たざる」時、それは一つの姑息である。我々は精神生活者としては、時代と社會とに對して自己の獨立せる足場に立つて、此れを取り容れ、若しくは排斥し得るに堪へる超越的態度を保たなければならない。かくの如き超越的立場が不可能であると云ふものは、凡そ精神生活が不可能であると云ふに等しい。それは思想の根本約束であつて、若しそれを許さないならば思想の世界は消滅する。何となれば若し初めより必ず一つの定められたる結論に達

せざるを得ない如く強いられて居るならば、其處に可能なるはたゞ方法論とプロパガンダとのみであるからである。如何なる立場をも若し否定せむと欲すれば否定し得る自由を約束として初めて思想の世界は成立し得る。此の意味に於て、思想は個人的であり貴族的でなければならない。貴族的とは其の思想の內容が民衆のそれと一致しないといふ事ではない。況して共通の對象を持たないと云ふ事ではない。只民衆のそれと共通すると否とに關はらず、其の獨自の權利と自由とを保留すると云ふにすぎない。「自ら省みて直ければ千萬人と雖も我れ行かん」とする根據を持つ事である。民衆を愛するとは民衆と同ずる事ではない。負ふべきものを負はしめ、醜と弱とを超克せしめむとする事こそ愛である。例へば暴力を否定せむとする事は民衆が暴力を是認して居る時は無論のこと、此れを是認する事を以て一種の義氣となして居る場合に於いて、思想家のなさざるべからざる愛、義務である。我々は民衆に對する愛の爲めに「同情」を壓へて、かくなさなければならない。例へば我々が電車に乘つて、醉ひたる紳士が車掌を毆打するのを目擊したとする。其の時若し車掌が怒つて其の紳士を毆り返へし、此れを車外に突き飛ばしたとする。其時我々の同情は素より車掌に傾くであらう。若し其の車掌が自ら其れをよい事ではないと思ひ、又車內を騷がした事をすまないと思ひ乍ら、あまりの事に立腹したのであるならば我々は此れを非難する感情を持たず、寧ろ「いゝ氣味であつた」と思ふであらう。否若し其の車掌があまりに自ら咎めるならば「其の位の事は關はないよ」と云つてやり度くなるだらう。併し其の車掌が其れを當然と思ひ、自らそれを正しいとして主張するならば、我々はそれに反對しないわけには行かないであらう。又それが正しいか否かと問はるゝならば、「正しくはない。」と答へざるを得ないであらう。自分の子供が他人の子供から賣られた喧嘩を買つて、相手を傷け、自分も傷いて歸つた時に、我々はその事情を聽いて腹の底で子供の勇敢をほめて居ても、子供に「喧嘩してもいゝ」と云ふ事は出來ないであらう。其處に善と正義そのものゝ不可侵の權威がある。而して思想家とは此の善と正義との權威の奉行であり、代辯者としての使命を持つものである。其處に同情の超克が缺くべからざるものとなつて來る。若しその人間的同

情のために、「他人を毀つてもいゝ」、「喧嘩してもいゝ」と是認するならば、道德の權威は保たれることはできない。我々は正義の奉行としての義しを枉げたのである。一寸を讓れば一城を讓る。かくの如くして道義は頽廢するのである。正義の旗の高く樹てられたる山の麓にて民衆がその醜弱の裡に輾轉することはさまで恐るゝに足らない。併しその旗を引き下して、山腹に於て民衆がこれに狎れ、弄ぶ事を許す時それは恐るべきことの初まりである。自分は彼の芝居に於て、無頼の徒や、盜賊が、自己の惡事を誇る、いはゆる「タンカを切る」場面に於て、「お釋迦さあでも氣やあつくめい」と云ふのを聞く時不思議な感激に打たれる。彼等は樣々な惡事を犯し乍らも、釋迦の尊むべき智慧者である事丈は認めて居るのである。其處には猶正義が支配して居る。樣々の罪惡もなほ善の「位」を汚しては居ない。故に我々は彼等が「もう年貢の納め時」など云ふ時憐れみの心を自然に起す事が出來るのである。そして彼等が罪惡を犯したのも其の然るべき原因があつたのであらうと思ひ、彼等も亦釋迦の愛から漏れては居ない事を思ふて滿足を感ずるのである。併し乍ら我々が正義の旗を引き下ろして汚す民衆を見る時には、假令彼等の中に、盜賊や、無頼の徒とは比較にならぬ程の理由と根據とがあつても、我々は前の場合に於ける如く、自由に同情を働かしめる事が出來ない。安心して愛しかけ、手を握る事が出來ない。其處には一つの重大なる顚覆がある。我々の精神全體を支へる主柱の動揺がある。我々は彼等が正義の旗の不可侵を認めることを條件とせずしては、愛と同情との通路が遮斷されるのを感ずる。協同の基礎が見出されない。何故に民衆は正義の旗を引き下さなければならないのであるか。若し彼等の主張する處が正しいならば此の正義の旗こそ彼等が其の下に集まるべき絶好の場所でなければならない筈である。然も彼等は別の旗を立てんことを欲するのは何故であるか。其れは彼等の正義が神の正義に堪へないからである。換言すればそれは正しくないからである。我々は暴力の行使を正義として押し通さむとする時神を「目の上の瘤」にせねばならなくなる。神が衣食の道に關して、正義として命ずる處は聖貧の道である事は疑ひを容れない。我々は此の道を神の正義として是認し、自ら此れに堪へ得ざるが故に暴力革命の道を撰ぶ

と何故に正直に我々の分限に相當した立場を自ら標榜することが出來ないのであるか。神の名に依つて、資本家を討伐する事が出來ないならば、神の憐みを受けて、資本家を討伐すべきである。神をなみして、其の正義の旗を引き下ろして、暴力を正義として通用せしめむとする事は一つの强引である。無理である。此の强引と無理とは時代の潮流に乘り、群衆の力に依つて或る處まで通るかも知れない。然し終局の成功、最後の勝利は不可能である。其の何物かに憑かれたる被催眠者の如き群衆心理は、自分は寧ろ一つの復讐の靈（スピリット）の支配する世界であるやうに見える。即ち彼のソドムとゴモラの驕れる民を懲罰した靈が民衆に乘り移つて、資本家を討つのである如く見える。我々は最後の場合に於いても、かくの如き神の怒りに奉仕するものとして、猶神を認めるものである場合に限り、民衆と握手する事が出來るのみである。神をなみし、其の律法の神聖を侵して、暴力を是認せむとする民衆は我々と共通點を持つ事が出來ない。其れは神の敵である。從つて其の奉行たる思想家の敵でなければならない。かくして經濟革命は一つの正義の觀念の革命であるからである。それは道德革命であり、純粹に原理上の革命として、思想家にとつて致命的の問題である。かくの如き革命に對しては思想家は自分の立場を明らかにする事は自己の生存權の問題である。若しも人格の獨立と自由との不可侵の原理が他の原理に依つて置き換へられる事がかくの如き革命の意義であるならば、我々は思想家としての最後の立場を奪はれるものである。故に我々は必死に抵抗しなければならない。然して人格の獨立と自由との不可侵の原理からは暴力を正義として認めることは不可能である。故に我々人格主義者が思想家である限りは暴力に依る革命を是認する事は不可能である。我々にとつて可能なのはそれを不正と認めて、しかも此れを許すこと、恰も前述の紳士に對する車掌の行爲に於けるが如くなす事の他にはない。然し乍らそれは我々が人間的同情の立脚地に立つ場合の事であつて、其の同情を超克して眞に正しさを負はしめむとする時、かくの如き立場は依然として一つの姑息である。我々は自分に對して暴力に酬ゆるに暴力を以てする立場を許さず、此れを超克せむとして自ら努力すると共に、他人に對してもかくの如き努力を勸進しなければならない。此れは單

に暴力の行使に就いての自他に對する超克的努力の例にすぎないが、其他凡ゆる方面に亙つて同樣の超克的努力が營まれなければならない。而して此等は凡て自他に對する「同情」との精神的鬪ひである。かくてツアラツストラの如く我々の人間性を超克せむとする努力は我々の精神生活の基調となる。我々は事々物々に當つて、日常に、不斷に、自分に對しても、他人に對しても、「超克せよ、超克せよ。」と叫ばなければならない。同情との鬪ひ、羨望と、嫉妬と、肉欲と、愚痴と、凡て卑しく、狹く、弱く、誇りなき事を超克せむと努力しなければならない。人間性の段階に於いては、尤もな、無理のない、愛すべき心情も、此處に於いては排斥すべきものとなる。此處に我々の欲するのは高貴であつて、可憐ではない。悲壯であつて哀愁ではない。他人の才能を嫉妬する事は藝術家として無理のない事であつても、死んだ子の年を數へる事は母親として尤もな事であつても、立ち上がる力を失ふことは失戀の人の避け難き事であつても、誤解されて淋しさに惱み虐待されて怨嗟することは人情の自然であつても、我々は此等を自己の醜弱、卑小として斥け、負ふべきを負ひ、負はしむべきを負はしめ、勇ましく起き上り、捨つべきを捨て、孤獨に堪へ、公けにして、強く、大きく輪を畫きつゝ登高せむと努力しなければならない。此の自我感情の誇りに生き、氣を負うて登高するものはツアラツストラである。かくして寂寥を喜び、民衆を輕蔑して鷲の如く巖角に孤立し、雲雷を其の脚下に眺める高山の嶺や、或ひは眞夏の大野に孤り燃ゆる太陽の如く、只管自己の孤獨と誇りとを強調せむとするに到れるものは超人である。ツアラツストラの超人には此の超克主義の反動的なる強調と誇張とがある。其れは民衆との距離を強調し、孤獨を誇張する。民衆との距離は止むを得ざるものたるに止まらずして其の趣味となり、孤獨は其の寂寞に非ずして誇りとなつて居る。其處に貴族主義の民衆主義に對する反動的なる誇張がある。かくの如き誇張は前にも述べた如く、精神生活者の警めなければならない一つの外道である

我々の超克主義が民衆の人間主義と手を分たなければならないのは、我々が民衆を愛しないからではない。我々の孤獨は我々が此れを欲せずして、然も避ける事の出來ない悲哀である。我々は此の別離と孤獨とを悲嘆を以て堪へるのに過ぎな

い。只其時我々の超克主義は我々の悲嘆の感情をも亦超克せむとして作用するが故に、其の感情はさめぐとした涙や、弱々しき哀音とならないで、石の如く冷たき沈默となり、湖水の如く靜かなる忍受となり、更らに積極的に孤獨にして快活なる獅子の如き舞踏となるのである。然し乍ら其處には不自然にして偏執せる誇張と强調とが存在するが故に、其の誇張と强調とは更らに正順にして素直なる調和に迄淨められなければならない。即ち今一度此の反動的超克主義の偏執が超克されなければならない。所謂「三樣の變化」に於いて、駱駝は獅子となり、更らに小兒とならければならない。佛敎に所謂「離着」とは先づ世を離れて法に着き、更らに法に着く事をも離れるに及むで眞に自由となるのである。超人主義の「怒り肩」はも一度平らかになり、其のこだわりと偏りとは取り去られて素直となり、其の圭角は磨かれて圓滿となり、其のあまりに氣を負ひすぎた誇りは、自らなる而も犯すべからざる威儀として聖化されなければならない。一言に約せば超人は聖人とならなければならない。其處に於いては最早や民衆との距離を特に强調する必要なく、殊更に孤獨を誇る必要もない。何となれば旣に民衆とつきすぎる憂ひなく、孤獨に堪へ得ざる恐れなきが故に、其の安全にして捉はれざる境地より自然に民衆に向つて下りゆき、孤獨の山を出でゝ市におもむき、民衆と交ることを素直に悅ぶ事が出來るからである。故に超人に對して反感を感じなければならなかつた民衆も、かくの如き聖人に對しては慰めと勵ましとの伴侶として此れを迎へる事が出來るであらう。何となれば彼等は今や民衆の友であり、仲間であるからである。只異れるは一度民衆より離れて高所に往き、再び還り來つたる民衆である。民衆と伍して民衆を引き上ぐるものは聖人である。聖人が山に隱れて獨善を樂しむ仙人的隱栖から、遂に市に現はれて民衆と伍して民衆を導く生活を撰ぶに到るのは彼等が一層完成したからである。所謂「小隱は山にかくれ、大隱は市にかくる」と云ふが如く、又ツアラツストラも其の德と智慧とに飽滿して後、遂に民衆に向つて所謂「沒落」を初めた如く、一度民衆を離れたる超克主義者は再び民衆に向つて還り來たる時がなければならない。彼の親鸞が自ら愚禿と稱して在俗の中に沒入し、又トルストイの神父セルゲイが修道院から出て

民衆の中に沒し去つた如き此れである。かくの如くして初めて眞に民衆の仲間となり、僚友となる事が出來る。かくの如き民衆は最早や只の賤民ではない。それは一度貴族主義を通過し來れる民衆である。神の民である。貴族主義が民衆主義と握手し、調和し得る道は此の道の外にはない。初めより民衆を一歩も離れない民衆主義は、民衆をして賤民として止まらしむる懶惰若しくは姑息である。かくの如き民衆として止まるに堪へざる事は自覺せるものとして當然の事である。かくの如き民衆の仲間若しくは僚友より、一度身を脱せむとする事を咎むる者は精神生活者ではない。行者ではない、此の意味に於いての貴族主義には正當なる根據がある。行者は一度民衆を離れて再び還り來たる迄、其の精神的遍歷を許されなければならない。親鸞は在俗に交つても只の凡夫ではない。セルゲイは民衆の間に沒しても只の民衆ではない。民衆主義がかくの如き意味での貴族主義をも許さない時、それは賤民主義である。我々は如何なる意味に於いても醜弱を醜弱として、低卑を低卑として、その儘放置する事は許されない。醜弱と低卑とは必ず超克されなければならない。人間は超克せられて超人となり、更らに聖人となり、かくて賤民と神の民とをつなぐ橋梁となつて再び還り來らなければならない。超克とは否定ではない。超克する事に依つて包攝するのである。止揚するのである。人間と超人とを超克して聖人となる時我々は人間性の凡ゆる愛すべき、親しむべき味や、地の匂ひを忘れるのではなく、又超人の誇りと高居とを理解しないのではない。此等を把握し、超克して、高き階段に登攀したのである。此れを卒業して自由となつたのである。故に其の心境は人間の心理をも超人の心理をも隅々まで理解し得る。かくの如くして初めて民衆の仲間となり、僚友となつて然も此れに捉はれずして此れを引き揚げる事が出來るのである。故に其れは仲間であると同時に導師である。僚友であると共に豫言者である。民衆はかくの如き導師と豫言者とをも猶且つ其の仲間より排斥せむとするであらうか。其の僚友として受け容れないであらうか。かくの如き者は其の仲間の意に逆うて發言し、若くは必ずしも僚友と共に踴らざるが故に、彼等にとつて愛すべき者とならないかも知れない。少くともそれは民衆の欲する好餌を以て此れを釣る煽動家の如く民衆に

とつて快きものとはならないであらう。然しかゝる無理解と孤獨とは素より聖人の欲する處ではなくても、既に超人の境涯に於いて其の試練を經たる後であるが故に、彼等を傷つける事は出來ないであらう。彼等は既に其の孤獨と無理解とに依つて傷つけられる恐れなき強き者となつたが故に、民衆に向つて「沒落」したのである。素より我々は超人ではない。猶更ら聖人ではない。而して又只の民衆でもあり得ない者である。然も民衆と手を分つ事の出來ない程民衆を愛して居るものであるならば、我々の取るべき道は超人となり、聖人となつて後再び民衆に「沒落」する事に依つて、眞に民衆の仲間とならむ事を欲して登攀の旅に發足する他はない。此れ我々が民衆への愛を正しく生かし得る唯一の道である。彼等と握手し、調和し得る唯一の道である。此の意味に於ける貴族主義をも認め得ない者とは我々は到底共通の立場を見出す事は出來ない。かゝる人々に向つては一種の深き痛ましさを以て別離を告げる外はない。恐らくは我々も亦何處かで再び相ひ會ふであらう。（一九二三、五、一）

女性の建設的生活と性の道德

長谷川如是閑

男子の女子に對する觀念は、今日までのところでは、法律の上で「所有權」と名づけられてゐる物に對する所有の觀念を伴つてゐることをまぬかれない。人間的感情が非常に發達した今日、人間であるところの女子に對して、男子がさういふ觀念を持つといふことは、有り得べからざる筈のものであるが、しかし非常に精練された外觀を持つてゐる今日の感情生活の根柢に、どういふものを含んで居るかといふことを眞實に見出さない以上は、男女間の制度を健全な基礎の上に築き上げることの出來る譯がない。

男子が女子を所有權の目的物と考へたのは、男女關係の歴史が明かに示してゐるところであつて、ただその目的物が、生活の上で共同する人間同志であるために、物品や、家畜等とは異つた結果を生じたのであつて、その觀念上の根據には大した相違はなかつたのである。それにはいろ〳〵の事情もあるが、生物學上異種族との結合が、種族の發達を強める唯一の道であつたために、男女の結合がどうしても強制的になつたといふ歴史がある。即ち男は、女を合意によつて得ることが出來ないで、多くの場合掠奪の形式で女を得たのである。この掠奪の形式は、男性間に於ける征服と同じであつて、且つ多くの場合そのことが征服に伴つて行はれたのである。異種族が征服されると、男子は奴隷として取られ、女子は妻として取られたのである。そして、この二つのものは、共に今日の所有の觀念によつて『所有』されたのである。この非常に野蠻な形式が、後にはもつと平和的な賣買の形式となり、更らに贈與の形式となつた。けれども、それは皆矢張り女子を、所有權の目的物として取扱つた方法であつた。しかも各國共最近まで、贈與の形式が結婚の形式であつたので、いかに女子が昔の通りの觀念で取扱はれてゐたかを見ることが出來る。日本でも最近まで事實上さういふ觀念が支配してゐたのであつて、今日でも大部分は同樣の狀態に止まつてゐる。

女子の貞操に關する道徳なり、法律なりは、卽ち右の歴史上の男女の地位から生み出されたものであつて、決して最も發達した人類の男女關係の哲學から生まれたものではない。むしろ、男女關係の最も進歩した哲學そのものが、右のやうな男女の歴史上の關係に根柢を置いてゐるのである。元來法律は、道徳に根柢するものであるが、その道徳は傳統的の歴史上の關係を離れては成り立たないのである。男女關係の法律は傳統的の男女の地位が生んだ道徳に發程してゐるのであつて、進歩した法律でもその點に於いては、歴史的關係から離れてはゐないのである。

今日いづれの國に於いても、貞操の義務は女子のみにあつて、決して男子がこれを負はないといふ習慣、また結婚及び離婚に關して、男子を主とし、女子を從とする法律及び習慣等は、男女關係の歴史上の必然であつて、極めて強固な根柢の上に成り立つてゐる。女子のこれに對する反抗は、各國共に容易に成功しない現狀である。

近代に至つて女子が右に述べたやうな傳統的地位に不滿を感じて、精神上並びに實際行動の上で種々なる運動を起すに至つたが、それには二つの段階があつた。第一段に於ては、假りにこれを「思想、感情に基く運動」と呼ぶことの出來る過程を取つた。それは女子が漸く彼女自らの傳統的な地位に不滿を感じ、生活の革命を希ふ氣分が彼女自身の裡に燃えたつやうな勢をもつて起つて來たが、併し彼女の生活そのものは依然として傳統的生活組織に拘束されて、一歩もその外に出ることの出來ない狀態にあるので、其處に矛盾が起り葛藤が生じたのである。それは西洋では今から五、六十年も前のことである。

何故女子の社會的の地位が、在來の通りであるにかゝはらず、さういふ運動が彼女等の間に起つたかといへば、それは畢竟男性の社會に於ける、自由解放の精神が男子の共働者である、女子の心理に影響したからである。故にそれは自由解放の精神が、思想又は創作或は學問等によつて、暗默の間に女子の潜在意識に働き得るやうな、所謂智識階級社會の女性に限つてゐたのである。

この階級の女性は、男子に對する傳統的の女性道徳が、例へば貞操觀念にしろ、家庭の意味にしろ、すべて、女子を男性の運命に對する絶對服從者としてゐることに、不安を感じ出したのであるが、それは彼女等の生活の體驗に依つたといふよりは、寧ろ男性の社會に發生した、近代的精神を感情的に受け入れたことに動機してゐるのである。だから彼女の反

抗的態度は畢竟感情的である。場合によつてはヒステリツクである。イプセンのノラのやうな女がその標本的のものである。ノラは近代精神を暗默の間に受け入れたゝめに、自分は何故とも意識しないで、たゞ男子の弄ぶ人形のやうな、傳統的の女子の生活に倦怠を感じて、それから逃れ去らうとしたのである。が、これは畢竟私のいふ近代的女性運動の第一段の過程であつて、彼女自ら男子に寄生する女子であり乍ら、感情的思想的の興奮のために、抽象的な自由解放運動を起したのである。しかし彼女は家出をして果して何をするだらうといふことが問題である。抽象的自由解放の運動は何等生活上の根據がないのだから、ノラも夫の家は逃れ出ても自ら生活する具體的の自由を持つてゐないので、外へ出ても依然としてその感情を滿す實際上の生活を求めることは出來ない。

日本でも、つい近頃までの女性運動はかういふ種類のものであつた。夫の有力な社會上の地位を利用して、可成り贅澤な生活をし、いろ〱の學問もするといふ婦人が、自由解放を叫んでゐたのである。しかし、もと〱その女性等が、そんな高尚な感情を持つことが出來たのは、夫の社會上並びに經濟上の地位の有力であつたお蔭である。その夫がなかつたならば、またその夫から突き離されたならば、彼女の將來はイプセンが示さなかつた、ノラの將來と同じやうに悲慘なものであるに違いない。故にこの感情的、又抽象的自由解放の運動は、興奮させる飲料のやうに、女性の運動に對して刺戟的の效果はあるが、さういふ時代に於ける女性運動は決して、社會的に有力な實際的效果を舉げることは出來ない。

この時代の特長は、多くの智識階級の女性が、感情的に興奮して、今まで彼女を拘束してゐた傳統的道德を、打ち破ることである。殊に貞操に關する觀念が急激に變化することが、この時代の男女間の葛藤の主たる原因となる。夫に對する盲目的貞操や、處女の消極的であつた性的道德やは、たゞ感情に依つて踏みにじられる。家庭に於ける妻の自由、夫を選ぶ處女の自由、夫を捨つる妻の自由……さういふ自由が、たゞ感情的に又ヒステリツクに、遮二無二要求される。それはつまりその時代の人間の社會的傾向が、女子の感情の上にも現はれたのであつて、男性はたゞそれを理解すべからざる女子の我儘で、一種の神經性の行動であるかの如く思ふのであるが、しかし、女性をしてさういふ反抗的精神を起さしめたものは、畢竟男性の社會に於ける一般的傾向そのものであつたのである。殊に近代に發達した人格の觀念の、個

人主義的特徴は、今まで一人前の人格と認めなかつた女子に、個人としての單位を與へないわけにゆかなくなり、これに人格的敎養を授くるに至つたことが、この第一次的女性運動の勃興を助けたのである。

女性道德の上からこの第一段の運動を觀察すれば、それは生活の根據に乏しい極めて薄弱な思想行動であつて、結果はたゞ悲劇的に終るべき性質のものではあるが、併し次に述べる第二段の過程が發生するに先だつて、さういふ心的生活の爛熟したといふことは決して意義のないことではなかつた。

第二段の女性運動は即ち、第一段のそれとは反對に、先づ女性の生活上の根據が築き上げられ、その根據の上に新たな女性的感情が培はるゝに至つたのである。

今まで男性に寄生して立派な思想なり學問なりを得てゐた女性は、丁度夫の經濟で美しい頸飾りや衣服を着飾つてゐる女性と同じであつて、彼女等の自由解放はその美しい着物や頸飾りを捨て去らない以上不可能のことなのである。ノラは乞食をする覺悟がなければ夫の家を出られない、女性が男性のためにそのやうに黄金の鎖で縛られてゐる間は、自由解放は、決して彼女等の上には持ち來されない。第二段の女性運動は即ち女子の社會的の地位が次第に、この男性の黄金の鎖を離れたところから出立してゐるのである。この時代に於いては女子は、その生活に於て男性と對等の地位に立つべき傾向をとつてゐる。それは男性に寄生する傳統的生活に於いては、經驗することの出來ない新たな生活體驗である。それは美しい思想感情や美しい頸飾や衣服やを、夫の經濟で身につけてゐる女性等の、思ひもよらない體驗である。新たな女性道德は、この新たな體驗から生るべきものである。

それは云はば、ノラが夫に反抗して家を出るまでが第一段の運動であつて、抽象的自由解放時代がそれであつたが、家を出たノラが下女奉公をするか、紡績女工になるかして、自ら彼女の生活を築き上げるべき運命に立ち到り、その全く新な生活の體驗を得、そこから生れた思想感情に基く運動を起したのが即ち第二段の現代的女性運動なのである。それは傳統的文化の崩壞だけを意識したイプセンの創造し得なかつた世界である。

今日の日本で、自由戀愛を說き、女性尊重を說く人々の多くが、尚第一段の時代の人であることは止むを得ない理由もある。日本に於ける女性の地位は、西洋のそれに比べれば少くとも半世紀位ゐは遲れてゐるかも知れない。從つて西洋では半世紀も前のイプセンの時代が今の日本の現狀でもあるだ

らう。しかし經濟事情が世界的になつた爲めに、日本もまた產業的に、世界の水準に急激に近づきつゝある結果、女性の社會的地位は、智識階級の思想上の地位が停滯してゐる間に、ヅン〳〵變化して行つて、いつの間にか紡績女工が大學教授や文士の意見を反駁するやうな形勢に、もう既になつてゐる。少くとも女性だけの間の形勢をみても、夫の社會上並びに經濟上の地位に依賴する女性運動者は、もう社會的獨立の地位を持つ職業婦人の思想感情の强力な態度に辟易させられてゐるといふ有樣である。それを見ても日本が既に女性運動に於いて、第二段の時代に進み行つてゐるといふことが分る。

女性道德はそれ故に、女子の新な生活の體驗に根柢して建設されるであらう。この形勢の下に於いては、女子は最早初めに云つたやうな、男性の所有物といふ歴史的の地位から離れて終つてゐる。卽ち今までの女性道德は、男子の女子專有の觀念を根柢に含むものであるといつたが、この觀念は女子の社會上の地位の變化のために、その根據を覆された譯である。エジプト、ギリシヤ、ローマ以來現代に到るまでの社會的事實であつた、女子の隷屬的地位も、哲人の思想も、女性の反抗も、それをいかんともすることが出來なかつたのであるが、現代に於ける女子の社會的地位の變化は、何の議論もなしに、事實そのものを以つて最も有力に、數千年來の固定的觀念を崩壞せしむるに至つたのである。第一段の運動に於いて徹底的の效果が擧らなかつたのは、いかに女性の思想感情が發達してもその時代はまだ女子が在來の隷屬的地位に在つたからである。この事實が崩れなかつた間は、女性の道德も傳統的のそれであるより他仕方がなかつたのである

今日、傳統的の貞操の觀念が、日に日に打ち壞されて居ることは、公の事件、家庭内の私事を反省する人々の充分認めてゐるところである。文學青年や、文學少女の傳統的道德に對する破壞事業は、歴史的に免れ得ない過程である。しかしそれは前にも云つた如く、みな悲劇的であつて心的に勝利の氣分を含んでゐるにもかゝわらず、その當事者等は明かに社會的頽廢の犠牲者である。爛熟文化の崩壞と共に、亡びてゆく人々の末路である。

これ等の犠牲者の、破壞的事業によつて亡ぼされた時代の後に、新な世界を建設するのが、新な生活の體驗に生きる現代の女性達の事業である。その道德は堅實に彼女の社會的地位と並び立つて、それを破壞することをしないで、それを基礎づける性的生活の理想でなければならない。昔から性の道德は、文化的頽廢の裡に於いては破壞に働き、文化的建設の間

に於いては建設的に働くといふ當然の傾向を持つ。爛熟文化の犧牲兒でなく、至難な建設の仕事に活躍する女性達の性の道德は、それがいかに傳統的の拘束に反抗するものであるにしても、彼女自らの新な生活の建設に對しては、極めて忠順のものであらねばならぬ。

崩壞の過程を描く藝術に現はれた道德破壞は、第一段の時代の女性を支配したやうに、何時までも第二段の建設時代に於る女性を支配することは出來ない。生活の戰ひに於ける勝利者たらんとするものは、爛熟時代の寵兒のやうに弱々しい犧牲者として倒れてはならぬ。ローザ・ルクセンブルグが、あれ程纖弱な、あれ程温かい女性的感情の持ち主であり乍ら、その生涯に於いて微塵だも、頽廢的女性の弱點に陷らなかつたことは、奮闘的の女性のために、最もよい鏡であらねばならぬ。



女性性教育

京都帝國大學教授　山本宣治

序

女に對する性教育の問題を男が研究するには、まづ性學術を繙いて女性心理を調べるのも一便法であるが、併し斯樣な卓上研究を更に充實させ其斷案の眞實味を增す爲には、常態の婦人生活の中に實際觸れて見て前の研究判斷に經驗の裏書を加へなければ不充分である。然るに論者自身は母と妻と二人の幼い女兒と若干の從姉妹と少數の女友との交渉の外に、廣く常態の女性一般の生活を卜すべき體驗を有しない。少くとも之を論ずる前には、數年女學校教師でもやつて青年婦人の觀察を試みたいと思ふて居たが、とても忙しくてそんな副業迄手を出す餘裕もない。偶に暇のあつた頃には二三の機會もないでもなかつたが、無名な一生物學者たる事が却つて祟つて邪魔となり、終に其方面には無爲今日に至つた。其間に男むきの講演に侵入し來つた僅の女性から有益な教示を受けた事もあり、又近くは大坂朝日新聞社の聘を受けて婦人文化

講座に「戀愛の生物學的基礎」を講ずる事となり、之亦聽講者から教訓を得たいと希望して居る。

斯樣の次第だから、此論文は純なる、机上の空論である。併し乍ら、世の所謂婦人教育の大家先進の多くが、餘り女の包圍に馴れ女性的雰圍氣に飽和した爲に、或は男性の性的二次的特質を漸くに失ふて眞に女に化する位になり女らしい慇懃鄭重な物ごしを具ふるに至つた人もあり、或は女性の弱點にのみ精通しすぎて操縱の技巧入神の妙に達し、他をして婦人に態と媚を呈してるかと疑はしめる程の人々をも見受けるのであるから、其「廬山中にあつて廬山の眞面目を知らぬ」方々よりも、却つて私の樣なポット出の局外無禮者の說のが、先入に煩はされぬ點に於て、或は又何かの取柄があるのでないかと、聊か押付がましく机上の空論も覺悟の上で、次に對女性々教育を論じ併せて世の婦人雜誌の性教育上の效果をも研究して見たい。

無風地帶内の體驗至上論

從來日本の中流社會では保護者が嚴に監督を加へて處女の童貞を守り、戰々競々たる監視防禦擊退の末まづ無難に彼女を婿に渡しホッと一息つくといふのも、今迄まづ世間一般に可能であつたから、夫を通じて始めて異性を知り、子を産んで後始めて分娩生理學の幾分を體得して、特に別段の性教育もいらなかつた。

といふ論據で『内の娘に限つて心配はありませんから、そんな性教育なぞいやらしい事は……』と抗議を持出す父母兄姉も現にないとは云はれない。此點に於て兎角結婚前に盲動を試み易い青年男子とは異り、天性受働的でしかも充分の保護を受ける處女には、性教育は全く無用だといふブルジョア論理も其階級内丈で時としては成立せぬ事も無い。併し乍ら之も夫たるべき男が純良無垢の青年であり、且又結婚生活に對する充分の理解(詳くは Dr Murie Stopes: Married Love 參照)を具へて居る場合に於てのみ可能で、若し彼が過去秘密活動の報酬たる性病々原體を體内に潛めて居たり、或は又女特有の性的危機に全然無理解で姙婦の一時的ヒステリーに對抗してむかつ腹たてる程の性的無識者である時には、體驗を以て性智識を我物とする前に早くも無知の報ひとして取返しの出來ぬ痛烈な痛手を負ふ事になる。良家の子女に對して斯樣な心配は杞憂だといふ人があるなら、現代流行の婦人雜誌の小說と告白とに性病記事の多いのを見て、何とか考へ直す必要が出來るに相違ない。階級意識などといふ人造品に毛頭頓著せぬ性病々原體は貴族賤民の差別無くどこへでも極てデモクラチックにもぐり込むから、世の女學生が寫眞畫報の新郎新婦を見て夢想する通り、よし貴族や外交官に嫁入るとしても安心は出來ない。其上に斯樣な夢が悉く實現される

のでないから、一般女學生にとつて今日の世の中に斯樣なブルジョア式上品な隱蔽主義は、男學生に於けると同時に、有害無益なのだ。

貞淑な婦人の抗議

所で斯樣に女自身の爲と思ふて性教育に取掛るとしても、其取材によつては、被教育者の抗議を得る場合もある。例へば予の聽講者の中の一小學女教師（既婚　末子なき基督教徒）の曰く

「私は結婚して始めて男といふ者がいかに肉的に女を見て居るかに驚かされました。先生の講義によつて、大多數の男が自慰とかいふ事を青年期に於てなすのを聞いて、非常に驚きました。男はさうした動物性の生理的に強い者である事を知つた私は、男に對する憎惡の念がこみ上つてきました。私はもはや男を神聖な者と見る事ができなくなりました。

勞働者の如き最も精神生活の低い者による實驗、又は統計の如きは應答者の首肯し能はぬ所であります。」

此人のいふ所の統計とは青年男子の自慰開始年齢頻繁度曲線（近刊山本宣治著「性文化の黎明」參照）の事で、其が獨逸の大學生に就て觀察研究されたといふ事をば誤解して居る。客觀的自己分析と無忌憚無誇張の告白は餘程高等の教育を受けた俊才か又は其に相當する人でなくば中々書けるものでないといふ事實を、知り得たのは私でも研究着手後餘程後の事である。扨其感想はまだ續く。

「先生、私は未婚の女子の純潔さを信じます。結婚して後性智識を得るも遲くはございますまい。どうぞ神聖な娘さん達にさういふ智識を與へないで下さいませ。唯結婚に對する確固たる見識と理想とを與へられ、苟くも自己を賤る事無き高き人格を養成されん事を。」

此時の講演（於京都市第四教員聯合會、四時間）の聽衆が主として既婚の男であり、特に要求あれば既婚婦人の傍聽を許す事として、直截簡明な科學講演を註文されたのであつたが、少數婦人には豫め其旨斷つて何の手加減も無く話した其時の事、驚いた人にも無理はなく大いに同情に價する感想である。

苦い藥はオブラートの厄介

其所で前の理由から性教育に手をつけやうとしても、實際「神聖な娘さん達」の爲にそんな事を知らして呉るなと、涙を流さん許りに縋りつかれるのにむげに振切つてそれでも是非に及ばぬと求めもせぬ人を集めて無理槍のみこませていゝものか、斯く婦人側の要求も無いのに強制啓蒙を行ふのは「處女の精神的純潔」を傷つけるのだから怪しからんと抗議も出たさうだ。

併し乍ら其「處女の神聖」を重んじて、無智の樂觀の上に築き上げられた暢氣樓を放任しておけば、矢張在來の「良妻賢母教育」のまゝ、色々の家庭悲劇の續出は依然やまぬ。其

がいやなら、時によつては心的追究による幻滅もやむを得ない。物的體驗の後の悲慘な幻滅よりもましなのだから、丁度苦い藥を子供にのます時にオブラートに包む醫者の慈悲で、是非共性教育は行はねばならぬと私は確信する。

或は『女性の否』か

扨斯く性教育を毛嫌ひする事は一體若い女性に於て一般的であるが、成程不良老年共が集まつて若い娘の前で態と底拔の猥談を試みる樣なサド風行動に類する性教育なら、娘達の抗議も無理はない。併し女性心理を相當に重んじた正しい性教育に對して、舊時代に育つた母親達の當推量や取越苦勞は別とし、今代の娘達が悉く前に感想を述べた某女教師の如くに皆基督教的感傷主義と潔癖とを持合はせて居るか。他の方面から見て（1）余は大に疑はざるを得ない。

（1）京都の或優秀な女學校の生徒が丸善店頭に來て熱心に漁つて居る書の多くが、當世流行の性研究書であるとの、店員の觀察。

性教育の試みの最初に於て起る激動が、男學生にでもやむを得ぬのだから、女學生に於ても少々のゴタ〳〵（1）は免れられない。併し此際に『女性の否』（Feminine No）といふ事もあるから、少々其邊を飜譯割引する必要があるかも知れぬ。

（1）昨年十二月長野縣飯田高等女學校の補習科生は某教諭の性教育に憤慨し同盟休校を行ひ、父兄も其れに贊成し種々前後策を講じた由。

實際に詳い教師の意見

一般に基督教一流の高潔な趣味を有する人は、自分の氣持に引比べて他の心理に推測を試み、爛ぎめの人道主義を押賣せんとする傾向がある。斯樣な人々に聞けば、純潔な處女の氣持をひたすら尊ばねばならぬと、前の女教師と同じく主張するが、扨事實はどうあらうか。之を當時者に訊して見れば

『予の經驗に據れば、女學生は案外此種の問題に對する時糞度胸あり。』理學士立田鐵二氏私信

『女學生に對する性教育講義の論調及び題材は、男學生に對すると同樣にて可なり。』奈良女高師教授高橋章臣氏私信

女學生を殊更いたわる必要を力説する人が教育の實地に沒交渉な方々に多く、他面實際家が觀察する所と比較すれば、私は此方をとりたいと思ふ。殊に女學生は同年配の男學生より遙に性的に早熟であり又世事に就て眞劍な觀察を是非せねばならぬ境遇にあり、又女性全體をして保守因循に過ぎても一度覺悟の臍を固めた上は其度胸に男も驚く程なのだから、唯花に戯る蝶の如き脆くも亦うるはしい娘心のうわつらのみを見て、底にある女性固有の堅い意志のある事を忘れるのも不當ではなからうか。

過激性急と見做される私の辯解

扨前に私は所々に教を乞ふて、對女學生の性教育の題材及び論調をば對男性のそれに多少の變更を加ふる事の必要有無を訊した。所が其時の簡單な小冊子「性教育私見」のまゝですぐ樣私が女性性教育に手を出さうとして居るかの如く、解された方々もあり、次の如き苦言を受けて私は大いに恐縮した。

『題材は同一にて可、但し論調を婉曲にせざれば處女の夢を破る事大にして、世は餘りに猥々しからん。即ち痛烈なる婉曲さを以て徐々に會得せしむべし。』理學士森下薫氏私信

『殊に鋭鋒の急進的性教育を其まゝ感情强き處女に授くるは宜しからずと思惟す。』理學士妹尾秀實氏私信

『丘博士の生物學講話の樣に、少し皮肉が過ぎであてこすられた樣にて不快なるべし。』岸田久吉氏私信

『消極的性愛のつゝましやかを維持し、神秘的な性を發達せしむる爲に辛辣なる批評的論調に稍興味を帶ばしむ事望ましからずや』法學士淺野憲二氏私信

いづれも皆御説の通り、之は私個人の問題ではあるが、不肖筆者一指を性學に染めた以上兩性の性心理の別を辨へぬ程無責任でもない。又殊更に辛辣な材料許りを按配し無益に若い娘心を苦しめたがる程に、變態性サド風衝動を持合はす樣にうまれついて居ない事を、此機會に於て畏友諸兄の前に告白しておきたい。

未婚婦人の性教育の教師

對婦人の性教育は、彼女達が現實の異性に多少なり共性的體驗を得たか否かに從ふて、二大別する必要があると私は思ふ。換言すれば、ざつと既婚未婚の二部類に被教育者を大別して、別々の方策をたてねばならぬ。

今第一に未婚婦人に對する性教育の主なるもの、即ち女學校の性教育を考へて見るに之は無論前述の如く無益に小鳥の樣な娘達をビックリさせぬ樣に、充分手加減の必要ある事は又次の説の通り、

『女學生に對しては、女教師をして性智識を授けしむる事が是非必要です。次に女子に對して餘り直接的露骨でないがよいでせう、但し急進的たるを妨げないでせう。』帆足理一郎氏私信

『若き女性のロマンチシズムを害ふべからす。予は性教育と共に、否より以上に戀愛教育の必要を思ふ。』高橋元一郎氏私信

『女子に對して急進的ではいけますまい。衞生學の智識をウンと注入する必要がある。女子が此方面にめざむれば、女子はパッシヴなる故、男子の盲動を制限する上に於て大効あるものと思ひます。』山川種三郎氏私信

態度に就ては、斯く兩性々心理の差ある點に基いて、男學生に對する如く矢庭に突貫し度膽を抜かんとする方針は不可である。

して又其教師たるべき人は「原則として」或は「理想として」矢張女性でありたいと欲するのは、予も次の論者と同感である。

『女の先生で生徒の信望を集めて居るといふ樣な人から云ふて貰ふたのだつたら、必ず益の方が多いだらう。女の方が男よりも此點では危險が少い。』小野俊一氏私信

必要な丈理想的女教師が居るか

所で理想と原則の上から申せば、此通りの要件即ち他の生物學の大家の言を借りるならば

『講演者は、常規の結婚をなし子供をも育する婦人にして特に性教育を研究する人を撰ぶべき事。』理學博士谷津直秀氏私信

である。

併し乍ら、今現代日本の教育界といふ現實に就て（一）相當の年輩の女教師で（二）體驗と理解とを充分に具へ（三）特別に性教育を研究した人をば、實際求めて得ることが可能であるかといふ實行上の問題になる。成程如何に悲觀したとて現代日本に此三要件を完備した人が皆無だとは云はれない。けれ共之が全國五百の高等女學校に就て各一人宛の適任者を得る事が、今早速大規模に講習したとて五年さき十年向ふに出來るか。篤と落付いて考へて見なく共所謂常識でわかる話である。

成程眞の良妻賢母であり、「熱烈な信仰」と「高い人格」と「純潔な熱情と愛」とを具へて居る人は少くない。併し此際いくら信仰と熱情と人格が具はつて居ても、第三の要件たる性現象の實體に關する徹底した理解がなかつたら、却つて其教師の熱誠と努力と信仰とが種々有害な結果を生ずる樣になる。

女性特有の直覺的判斷

一體我日本の女性とのみ云はず、一般に人類の女性が斯樣な性といふ漠然たる問題に對して下す所の理知的判斷はどうであらう。

『女は、個人的觀察を基礎として直覺的普遍的に眞理を發見し、抽象的理論を迅速明瞭に躊躇せず或具體的の例に適用しやらとする。之が女の無意識的即直覺的判斷である。』John Stuart M,ll

斯樣な天性が、世にも稀なすぐれた女によつて表現された時、我等人類の社會は、たとへばエレン・カイとマーガレット・サンガーと與謝野晶子との中に、人類の恩惠を發見する事が出來る。

併し乍ら一方此天性が、失戀に醫やすべからぬ痛手を負ふ老孃教師の中に、或は不良少年に弄ばれた末の論落の女の中に、或は放蕩無賴の夫をしよいこんだ憐な妻の中に、もし遺憾なく表現されるならば、其は彼女達に對して頗るお氣の毒ではあるが、人類は彼等の『女性特有の無意識的即直覺的判斷』の爲に、多くの誤謬と煩累と害惡とを引受けねばならぬのである。

現代の教育界でお上のおんおぼえめでたき「老練なる模範

「女教師」の或者が若し無準備で此問題に携はる事となつたら、予が斯く單に卓上の空論で晷へた所が或は杞憂に終らぬかも知れぬ、希くばそれが杞憂であつてほしいものである。

現實を見せつけられた時の恐怖

更に兩性々心理から考ふべき女教師問題の一面がある。

一體私自身の體驗した性的啓蒙運動の經驗の中でも、宣傳者の傳へた智識が聞く人の性的經驗に適切であり、又的にうまく當れば當る程、其人には何だか天眼通の前にモデルとして立たされの穴明く程觀察された樣な頗る薄氣味惡い感じが湧くものと見えて、無暗に尻込みする樣な人が多い。私や又私の從弟で同學たる安田德太郎君も性學論文を書く事によつて（１）現に若干の友人から見離され又文人連からは「永久に神聖な藝術品」の秘明かしをする危險人物と見做されたり、其他種々の餘興にも接した（２）其等の現象は即ち疵持つ脛の痛みで、彼奴俺をモデルにしやがつたなと感じる一種の恐怖であるが、何も實際我々に其程すばらしい天眼通の通力が具はつて居る譯でもなく、唯横に列ぶ蟹文字を縱にならびの角文字に列べかへた丈の仕事で、東西人情にかかわりなく貴賤賢愚共に變らぬ色の道といふ普遍的事實を證明したのに過ぎない。

（１）安田德太郎（一九二二）『サド風とマゾホ風』改造十二月號。
同（一九二三）『いびつを樂しむ心理』改造四月號。

（２）獨逸の性學大家マグヌス・ヒルシフエルド博士は平素から醫界の常を破して現狀暴露を試みた爲、開業醫連の怨を買ふたが、一昨年秋ミユンヘンであつた某學會の席上袋叩きにされた例さへある。但し其際醫者だから命に別條無いやう要領よく撲つたと採られたとの事。

同性間の反撥現象

扨斯樣な現象が女教師の性教育にも起るに相違無い。教師が同じ女であり、同じ生い立ちを經て來た丈あつて、彼女の講義が緻密婉曲な女性心理の妙を得て居る爲に、却つて女生徒の反感を喚り、教育の効果を殺ぐやうな事はないか、之が頗る注意を要する點で、作業能率の上から見れば、却つて大マカなそしてどこか拔けた所のある男教師の話のが、案外効果が著しいかも知れぬ。

殊に極端に不都合な場合（こんな馬鹿な事は到底ありさうにも思へぬが）イコヂで嫉妬心に富んだ女教師が氣分のイライラした月經時に強ひて講義する樣な事があつたとすれば、却つて同性である爲に理解があり過ぎて、教師生徒互に痛い所をつゝきあふて快感を得んとするサド風現象が生じて來る、殊に若い美しい生き〳〵した將來を有する娘達に取まかれた女教師の「惜め共返らぬ春」にあこがれる氣持にも、ちと同情せねばなるまい。

極端な實例。某女學校出身者の縁談が其出身校に問合せをすると、不思議にも悉く破談になる。怪しんだ卒業生が其原因を調べて

見ると、介監米女史が一々其問に應じて、杳然無根の悪評を書き盛つたと知れた。

啓蒙はどぶさらへ藪掃除

抑々啓蒙運動なるものは、予の短い經驗に據れば、決してお姫様が振袖姿でやれる様なお上品な仕事でない。又フロック・コートを着て講壇に登りそれから自働車で宿へ歸つてお髯の塵を拂ふて貰ふて階下る様なやにこい事業でもない。

即ち啓蒙は「無知」と名のついたどぶさらへである、大掃除のすんだ後でせい〳〵したなぞと云ふて居られるが、扨其最中は臭氣紛々たる泥をかきまぜたり蛭に吸つかれて摘まんで捨てたり、決して愉快なたやすい仕事ではない。

又譬ふれば、啓蒙は「虚僞迷朦」といふ藪の開拓である。大斧を振廻し當るを幸ひ薙ぎ倒す大わらわの奮鬪である。茨の棘に手をかきむしられる位は問題にならぬ、中でウォー〳〵咆へて居る虎が出てきたら早速虎退治、蛭を出さぬからと油斷して居ると足元の蝮にかみつかれる、蝮でも虎でも屹度こつちで退治出來るときまつて居ないから頗る險吞である。

所で話は女教師に戻る。一體女は開拓者であるか、戰士なのか、「どぶさらへ」は女に出來るか、蛭の吸ひ疵と茨の棘の引掻き傷に超越する程に女は鈍感であるか。無論波風荒い一般的啓蒙と「壺中小天地」の女子教育とは一所に話は出來ぬがそれにしても女學校には女學校相當に可愛らしい蛭も虎蝮も居るのに相違無い。

民族自決と女性自決

斯様にして、書齋に籠つて本の中許りの智識許りで女學校の事を研究して居ると、一體女自身丈で女の教育を賄ふて行く事が可能であるかといふ疑問が浮んで來る。

一體青春時代に多くの理想家の溺つて出て來る基督教の關門で、彼等の多くはデモクラシーの大本義と民族自決の大理想と併せて「久遠の女性」の偶像をつかんで來るのを常とする。所で其デモクラシーは本論の問題外だから措て論ぜす、民族自決主義のいふ民族なる概念は一體何を内容として居るのか。トルコ人もアルメニヤ人もルマニア人も各々主張する如く、朝鮮人も臺灣人も主張する。更に其が高じては隣人も長人もアイヌ人も皆主張しかねない勢ひであつた。其民族自決といふ名は如何に公正な自由な響きを生じるが、扨其内容と概念其ものの眞實味が事實で證明されず、今では唯徒らにヴェルサイユ條約の記録に其名を止めて居る許りである。

次に「久遠の女性」に關係の深い基督教センチメンタリストや空想的フェミニストに聞けば、「女をして女自身の事を解

決せしめよ」と之等高潔寛大聰明な男は叫んで居る。即民族自決なみに女性自決主義を考へ出した次第、つまり名前の上では今迄の略取者が被略取者に與ふる世にも有難い御惠みとして呉れた樣に見せかけるが、しかも其實虐げられて居たる者が漸にめさめて自己の實力に訴へて存在を明かにしたのに對し、今は無力な過去の暴主が不相無相に手を引込める間際のごまかし文句なのではないか。民族自決でも女性自決でも此點に於て原理にかわりが無いと私は解釋する。

女性自決は實行不可能

所で此女性自決といふ名前丈堂々として其實中味朦朧たる概念でも、近代フェミニズムといふ形をとつて世に現れて來た時には、矢張大掃除とどぶさらひには物ずき男が其任に當つたのではないか。西洋や昔の話といはず、現代日本に例をとれば、赤瀾會の女丈夫の演說會でも矢張おせつかいな利彥翁が前座を勤めて『どうか諸君聲の薄い婦人達を餘り野次らないで下さい』となだめたといふ報道は事實無根の逆宣傳であるか。

予一個の獨斷に據れば、何に據らず女性自決なぞと云はれる事柄は「女といふ生物よりも三本毛の多い」男と稱する動物の一種が其自身で子をうみ種族保存の實を全うし得る時に及んで、且又今申した「男といふ獸より三本毛の足らぬ」高潔な生物たる女が彼等丈で新天地を開拓しユートピアを築き上げた曉に於て、始めて其等の實現は可能であらう。

其故に此偏見を元として、今私の論ずる性教育に及んでも女性自決主義の性教育は同樣に不可能と見える。如何となれば、現代日本に於ける性教育は純然たる一つの啓發運動だから、そして女は天性守成調和に長けて開拓進擊に適しない者である故を以てである。

女護の島へ侵入する男

見よ、昔男禁制であつた女學校でも今は「お料理」や「音樂」の如き特殊學科に迄男教師が入込んで居る。之は必ずしも「色魔教師」が安い俸給も覺悟の上でもぐり込んだのによるものではなく、矢張教育といふ事業の性質上男の手を借らねば行へない事が、貧弱な語學智識やまづい料理や其他色々の物を味はされた上、やつと合點が行つた次第である。

學校と云はず、女醫を見よ。出來た始めは「女性自決主義」の女は申すに及ばず、狼連の男迄が手を握つて貰ひに行つたものだが、扨其騷ぎが靜まると女自身がどうだ、平生の輕い病氣なら診察料の安い方の女醫でまづ我慢しておくが、さあ大病になると女患者自身から『あの先生ではたよりないから、男の先生を……』と註文するのが目下の現狀である。

單性自決は何に於ても不可能

斯く例をあげても「御婦人」を決して侮辱したりこき下したりしたのではない。根氣のよくなければならぬ仕事では夕イピストから事務員、それから今迄「女禁制」の中學寄宿舍で寮母を歡迎したり、或は癇癪持の男教師を追拂ふて辛棒强い親切なしかも發音明晰な女語學教師を招聘すると、今迄ずるけてあばれた茶目公共も急におとなしくなつて几帳面に豫習をやつて來るといふ樣な美點も見えて來た。

之等の事から見ると、男でも女でも自決なぞといふのは、恰も結婚前にお上品な男女が獨身主義を標傍するのと同樣、甚だあてにならぬ云ひ草なのであるまいか。女性自決なぞとフエミニストぢみた考へとは沒交渉に『七歳にして席を同じうせず』から出發した女護の島の女學校でも、斯く女性自決の壘は順々に陷落して行き、最後に對婦人の性教育許りが厳然と「貞淑な婦人」と「親切高潔な」男とによつて守られて居る。之が永久に「女性自決教育」の奥の院として其存在を全うし得るか。私の偏見に從へば、餘命幾何も無いものと觀測する次第である。

女子性教育の特殊使命

如何にして斯く觀測されるか、其は私の見地から、將來の婦人に對する當然の使命と見る事から、自然さうなる外は無い故である。

所で私の主張する純科學的性教育の使命とするのは

第一に眞實の追究宣明である。各個人に性現象を諸方面から觀察せしめ、特に從來閑却されて居た人間的方面を示し、又彼と彼の最愛の者の身邊に襲ひ掛る不測の危險を、未發に防ぐに足る科學的智識を授けるのを旨とする。

第二に善と美との「導出」Education である。即盲目的本能を制馭すべき理性自律の可能なる範圍を示し、以て自知自敬の力を養ひ、まづ凡人として自ら顧みて僞り無く生を樂み、更に進んでは世界同胞に奉仕し得るの餘力を養はんとするを以て旨とする。

此二ケ條は人間として男女平等に要求される所の事である。併し乍ら第二次的に、生物學上男女が別物であるといふ事實に關して特殊な要求が出て來る。其要求の由來を說くはまづ後に讓り、取不敢其項目を擧げて見れば

女性に對する性教育の特に目的とするのは

一、人類に於ても亦他の生物と同樣に、男女兩性の個體は生物學上互に特異の者として生みつけられ、しかも男性は女性と互に不可缺なる者として全人類の各一半でやる事實をば、從來の如く多大の冒險の後始めて體得せし

むる如き愚擧を避けて、兩性の性的直接交渉の始まる前に科學的に敎ふる事。

二、人生に於て最重大な母性の生物學的意義を特に自覺せしむる事。

此二要件は追加といふよりも、寧ろ此方が緊急問題であるから、第一次要件の隨一たる一般的性智識に關する眞理宣明を暫くさしおいても、まづ特殊問題をさきに解決したいと欲する緩急順序の話なのである。

男心と娘の性敎育

何故に斯樣な案をたてたのか、其は簡單な卓上思案許りでなく、其外に婦人雜誌も相當に研究したが其よりも次に揭げるやうな男學生の追究質問が少からず私の此點に關する注意を促したからである。

私が同志社大學豫科でやる人生生物學講義全六十時間の中で一時間男女の肉體的相違を述べ、次の一時間兩性心理の差違を述べて少し許り女性心理に觸れる。此女性心理なる大問題を僅一時間で卒業させやうと試みるのは以ての外の大望であるけれ共、他に是非共云はねばならぬ事が多いから、さうさう其許りにこだわつて居られない。所が聽講後特に物足りなかつた點を學生に訊すと、頗る多數の人々が此女性心理問題がそれだと云ふのである。

一體若い男は誰でも一生に一度は女主人公の活躍する小說を耽讀する時があり、近頃の樣にモーパツサンやフローベールやシユニツツラーの譯が續出して可成廣く愛讀されて居る樣であり、又私の聽講者の中にも可成其等に精通する文學青年の多い事を彼等の感想文によつて發見するのであるが、斯く詳細な小說の描寫があるにも係らず、それにも滿足せず更に要を摘まんだ科學講演を要するのは抑々何故か、其心理分析も今此婦人性敎育に關聯して特に必要になつて來る。

未婚男女の異性觀と智識慾

今思春期に入つてしかも現實の異性を知らぬ青年男女が抱いて居る異性觀を比較するに女性は槪して男性をば自分達と全く同一な心理を有する生物と獨斷するか、又は超自然的純潔なる勇士と偶像化する傾向がある。男性側でも同樣に異性を天女扱する事もあるが、槪して女性をば自己のと異る一種不可解な心理を有する者と本能的に感じて、或は女を魔物扱ひする人もある。即此二種の異性觀の一は獨斷的樂觀、他は懷疑的悲觀の色彩を帶びて居り、前者は現在の美しい夢を守らんとし、後者は現在の無知に泥まず追究を試みる所に、著しい性的特徵が現れて居る。

男の方はわからぬから知りたいといふ本能的欲求がまづ第一にあるが、其外に更に油斷のならぬ男心の底迄邪推を逞し

うして見ると、異性の心理に充分精通して弱點をつかみ活殺自在の色魔的手腕を揮はんとする野心がほの見える。之はあながち不良性を多く所有して居る私が、自分の心に引比べた臆測ばかりであるまい。造兵工學の研究でも堅固な甲鐵板が出來ると又更に攻撃力の多い彈丸火藥が發明される樣に、犯罪でも捜査術が發達すると更に進んだ犯罪法が工夫される樣に、世の中でも矢張男と女とが追ひつ追はれつして居る。所で虫のいゝ甲鐵板製造家は敵の彈丸が矢張昔のまゝで舊式だと夢想したがり、呑氣な名探偵は惡魔は矢張惡漢でも近代科學の精華を取込む事があるのを忘れ易い樣に、勝手な男共は馬鹿女共を其まゝにして自分達丈敵方の情報を充分得ておいて、うまく〳〵と兩性鬪爭に勝利を占めやうともくろむのも亦、此油斷のならぬ世の中にありさうな事ではないか。

「欺かれた妾の告白」を讀む男の心理

うそだと思ふなら、表紙にデコ〳〵した現代式美人の石版畫のある婦人雜誌を御覽。毎號々々よくも飽きずにこうも同じ事を繰返せるなあと感心の餘りに涙がこぼれる程「色魔に欺かれて罪の胤を宿した私の告白」が出て居る。

『Voltaire が云ふた事がある。『昔或女王が一人の女原告の訴へをいかにして却下したか、其話をば凌辱を蒙つたと訴へる拔目の無い娘達にお傳へしやう。其女王はまず一振の刀を手にし、次に其女原告に刃をもたせ、自分は刀鞘を操り不絶ふり廻して見て、其まゝでは女が刀の鞘に刃を納める事が不可能だといふ事を女に納得せしめたのである』實際此種の凌辱は稀有困難である、併し乍ら全然不可能といふのではない。』Thoinot, L. (1920): Medicole-gal Aspects of Moral Offenses. (Engl. Transl)p.81

所で其雜誌の内幕を覗くと、時として其告白の筆者は窈窕たる美人でなくて實は見るも興醒めなむくつけき鬚男であつたりするが、しかも此毎月々々性懲りも無く出て來る雜誌をば、めぐれどはしなき愚痴と、云ふても詮無い返らぬ繰言と、あいた口がふさがらぬ程臆面も無い手前味噌とを、金を出して讀む慈善家の中に少からず男が居る。此事實は、私の解釋によれば「いかにして天性愚なる女をたぶらかし、而して何等責任をおつかぶせられる事無しに手際よく切拔けられるか」といふ作戰計畫の研究資料として、之等の雜誌が一部男性に利用されて居る事を示すに外ならぬ。

其に對抗した男の告白雜誌が無いのは何故か

所で告白專門の婦人雜誌に對抗して、長髮やオールバックの美男子の肖像を石版摺の扉として、「女色魔に捨てられた私の告白」を滿載した「男子雜誌」を發行したら、男性心理を知りたい女達が買ひさうに一寸思はれるが、其所が前申した異性觀に對する態度の相違で、そんなに棄てられた男の告白

なぞ汚らはしいものはお孃さん達はおぞけを振つて手を出さぬ。又實際男を棄てる位ゑらい女はそんな馬鹿男の心理なぞは直覺的に知つて居るから態々金を拂ふて雜誌を買ふて迄研究しなければならぬ男程に馬鹿でない。無論男の方の告白も女のより數こそ少いが、可成大作や傑作が續出する。併し常態に於て男が人前で欺かれたなどゝ廣告するのは頗る自重心を傷つけ威嚴を減ずるから、よし自分が欺かれても精々内所にしておき、一方廣い世間には專門に欺かれたり棄てられたりするのを自慢にするマゾホ風大家の傑作であるから、其を時に讀んで苦笑し乍ら「甘い淚」に耽る位のやさしい所、男清姬でも中々容易な事で蛇にならぬ。大體から云ふて男の方が諦めがよくサッパリして居る。

男は愚痴の安全瓣に感謝せよ

扨斯樣に男も讀むなる婦人雜誌でも、婦人讀者側から考へて見るならば、過去自分の愛人が私を欺いたといふ唯一の經驗から割出して「あらゆる男は皆女を欺く獸なり」といふ眞理（實際大抵の場合さう考へておけば間違ひは無いなのだが）を發表宣傳し、自分許りが正しく男は無暗に不埒であるといふ判斷を繰返し〳〵述べ、自己示唆として氣休めの種となし、併せてマゾホ風快感を得る爲に、確に婦人雜誌は歸らぬ愚痴の安全瓣である。青年男子に運動競技の必要な樣に、現代日本の婦人にとつて婦人雜誌は鬱憤を晴らす爲値安上なくてならぬものであり、若し世の惡口屋の攻擊に憚り又は同業の競爭に耐へ兼て此安全瓣の數が減ずるならば、世の多くの夫は自家製告白と永々しい閨中講演に惱まされてノベツ閉口せねばなるまい。斯く考へ來れば男は、婦人雜誌の低級を嘲る所が、却つて其徹底した低級さに大いに感謝せねばならぬのである。

告白雜誌による性教育

扨性教育の見地から之等の雜誌の態度を觀察し、又其教育的價値を評價して見やう。

一體我々が其記事を文字通り割引無しに受取るならば、人見たら泥棒と思へといふ風に、男と見たら皆惡魔と思へ、嫁入りしたら必ず夫から性病を移されるものと思へ、とすべての最もむごい場合を示した一種の性教育であり、脅嚇威喝の弊はあるが、一面婦人自身をして警戒自重せしむるといふ長所もある。

所で前に述べた基督教信者の女教師は、夫によつて始めて男の獸性を知り、次に私の性教育講演によつて其事を更に確かめ得たのであるが、之は恐らく此應答者が基督教式潔癖に煩はされて婦人雜誌を讀まなかつたせいで、若し彼女が早く其等の文獻に一應眼を通して居たならば何も夫を持たず共、

又私の性教育講演によらず共、既に「男の動物性」位は會得出來て居たゞらうと思はれる。

女は、否人間は他人の經驗に頓着しない

更に彼女は、異性觀の其革命によつてもはや男性を神聖と見る事はできず、男性に對する憎惡の念がムラ〳〵とこみ上つて來たといふのであるが、世のあらゆる少女達が悉く此告白文學の耽讀によつて、或は又性教育を受けた事によつて、彼女の如く男を嫌ひ人生を呪ふ樣になつたと今假定するならば、世は結婚を厭ふ娘達の拒婚同盟結婚ストライキによつて大恐慌を來すであらう。對女性々教育は此論理の樣に唯簡單な卓上思索に止まつて居るから、近い將來實行の上斯樣な偉大な効果を揚げ得るか、頗る疑問である。併し婦人雜誌の威力に至つては、今の如くよく賣れて居るにも係らず、懲りずまに續出する「欺かれた女」の多い事から見れば、あの實物教訓の威喝的報告も其影響至つて貧弱だと思はざるを得ない。

『男は純潔な處女を得やうと熱望して居るのに、女は男に對して其純潔の點に注意する事少いのは、不可思議千萬である。尤もE. v. Hartmann の云ふ通り、年若く無垢又無經驗な少女は、眞の遊蕩兒を本能的に却けんとする傾きはあるけれ共、其他の女に至つては決してそんな事は無い。即ち或著者は『女は、一人の男の愛した女の數に正比例して、益々其男を愛す』といひ、Balzac は「女は既に他の女の持物になつて居る男を、手に入れやうと努力する」といふた。』Gross, Hans (1905): Kriminalpsychologie. 2. Auf 1. Wien.

暗い人生明るい人生

前述の型の告白雜誌を讀めば、男に置ざりを食つた女が泣伏して居る宿屋の一室と、牢獄の樣にジメ〳〵した漬物小屋兼臺所と、青い顏した婦人病患者が多勢不景氣な火鉢に鼻をあぶり乍らボソ〳〵とお互の病氣を語りかはし同病相憫んで居る婦人科病院待合室と、ばかりで、人生の全部が成立して居る樣な感じを受け易い。

所が今眼を轉じて他の型の婦人雜誌を見ると、新郎新婦のニコ〳〵顏や某實業家の圓滿な一家團欒の光景やピアノのおさらへや、色々美しい寫眞口繪が一杯のせてあつて、其を見て居ると前の印象と正反對な花やかな世界が、さながら廻り舞臺の暗轉の後バッと照らし出された樣な感じ。此方では、名士美人が目眩しい迄に往來する彼の帝劇幕合の廊下と、新流行の衣裳を着飾つた夫人令孃で滿員の三越食堂と、自動車がズラリと前に列んだ日比谷大神宮と帝國ホテルとそれから「息づまる程甘い陶醉」の箱根熱海と、電熱ストーヴ、プラス青赤色洋酒瓶の文化臺所と、最後に一生おしつこも鼻水も垂らした事のなさゝうな綺麗な子供達が洋服を着て小間使に

かしづかれて居る公園の芝生と、之等光景の總和が「畫報人種」の住む世界の全部の如くに見える。

『貴婦人の謬見。——貴婦人達は、人中で口に上せぬ事が、實際此世の中に存在しないと思ふて居る。』Friedlich Nietzsche: Menschliches Allznmenschliches.

明るい人生の虫のよい夢

『女は、否人間は いやな眞實にはわざと眼をつぶつておいて、虚僞でもよいから美しいもので滿足したがる。』Hans Groos.

いかに告白雜誌が暗澹たる人生を敎へ、男性心理の不快極まる獸的方面を力說しても、矢張實の所は此「寫眞畫報」式人生觀のが、世間の、否お孃さん達のうけがよくて、ホーム、スヰト、ホームの音樂入で恰も物見遊山かピクニツク行の樣な陽氣な氣分でお嫁入遊ばされるのである。

それからさき「血の道」もお起しにならず、夫君も品行方正でしかも思ひやりに富んでやさしく、玉の如き愛兒を擧げてもバナヽやチヨコレートの如き「文化的間食」を與へ過ぎて疫痢を招く樣な事もなく、其子がやがて成人して曉星か附屬か府立一中を經て一高帝大へ順々すべらずに上り、しかも其間に小間使に「誘惑」されたり或は「何所の牛の骨とも馬の骨ともわからぬ」カフエーの女に迷はされたりする事は更になし……とかういふ風に話が寫眞畫報の漫畫一代記の樣に展開して行けば、それこそ性敎育なぞといふ「下劣」たものには交渉無しにすむのであるが、ドツコイさうは行かぬといふのが多くて、結婚迄はどうやらかうやら「寫眞畫報」式だが三々九度の後は「欺かれた告白」の方に筋書がいれかはりになつて、三角關係が出來たり自動車運轉手が舞込んだりお膝元から不良少年が飛出したり、お氣の毒乍ら仲々プログラム通りに行かぬのが多いのはまゝならぬ浮世である。

プラトニツク　ラブの實在可能性

或は又近來の樣に男女交際が自由になり始めると、昔の樣に文藝投書雜誌の終の方の六號活字で『どうか淸い交りをして下さいませ。寂しい野の花』なぞとコツソリ書く位のなまやさしい事では滿足しない。早速日曜には井の頭や多摩川べりさては「若草の武藏野がり一愛人の手を取りつ取られつお出掛けになる娘さんも出來る。其お供を仕る若者は、無分別にもウヰスキーや色靑いペパーミントの小瓶などをポケツトに潛ませて居るなどの光景を目にするのも稀でない。所が困つた事には

『兩性の心的相違は、運動輕快にして停止する事の無い精子と、營養分を貯はへて不動靜止な卵とによつて、象徵的に現はされて居る。そして、熱烈な向上心と洗練された趣味と高潔な理想と鋭い自省心とを缺乏する男が、多妻主義の權化である事は、生物學上の

必要現象である。よし萬物の靈長として前に述べた高貴な屬性を具へた男でも、異性との接近が其度を過ぎると Ellis の説の通り、動物的本能以外に人間の理性の干渉を容れぬ『獸』に還原せざるを得ない。之が一般の結果であるから、過度の接近による必然の結果に對して狼狽するのは、遺憾乍ら無學無知の結果と云はねばならぬ。則ち、少く共自ら進んで接近を試みる以上、其裏面の展開と事件の進行は百中九十九迄機械的正確を以て行はれるものと、覺悟しておく事が必要だ。此事は、特に體質の差に基づき性的發生史を異にして男性心理を毫も解せざる純潔無垢の處女が必ず心得おくべき事、殊に安小説の Platonic Love を現實のものと考へると、大變な悲劇が起る事がある。』山本宣治（一九二二）人生々物學講義大要△三四――三五頁。

即之を由すのも甚だ殘念ではあるが、小説に書いてある樣な「肉慾を超越した清純なラヴ」は、世間見ずの純潔無垢の處女が考へて居る程、世間にザラにある事でなく、寧ろ稀れであるからかくあれかしと思ふあこがれと理想から書いてあると判斷した方が安全らしい。

『經驗無き乙女達は、自分の力によつて、よく或男を幸福ならしめ得ると夢想する。其後彼等は、其男を幸福ならしめ得るものが唯一人の乙女に許り存して居ると思ふと、其樣な事は其男を輕んずるに等しい事がわかる。……女の虚榮心は、其男が幸福な一良人であるより以上の者たる事を要求するのだ。』Fr. Nietzsche: Menschliches Allzumenschliches.

男心を知らずにすむか

之が私の見た現代の日本である。此樣な世の中で親達や其他の理想家が、娘達にいつ迄も「あどけない娘心」を保存しておく事を望むのは、一見慈悲に似て、其實娘達の戀愛と結婚生活に現れ易い陷穽を明示せぬいとも險かな博奕であると、私は確信する。如何となれば、育兒は分娩して後に育兒書を繙くも遲くはない。姙娠分娩の注意は懷姙してから學んでも左程手おくれでない。併し乍ら、懷胎に到らぬ内に早くも、其に携はる對手の「男心」を知つておく事が更に〳〵緊急問題なのではないか。之をだ『うちの娘はからネンネエで困ります』と放棄しておいていゝ程悠長な問題でない。よし「うちの娘」は不良少女でなくても、世の中には攻撃性に富んだ不良少年不良老年がウヂャ〳〵と不絶女性の隙を狙ふて居る。そして男女兩性の全く違ふた生理的特質があり、又其「乙女心」には毎四週間おきに特にやるせない氣持が湧いて來て怒り易く泣き易く爭ひ易く縋り易くなり、又自制心が突發的に衰へる事もあるのではないか。そして誰もが用心堅固なブルジョア生活の牆壁の中に晝はひねもす夜は夜もすがら番兵に取卷かれて居るのではない。して又今は「大正の聖代」であつて、もはや「箱入娘」の存在を許さぬ樣になつたのも是非が無い。無論世の多い娘の中にはうまれ乍らに聰明な

人もあつて

「女は直覺的に頗る正しく、偉大な男の天才的事業と其道德的價値を悟る事をなす。」AUGUST FOREL

人もあらうが、皆が皆迄習はずしてさうは行かぬ。

男を知る前にまづ男心を知れ

斯く考へ來れば、私の力說したい女性に教育の先決問題が、第一に

人類に於ても亦他の生物と同樣に、男女兩性の個體は生物學上互に特異な者として生みつけられ、しかも男は女と互に不可缺な者として人類全部の各一半である此事實をば、從來の如く多大の冒險の後始めて體得せしむる如き愚擧を避けて、兩性の性的直接交涉の始まる前に、男性生理と心理とを科學的に敎へ込む事

であるのは、今更事新しく說明を要すまいと思ふ。即戀人をもたずに、婿を貰はぬ內に、男はザツと斯樣な特性を具へて居るといふ概念を得させたい。之が此格段な場合に於ける唯一格段な解決法の第一と、私は確信する者である。

男教師は女生徒の前のモルモット

其故に、予の獨斷說を基礎とした當面の對策に於ては、女學校の性敎育擔任者は必ずしも女である必要は無い。否實際に於ても男の適任者が稀な以上に女教師の適任者が稀なのだから、男教師をして其任に當らしめるも差支無い。否寧ろ其以上に進んで、一切の『常識的安全第一』の說とは反對に、原則として女學校の性敎育當事者は男教師たるべしと、私は主張したいのである。

出來ない事を承知の上で勝手な註文をし、其思ひ付を自慢したいなら、一妙案がある。其は夫が生物學者、妻が女醫である夫婦を聘して、其夫には生的器官の解剖と性交生理を說かせた後、妻に月經姙娠分娩育兒の講義をさせる事とし、開講第一夫婦交り〲に兩性々心理の講義をやり、聽講者は其二通りの兩性觀の和ぎをとつて二でわればいゝ。

つまり此際の性教育は、何も斷片的性智識を詰め込む必要は無く、敎師自身が女學生達の試驗動物となつて、成程男は女と違ふ心理を有してる者であるなあと會得させれば事が足りる。若し其が粗暴驕慢の惡教師ならば、其教師の人格を通して粗暴驕慢下劣なる男性々格の半面を知り得た丈でも女性は賢明になる、そして男性に對する幻滅はよしきても、其時のは他日粗暴驕慢下劣なる惡良人を迎へて得べき幻滅と比ぶれば、其少女の受くる心の傷は遙に輕く又之に伴ふ副作用は遙に少い事は云ふ迄もない。又幸ひにして良男教師を得たならば其時の良影響は良女教師の與へたそれよりも更に多からうと、私は想像期待して居る。

結婚がイヤになつたらせず共よい

男性性的器官が突然女の眼に觸れた時、彼女はうごめく蛇を見た樣な本能的恐怖に打たれ激しい動搖が起り嫌惡の念が湧いて來る。性現象の現實暴露に際しても、此樣な本能的退却が起り且又從來のつゝしみ（即ブルヂョア式タブー）があるから、侮辱を受け貞淑を傷つけられたと心得て一時的反抗が起るとも、其は今日の娘心に無理は無い。だから、此點は前述の通り直截簡明を尊ぶ男學生とは違ひ、精々急がずあせらず順を逐ふて進むのがいゝ樣に思ふ。併し共にしてもいつかは一度覺悟を定めてルビコンを渡らねばならぬ。それがこわければ、矢張今迄通りの良妻賢母教育、そして男を買冠つてしくじるのは女の無知不明のせいによる自業自得である。但し此無知も之迄男の都合のよい樣にカラクり仕掛けしてあつた良妻賢母教育の必然の結果なのだから、其責任の後片づけの大部分は矢張男に振掛つて來る。

所でまづ其峠も越え、男でも矢張人間に違ひないが女と違ふ者である事がわかつたとした上、そんな男はよし人間でももはや「神聖」でなくなつたから結婚がイヤになつたといふお孃さんが出來たなら、それでも宜し、唯さへ結婚したがる人が多過ぎて困るのだから。

男教師による一の危險

世人の考ふる所は、此樣な男教師による性的啓蒙は多大の危險が伴ふといふが、其危險の一は今申した「あどけない乙女心」を驚かし彼女の美しい夢を破るといふのだが、一體今迄の人は不當に御婦人をいたわり過ぎたのではないか。其爲に「婦人向」著述や講演や教育に食傷して彼女達は消化不良に惱んで居る。一足飛びの解放は出來ぬにしても何とかしなければならぬ。男の方でも狆や猫をいたわる樣に唯何かなしに可愛がらないで、少く共異性の爲を思ふなら、時には痛々しくても冷水をあびせ掛ける親切があつてほしい。女に媚びる變性男子や色魔が世に多いから、此機會を利用して一寸憎まれ口を叩いて見る。

師弟間に起るかも知れぬ戀愛葛藤

今述べた懸念より更に大なる「常識的危險」といふのは、男教師女生徒間に戀愛の生ぜんとする蓋然性の事である。若し教師が勝れた人で未婚ならば、尊敬から戀愛がうまれ來て「めでたし〳〵」も結構だが、併し性教育擔任者が未婚の青年では、いくら大膽な秀才でも鐵面皮にやれまい。又そんな試みを行ふ勇敢な女學校もあるまいから、其點は心配無用とする。

所で原則として妻子を現に控へて居る男教師が其任に當るとして、其所に秘密な性的交渉が起り得ると憂ひるのだが、無論之も廣い世間に悪教師も居るから、全部保證は出來ぬにしても、さう〳〵泥棒扱ひでは苟くも教育者に對して無禮ではあるまいか。殊に學校教育の場合には衆人環視の中の事だおまけに敏感な女性の直覺的判斷は其際少しの變化でも採り出さずにはおかぬ(1)。其故葛藤の發生は神經過敏の焼餅屋が局外で考へる程頻繁に起り得る危險であるまいと、私は對男學生の性學講義に於ける群集心理が豫想に反し却つて抑制自重の方向に都合よく働く事から類推しておく。但し個人應問を獨房なぞでやるとすれば、カトリック教の懺悔の時の樣な弊害も起らぬとは限らぬが、男でも餘程勇氣が入用の告白の後の相談を、果して内氣な女生が求めるであらうか、之は無經驗だから何とも云はれぬ。用心に如くはないが、餘り非人扱ひは教育者を過する道であるまい。さう無暗にこわがると、男教師に迄貞操帶の如き錠前が入用になるかも知れぬ。

（1）女學校へ行つたら、教師は第一時間教壇に立つが早いか教室内で最も容色の目立ゝぬ一女生を見付けて、其時間内其女生から他に眼を轉さぬ樣にする事、質問を秀才らしい小數の女生にのみあてると他の物議を醸す事があるから注意、などと色々の秘訣を新米教師に口傳して吳れる老練家もある程だから。

男心を知れば母性はおのづから

所で男教師が何を教へるかと云へば、博物生理衞生の時間に少しづゝ挿込んで、まづ第一に男は女と遊ぶ者である事、それから始めて兩性の接近其度を過ごすと性交に至るのが常態である事、性交が行はれたら姙娠分娩に至るのが常態である事、子をうみ落したら今日の經濟組織では男に物質的補助を受けて母が育てねばならぬ事、之等を共順を逐ふて述べ、其子に於て父母の性は遺傳學的に半分宛存在して居る事に說き及ぼせば、もはや配遇者の選擇を忽がせにしてはならぬ理由や結婚の重大な所以や貞操の重んずべき所以を態々說教しなくても、既に將來の生活に對する覺悟は自然にできる。即女性々教育の第二要件たる

人生に於て最も重大な母性の意義を特に生物學的に自覺せしむる事

は、前述の科學的啓蒙の必然的結果として現れて來る筈である。

之が對女學生性教育に關する私の卓上思案の大體である。無論實驗して見なければ、果して空論か實論かはわからぬから、自說を謙遜するのも自慢するのも不可能ゆゑ、當分双方共差控へておく。

＊　＊　＊　＊

附り　一、處女の間の同性戀愛

女學校に於ける同性戀愛の問題が屢々學校當局者を惱まし時には同性心中が起つたりして責任者を苦しめる事もある。

斯樣な現象は、一般的に云へば、女子教育にあづかりしかも學校樞要の地位にある男が、女性心理に疎く、就中處女の心理に全く無知である事に原因する事が多い。即性的無知にして何等反省する所も無く男性心理を以て直に女性のそれを律し、純潔にして何等肉體的trickを伴はず唯抱擁唯憧憬に終る處女のプラトニック・ラヴをば、男學生寄宿舍に群集心理的傳染現象として起り易い相互自慰及び鷄姦と同一視し、直ちに之を醜行と斷じ威嚇壓迫刑罰を以て其に臨む結果、ゆわれなき侮辱を受けたへ難い羞恥を抱く乙女を驅つて悲劇的運命に陷れるのである。又一方に於て現象の內容のわからぬ他の乙女達の好奇心を唆つて、わからぬまゝに無我無中な模倣に始まる傳染も行はれる。

即女學校に於て、異性心理を學ばねばならぬのは、單に女生ばかりでなく、一般男教師がまづ兩性心理の差を科學的に學ぶのが、目下の急務である。

女性間の同性戀愛は、未婚既婚に從ふて種々形式を異にするが、女學校教師の必ず知らねばならぬ事だから、近く機會を得て安田德太郎君が多分小册子を書くであらう。

實話。或若い督學官が女學校視察に行き、體操科授業中に數多の女生が佇立傍觀してゐるのを見て、其校の女生が頗るずるい事を責めたが、其を唯々諾々聞いて居た校長が次の室迄先導して行つて恐る〳〵『實は婦人には女性の特有の…』と口を開きもあへず、督學官はハタと思ひ當つて赤面したさうだ。此話が可成そこゝから傳へられる所を見ると、唯一回の出來事で無く、繰返し〳〵起つた事らしい。

附り　二、高級婦人雜誌

さきに婦人雜誌を論じて分類を試み、告白雜誌と囈報雜誌との二つを述べたが、尙此外に「高級婦人雜誌」がある。併し別段其に觸れなかつた譯は、其が大體から見て名許りの婦人雜誌であり、寄稿者も讀者も其大部分が男子であるから、態と省いた次第。無論之を讀む熱心な女も少くはないが、近頃は其雜誌が「高級」である爲に何やら電車の中で擴げて居てもゑらさうに見えるといふので、讀んでも餘りわからぬが人に見て貰ひたさに買ふ女もなきにしも非ず、さうすると之は婦人の「讀物」でなく「見世物」と利用されて居るが、擴げて人に見せる內に矢張何かおぼえるから頗る結構な傾向である。

由來新興日本の女性文化の建設に於て、明治二十年代に最も盛んであつた巖本善治氏の女學雜誌が「高級婦人雜誌」の元祖であり、當時の思想界に異彩を放つて居たが、之も亦主

として男が書き男に讀まれた物である。今も昔も啓蒙に熱心な若い男が主として其雜誌に携つて居るが、秀才は「笛吹けども踊らぬ」に愛想盡して其を離れ（1）、又殘つて居る男も久しく共に從事して居る内に元有意義であつた男として溌溂な思想も失ひ、女性自決の妥協的傾向に陷つて終に雜誌も存在理由を失ふに至るといふ筋道、希くは今ある高級雜誌のための意氣込を忘れず徒らに營利主義の捕虜となる事なしにきばつて貰ひたいものだ。あつさりした表紙が段々艶麗になるのは餘りほめた傾向でない。

（1）『一體青年氣鋭の學者は、抽象的に女性を考へて一擧に女性の啓蒙向上の可能を夢みて、種々の試みをした末、あこがれの女性は唯理想の者に過ぎなかつた事を發見して又男の世界へ歸つて、そして皆大家になる。後の大統領ウイルソンも後の生物學の大家モルガンもロイブも皆、青年の頃我校の教師であつた事は何を意味するか』と米國隨一の女子大學ブリン、モール校の總長交迭に際して、嘆聲を發した男の學者が最近にあつた。

* * * *

對既婚婦人の性教育

既婚の女に對する性教育は、既に彼女達の處女としての羞恥心は事實體驗を以て拭ひ去られた筈であるから、女學生に對する程に廻り道と氣がねをせず共、素直に彼女達の體驗を科學的に一括して適當な説明を下し、其上彼女達の抱いて居る迷信を掃除すればいゝ、即ち女が男と同樣に眞理を愛するならば、何も困難は無い筈である。所がさうはうまく行かぬ。

『自然は、女に唯一の自衞手段として、僞善を與へた。獸が爪を使ふのと、女が僞善を用ふるのは同じ事であり、女は自身の僞善を或程度迄辯明出來ると信じて居る。』Schopenhauer

といふ程ひどくはないとしても、矢張今迄のたしなみとか品とか申すブルジョア式タブーがあるから、困難があらう筈は無いと云ふても、其「筈」が豫定通りに實現しない。現に京都市教員聯合會の四時間講義でも、一男聽講者の觀察によれば

『性教育講義は講師次第で有害の事もあらう、但し先生ならばどし／＼やつて下さい。併し女には餘程前置をうまくやらぬと、處女をを傷つけられた樣に思ふ人が多いのを見聞した。實際第一講丈で「あんな話をよくまあ講壇から鐵面皮に云へたもの……」と嘆聲を發して第二講には來なかつた女教師をも見た。』

さうである。講演後受取つた匿名感想文の中にも女教師のが數通あつたが、皆私の話した女性生理及び心理を彼等の體驗に對照して全部肯定して居る點から解釋すると、私の説が虚僞杜撰極まる爲に若干女教師の憤慨を招いたのではなくて、寧ろ其が彼女達の體驗にピツタリあてはまり過ぎた爲に、透視され解剖を受けて居る樣な氣分で其場に居たまらぬ樣になつたのではないかと思はれる。女でなく共、人間は痛い所を

ゑぐられたら悲鳴をあげるのは常然、例へば其時の一男聴講者でも

『神秘な所に美觀がある。物が餘りに赤裸々になり機械的になれば、無趣味となり醜汚の感じが生じる。』

と答へた。其時の講演は前に某誌で公表した以外立入つた事も云はなかつたのに、斯く乙女達を苦しめたとは私の無經驗の致す所、將來對既婚婦人の話でも餘程「御婦人の貞淑」を傷つけぬ樣注意したい覺悟である。併し乍ら、我日東島帝國の女性に對しても亦、一般に

『女は分析を厭ふから、眞因の區別は出來ない、そして分析は多くの不眞實を暴露するから、女は分析される事を好まない。』R. H. Lotze

『女の性質は、男、愛情、小兒、社會、人生の目的等に關して、一切の眞實を惜む。そして彼等の眼を開く者には悉く復讐せんとする。』Fr. Nietzsche

のかも知れぬ。さうしたら是非も無い。女の爲を思ふて進んで啓蒙をしやうといふのに、却つて復讐なんかされてたまるものか。殊に怨を受けたら七生迄祟るといふ執念深い女の一念否しかも複數の怨が積つては後生が恐ろしいから、對既婚女性の性教育は他の適任者にお譲りするか、それ共眞實を愛する事女よりも稍すぐれた男即彼女達の良人を介する至極廻りくどい間接啓蒙に甘んじて、得心づくの無知の中に惱む女性には手が觸れないのがいゝか、目下考慮中である。

一九二三、一〇一四京都市外宇治町にて

自説のあらましと其補遺

一、此論文は性教育の中で特に女性に對しての實行法の大體方針を發見せんと試み、併せて現代流行の婦人雜誌の性教育上の價値及び影響を考へたものである。

既に前に公表した、三論文の後をうけて現代性教育對策の一部となり、近き將來に於て一括されて『性文化の黎明、性教育論集』として公表される豫定。

二、筆者自身が最近數年間試みた文獻上の性學研究と、同志社の男學生に對して施した性教育と其間の觀察經驗とが、此論文の基礎根據となつて居る丈で、常態女性に對する教育上の經驗は皆無だから、女子教育專門家から見れば之は純然たる机上の空論である。併し乍ら机上論必ずしも實施して空論だとは限らないから、論據の一部始終を録して江湖の識者の叱正を乞ふて見る。

三、之で論ずる女性とは、女學校の門は一度は潜り或は又婦人雜誌の少くとも一部は購讀した經驗を有する婦人、即少くとも自任自稱して智識階級の一員だとする女のみを意味し、其以外の「無識無産」の女賃銀勞働者及び枕席勞働者等は包括されて居ない。だから名實兼備のブルジョア及び氣分丈ブル臭いプチー、ブルジョア婦人のみ對象とする。

四、「良家の子女」は清純な家庭に育ち地位學識ある良人に嫁する故、不測萬一の性的自衛策を此純潔な處女に授くるは有害無益であるといふブルジョア論理は、一方晩婚を強ひらる〻有識男子側の結婚前期の性的活動の可能と、性病々理原體の階級無差別的普及の事實と相俟つて、「耳を蓋ふて鈴を盜まんとする」こけの骨頂に歸する。

五、性現象の現實暴露に際して起る婦人側の本能的退却はブルジア式タブーの觀念と結合して、一種激烈な羞恥と憤怒とを惹起し、殊に基督教の「高潔な人生觀」にかぶれた人に於て其が甚だしい。併し乍ら女學生が他面に於て潜に性智識を求めて居る事實から見れば、斯樣な啓蒙初期に於て起り易い抗議拒否は因襲の情勢による或は女性生得の伴假辭による『女性の否』から來る皮層的假象と斷じて、其拒否は餘り眞劍に受取らずに唯淡白に啓蒙の試みを續行するのが、社會人道の爲になるやうに思はれる。

六、性教育は現代日本に於ては純乎たる一の啓蒙運動即どぶさらへ藪掃除の類の男性的事業であり、天性守成防禦に長けた女の教師が其を試みる事が可能であるか。第一に既婚にして子もありそして充分な性學智識を具へた適任者を早速に得る事が困難な上に、適任者があつても、師弟間に緻密婉曲な理解がありすぎる爲に同性反撥現象が起り易からうといふのが、私の机上の取越苦勞である。

七、「女の事は女がする」といふ女性自決主義は、此男女によりて形成されて居る人間社會に於て、或特殊の場合の外大抵實行不可能である。女子教育に於ても、教育といふ啓蒙事業の性質上、矢張男教師の參加共力をあらゆる學科教授に必要とする樣になつた。將來行はねばならぬ性教育でも唯今の所「常識的」に女性自決を要求されて居るけれども、之は私の所見に據れば、一種の机上の空論か疊の上の水練であらう。

八、女性々教育に於て特に女教師を不可と私が斷定を下すに至つた積極的理由は、現代日本の世相から見て兎角男性の肉迫突貫に對して無知無防備な處女達に對して、結婚前に起り易い不測の（處女から見て不測であるが人性の全部から見て極めて當然な）危險を防ぎ、併せて結婚後の幻滅の惡影響を精々少からしめる爲に、前以て男性生理及び心理の科學的智識を授けるのが先決問題であり、其當事者にはモルモット代りに男教師を以てすれば男性特性の實物教授にもなるから、至極てつとり早くて案外危險も少く又實行も割に容易であらう、といふ私の所信に據つて居る。

九、未婚青年學生が女性心理に關して抱く智識慾は、余の見聞の實際に徵して、頗る熾烈である。無論之は本能的智識慾に始まるが、第二次的に自分達男丈充分敵情に通じて一種活殺自在の色魔的怪腕を揮はんとする野心が幾分加はつ

て居ると、私が觀察したのもあながち自己本位の邪推許りでないらしい。彼等の此智識慾は現在に於て、主として(一)性慾描寫小說の耽讀と(二)告白專門の婦人雜誌の硏究とによつて、充たされて居る

十、現代流行の婦人雜誌を三大別して(甲)告白雜誌、(乙)寫眞畫報雜誌、(丙)高級雜誌とする。執筆者と讀者とに就て男女の割合(sex ratio)を考へるならば、甲乙だけが純粹の婦人雜誌であり、丙は寧ろ男の讀物であると同時に或女共の「見世物」に利用されて居る。

十一、告白雜誌は、女性特有の愚痴の安全瓣として、世の夫の感謝すべきもの、其くどくて齒切れのせぬ低級さが其の特徵であり、未婚青年も亦此雜誌の分析的硏究によつて女性心理の幾分かに觸れる事が出來るから、性學硏究材料として可成貴重なものである。但し之の感嘆的に描寫した暗膽たる人生は一種性敎育上の警戒として未經驗者の爲に有益と思はれるが、欺かれる女が一向減じない所から見ると、豫想外其方面の敎育的効果は乏しいらしい。

十二、寫眞畫報は「愚人の樂園」Fool's paradise の紀行記錄べデカーとして絕好のものであるが、貧乏な學者が見れば、あれ丈金掛けてアートペーパーと網目版を用ひたら我々の世界的硏究も自由に發表が出來るがと惜く思ひ、赤い連中から見れば、奴等いゝ氣になつて噴火山上の舞蹈をしてやがら今に見ろ……と思ひ、世間見ずの少女が見れば、私もあの寫眞の通りに結婚したり家庭をもちたいと思ふ。最後の點に於て、此雜誌は女學生性敎育の上で輕佻浮薄淫靡華奢なる惡傾向を招き易い有害無益の物と斷定するも、あながち私の偏見獨斷許りでなからう。

十三、高級婦人雜誌は、本來ロマンチックな青年秀才が抽象的假想的女性の啓發を圖る爲に試みた一種英雄的計畫に其端緖を發し、世の多くの同感者たる男の贊助後援によつて其存在を續けるが、經營編輯者の豫定の退却又は女性化墮落によつて營利主義の惡影響を受け、又は群衆暗示の爲に美人畫を表紙に掲ぐるに至り、或は容積尨大な小說創作の貢獻によつてふやけ切つて、終に當初の存在理由を失ふものが過去に多かつたのは殘念である。

十四、女學生の性敎育に於て、兩性の接近——性交——姙娠——分娩——育兒といふ當然的自然過程の智識を與へ、且又子供に於ける父母遺傳質の同格な事を知らせたらば、配遇者選擇、結婚、育兒、母性などの重大な自覺は、何等道學者的敎育を待たずとも、湧いて出て來る。

十五、異性の師弟關係が更に深入りして特殊の性的接近を招くであらうといふ常識的心配は、實は女性特有の敏感と一種の嫉妬心から來る嚴重な相互監視の存在を知らぬ空論で、實際さう／＼物騷な極端な例は新聞でおどかされる程

普遍的に起るものではあるまい。

十六、女學校で異性心理を學ぶ必要があるのは、唯に女生徒許りでなく、一般男教師も充分科學的に女性心理の男のそれに違ふ點を心得又起り得べき色々の場合に備へておかぬと處女の純潔無害の同性戀愛を抑壓して罰を加へたり又自殺させたりする様な大事を惹起す例もある。

十七、既婚婦人が有して居る性智識が、頗る危險な速斷と言語同斷の迷信に充ちて居るのは、一般的事實でありしかも其れによつて彼女達の性的生活は可成に惱みが多いにも係らず、今時間經濟腦力經濟の直接啓蒙をやらうとすると、女性特有の氣持が煩ひをなして內心の智識慾の旺盛なのと衝突して一種異常の發作が起り易い。即斯樣な特殊狀況がある爲に、科學的啓蒙は既婚者に於ても豫想外の困難に遭遇する事を覺悟しておかねばならぬ。

十八（追加）此所說は、門外者が見て强ひて奇を衒ふ僻見で、しかも危險極まる空論と見えやうが、實際家に見せれば穩健著實にして實行の可能性の多いものと思ふかも知れぬ。

短詩募集

七月號に短詩を募集します。優れた一篇と佳作數篇を本誌に掲載致します。左の規定に從つて御投稿下さい。

募集規約

一、原稿は十行以內のこと

一、原稿には住所氏名を明記すること

一、封筒に「短詩」と朱書すること

一、〆切九月二十五日

一、當選者一名に薄謝拾圓を、佳作者には本誌一部を進呈します

女性改造編輯部



毒婦妖婦

井上唖々

○醜婦は妖婦たるの資格がないが、時としては毒婦として活躍する。美人にして始めて妖婦としての手腕を發揮し得る、顔容の妖艶なるは男性を悩殺し翻弄するに充分である。但し美人には時に痴呆があり、生氣を缺く人形面は却つて男性の玩弄物となるに過ぎない。そこに才氣の閃がなければならぬ。美貌と才智を兼ね備へるに及んで、威力有爲男子を壓倒し、以て城を傾け、國を傾けしむるのである。三平二滿は當世の女を象徴し、盤若は昔時の美人を代表する。盤若の形相物凄きが中に、仔細に點檢すれば、目鼻立の整然として、その凄艶なるを感得する。三平二滿に至つては鹽吹と好一對であつて噴飯に値するのみである。されば當世の女の化粧は、只白く厚く塗る許りが能であつて、塗れば塗る程、その低い鼻は愈々低く、その出額は益々高い。彼は美人たるべく出發點を誤つて居る。此に於てか妖婦を求めんとして、何處にも求むることが出來ない。偶々近代に名を謳はれた照葉とか、お鯉とか、貞奴とか、一二の辣腕家を認めぬでもないが、容貌に、才智に、妖艶魅惑の實力を缺如して、妖婦と言はんよりも、寧ろ淫婦と云ふ方が當つて居る。偶々白蓮女史の如き出色の女が無いでもないが、末路蕭條、有髪尼となつて淋しい餘生を送るなど〻は、蓋し龍頭蛇尾の感ありだ。毒婦は一面から見て烈婦であらねばならぬ。良妻は一面妖婦でなければならぬ。良人をして鼻下三尺ならしめ、長火鉢の前を安住

の場所となさしむるは良妻の手腕である。

○繼母が毒婦と云ふ譯ではないが、繼母と云ふ境遇が毒婦的行爲を誘導するのである。先妻に對する嫉妬が、先妻の子に對する殘忍行爲となつて顯はるゝのである、誰か好んで繼母となる者があらう。運拙くして再婚せねばならぬ羽目に陷るのである　彼が若し子を生まぬ時には、子の情愛を解する事が出來ぬために、繼兒から見て不慈の母であらねばならぬ。又己れが腹より生れた兒は、先妻の子よりも愛が深いだけ、それだけ、先妻の子を疎にするのも自然である。繼母の行動は孰れにしても繼兒に取つて不足不滿たるを免れない。彼の眼は蛇の如くである。彼の盛つた飯には毒が入つてはせぬかとの懸念がある。溫順なる女性も一旦繼母となれば、忽ち其性格が一變するのである。彼の罪でなくして、繼母たるの罪である。されば先天的の毒婦でなくて、後天的の毒婦と云ふ可きである。

○姑も亦之を毒婦の中へ加へることが出來る。彼は嘗て花嫁であつた、可憐なる花嫁は献身的に、良人の母親に奉仕したのであつた。これ命これ從ひ、一として反くことがなかつた。而も姑からは箸の上下しまで非難され、時には煙管で打擲された事さへある。半夜床の中で暗涙に咽んだことは幾度であるか知れぬ。それが如何である。自ら嘗めたる幾多の苦楚はけろりと忘れて了つたのか、或は自分の受けた苦痛を今こそ人に加へて遣らうと云ふ復讐心に基くのか、一旦姑といふ位置に居直ると同時に、罪もない花嫁を虐め拔くのである。姑の爲めに泣いた花嫁は、天運循環し來つて、花嫁を酷遇する姑となるのである。例へ姑が鬼でも蛇でも云々と云ふ俚諺がある。姑の代名詞は即ち鬼であり、蛇であり、小姑に鬼千疋の渾名がある。

○鴇母に至つては毒婦たらざるを得ぬのである。彼はつまり毒婦たる可く勉强して居るのである。彼の佛顏は女郎の怠慢となり、延いては見世の衰微となるのである。自ら進んで强慾非道の汚名を着て、御内所の爲めに奮勵する鴇母の苦衷には寧ろ讃辭を與へて然る可きである。

○御殿女中で美貌の所有者は、いつか殿樣のお目に止まり、次でお手が附き、側室に出世し、お子樣を設けてお腹樣といふ身分に納まるのであるが、醜貌にして嫁入もならず、一生男の味を知らずに、御殿奉公する女は、根情が僻んで、惡辣陰險なる手段を弄し、他を陷穽せんことのみを心懸けるに至るのである、岩藤と云へば直に意地惡き老女を聯想し、意地惡き御殿女中の代名詞とまでなつて居る。

○姦通の結果亭主が兎角邪魔になり、密夫と謀し合せて亭主を毒殺する女がある。これなどは申分のない毒婦であるが、亭主が心から憎いのではない、情夫を好むこと、亭主に優るの結果である。亭主が若し姦夫を許して呉れるならば、かく迄の無殘を敢てせぬかも知れぬ。亭主に密會を發見されて亭主の方から、重ねて置いて四つにされるよりも、寧ろ發見されぬ前に片付けて了ふ氣になるのである。毒害し、斬殺するなどは、奸惡の極上であるが、かの長患の夫の看護に疲れて、薄情にも振り捨てゝ家出する女房も、夫の意氣地なしに愛想を盡かし、別れ話を持ち出す細君も、共に毒婦の卵子と言つてよい。世間にはこの毒婦の卵子がうよ〳〵して居る 七人の子は成すとも、女に心許すなとは千古不磨の眞理であつて、亭主の居ない留守には何をして居るか譯の判つたものぢやない。女は人前を繕ふ代物である。三々九度の盃を日比谷大神宮で行つても、活動寫眞館の握手が取持つ結婚でも、目覺めたる戀愛に基くとも、盲目的の結合に出づるとも、女は常に男を欺いて居るのである。欺くの强弱と、巧拙とに依つて、此に貞女となり、淫婦となり、姦婦となる。而して妖婦となつて、財産を蕩盡せしむるは、拔群の手腕と、天稟の美貌とを所有せねばならぬ。

○妖婦の典型は小野小町である。深草の少將をして九十九夜も通はしめ、遂に凍死せしめたる隱忍は凡婦の能くする處でない。宮中の花と謳はれて、何人にも應ぜざる處、如何に自ら高く標置したかゞ判る。而して男性をして徒に惱亂せしめて會心の笑を漏す慘忍は、人の心膽を寒からしむるものがある。淸少納言に至つては才藻絕倫、男性をして瞠若たらしむるの槪があるが、惜しいかな容貌秀絕を缺いだが爲めに、才氣は貧の持腐れとなつて、彼の爲めに命までもと打ち込むだ貴公子が無かつた。和泉式部の淫奔は出色であるが、これ亦浮氣女としての資格が充分であるのみであつて、未だ男性をして悶絕せしむる程の技倆を持たなかつた。其他片々たる才媛は、和歌系譜に堪能に、春夜歡樂を猟る淫婦たるに過ぎない。

○世の泰半は淫靡の風潮を醸し、滔々として逸樂これ事とする樣になるのであるが、戰亂相踵いでは、人心殺伐に流れまた溫柔鄕裡の逸物を產出しない。毒舌保元の亂の因を作つた美福門院は確に妖婦と言へる。入道淨海の權威を以てして、遂に祇王祇女、若しくは佛の如き溫和貞順の凡婦に甘んぜねばならなかつた。僅に常盤御前を得て滿足の笑を浮べたに相違ない。何となれば常盤は妖婦に近い型を備へて居るか

らである。操を汚しても貞女であるとは妙な論理があつたものだが、この批評はどの位後世の女の利便に供せられたか知れない。

○此に淀君を得て始めて我朝は他邦に對して誇り得るのである。名門の出にして、絶世の美貌を有し、妙齡の身を以て百姓の倅の妾となつた。たとへ不世出の英雄、天下の第一人者であつたにしろ、その昔を尋ぬれば家來筋、顏は猿の樣で、おまけに年寄である。それにも怯げずに身を委した心情は、如何しても妖婦でなければ出來ぬ離れ業である。石田三成とも通じた、大野修理にお伽をさせた、散々に英雄を掌中に弄んだ揚句が、豐臣家を織手で掻き廻し、到頭滅亡せしめたとは、思ひ切つた振舞ではないか。

○かの玉藻前に至つては、三國傳來の九尾の狐の化身とあつて、餘りに荒誕無稽である。徳川時代に入つて刮目に値するの女性がない。娼樓妓家に全盛を誇る太夫として高尾がある、揚卷がある、名妓美婦と云ふに止まつて、冴えた手腕を認め難い。寧ろ良妻賢母型に屬して居る。意氣地を立てるとか、情は賣れど心までとか、金を山と積まれても、厭な客衆には振つて振つて振り飛ばすとか、頑固で偏狹な點は確に漢學の感化を蒙つて居る。女も子曰くを遵奉する樣では、之を相手に甘い酒が飲める道理が無い。此に於てか妾は常に留守番であつて、旅行のお伴はお妾と相場が定まつて了ふのである。

○近世毒婦として、妖婦として稍指を屈するに足る者、これを智識階級に求むる能はずして、一丁字なき下賤の社會に發見するのである。就中膾炙するものに高橋お傳がある。生首お仙がある。而も彼等は少額の金に眼が晦みて殘忍を敢てする一種の低能兒である、たゞその傳說に依つて其行動を點檢すれば正に戰慄に値するものがある。而も多くは稗史小說家が誇大の筆になるもの、遽に信ずべきでない、ラシヤメンお玉、辨天お君等講釋師の張扇、文士の萬年筆から假設せられた毒婦妖婦は數限りが無く、新聞記事に顯はれた問題の女の詳傳を知りたければ、澤田撫松等一派の記述を讀むが宜い。假設は蓋し實在に原因して居る。本質極めて低劣なるも、評判の爲めに思ひ設けぬ毒婦の名を博する者も尠くない。夜嵐お絹も其一人である。評判は決して眞價でない。眞價なくして評判を博するのは彼等の光榮であらねばならぬ。何となれば長屋の嬶に終る可き運命の女が、僥倖にも思はぬ名聲を贏ち得たからである。

○此に假設として妲妃のお百は毒婦の將帥である。お傳と比

して容貌の差があるのは、蓋し昔時の作者と近代の作者が頭腦と脚色の點に於いて雲泥の相違があるからである。

○××××××××××正室の働きでない。××××に於ても、××××××××××××事故を醸したのである。各時代ともに然りである。此に德川時代を引證するに、大名の家に騷動の絕えた事がない。大小の差こそあれ、側室の舌はよく一家に波瀾を起すだけの力があつたのである。

○著名の例に加賀騷動がある。黑田騷動がある。小笠原騷動がある、森騷動がある、側室の權腕はよく忠臣を遠ざけ、小人を近づけ、漸く一家を顚覆せんとする隱謀を逞しうするのである。此中尤も人口に膾炙して其妖術を首肯すべきは、黑田騷動の中心人物たるお秀の方である。大名は素より凡庸で世情に通じない。之を籠絡するは赤兒の手を捻るよりも譯はない。その譯のない手を捻つた爲めに、事が面倒になつたと云つて、罪を必ずしも側室に歸す可きでない、功を獨り收めしてはならぬ。そこが女の女たる、損か得かは知らぬが、目標にされる所以である。

○女將に三ぎんがある。一は新澤樂のおきんである。伊井を愛して天に愧ぢさるものがあつた、年六十にして壯者を凌ぎ、その肌膚の滑なる、十七八の處女も及び難しとある。その昔吉原で散々男に弄ばれた娼妓の果てとは思はれぬ程に若々しかつた。岡田のおきんは濱町に崛起し、入金のおきんはお世辭で名が高い。皆一代の才女であつて、千客をして萬來せしむる吸引力を持つて居た。其實力なくして愁氣滿々たる者にバー、カフエーの女給がある。美貌を缺き、智識を缺き、一夜相識る男に多額の無心を吹懸けて吃驚仰天せしめ、あつたら鼻下長を逸して了ふ。その指の爪の長くて垢の溜れる、耳の穴にむく毛生ふて耳糞の堆さ、白粉のむらはげ、髮の毛の赤くして、坊主襟なる。天然と裝飾を缺如して、敢て自ら覺らず、魅惑せんとし、籠絡せんとするは、神經の遲鈍なる證據である。若しもこんな女に籠絡せられる男があつたとしたら、その男は田舍から出て來た許りの野暮漢に相違ない。されば相手次第で妖婦ともなり得る、三ツ山形に二ツ星の松の位の太夫職に眼も呉れぬ男もあれば、新宿の馬方女郎と心中する男もある。惚れた弱味は松皮の黑疱痕も笑靨と見え、すべた女も辨天樣と拜まれるのである。

○越後は女郎の產地であつて、越後出る時きや涙で出たが、今ぢや越後の風もいや、と謠ふ程、越後の女は娼婦に適して居る。卽ち出稼ぎ女たるの性格に富んで居る。かの天草の女に至つては一層氣宇が大きく、海外に發展して、不毛の地に

侵入する勇氣がある。越後系の女郎は決して容を振ることがない。その代りに惚れることもない。肌は白く、且つ餅肌であるのは、××××××××××××。即ち越後女は心の妖に非ずして、體の妖である。此點は京女も亦然りである。鴨川の水に磨き上げたる肌は雪の如く、柔きこと羽二重の如く、一瓜實に二丸顔の美人揃ひである。昔時に於て、大阪女は妖婦として推賞すべき特質を備へて居た。近松巣林子が取扱つた相手の女は、殆んど大阪の女ではなかつたか。而してこの大阪の女は大概男を死地に導いて居る。妖婦の特色がなくて、かゝる思ひ切つた眞似が出來やう筈がない。一々例證を擧げる迄もないが、淨瑠璃に顯はれた女の中で著名な女に、梅川がある。お俊がある、お初がある。夕霧がある。小春がある。娼婦、妓女、女房、娘、あらゆる大阪の女は妖婦型である。大阪の風景に賞美すべきものなく、京都の山川の興趣饒なる、而して女は人形の如く、反對に大阪の女の活く々したのは如何した譯か、山紫水明偉人を生ずとの諺も餘り當てにはならない。尾張は平々凡々の平地である、而して信長が生れた。秀吉が生れた、利家が生れた。當時の英雄多く尾張から生れたと言つて可い。大阪の凋落に反して、現代は名古屋美人を推賞する。推賞するは何が故であるか、新橋で嬌名を謳はれ、全盛を誇るもの、或は妾腹として振はぬもの、而して他に比べて沒落せずして、生命を持續するものに、名古屋種が多い。香雪軒の娘は杜公の夫人となつた。名古屋の女は新潟に比べて手腕がある、能がある、技術がある、――そして京都式の吝嗇がある。新潟の粗野が、名古屋の柔佞に壓倒せられるのは當然である。つまり名古屋の女は猫と思へばよい。面憎くても遂に遠ざけることの出來ぬのは猫である。

○京都女の執拗は、かの「掛乞や京の女の恐しき」の一句に盡きる。更に附言すれば、あの聲で蜥蜴食ふかや山時鳥、である。妖婦に非ずして毒婦に近い。秋田、山形等美人系の女でも、あの土音ではお座が覺める。此に關東の女否江戸の女の特徴を一言する。

○江戸は將軍家のお膝元である。諸國の人々その繁榮を慕ふて來集し、業なるもの、土着となるもの、子々孫々相傳へて江戸ッ兒と誇稱するのであつた。鼻張が強くて、意地張である。娘も亦この氣質を受け繼いで居る。女郎には不向で、藝者には持つて來いの性格である。吉原に江戸の女を見ずして、柳橋に江戸の女の多いのは素より當然である。江戸の女の延長は東京の女である。田舍漢に蹂躙せられた東京に滿足な娘の存在があり樣はないが、彼は天然にして男性をそらさ

ぬ。如才なさがある。お百度参りの孝行娘は田舎娘でない。可愛い男の爲めには進んで身を賣るのも東京の女である。彼は妾として妾だけの勤めに申分は無い。姐御となつては倶利加羅紋々の荒くれ男を頤の先で自由に驅使する權威を持つて居る。これ一面に於て善意に解釋したる妖婦ではないか。長火鉢の前の立膝、五分の隙が無い扮装風俗には魔魂惚れずには居られない、唯惜むらくは、東京の女は色が黑い。肌が荒い、言葉がざつくばらんである、七面倒な事が嫌ひである。漸を以て進むの忍耐に乏しい。竹を割つた氣性は、凡て其場限りである。大阪の陰險、名古屋の柔佞、京都の執拗、新潟の屈從、これに江戸ツ兒の啖呵を加へて、完全無缺の妖婦を見る。巴里の女、土耳其の女、果して男性を魅惑せしむるの力があるか、否か、恐らく彼の妖は新潟のそれと等しく、肉の妖ではあるまいか。寡聞にして西洋の妖婦の傑出した者にクレオパトラを知るのみである。食するにホークとナイフを用ひ、簡單明瞭なる服裝せる女に、手練手管があつて堪るもんかい。換言すれば彼等の技巧は獸性の發揮である。

○××××は一盗、二婢、三妾、四妻の順位である。が此に後家の捨て離き色香を閑却する事は出來ない。惚れられるだけは殘して後家の髮、石塔の赤い信女が妬むのは當然である。後家の中で歴史に著聞し、妖艶淫虐、最も活躍したのは吉田御殿の主人公千姫であるは云ふ迄もない。木强漢島村抱月をして浮名を流さしめたのは松井須磨子である。後家は妖婦でない、が妖婦たる可き好都合の境遇にある。後家の爲めに身を誤まつた學者、未來ある青年等、數限りがない。現代にも幾多の事例があるが、現存者は其名譽を重んじて此に顚末を明にせぬ。

○我が日本の史家は、妖婦の傳記を逸したが、支那には稍出色の妖婦を見る。大邦は大邦だけに大仕掛な凄腕の所有者が居る。

○漢の呂后は賢婦であつて妬婦である。我が政子と性格が酷似して居る。行跡も亦相似て居る。呂后が如何いふ風に戚夫人を慘殺したか、先づ趙王如意を鴆殺し、夫人の手足を斷ち眼を去り、耳を煇し、瘖藥を飲ませて厠中に居らしめ、命じて人彘と曰はしめた。帝を召して之を觀せしめると、帝驚いて大に哭し、これが基で病を得て、一年餘りで崩じて了つた。賴朝と馴れ染めは極めて妖婦式であつた政子は、晩年に至つて毒婦となつた。呂后と相並稱すべき毒婦の統領である。

○後宮の佳麗三千人、三千の寵愛一身に鍾まつたのは誰である。六宮の粉黛顏色なき程の秀麗佳絕は大年増の楊大眞であ

る。始め玄宗の子壽王の妃たること十年、玄宗に懇望されて後宮に入つたのである。馬嵬に惨死しても猶白樂天に依つて、玄宗が綿々の情緒を謳はれ、未だ嘗て史上に見ざるの女性美を發揮した貴妃は、これ妖婦中の妖婦ではあるまいか。元より小股のきりつと締つた女ではない。豐艶便體、當世向の丸ぽちやで、五代目の相手となる立女形ではない。支那の女は皆丸ぽちやで、我が日本とは美人の標本が違ふのだから已むを得ない。漢の武帝の李夫人は、反魂香にその名を留めて居る。此に呂后の殘忍と、貴妃の妖艶とを兼ね備へた傑物がある。卽ち則天武后である。

○唐の大宗、則天武氏の美を聞いて、後宮に召し入れたのは僅に十四歳の時であつた。貞觀十一年に才人といふ女官になつたが、二十四歳の時に大宗が崩じたので、寺に入つて尼となつた。大宗の子で、次の帝位に卽いた高宗が、寺に幸して才人の變り果てた姿を見て泣いた。時に高宗の皇后王氏と、淑妃とが寵を爭つて居たので、王皇后は才人をして窃に髪を蓄へしめ、高宗に勸めて宮中に納れた。すると忽ち后も淑妃も高宗の寵を失つて了つて武氏獨り寵を專にする樣になつた。時に年が卅二であつた。才人から昭儀と位が上つて、尋いで后となつたが、王蕭共に殺して了つた。高宗崩じて、子哲位に卽いたが、廢して廬陵王となし、子旦を立て、自ら朝に臨んで、制を稱し、武氏の七廟を立てた。諸王反亂したが皆之を滅し、自ら聖と名乘り、皇帝と稱し、國を周と號した。時に年が六十七である。初め僧の懐義を寵したが、後に張易之、張昌宗の兄弟を愛した。その精力の絶倫驚く可きものがある。八十二で死んだ。次の中宗の后韋氏も淫亂では武氏に敗を取らなかつた。

○夏桀に末喜がある、殷紂に妲妃がある、周幽に褒姒がある、衛宣に宣姜がある、魯桓に文姜がある、魯莊に哀姜がある、晋獻に驪姬がある。魯宣に繆姜がある。陳女夏姬がある、齊懿に聲姬がある、齊の東郭妻がある、衛の二亂女がある、趙靈の呉女がある、楚考の李后がある、趙悼の倡后がある。皆これ妖婦の傑出せるものであつて、一顰一笑よく國を亂し、人を滅したのである。この中人口に膾炙したる二三を拔いて、その亂孽無道を述べる。

○末喜は夏の桀の妃である。色に美にして徳に薄く、女子にして丈夫の心を行つた。桀、末喜を膝上に置いて日夜酒宴に耽つた。酒池を作り、頭に繫して酒池を飲ましめ、醉ふて溺死するを見て、末喜は大に笑つた。

姐妃は殷の紂の妃である。紂酒を好んで淫樂し、日夜妲妃

を離さない、妲妃の譽むる所は之を貴び、妲妃の憎む所は之を誅した。糟を積んで丘と爲し、酒を流して池となし、肉を懸けて林と爲し、人を裸にして其間を逐はしめた。これ妲妃の大に喜ぶ所である。紂は又炮烙の法をつくり、銅柱に膏し、之に炭を加へ、罪ある者をして其上を歩かしめ、炭の中に墜ちて七顚八倒するを見て、妲妃は大に笑つた。妲妃の言ふには、聖人の心に七竅があると云ふ事を聞いて居る、どうかして見たいものだと、そこで紂は紂に諫言した比干を捕へて胸を剖いて之を觀せしめ、妲妃の御機嫌を取つた。

○褒姒は周の幽王の后である、幽王褒姒に迷ひ、出入共に同じく乘つた。褒姒の意を迎へやうとして倡優を前に列べ、夜を晝に繼いで飮酒沈湎したが、褒姒はにこりともせなかつた。幽王どうかして笑せやうと、いろ〳〵萬端手を盡したが、どうしても笑はない。そこで幽王は寇の至る時に擧ぐる烽火を、寇なきに擧げた。諸侯烽火を見て悉く至つた。褒姒始めて大に笑つた。幽王褒姒を喜ばせやうとして、度々之を行つたので、諸侯之を信ぜず、來援することがなくなつた。西夷、犬戎來つて幽王を攻めた時に烽火を擧げたが、兵が來らぬ爲めに殺されて了つた、即ち幽王は褒姒が一笑の爲めに赫々たる宗周を滅して了つたのである。

○陳女夏姫は其狀美好匹なく、內技術を挾むで老いて復た壯なる者であつた。三たび王后となり、七たび夫人となつた公侯之を爭ふて迷惑して失意せざるものがなかつた位である。

○支那の婦人は精力絕倫で、奇略縱橫である。お茶漬に澤庵の尻尾を嚙り、カロリーに、ヴイタミンを計算する樣では、到底男子の滿足を買ふ事が出來ぬ。今後の日本婦人は豚を食ふに限る。支那の妖婦は悉くこれ淫婦であつて、一人を守ることなく、性質凡て殘忍であつて、人を殺すこと蟲けらに等しい。日本の妖婦に比べて徹底的である。飽く迄我意を張り通して、屈せぬ所にその特色を認める。

姙まざるの工夫を講ずる者は、闇から闇へ葬むる中條流と異ならぬ。藪へ捨つる者がある、賣つて金に代へる者がある甚だしいのは命を斷つて顧みない、狗子に佛性あつて、女子に魔心がある、從つて兒を殺すのは、父に非ずして母である、戶外の鼠賊は恐るるに足らないが、後閨に兇盜を戒めねばならぬ。神明佛陀の光に浴すること難く、惡魔外道の闇に墮し易きは女性である。妖婦を操縱する法も女を御する道も變つた事はない。婦女を見ること玩具の如く、家畜の如く、暴虐壓制到らぬ男には、如何に狂暴な女も溫柔猫の如くなる。婦人のヒステリーは畢竟男が甘過ぎるからだ。其才を貴び、其美を愛して珍重其度に過ぎるからだ、毒婦を制御するは放逐である、妖婦を屈服するは鐵拳である。



父獨步を憶ふ

國木田虎雄

1

季節はたぶん秋であつた。

朝早く父と私とは、郊外の練兵場近く、眞直ぐなコークスの道を歩いてゐた。遙か遠く、道の上に射的場の土手が朧げに眠つてゐた。

今でも私はその土手のことを思ふと嬉しくなる。そのじぶん私は大變弱虫であつたが、私の日毎の夢はたいていその土手の附近から離れなかつた。遠く聞えてくる鐵砲の音に私は私の戰場をそのあたりに描いた。どんなに華やかな突貫が疊の上の私の兵隊共によつて毎日續けられてゐた事であらう。

道の南側の灰緑色の敷疊の波の上に、空虚になつた雜木林の部屋部屋がひつそりと續いてゐた。清冷な霜の白い刷毛はこの子供の嬉しさでわくわくする體を朝の空氣をもつて不思議な氣高さに化粧してくれた。

このじぶん私が二人限りで父と共に歩むのはこれが始めてであつたらしい。私は大股に兩手を大きく平行に振りながら父の横に、さくさくとコークスを踏むだ。

もうその時あたり病める父の顏を、私ですらひどく青白く感じた。

私はこの時何故か大人らしく平氣で父に話しかけたかつた。この五六歳の愛すべくこざかしい子供は自らを彼の友人に見立てゝゐたのである。

歩みにつれて父の手は極く僅に搖れて居た。

「あなた、そのふりかたはまちがつてゐます。」かう云ふやうな氣で私はそれを父に注意した。
「うそをつけ、おまへのがまちがつてゐるのだ。」父は不思議さうな顔にかすかに笑ひながら言つた。私は父が正しいのであるといふことをどうしても信じ得なかつた。私にとつては平行に振ると云ふことが唯一の眞理であつたから。
　私はおどおどして僅に抗議を申込むために口を開かうとした。だが父はもう私のあやまりを説明しだした。しかし其の言葉は耳には入らなかつた。私の心は何とはない悲しさの外何物も内に入れる事を拒絶してゐた。
　もう私は機嫌が惡かつた。私は默つてしまつた。黝つた赤土の小徑を、顔よりも高い笹藪を、枯れた尾花の中を、私は父に從つて夢中になつて歩いた。
「虎雄、登れるか」父は一間程の高さの土手を登りながら振り返つた。直ぐ父は下りて來て私を抱き上げた。
　下は山の手線の線路である。
　工夫のやうな男が二三人線路の横に立つてゐた。その足許にむさくるしい頰髭で顔をうづめた男が泥塗れになつて寢て居た。四五間離れて巡査が一枚の莚を持つて人々の方に向つて來た。
　突然、私は目の前に切斷された手首のやうなものを見た。私の體は何故か竦むでしまつた。そして厭ふべき不思議なものの香りを感じた。それは忽ち全身にひろがつた。
　しばらくして「虎雄、歸らう」父の惱ましげな眞面目な顔がいつた。私は父の顔を見詰めてゐた。
「さあ歸らう」父は私の手を取つた。然し其の聲は子供である自分に云ふごとくではなかつた。其の聲を私は何とも云はれない悲しいものに、はつきりと感じた。
　縁側に腰をかけて靴脱ぎの自然石の上で其の青白い足を水に浸して居る父を、私は椽に首筋をあてながら默つて見てゐた。私の頭にはつきりと殘つてゐる其の足の青白さこそは私の父の面影の全部の空氣に應はしいもののやうに思はれる。
　父はふと横に坐つてゐる母に今見て來た出來事を話し始めた。私は其の最初の言葉を聞くなり自分の體の置き場所に迷つた。然しなつかしい父は直ぐに口をつぐむで私に優しくほゝ笑みしながら、母に、「あとで、あとで」と云ひながら奥に入つていつた。
　それから私はどうした。私はその一秒後の自分を斷ち切られたやうに忘れた。

その他、その當時の私の記憶は、たゞ黑く大きい臺紙に枠取られた小さい寫眞にすぎない。

或る時、父は温かさうな緣側の日向にしやがんで、庭の植込を越して垣根にまで屆きさうな接竿を手にして、頰骨の出た口髭のある人と笑ひながら話してゐた。父はしきりにその竿の說明か自慢をしてゐたやうである。

また私は大きな食卓の彼方に坐つてゐる父を見る。それは湯ケ原のとある宿屋の明るい二階であつたらしい。私は自分の食卓のものが氣に入らなかつたので、何か或物が食べたいと強情を張つてゐた。女中が後から私をしきりに賺してゐた。父はその時、心から困つたやうな顏をして、女中に私の強情を話してゐた。

2

その白く塗られた病室は、私の長身ぐらいの小松の間、小高い灰色の砂丘の影にあつた。私はいつもその病室を深い懷しさと恐れとで悲しくなつた心で見てゐた。母達はその建物に少しでも近づくことを絕對に子供等に許して呉れなかつた。その建物の內の部屋の一つに私の父がゐるのである。

私はこの時、もう小學校の一年生であつた。時々私は獨步といふ名を耳にした。不幸にも、やがて遂に私は數へられた。彼は私の父であることを、それに彼の病氣がひどく重いと云ふことを。

然しその父は、私の今まで慕つてゐた彼の父とは全く別人のやうに思はれた。私は心の何處かにかたく信じてゐた、彼の私の古い父は決して死にはしないと。

それは恐らく父の死期が近づいてゐた爲であらう。或る日私は妹と二人で父の病室に入つた。父は窓を後にして私達のためにベツドに起きなほつた。その病みほけた顏に靜かにひと流れした微笑こそは、どんなに久しくも私の待つてゐたものであらう……

光線を後から受けて、父の鋭い頰骨のあたりの線が灰色の顏をくつきりと浮ばせてゐた。すでに父の顏にかの懷しい青白さのないのを私は感じた。

妹に向つて父は山伏の話をしてくれといつた。今にして憶へば妹の話し振りは、なんといふ愛らしくものどかなものであつたらう。意味の解らない小供の言葉が、彼の太つた

頰の眞赤な私の家の女中の口振をそのまゝに、ゆるゆると得意げに私の耳に續いた。

然し私の心は決して穩かではなかつた。あたりの空氣は私を落付かせなかつた。私は故知れぬ焦燥を全身に感じてゐた急に、私は妹の話を奪ひ取つた。そして思はず大聲でそれを暗誦し始めた……が忽ち私は默らなければならなかつた不機嫌な父の顏が言つた。

「父さんはみどり（妹）に聞かうとしてゐるのだ」

今でも私はその時のことを深く悔む、その時と同じ心で。

私はその後、夢の他に、父を見ない。

それから幾日の後であらうか、幾時間の後であるか私は忘れた。眞夜中、父の死骸が病院から運ばれた。私は暗い私達の部屋から、眩ゆい次の間の光と緊張した人々の聲を感じた今は亡い私の姉は、私の横の寢室の中で泣いてゐた。然し、私は泣かなかつた。私は何故か病室に居る父を考へた。彼はベツドの中に私の樣に靜かに寢てゐた。

朝、私は白蠟の父の死顏を見た。婦人達は皆泣いてゐた。彼の人は不思議な美しさの中に深く眠つてゐた。私はそれが父であると思ふことを心に拒み續けた。

午後、私は六月の暑さの中で、母に命じられたまゝに團扇で眠れる者の顏を煽いでゐた。私の見詰めてゐた瞳は、いつかことごとく潤んでしまつた。

この時、私は獨歩が私の父であると云ふ考へに深い厭はしさを感じた。若しも人々のこの獨歩が私の父であるならば、私の目の前に永久に眠つてゐる者は、彼の私の古い父でなければならない。

私は人々の悲しみを怨めしく思ふ。

彼等は決して私の古き父の死について悲しんでゐる樣子は無かつた。

今にして、私はようやく信じる、小説家獨歩は私の父ではないと。私の内に於て彼の古き父は未だ生きてゐる。何故ならば私は決して父に對して七歳の時以後年齡をかさねない。今、父を憶ふ時、私はただ七歳の小供である。

そして私は未だ廿歳を一つ二つ越したばかりであるが、獨歩を想ふと、何故か深い疲れを感じる。それは恐らく、この最も親しい他人が、私の虛弱な心の上に、七歳の時からかかる、厭ふべき一箇の幽靈である故かも知れない……

島田對舟木事件批判

私の心持ち

島田清次郎

私は此事件に關しては、一切の文章を發表したくありませんし、また發表しないことを約束しましたし、且つは、事件の眞相に就いては、四月十八日東京地方裁判所に出頭した際記者倶樂部に於いて發表しましたことに盡きてゐると思ひますから、ここで何事も申し上げられません。唯私自身の心持に就いては、心ある全國諸兄姉のお考へにお任せするばかりであります。

唯私がいかなる時にも如何なる所に於いても常に唯一すぢに愛の心を失はずにゐたこと、今もその心を失はずにゐることを信じて下さい。どうしてこんな風になつたのか私には最初わけが分りませんでした。私にとりましては、この問題は飽迄も心の問題でありまして、頭の問題ではありませなんだあくまで愛の問題であつて、理性の問題ではないのでした。私は、くどいやうですが、今も、今後も、愛する一念に變りはないことを自分でもハガユく自分で自分をイジラしく、哀れに感じずにゐられません。ほんとうに、あの思ひ切りのよい、嚴冬のやうな冷徹さが、私の心臟から、この問題に丈けは失はれてゐるのを、たゞ、自分の力以上の不思議さのやうにさへ思はれてゐるのです。

今にして思ひますれば、私自身が近頃いささか身邊の人々に對し粗野の態度があつたことが何よりもいけなかつたのだと思ひます。この點は充分に反省して充分に愼みたいと思ひます。

折角四五年來の全國の諸兄姉の御厚意と心ある人々の恩誼

とにいささか報いたいと思ひ、世界の周遊までして來てゐ乍ら、こんな事件の爲めに社會をお騒せしたことを、相濟まぬことに思ひ、且つ一個の男兒として、遺憾のことに思ひます

しかし、このことは私にとつては誠に良い反省の機會となりました。私は今後一層精勵いたしまして今日までの心ある人々や、全國の諸兄姉の御厚意の萬分の一にも報いたいと存じてゐます。

終りに舟木家の人々は申すに及ばず、各官署當局の諸大人や私身邊の諸先輩及び辯護士、新聞雜誌社の諸兄に對し、種種とお手數をわづらはしたことを、茲に深くお詫びしてをきます。

長年苦勞をかけましたたゞ一人の老母に三國一の花嫁御をめとつて喜んでもらいたいと思つてゐたのに、かへつて、こんどのやうな工合になりまして、老いの身に苦勞かけたことも、悲しいことの一つであります。

今度のことは、私にとつては社會的打擊であつたといふよりも、それよりも、先づ、第一に、ハートの致命傷でありました。しかし、私は、私自身の內部に、この傷手のうちからなほもよみがへり、生きてゆかうとするかすかな光をみとめ得られるやうにと自分で自身をいたわつてゐます。もつと立派な、もつと聞いても胸のすうつとするやうな、明るい快よいニュースで再び愛する諸兄姉にお目にかゝる時機の近からんことを祈ります。

私は勉強します。

私はいつまでも私です。

どうか氣を落さないで下さい。

リビドウ原理から見た島淸事件の父と娘

室伏高信

島淸事件は豫期されたとほり蛇の尾に終つてしまつた。しかし精神分析學からいふとあれだけでも充分だ。

島淸それ自身もこれなのだが、相手方の退職將官とその若い娘もまた同じことなのだ。私の云ふてゐることの意味はこ

の事件がフロイド一派の謂ふところのlibido と narcissismus の原理によい證據を與へたと云ふことなのである。

私は島淸その人についても、若しくはその相手方となつた退役將官とその娘についても何ごとも知らない。たゞ新聞紙に現はれた報導を私の觀察の基礎にしてゐるだけである。それによつて見ると島淸君の性格は常識人ではないかに見える。大分氣違ひじみたところがある。若しほんとうに氣違ひじみた男なら私には輕蔑ではなくして尊敬の對象となれる。常識人に對する抗議が寧ろ私の社會批評の一つの主眼なのである。しかし私の知つてゐる範圍で判斷して見ると島淸君は本來の氣違ひじみた男ではないらしい。少年期によくあるやうなメガロマニヤ――それも意識的な、欺僞的な、廣告的なメガロマニヤで、たゞその自己宣傳がどのやうに自己に報復されるかをさへ反省することの力のない程度の理智の缺乏さを示してゐるに過ぎないやうに思はれる。しかもこの事實を通じて彼の生活原理のうちに著しく目立つてゐるのはナアルシシムスである。ある程度までナアルシシストでないものはどこにもないといへないことは無論ないのであるが、それにしてもそれが島淸のやうに著しいのは少ない。その意味で彼は政黨の首領になる資格を充分にもつてゐるともいへるであらう。もう一つ彼の生活原理として著しく目立つてゐるのはリビドウの原理だ。彼は自己宣傳家だとともに性慾人だ。性慾そのものだ。今度の事件でそれが一層明瞭にされたのだ。「出齒龜」と云ふ言葉の代りに「島淸」といふ言葉もこれから流行するであらう。

相手方の退役將校にしても、その娘にしても、矢張り精神分析學のよい材料なのだ。たゞ違つてゐる一點がある。島淸は一人にしてナアルシシズムスとリビドウの二原理を平行的に發展させてゐるのに相手方はその一つづゝを特別に發展させてゐる點である。そこで島淸一人に對し、相手方二人が問題となるわけなのだ。この意味では島淸が一人前なら相手方は半人前なのだ。尤も兄弟や辯護士や德田秋聲氏やも與黨に登つたようではあるがそれ等はこの島淸劇では雜式小物の役目なのだ。

退役將校は何故半人前なのか。この人は偉い人なのかも知れない。偉くてもかまはない。世間的に偉い人であればある程半人前なのだ。特にわれ／＼が老將軍とか退役將校とか恩給軍人とかいふ言葉でも想像されるようにこの人も特別な名譽癖の持主であるに相違あるまい。「昔なら娘を手打ちにする」とか「自分も切腹」するとか口にしたといふから、餘程

の名譽慾の强い人に違ひあるまい。世間では中將や大將位ひの娘がどうしようとこうしようと別に氣にするほど中將や大將を偉いとは思つてゐないが、そこが軍人の無邪氣なナアルシシストである所以なのだ。名譽慾を煽動しなくては軍國主義は成立しない。その煽動された名譽慾が自己偏愛の本能と抱き合つて軍人心理ができ上るのだ。その心理が同時に凡ての支配階級の心理なのだ。ブルヂョアのような素町人階級でも今日のように支配階級に成り上ると矢張り同じとなのだ。家門の穢れ！それが少くとも表向きにはこの人たちの生活の最高原理となつてくるわけだ。老人になつて性慾が缺乏してくればくるほどこうした表向きの生活方法が自己偏愛の本能と階調を示してくるわけなのである。そこに老人、特に支配階級の老人なぞにとつてはリビドウの代りにナアルシシズムが支配的となつてくる。

こゝに娘のための危機がある。なぜなら娘の最高の生活原理はリビドウそのものであるからである。

娘の生活原理が性慾主義であり、そしてその父の生活原理が自己偏愛の本能のうへに立つ形式的名譽欲である。

ナアルシシストとしての父、性愛のための相手力を喪失してしまつた老いたる父、そして性愛の唯一の相手方を朦朧な から自分の娘のうちにのみ見出して竊に自ら慰さめてゐる老いたる父に、若き娘を理解せよと求めるのは無理だ。

若き娘はリビドウのうちに生きてゐるのだ。彼女がそれを口に出さない女であればあるほど彼女はリビドウのうへに生活してゐる女なのだ。何故なら隱くさうとする心理は隱くさうとするあるもの（リビドウ）の意識から成立するものであるからである。

若き娘のうちにもリビドウと内部に戰ふべきナアルシシズムスが存在しないのではない。しかしリビドウがナアルシシズムスを征服するのが娘である。生慾生活が支配的である女が若い女である。若き娘から性慾を奪ひとつたとしたら最早や若き女ではない。中年の女でもない。枯れた骨なのだ。

若き娘とその老いたる父との關係は爭鬪狀態なのである。父はその娘を性愛の殘肴として竊に慰めるか、でなければ名譽慾若しくは物質慾、要するにその外的生活の財として考へてゐる。若き娘はその强烈なる性生活の慾望を外面的壓迫の一切から解放しやうと努める。こゝに父と娘との關係は不斷の爭鬪狀態に陷らざるをえないのである。その爭鬪の破裂を島清事件の父子において見るべきである。

私はこの事件を通じて何ごとも非難すべきもののあるのを

見ない。島清も若い男なのだ。小説の一冊二冊を書いて威張りたいのも別にアブノオマルなことでもあるまい。また强烈な性慾の持主であることも當然すぎるほど當然なのだ。それが若き女とつき合つてそこに彼のリビドウの滿足を要求するとしてもそれがアブノオマルだと云ふべき何の理由もあるまい。たゞ裁判所の法室で、法の恐怖と、辯護士その他の常識的判斷のために謝罪狀のやうな男のすべからざるものに調印したことによつて、彼の藝術家としての良心の低きことを證據立てたのだ。また相手方の父や、その頑迷な父をとりまく人たちの無理解さにも普通以上なところがあり過ぎたように思はれる。彼等は自分の娘（または妹）が木か石でもあるかに思つたのだらう。

彼女は娘である。かかるがゆえにリビドウの主體なのだ。この分りきつた現實を見ないで、若しくは見て見ないふりをして、彼女を木か石だと考へたところに一切の禍根が横はつてゐるのだ。

それは無理解といふよりは若き女への冒瀆なのだ。若き女を若き女として遇せざることは一つの冒瀆なのだ。神への冒瀆なのだ。島清のなしたことが×××あるのではない。彼は若き女を×××結晶だと見たことにおいて少しも誤謬はないのだ。たゞ彼の性的慾望があまりにもアブノウマルであつたことを自ら知らなかつたのだ。

この事件は倫理の問題であるよりも心理の問題である。特に精神分析學の問題である。この事件は親と子との爭鬪が親の古い新らしいの問題ではなく、肉體の新らしい古い、即ち老朽と、若き血との問題であることを教へる。

今日の親の義務はリビドウの原理をよく體得することである。性的慾望は神が人間に與へた神聖なものなのだ。神の與へたものを奪ふものは凡て冒瀆なのだ。「親」といふことのためにどうしてそのやうな權利がもちえられよう。「親」は權利ではなくて義務なのだ。その若かりし時の性慾のつぐないをその子のためになすのが親の義務なのだ。凡ての親はその子の性慾の保護者、即ち自由の維持者、從つて解放者でなければならぬ。たゞ問題はナツハマンソオンなぞのいふようにFreu's Liliodotieorie とFr alcpre piatos とが同一だといふことができるかどうかの判斷だけなのである。

結婚せしむべきか

千葉龜雄

なぜ、戀をして惡いといふのか。なぜ尊敬するものに、手紙をやることが惡いといふのであるか。戀をするのになぜ父兄の監視を受けねばならぬといふのであるか。男性と交際するに、なぜ、家庭のつきそひが無ければならぬといふのであるか。青木滸江子が、社會の問題にまた法律の問題になつたのは戀をしたから惡いのではない。手紙をやつたから惡いのではない。また父母の監視が無かつたから惡かつたのでもない。家庭のつきそひが無かつたから惡いのでは猶ほ無い。滸江子の上にかぎらぬ。さうした批難は、一切採り上げる値打がないのである。さういつた自由は誰にも許されてよいのである。たゞ滸江子が問題になつた一つの理由は、不幸にして、心から尊敬し、尊敬の好奇心を向けた滸の相手が、島田清次郎氏であつたためである。他の一つの理由は、滸江子が自他の人格の批判を持たない無知な女性であつたことである。

もとより男性には、肉をとほしてのみ女性を見、または求めやうとする傾向が、多少とも誰もの中にひそむ。強ち島田氏ばかりの事ぢやない。先づ肉を征服すれば、心は從つて征服される。かういふ女性哲學を持つて居る男性も、また決して少なくはないのである。が、たとへさういつた現實が何程あればとて、それが肯定されてよいといふ理由には少しもならない。おそらくそれ等の征服慾は、腕力の強さや、經濟權の占有やが、これまで專ら男性の手にあつた歷史から見て、當り前だと考へられて居た思想の遺物である。と云つて、私は女性といふものを、メエテルリンクが眺めるやうに、あゝめちやくちやに神聖なるものと考へるわけではもちろん無い。むしろ彼等女性の生活と意識は、どういふ意味でか、必ずその大半は性を中心として廻轉して居る。だから、いよいよ行き詰つたなら、性の機關の取引きだけで、命をつないで行かうといふ最後の安定さへも女性は絶えず持つて居る。それほど彼等の意識は、たゞ性によつてのみ支配され、それを

肯定して居るのである。かういふ事は少なくとも男性にはない。少くとも性の意識のみが、彼等の生活の全部でない。

　とにかく女性も女神ではない。人間であることがわかつた。男性ももとより人間である。生殖機關、內分泌、エトセトラがこの人間である二つをひきつけ、ひきあふに何の不思議はないのであるが、さて近代兩性の結合が問題となるのは、その結び付きの機縁として兩性お互ひの强制されない意志を何よりの必要として來たことである。人間以外の生物の性的結合は、單に本能の刺戟を必要とする故に、鷄、雉子、獅子その他にあつてはみな牡が牝にすぐれた體質の偉力と、色彩の美しさを惠まれたであらう。それは必要な誘惑である。しかし人間兩性の正しい結び付きには、すべての誘惑の意識は不純とされる。誘惑すらも强制の變形だからである。次に近代の兩性結合の正しい經過としては、お互ひの理解の出來るだけ完成するのを待つために、そしてその結合の生活を、より完全なものに用意するために、その理解が完成されるまで、性交を出來るだけ後に引き延ばして置く强い克己性が人間の中に自覺されて來た。そして、もし强制されない自由な意志で、二人が結び付き得る固い泥び合ひが二人の間にあるならば、戀愛の結果の遲速などは、さうやきもきしなくともよい譯だからである。要するに、それは完全な兩者の合意と理解を基調とするからである。だからお互が、青年である爲に、やゝもすると、それを破壞する破目に陷るといふような言ひ譯は、よくあることだが、何等の權威を持たない。お互ひを愛すれば愛するほど、お互の人格を愛し、かばふのは、戀愛者の當然採り上げねばならぬ義務だからである。さらば、男性がその征服慾と體力とを利用して、まだ充分に理解し合はない女性の童貞を强制することは、どの途から見ても許さるべきものではない。しかもその男性が藝術家である場合には猶更の事である。なぜなら、藝術家は、時代に撰ばれた人である。それは道德家である爲ではない。世間の道德に超越して、人類の魂を愛撫することにおいて、また美くしい、憐ましい、もしくはいたましい人類の魂をやさしくいたはることにおいて最も鋭どい感覺を持ち、最も微妙な情操を持つべき筈だからである。だから、かゝる藝術家が、藝術家の名においてその惠みに背いた場合には、苛責はまさに二重になる。

　島田氏が責めらるべき責はかゝる疑ひがあつたためである。我等はもとより芳江子が、氣の毒なほど無知な少女であることを充分に認める。けれども芳江子の無知と、島田氏の

執つた行動とは全く別のものである。なぜなら、相手が無知だからといふて、その無知を利用し、濫用する事がゆるされてよい理由には少しもならないからである。從つて相手の無知な事が、少しもその採つた行動の責任を輕めない事も自明である。世論の多くが、そこの錯覺に陷つて居るのは、殊に心外である。いや、それだけではない。芳江子はまことに平凡な一女性に過ぎない。それは我國の教育精神が人類的である方に向はないために、その誤まつた教育の禍を受けつゝあるところの、無數の若い女性の中の一人に過ぎない。然るに島田氏は違ふ。彼は小さくとも藝術家である。それは芳江子と同じ水平線に置いて論ぜらるべき地位ではない。然るにこの兩者の結び付きには、何も藝術家の魂が求めて居るやうなものが、形式にも、精神にもどこにもない。或ひは互ひの人格の生長を氣長に待ち、お互ひの人格を慈み、かばふところの、近代戀愛の意識すらも殆んど求められない。有るものは、たゞ近代前記の征服慾と、巧みな誘惑と、盲目な本能だけである。

芳江子は二十歳の處女であつた。內に眠つて居る性慾を我等とても認めぬものでは無い。けれども、島田氏におくつた手紙だけでは、それが戀愛の根を潜めて居るものとだけはどうしても認めるに躊躇する。彼女は、或は多少とも奔放性の女性かも知れない。けれどもあの手紙だけに現はれたところでは、知識に幼い人々の、好くある無考へな好奇心と崇拜の心理に過ぎないものではないか。精々でそこから生れる不良性と遊戯心ぐらゐの程度ではないか、それにあれぐらゐの手紙を出すことも、單獨で尊敬する男性を訪問することも、道德上にも、良心の上からも、少しも惡いこととは私は思はない。寧ろ咎むべきものは根本にあるその社會道德ではない、道德を支配するのは知識である知識は批判であり意志と行爲を支配する規範である。芳江子の場合にあつては、その知識が缺けて居たのである。いかなるものが尊敬に價するのか、人格の價値とは何であるか。それ等に對して、何等の用意をも持たなかつた彼女の無知に、すべての禍が急轉直下して現はれて來たのである。もし相手が島田氏でなかつたならば、或ひは結果は別の經路を採つたかも知れない。しかし、その別の結果がたとへ上々の成績を收めたにしても、それはたゞ偶然の仕合せに過ぎないので、かう云ふ無知と無批判から出發した兩性の交涉が、根本にあぶない分子を含んで居るにそれは少しも變りがないのである。だから芳江子の受けた人生の不幸は、やはり素因が自分にある。たゞ芳江子の

好奇心と崇拜の心理は、何と云つても、島田氏に對する好意に相違ない。が、好意と戀愛とは、それだけでは全く別ものである、好意が戀愛になるかも知れない、或はならぬかも知れない。少くとも戀愛にまでもまだ熟しない、また熟するかどうか分らないその好意を、逆に利用し、或は誘惑して、性交を强制した形のあるのが、藝術家たる島田氏にとつて、猶ほ無反省な仕業だと思はせるのである。尤もそうした濫用は隱れたところにまだ何程もあるのだが。

かういふ考察は、我等第三者に、以下のやうな答案を求める。さらばかゝる交渉を持つた二人の生活が、此の末どうしたら一番よい位地に置かれるであらうかと。そこに端的に出て來るのは、二人を結婚させるといふ世間の興味である。それには芳江子の心がどう動いて居るか。差あたり、それをどう判斷すべき與料を持たないから、私には今まで何とも云へない。また彼女はあゝしたふらふらした、確かな信念を持たないやうな女性である。凌辱された者が、次第に凌辱したものに親しみを感ずるといふ、よくある不思議な婦人通有の心理に、いつか傾いて來ないと誰れが斷言されやう。たとへまたそういふ事實が起つて來たにしても、それは彼女自身には絕對の自然であるかも知れないから、それを鬼やかう今云はうとするのではない。たゞ私の卒直な純理論は、叙上の理由によつて、二人のこれからの結合を是認し得られるやうな、一つの所有性の根據をも私に發見させないのである。さらば世間で唱へる結婚肯定說はどういふ處から生れるか。それはかうである。どうせ二人とも社會的な瑕物になつた、二つの瑕物を一つに合せる方が、世間の評判も消えるし、當人達にとつても幸福だらうと。かう云ふ人々は、二人が共通に瑕物であることの概念だけは知つて居る。たゞ瑕物になつた理由が、二つの相容れない心理が、反撥し合つた爲であることを見落して居るのはどうか、第一にこの反撥した二つのものを一つに結び付け得るかどうか。第二にたとへ無理に結び付け得ても、それは結婚の名において、また評判塗りけしの手段の爲に、二人の生きた生命を、不自然極まる技巧で魔睡してしまふ處置ではないか。もちろん芳江子の本當の意志のあるところは、今日までも、まだはつきりと誰にも捉まへられてない。が、少くとも、その父兄を通じて說くものが、自分の眞實の意志と感情とでもを表白したものならば、正しい意義の結婚は、まづ決して二人の間に行はれる、希望はない筈のものである。

何となれば、彼女が今まで表白して居るやうな感情を事實と

見るなら、彼女がいま思ひ悩みつゝあるものは、自己のこれまでの無知とその無知に傷つけられた人格へのいたみと憤りで無ければならない。或はそれは復讐心にさへ燃え上ることも不思議ではないのである。そして之等をどれほど延長して行つたところが、島田氏に對する愛着となる感有性は先づ無いと見るのが至當なのである。或はトルストイの「復活」を連想するかも知れないが、それには二人ともあまりに役不足である。それにゆるす事の尊さなどに陶酔するのは、現代ではもう甘すぎる。現代は、何が正しいか、正しくないかをはつきりと見極めて、それに對して、容捨なく、怒り、反抗し、戰つて、自分の途を切り開いて行くべき時代である。けちな妥協などに目をくれる場合ではない。また此場合に、結婚などといふ事が、直ぐ誰でもの意識に上るのは、我國の人々が女性の生活を、何でも結婚でなければおさまらぬやうに考へることから來る。生命はまだ長い、結婚はいつでも出來る芳江子が當面に考へることは結婚であつてはならない。それはいかに厳粛に人生を考へて、いかに之までの誤まりを取返し、それに甦がへるかの反省で無ければならない。この修養が獲られなければ、たとへ結婚したところが、二たび前の誤まりを繰り返すだけの事だ。結婚はまあその先のことだ。

已に結婚を問題とせぬならば、島田氏と芳江子のこれからは、こゝに全く絶縁して未知の人に還る。もしまたそうでなく女側が、本當に島田氏に愛を感じて居たものならば、家名が何だ、社會が何だ、結局二人が結婚するのは當然であらうが、但し此の場合は極めて不愉快で輕はづみな、不純な結合が不純に終つただけのつまらぬもので、もとより何等考察の意義をも我等に與へるものではない。

過渡期にある現代女性の悲哀

三輪田元道

彼の藝術家がドラマを作るに際し、喜劇は難しく悲劇は易しと云ふ、即ち樂しきこと、目出度きことは之れを讀む者

をして眞に面白く感ぜしむるやう困難で之れに反して苦痛悲哀其の他の深刻なることは何人にも共鳴さるる事柄なるが故に假令平凡なる作なりとするも却つて面白く讀まれるのである、されば大なる宗教には樂觀教は少く悲觀教が多い佛教にせよ基督教にせよ皆悲觀教に過ぎないのである。其の悲觀の世界なるが故に樂觀の世界を求むると云ふ所に宗教の眞髓が在る、此の點より觀れば平和の人類間に絕えず奮鬪紛擾或は悲劇が演じつゝあるが、其處に進步が在る。斯の如く考察し來れば今回の島田氏對舟木家の問題も、之れを大きく考ふるならば、社會の藝術と觀るべきであらう、然し乍らお互に自己の秘密に亘ることは成るべく云爲せざるやう觸れざるやうにすべきが德義である從つて私自身の信仰では他人の、殊に未だ公に非ざるものには批評を加ふるを躊躇せざるを得ぬ。又評價等も欲せないのであるが、然るに幸か不幸か、最早此の事件は社會に事實となつて現出され、而して全國の津々浦々迄で發表され、老若共に批判さるるに至つたのであるから最早遠慮なきものとして玆に少しく——一部の批判を加ふることを許容されたいと思ふ。

此の事件の批判に先立つて、私は舟木家及び島田氏に對して敬意と同情を表することを忘れない一人であることを明言して置く。何故ならば、先づ舟木家の態度に就て批評を試みんに、本人芳江子、其の實父、其の實兄の人人に就て考へても、大いに同情せざるべからずと思ふのである。第一に本人は女學生の羨望の的となり居れる府立第三女學校の五ケ年の學業を卒へ、更に補習科にまで入つた人で、顏丸く脊高く、唇の薄いと云ふ特徵を有した平素快活な、人に愛さるべき性質を持つた乙女であつたと云ふ、又身も平常華やかにして居つた所謂女學生としては普通のタイプの女學生で、何等人より批難されしこともなく、何れかと言へば褒められつゝあつたと云ふ、故に斯の人にして此の事ありと云ふので、かの乙女を知つて居た人々は、其の期待する所のものを裏切られた、即ち一種の驚異を感ぜずに居られなかつたので全く大に輕卒の罪を負はねばならぬ。又嚴父は海軍の軍人で何れかと言はば儼然な人格者で、良家の家庭の父として譽れある人として知己朋友等よりも尊敬されつゝありし人、故に世間の人々は、斯の父にして此の子在りと是又豫想を裏切られたるもの、又男兄弟には大學教授の職に在る人、外國に留學せる人など何れも秀才と稱せらるゝ兄弟を有し、芳江子は其の末子に生れ、兩親は勿論、夫等の多くの兄弟からも可愛がられ、和氣靄々の家庭に育まされたのであると言ひ得られ

る。是等の點より考ふる時は、普通の失敗、墮落、犯罪などな裏には必ずや家庭の缺陷の因するものであるが、芳江子の背景に何等の缺陷を認めぬ先づ良家の子女なりと言ひ得らるゝのである。然るに今回の如き問題を惹起するに至つたのは學校の罪に非ず、家庭の罪に非ずして、現代の女性の踏まねばならぬ過渡時代の産物であると言ひ得るであらう。否、寧ろ之れを一家の家庭の子女として取扱ふよりも、現代社會の中産階級、知識階級の良家の家庭のタイプとして、之れを取扱ふ方可ならんかと思ふ。而して此の如上三人の今回の事件に對する人物を批判せんか、各自其の個性を異にし、先づ兄兩雄氏は物に對して相當理解ある所謂判つた人で卒直な同情ある態度を以て新聞等に其の意見を發表され、或は『世間に對して面目ない事だ、少しく今回の事件は逸まつたやうに思ふ』と自己の非を非として公にし、又島田氏に對しても或同情を有するものあるを窺はれるのは、現代の紳士の心理狀態が讀めるやうに見ゆるのである。而して又父なる人は軍人氣質で、即ち世間に對して面目なし依て處決すべしと、所謂軍人らしき性格を見る、更に本人芳江子は と言へば女學生らしき娘で、ダンスをさへ好んで居たと云ふ現代式の女であつたと思惟される。然れば今回の事件に現はるゝ三人の人物は三樣の個性を有し 其間に共通點なく、寧ろ別々に働いて居たのである。故に個性本意に考ふれば其處に現代の家庭の缺陷が現はれたものであつて、換言すれば父と娘の性格が合致し居たなら 今回の事件を惹起せざりしならんと思ふ。何故ならば娘が島田なる若き藝術家に憧憬し 之れに接近し、交際して、自分の心情を吐露せんとするに際して親達がそれを正しき交際なることを認め許すなら、娘も決して秘密には行はなかつたと思ふ。で、日本の家庭が今少しく解放的になつならば 娘は父なり兄なりに先づ其の心情を打明け 父兄は又或程度迄で娘の心情を酌み、其の崇拜する人と父兄何れかが後見の下に淸き會合を爲さしむる、斯くする時は先方も亦淸く正しき交際を以てすることは勿論であつて、今回の如き悲慘事を演出するが如き事はなかつたのである。元來現代の我國一般の家庭は解放的でない事が既に一の缺陷である。互に一種の城廓を廻して、そして夫れに蟄居しつゝあるが、其の蟄居しつゝある間は安全ならんも、其處に隙の在りて煙突、電話等の飛込まんか即ち大事件を惹起するのである。徳川時代には盛んに城廓を築き各藩の大名亦之れに閉籠るて所謂消極的に出でし中に獨り鹿兒島藩のみは城 らしき城を築かず、自ら進んで敵地に侵進戰はんとするの戰法を取つて所謂

積極的に出でたのである。而して此の兩者の結果は如何、城砦悉く完備せる德川は遂に悲しむべき結果に了つたではないか、是に見ても我國現代家庭の徒らに城壁を設けつゝあるは却に危險なるものと考へらる。

或人は彼女が島田氏の『地上』なる書を讀みしを難ずるも、今日の女學生の七割は此の書を讀めりと思はる、決して彼女獨りに限られしものにはあらざることは言ふ迄もない。又『地上』のみならず近代の作品は何れも柔らかき文藝で、之れを呪ふならば支那の始皇帝を伴れ來つて先づ學者を坑にするの滑稽を敢てせんとするの徒であらう。假令如何なる書にもせよ夫を讀むの態度を敎ふるのが敎育である。書に讀まれざるやう書を讀むの態度を與へ置けば足るもの、一般の學校としても今後爾あるべき筈のものでなければならぬと思はる。故に間接に論ずれば必ずしも舟木家を論難攻擊するに非ずして、我國現在の家庭の不調和、不合理の點多き事を示す一の材料となるものには非ざるかと思はるゝのである。

次に批判せざるべからざるものは戀愛問題であるが、這は必ずしも現代のものに非ずして、戀愛は人類開闢以來存するもので、世界的にはアダム、イブ在り、日本的には伊弉諾伊弉冊尊より發するのであつて、男女兩性は社會の源である而して此の兩者間には正しき關係の行はるゝ事を理想として其の正しき關係は又時代の推移變遷に伴ひ變替すべきものであるが、男女の性的芽生えの流るゝ時には妄動的に或は衝動的に働くもので、此の時代には唯、無意識に戀愛なるものを知らずして自己に感動を與へらるゝまゝ其人に取入れられる卽ち其の人を偉いと感じた時、崇拜心の起つた時、然し其は總て戀愛の芽生えであつて、夫れが熱烈となれば、此處迄は靈的——精神的に過ぎざりしものが、遂に肉的の色彩を帶ぶるに至り、握手し或は相擁して人生を語らんとし、果ては嫉妬するに至るのである。然れば戀愛は靈的と肉的に區別し普通靈の愛を高尙なるものとし、肉の愛を汚はしきものとされて居る。然し乍ら眞の戀愛は靈肉一致の愛ならざるべからずで、這は恰も水と波、波と水の關係の如きものにして水無くして波起らず、波起る所水在りの理を考へねばならぬ。素より種々なる男女關係は下層社會に於ては日々幾十幾百件の問題を惹起しつゝあるも世人敢て之れを奇とせず、偶々舟木家の問題は相當名を知られし人なるが故に社會の問題とされ、更に大きく言はゞ社會問題より行政、司法官迄で之れに關係するに至つたのである。事件發生と共に舟木家では可成り昂奮して娘の言を信じ遂に事件を法律問題として明るみに

持出したのであるが、私は惟ふ事此處に至らざる前に於て、舟木家は何故に今少しく愼重な、又冷靜な態度を以て調停もし問題を暗から闇に葬る事に努力されなかつたか、此の點は遺憾に堪へぬ次第である。

凡そ人の制裁に三つある、一は宗教道徳問題で、之れは精神的に其の良心が疚しくなきや否やを問ふもので、神に近き高尚なるものである。夫れが更に進んで社會制裁、或は人の口の端の如きものが力を持つて居る。之れは普通の習慣風俗に依つて制裁する。所が更に進むと司法即ち國法の制裁、國家の制裁を受けると云ふことになる。以上三つの制裁の中國法の制裁を受くる事は劣等なる、淺間しき制裁を受くる事にして、今回の事件が其の最も低劣なる法律上の制裁を受けんとし、之れに依つて其の曲直を辯ぜんとしたものである。社會制裁、宗教制裁より是を觀れば舟木家の爲めに寔に惜むべきである。社會制裁宗教制裁を超脱して凡夫常人の法律に依る制裁即ち普通の匹夫熊公八公の受くべき制裁標準を以てせんとしたるは其手續きの誤れるものと謂ふべきものである。尤も今日迄に某華族夫人の自動車運轉手と驅落したるを始め幾多此等に類似の事件相踵で發生したるも是等は殆んど社會上乃至道徳上の制裁に止まり法律上の制裁を受けたるものはないのである。而も注意すべきは舟木家が普通人の最後の制裁に依つて解決せんとしたるは、一は島田氏の人格の評價の標準の下されたると共に舟木家の標準も亦下つた事を遺憾とするのである。而も又此の事件の進行中に調停者の現はれて妥協、有耶無耶裡に葬るが如き事あらば、總ては法の權威を疑はしめ、或は社會制裁の鈍れるを思はしめ、又道徳制裁の力なきかを考ふるに於て甚だ遺憾の極みであつて、是は島田舟木兩家のみが負ふべきものに非ずして現代社會が斯の如き缺陷あるものに非ざるかを思はしむるものである。

次ぎに論じ度きは藝術論と道徳論であつて、藝術論は藝術の範圍に於て律し行かんとし道徳論は道徳の範圍に於て律せんとする其處に矛盾を生ずるのである。世人は往々之れを一致せしめんとするものあれど、由來藝術は藝術の爲めの藝術にして道徳には何等の關係なく、之れに反して道徳は道徳の爲めの道徳にして藝術の支配を受けない、けれども偶然か當然か藝術と道徳と一致することがある。即ち大なる文學者の作に成れるものにはよく一致してゐるのである。之れに反して偏狹なる道徳、デカダンなる藝術は互に其の距離は遠ざかるのみで、今回の事件の如きも若き青年男女が心の荒みで一時の出來心として、所謂デカダン藝術の實演でも行つて居るか

の如くに考ふるに於ては、全然問題とならざるも、之れを道徳律よりせば娘として、家庭として、學校として大いに反省すべきである。然りと雖も私の態度は必ずしも偏狹なる道學先生に與するものでない、從つて今日の藝術と道徳問題に對しても公正なる立場に於て之れを論ずるものである。藝術と道徳は無論調和するものである、否其の時代が來るのである。文化が進めば來るべきものである。又爾くあるべき筈である。で、此の島川氏と芳江子との兩人の間に起つた出來事を單にデカダン式の文學で一笑に附するのみにては事足らぬと思ふ。さりとて偏狹なる道徳論を以て批判するは餘りに惨酷である。尼になれ、獨身で生涯を終れ、或は潔く處決せよと云ふもの、之れに反して藝術本意に考ふるものは、昨日は昨日今日は今日、諒解さへあれば可し結婚して二人で暮せば可なるべしと云ふものもある。故に私は私の立場より觀て、此の二つの調和點を發見されたいと欲するものである。日本人の從來の習慣には悔ひ改むると云ふことがないが、此の際芳江子を悔ひ改めしめ、新らしき生命を開きて夫れに依つて蘇生せしめるなら決して尼になる必要も獨身生活する要もないのである。斯くして人生に意義あらしめ一方社會に對して罪を償ふべき誠意を表するの義務があらう。然るに、唯、藝術的考へを以てして禽獸も時に噛み合ひ時に睦み合ふもの仲好くなれば可なりなど云ふ曲論を楯に結婚問題を擔ぎ出すが如きは、社會風敎上より、又尊き藝術の上よりするも輕卒の甚だしきものである。若し結婚せんとするならば兩人の間に今少しく互に精神を淸め且つ今日よりも一層美しき精神態度、今よりも冷靜なる、又高尚遠大なる理想的の愛に依つて支配せらるゝ其の時代の來るべきを待たねばならぬ、今回の事件は假令調停和解し兩人の間に愛が續くとしても其は不完全なるもので既に事件其物が道徳、藝術、宗敎上よりして少しも同情すべき餘裕を發見しないのである。去り乍ら過去は葬れ。過ぎたるは詮なし、此の上は舟木家の名譽を恢復するため芳江子の爲めに自ら新しき、淨き天地を築くべく用意すべきであるが、私は是以上立入つて人身攻擊、家庭の批判を試むる事を欲せない、唯、比較的幸の滿ち來る樣舟木家の爲め令孃の爲め衷心より祈りを捧げて結論とする。

（完）

心理學より見た遊戲的な戀愛事件

中村古峽

　島田清次郎君の事件は、その最初に頗る物々しく報道せられたに拘らず、時日の推移に連れて、單なる戀愛事件であることが明かになつたようである。實際この程度の戀愛事件は今の世の中に決して珍らしいことではない。それで、初め法廷に提起された罪名なるものを見て、或る恐ろしい豫感を覺えずにはゐられなかつた余も、この結着を見て聊か安心したわけであるが、然しまたそれと同時に、現代の青年男女を危ぶむの念に堪へなくなつた。

　それは、此の事件に於ては、現代青年男女の戀愛生活の著しい特徴たる、戀愛の遊戲化が極端までに現はれてゐるからである。戀愛を極めて不眞面目に取扱ひ、輕率に青春の夢に耽ることは、各時代に於て、遊離的に存在することは固より免れぬが、然し一般的の風潮として廣く行き亘つたこと、今日の如く甚しきはない。實に歐洲戰後に於ける一種のルネツサンス的思想傾向は、從來の佶屈なる性道徳より解放の黎明を齎すと共に、今度はまた放縱にして當て度もない荒原に人々を逐ひ込んでしまつた。其處で現代の青年は、自由を弄びつゝ手當り次第に滿腹して、自分の肉體の損はれるのも知らないといふやうな狀態にある。そういつた危險な、放縱な性の生活の一面が、この事件に於て明かに看取せられるやうである。これは果して何に由來するであらうか。その原因を尋ねて行けば、外部的の原因と、內部的の原因とに要約することが出來よう。外部的原因とは、社會とか家庭とかの制度の缺陷から生ずるのであり、內部的原因とは、青年男女の心理生活の缺陷から生ずるのである。

　今日の社會や家庭制度は、青年の心的生活に對して充分な理解を持つてゐない。青年を玩弄視するか、又は頭から壓迫してかゝらうとする。社會の體面とか家系とかのために、青年男女の愛の生活に干渉しようとする。之は前者である。青年男女は、たゞ年頃になつてから、相手を定めて結び合せれ

ばよい、それまでは見せるな、聞かせるなといふ、之は後者である。

かうして青年の自由が奪はれるから、勢ひその反動として、自由交際や自由戀愛の論が盛んになり盲滅法に家を飛び出し盲滅法に戀の相手を求めて街頭を彷徨する不良の徒も生ずる。青年の心は全く寂しいものだ。あらゆるものに好奇心を持ち、而かもあらゆるものが本當に滿足されない時期なのだ。全く青年の生活は危ない。然しその危ないのは、餘儀なくされた危なさである。もつと今の世間が、かうした青年の心理を理解してやつたら、その危なさはもつと減ずべきものである。

島田清次郎君と舟木芳江孃の戀も、かうした無理解な現代の生活からせかれ出した一特徴と、見て見られぬことはあるまい。然しかうした社會學的の觀察は、余の領分でないからその道の專門家に任せることとする。

次に、現代の戀愛生活の不眞面目なる內部的原因の方面に入つて考へて見ると、先づ第一に眼につくのは、選擇が無批判に行はれてゐるといふことである。

從來の結婚制度に於ては、結婚の對象を選擇する條件としては、家系とか血統とかゞ多くの場合に重んぜられ、それから相性を考へるのが普通であつたやうに思はれる。然るに、新しい空氣の洗禮を受けた青年男女が、所謂男女交際のもとに行ふ選擇の標準は、先づ容貌であつて、相手の氣質とか品性とかを考へてから掛るやうなものは、なか〳〵見當らないさうして此の容貌のうちには、肉體的の容貌と共に、精神的の容貌をも含めて考へるのがよからう。精神的の容貌とは言葉が少し變であるが、精神の表面だけを見ることである。之を今度の事件に當はめて見ると、舟木芳江は島田清次郎の精神的の容貌に戀して行つたやうに思はれる。小說を讀んで感激するなどは、殊にその感が深い。小說が人格のすべてゞはないからである。質に弱いが、文に强いといふ人は決して少くない。「文は人なり」といふが、また「文は人ならず」といふことも云へる。ニイチエはあの通り强い意志の信者で力强い文字を殘したが、然しその性格は極めて弱かつたといふ。舟木女が島田君の文章に眩惑されて行つたのは、かうした島田君の性格に對する批判のない、極めて無自覺な戀愛であつたことは今更いふまでもないやうだ。

古い結婚制度にしても、新しい自由戀愛にしても、その一番大なる缺點は、外部の狀態だけに囚はれてしまふことである。家系や血統に囚はれ、容貌に囚はれてしまふことは、決

して幸福なる結婚の成立を保障するものではない。本當に當人同志の性格の適不適を判定すること、即ちその心理生活を明かにしてから、次にその他の條件を判定すべきである。是等の批判を充分に行き屆かせるために、男女交際は行はるべきである。

島田君の場合では、之があまりに滅茶苦茶である。小説を讀んで感激して手紙を送り、それで戀が成立つた。之ではあまり無批判ではないか。情を盡すのは結婚後でも出來る。男女交際とは決してそんなものではない。今度の島田君の此の事件から、男女交際を疑ふ人が世間には大分あるやうだが、余はさういふ人々には反對する。然し、さればとて、男女交際が此の事件のやうな性質のものであつてはならぬことはいふまでもない。こんな風に陷つて行くのが、今日の青年の交際觀だとすると、余は益々現代の青年を危まずにゐられない。之は要するに、彼等がまだあまりに訓練を缺いてゐるからである。彼等自身が訓練されてゐないと同時に、今日の世間もまだ訓練されてゐない。一足飛びに出たらめな歩み方をしてゐるからだと云ふの外はない。

批判なき選擇の次には、經過を樂しむ戀愛生活が來る。すでに出發に於て批判がないのであるから、その結婚前の交際生活が直ちに情の生活であることは、今日の戀愛生活には普通のことゝなつてゐる。さうしてこれが頗る危險なのである。

かうした男女の交際は、批判選擇の期間でなく、經過を樂しむ期間である。さうして、そこで彼等はその愛情を極度にまで燃やしてしまふ。經過を樂しむことは、一種の遊戲であるから、その遊戲をして一層完全なる快樂たらしめるために、あらゆる手段が用ゐられる。遠出遊山は當り前の事、近くは活動寫眞館で、衆人に樂しさうな姿をさらすのもその一つであらう。斯うして、情を燃やし盡した時は、既に愛の秋が來てゐる。昔から「結婚は戀の墳墓なり」と云つてゐるのは、かうした場合に當てはまる。本當の意味から云へば、結婚が戀の始まりでなければならぬのに、無自覺な戀愛生活に於ては、結婚する時にはもう飽きが來てゐるのである。之で幸福なる結婚生活の成立つわけはない。

感激して懷に飛び込んで來た少女を、島田君はよろこんで抱擁したらう。さうしてそこに甘い夢が開かれたらう。然しその夢から醒めた時、女は自己を思ひ、家を顧み、急に恐ろしくなつて來たらう。さうして、それと反對に男の情は燃え上つて來た。こんな食ひ違ひが、男をして女を藥山まで拉

するに到らしめた。もう最初から破綻を生ずべき芽をふいてゐたのだ。それを知らずにゐたのは、島田君の大なる手ぬかりであつたと、之は先づ普通に解釋しての考へ方である。

然しもう一歩進んで考へると、戀愛の遊戯化として、もつと恐ろしい分をも含んではゐないかと思ふ。そこに至ると、次第に常人の域から外れて、常人以外の埒内に踏み込んで行くのだ。さうして現代の青年男女は、無意無識のうちに、その軌道の上に乘つてゐる。危ないと呼ばずにゐられない。

經過を樂しむまではまだ普通の戀愛生活と云つていゝ。然し經過だけの樂しみでは滿足し切れなくなる。情は刺戟に對して燃えるが、同一の刺戟に對する反應の強さは、その刺戟の加へられる度數に反比例して弱くなる。そこで、益々情を湧き立たせて行くためには、同一の刺戟を度々繰り返すよりも、刺戟を強くして行かなくてはならぬ。さうして、青年男女の戀は、たゞ普通に經過を樂しむことから、次第に外れて行くの外はなくなる。たゞ普通に、手をつないで郊外の野山に語りつゝ歩くよりも、人にかくれてひそかに森のうちを歩くとか、或は故らに淺草の喧噪裡に仲のよい二人連れを現はして、衆人環視のうちにあることに無限の興趣を感ずるやうになる。今までの結婚は、相手としては、自分の身分に相當したものを選ぶのが普通であつたが、故らに高い身分のものとか、或は故らに低い身分のものと愛を交はすことに無限の興味を覺えるやうになる。是等の變態的心理が、即ち姦通を生み、性道德頽廢を促す一面の理由となるもので、曾て頻發した華族のお姫樣と運轉手との駈落なども、半面にはこんな心理が働いてゐたと見るが正當であらう。

かうした常軌逸脱を好む傾向が、更に強烈になつて來るとそれは愈々精神病者の一徴候になつて來る。即ち、對象間の戀愛過程を、單に愛の交換といふだけにのみ留めて滿足することが出來なくなる。そこで、厭がる相手を脅迫することに興味を感ずるか、または相手に虐待されることに興味を感ずるやうになる。非常に手數のかゝる戀愛生活であるが、茲に至つて刺戟を極端にまで濫用する傾向が明瞭に見られる。かういふことは、程度の多少こそあれ、現代には多くある。小なるは、好いた同志が互に手を握り合つたり、何かといふと喧嘩をしながら、直ぐ仲直りをしては却つて愛情の濃密さを増す。所謂「狐色の焼餅」が却つて惚れ薬になる類ひである。一種の愛の術として、かうした變態心理が利用される。さうして之が極端になると、身體に恐ろしい生傷を負はせたり、鞭で打つたりすることを樂しむ。之は谷崎潤一郎氏等の

小說に曾て多く描かれたし、また數年前、妻女の身體を燒火箸で傷だらけにした男が實際にあつたことなどがその例である。

島田君がどんな性格の人であるか、余はもとより知らないが、今度の戀愛事件で、女の指輪を奪ひ取つたり、無理に汽車で梁川まで連れ出してまで目的を遂げようとしたのには、かうした愛の享樂があつたのではなからうか。さうして女の方でも、受動的にある程度までその享樂をしてゐたのが、途中でぐらりと引繰返つて問題になつたのではなからうか。勿論之を變態性慾だとは斷言しないが、然し此の程度の愛のたくらみは決して珍らしいことではない。さうして、多くのものが それを極めて無自覺に、極めて粗雜に、たゞ情の奔るにまかせてやつてゐるので、余はそれが危險だと考へるのである。勿論當人同志は、のぼせ上つてゐるから平氣だらうがはたから見ては全くひや〳〵させられる。之も、現代の青年男女に愛の術に關する訓練がないからで、罪はむしろ世間一般にあると云つた方がよい。

さうしてこんな變態戀愛を樂しむやうな人は、所謂天才などゝ云はれる人に多く見られるやうである。

島田君は天才だと云ふ。自分でもさう認めて、大分傲岸な世渡りをしてゐるやうであるが、自分で天才だなどゝ號するのは、天才そのものゝ眞意を履き違へた滑稽事である。余等から見れば、天才とは異常の一名である。異常は必ずしもよい事のみを意味しないが、その效果を外部的に見て、社會に何等かの好影響を及ぼすものを普通に天才と名づける。だから天才とは、その仕事の一面だけに於て許されることで、その仕事が天才の名に價するからとて、他の方面の全部がまた天才を以て許されると思つたら大間違ひである。人格の全般に亘つて圓滿な發達を遂げ、人格の全般を以て社會の改善發達に寄與する人は、所謂偉人であり、天才以上の天才である。そういふ人は、決して自ら天才を誇ることはしないし、自分の仕事を買ひかぶつて、大風な顏をしたりすることはない。その衷心は、矢張り普通の人と同じ心を持つて、常に自己の足らざるを補はうとしてゐる精進の心があり、小石を積み上げて行くやうな仕事をも倦まずたゆまずやるやうな根氣を持つてゐる。さうして自分では意識しないうちに、社會に大なる寄與をしてゐる。決して自分の身を乘り出さうとはしない。だから一生人に知られずに終つたやうな偉人も、今の社會には隨分あらう。さうして さういふ人の寄與は尊い者である。

ところが所謂天才は、その人格の一局部だけで行動するのだから、その方面に於ては有爲多能の人であつても、他の方面に於ては極めて無爲無能の人が少くない。そしてその有爲

多能の勢力が枯渇したり、社會より認められなくなつたりした場合には、忽ち凡人になつてしまふのである。ナポレオンがいかに軍略の天才であつても、セントヘレナに幽閉されては手も足も出ない。また彼がいかに軍略の天才であつても、帝系統治の資でないために、帝王としては失敗してゐる。要するに彼は、兵馬を戰場に驅るだけの天才だつたのだ。

余は島田君の天才の程度を知らないが、常に天才を稱して得意になつてゐたことを知つて、聊か危ぶむの念に堪へなかつたものである。飽きつぽい日本の文壇で、名聲のあるうちに、うんと金儲けをして引込んでしまはうといふならとにかく、悠々と自己を凝視し、社會を眺め、その眞理を描破すべき使命を有する筈の文學者として立ちながら、矢つぎ早やに誇大的な題を冠した書物を出して、本當に自己の内省をどの點まで行つてゐるかを疑はれるやうな著作をすることは、同君の誇稱する天才の名と共に、危なつかしくてたまらなかつたのである。

そこへ今度の事件だ。余はどうも、君の半生の行動からして、特にその洋行中に傳へられた二三の逸話からして、天才の一面として性道徳の方面に缺陷でも持つてゐるのではないかと思はれた。然しその後の發表を見ると、強ちさうでもないやうだから、この觀察は勿論取り消しである。かく、君に變體的な戀愛嫉妬がなかつたとすれば女の指輪を取上げて見たり葉山まで連れ出して見たりしたのは、いかなる心理かといふに、それは矢張り普通の戀愛心理から來た一種の狂ひにすぎないだらう。

現代青年の惱みの一つは、與へられざる惱みである。年頃になつたものが、いつまでも放つておかれることは、今日の社會の生活難と共に、焦燥の感を深く青年の胸に抉りつけるものである。殊に島田君の場合、年少にして名を成すほどの早熟者だから、一層かうした焦慮があつたらう。さうして、求められざる淋しさは、驅つて君をしてこの暴擧に出でしめたのであらう。さうとして見れば、島田君のこの場合にあつても、決して普通の青年の行き方と變つてゐるのではない。現代の青年の性的生活から、一歩も出てゐないといふことは明かに見られる。

かうした性の惱みは、現代に廣く行き亙つてゐる傾向であり、從つて余は現代の青年に同情すると同時に、之を衷心から危ぶむものである。どうしても、之を本當に導くものがなくてはならぬ。それには、一時盛んに唱道された性教育を徹底させることも必要であらう。殊に今度の舟木女や、先頃の横濱の大野博士事件に於ける被害者のやうな、無自覺な女性の出ることを防ぐには、どうしても必要だと考へる。

「女性改造」懸賞募集

「光明皇后」の研究

光明皇后は、美しく、德高く、信心深く、聖武天皇を輔けて天輪聖王たらしめた人格者です。皇后が民衆的な公共浴場を設け、其浴室に一千人の病者を犒洗し且つ癩病患者の體を洗ひ、路傍の乞丐の手を取つて惠まれた情愛は歷史的に有名な話です、そして其事實は女神そのまゝの仁愛です。また精神的空䖍であつた當時の婦女に宗敎を與へられたことも有名です。光明皇后を、東西古今を通じて眞に婦人中の典型的人格者としてその事蹟を研究することは意義あることゝ信じます。原稿は可成、皇后の人情美を基調とした物語式に綴られたし。

締切　六月廿五日

賞金　壹等　壹百圓（一名）　貳等　五十圓（一名）

原稿　は四百字詰一枚として五十枚以下、應募原稿は一切返戻せず。「女性改造」編輯部宛「光明皇后事蹟」と朱書されたし

發表　八月號「女性改造」誌上にて

女性改造編輯部


むかしの
童話
こぶとり
新作画で











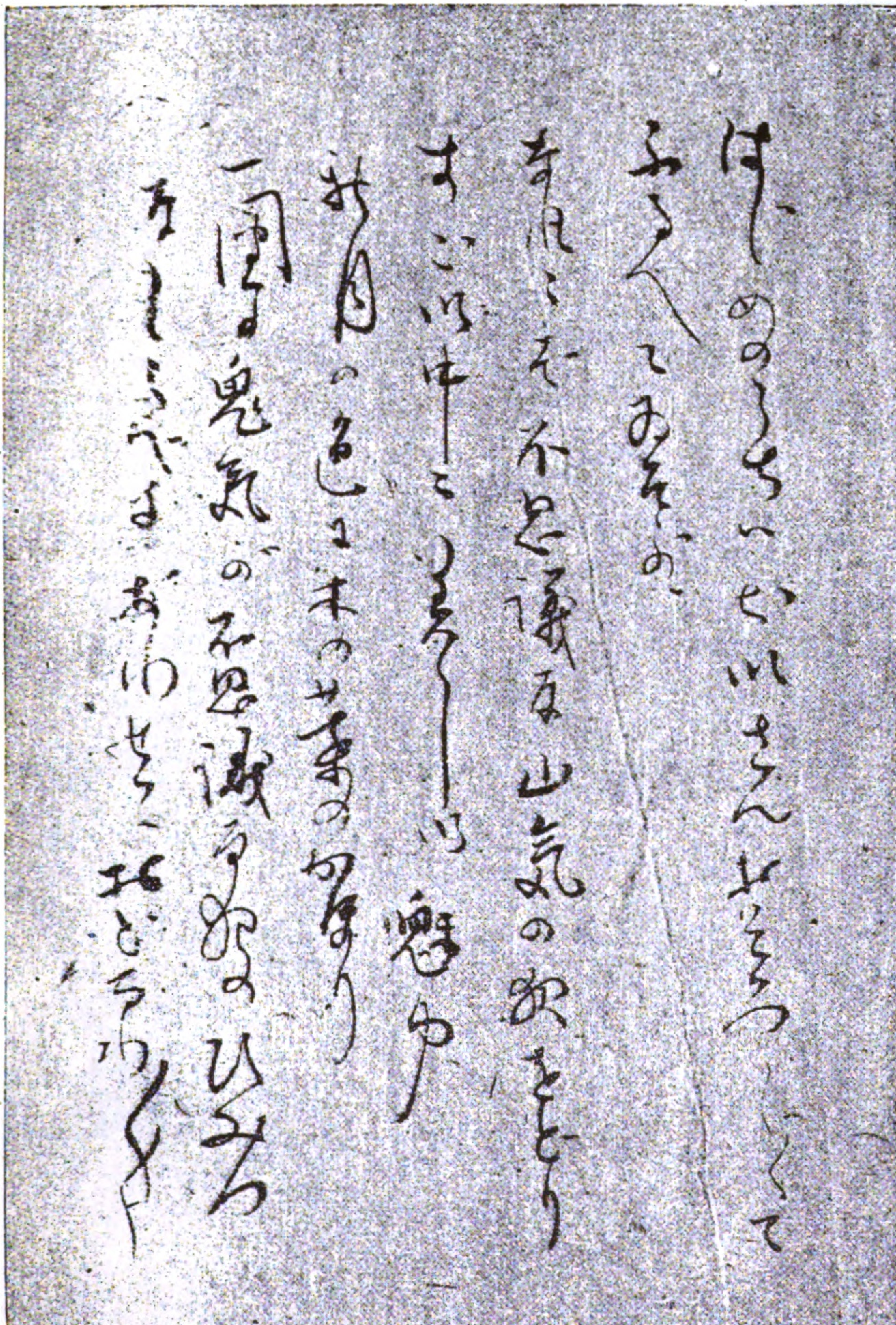









(2)



はしめのころハたいへんおそろしくて
ふるへておりたの
されハこそ不思議な山気の











温かき反抗

幼き日の想ひ出——自叙傳の一

澤田正二郎

一

「お前は、支那服を着て三井寺の石段の下に捨てられてゐた支那人の兒だ」

私が幼いころ、駄々をこねたりすることがあると、祖母や母は、いつも定まつたやうに斯う云つては私を怯かすのであつた。

「三井寺へ連れていつて、支那人へ返してしまつたがいい」

姉や兄も、さういふときには、きつと祖母たちの言葉に雷同して、年下の私を嫌がらせようとするのが常であつた。

支那服を着て捨てられてゐた孤兒——幾度となく、さうした言葉を聞かされて來た私の心の奥底に、強く深く根差したものは何であつたか？

「俺は支那人である」といふ背叛的な意識であつた。

「支那人として日本を××しなければならない。さうして、日本の×とならなければならない」といふ叛逆的な覺悟であつた。

今日に至るまで、私に附き纏うてはなれようとしない、あらゆるもの、殊に強者に對する反抗的精神は、多く、斯うした氣持の中から生れて來たものではなからうか。私は、みすぼらしい支那人の反物賣を見ると、子供ながらも出來得る限りの深切心をもつて彼に接した。道に迷うて困つてゐる支那人の藥賣があるのを見ては、その藥賣が、辿り行かうとするところまで懇にその男を案内して行くことを少しも厭はしくなど思つたことがなかつた。

何故に私は、三井寺に捨てられてゐた支那人の子として、親や兄姉にまでも取扱はれなければならなかつたのであらう？——私は、私の生れ故郷を調べて明かにしなければならない。

二

日本一の大湖沼として、小學校の兒童の頭腦にまでも深く植ゑ込まれて居る近江の琵琶湖、その沿岸の風光は、日本三景と共に、近江八景として世人の口々に稱め讃はれてゐる琵琶の湖、鏡のやうに滑かな湖面をかすめて響きわたるその音は、古も今も、聞く人々の心を打ち溶かさないでは措かないと云はれてゐる三井寺の晩鐘——何といふ幽邃な情趣であらう。

私の父が滋賀縣の收税長として、前任地の長崎から、その縣廳の所在地である、琵琶湖に臨んだ大津へ轉任して來たのは明治二十五年であつた。父は税務監督官といふ、聞いても堅苦しさうな職務をもつた役人であつたにも拘らず、一面には、風流をも好む性質の所有者であつたとみえて、嘗ては、俳人芭蕉や、畫家の探幽などが滯在してゐたこともあるといふ、三井寺の境内にあつた一軒の末寺を借りて、其處を住居としてゐたのであつた。

母は、大津へ來る前から既に懷胎の身であつた。月が滿ちて産れ落ちたのは、今、こゝにこの自叙傳を編まうとしてゐる私である。即ち私は、父母がまだ、あの異國的情緒の豐な搯鉢の底のやうな市と云はれてゐるほど鬱屈な長崎にゐた頃から母の體内に宿り、移り住むだ大津の地、琵琶湖名所の一つとして知られたる三井寺に於て、淋しい、けれど、幽雅なあの晩鐘の音を聞きながら、この世の中の一人として人間の仲間入をしたのであつた。祖母たちに、支那服を着て捨てられてゐたといふ三井寺こそは、私にはかうした思ひ出の多い生れ故郷なのである。

それならば、私の父が、彼の有名な明の國性爺の父のやうに支那人であつたかといふと、然うではない。父が若し支那人であつたならば、私の今日の生活にも、もつともつと面白い影がさしてゐたであらうと思はれるけれど、幸か不幸か、父は土州出身の士族であつた。而も、明治十年の役の熊本籠城の際などには、目ざましい奮戰をして勳功を顯したといふ、譽ある日本武士の一人であつた。母も歴然とした東京生れの人であつた。それだのに、斯様に判然たる日本人を兩親に持つた私が、何故に支那人の子として肉身の親兄姉からまで呼ばれたのであらうか。云ふまでもなく、それは、祖母や母が、私を教訓する慈愛の言葉だつたのであると解したが、一番美しくて穏かである。私が今日あることを得たのは、この母たちの教訓の賜でなくて何であらう。私は、いつも然う思うては、今は大阪で一人淋しく暮してゐる母に心からの感謝を捧げてゐる。

三

私が、母の大きなお腹を破つて飛び出した時、私には既に一人の姉と一人の兄とがあつた。姉はその時四歳で、兄は私より二つ年上であつた。

熊本籠城の際、奔馬にひどく頭部を蹴られたのが因で病付き、その後時々發作しては苦しまされてゐた腦病の爲に、父が床に就いてしまつたのは、大津へ轉任して間もなくの後であつた。いろ〳〵と手をつくし、醫藥をも代へてみたといふことではあるけれど、長い間の痼痾をどうしても癒やすことは出來なかつた。父は、二年の間この病の爲に苦しみつゞけて、明治二十七年の夏、丁度その年の秋に催されるはずになつてゐた三人の子供の七五三の祝をも見ることが出來なくて、遂に永久の眠りにと就いてしまつたのであつた。既う、七つと五つの歳を迎へてゐた姉と兄とは、父の死に遇つて、悲しまなければならないことを、多少なりと知つてもゐたであらうけれど、漸く三歳になつたばかりの私は、父が何んな風貌の持主であつたか、その面影さへも覺えてはゐない。ただ、強いて追想しようとするならば、父が臥つてゐた枕元を駈け廻つて叱られたことを覺えてゐる位にすぎない。然し、それとても、ほんたうに夢よりも淡い記憶である。臨終が近づいた時、父は囈言のやうに「正二郎が馬に乗つて來た」と母に云つたといふことを、大きくなつてからよく聞かされたのであるが、これによつてみると、父は私を、將來軍人にしようとの考へをもつてゐたのではなかつたらうかとも思はれるのである。「父親はなくとも子は育つ」といふ諺はあるけれど、現在、私自身が三人の子の父親となつてみて、「父が生きてゐて呉れたなら」といふ感を、沁々と味はずにゐられないことが多いのである。

斯うして亡くなつた父が、如何に繁激な職務の爲に、頭腦を使ひ働かしてゐたかを想ふ時、私は私の今の仕事をそれに比較してみて、その多忙さに於て、まだ〳〵父の仕事に遙かに劣つてゐるものの多いことを知る。さうして常に勵みの心を培ふことが出來るのである。この意味に於ても亦私は亡き父に對して大いに感謝を表さなければならない。

四

年未だ若くして頼りの夫を失つた母親は、母にはその母に當る祖母と共に、私達三人の子供を伴うて東京へ歸り、根岸の里に大きくもない一戸を構へて移り住むことになつた。しかし、根岸の生活も、姉や兄達と連れ立つて、動物園を見に行く爲に、鶯谷の坂を登つたことぐらゐの他は全く薄ら覺えである。根岸から半年足らずにして引移つたのは下谷の御徒士町であつた。この御徒士町時代から初めて私の意識は稍々はつきりと生れて來るのである。つひ此の間も、私は、昔懷しい土地の空氣を慕ひたさに、生溫かい微風に浸りながら、

單身更けた春の夜の街を心ゆくまで遊び歩いたのであつた。狹隘なるあの御徒士町の界隈は、當時と現今と、さう際立つた變遷の跡も見られないだけに、私には、何處の町よりも、一番懷しみも親しみも深かつた。

　人間は、生ひ育つた土地、家屋の關係によつて、その抱く氣持にも、大小、廣狹の差異を生じるものであると云はれてゐるのに、あんな長閑な琵琶湖の畔で生れて、こんな小さな町で生長した私が、どうして現在のやうな、多忙な仕事に親しむでゐることが出來るのであらうか。どうして今日、斯んな大きな氣持を抱いてゐられるのであらうか。私は それを、不思議に感じられてならないのであろ。奇蹟のやうにさへ思はずにはゐられないのである。

五

　正常な學年は未だ來ないのに、どういふ譯か、私は六才の春に下谷小學校に入學をしなければならなかつた。支那人の子は日本の學問が嫌ひであつたとみえて、その成績はいつでも殿尻であつた。七つにもなるまで前齒が生えなくて、大きな口からだら〳〵と涎をたらしてばかりゐた私は、家中の者や、學校の遊び友達等から「門跡前の蟇口」と綽名をつけられてゐた。(本願寺前の袋物屋に大きく口を開いた蟇口の看板があつたといふことである、)私はそれが何よりも嫌に際つてたまらなかつた。

　日頃は、他家の親たちに羨まれるくらゐ兄弟仲の好かつた間柄でも、姉や兄が、若し戲談にも私を侮辱するやうなことを云つてからかひでもしようものなら、私は本氣になつて怒つて、負けてゐることが嫌ひなばかりに、姉や兄を座敷中追ひかけ廻すのであつた。

「小さい癖にお止しなさい！何をするのです。姉さんや兄さんを追ひかけたりする者がありますか！」

　祖母は、そんなことがある度毎に、私をだけ叱りはしても、私をからかつた姉や兄を咎めようとはしなかつた。私も亦、そのうちには、他人にからかはれたりして馬鹿にされることを却つて面白く思ふやうになつて來た。私の根性は斯うして益々ひねくれて行くと同時に、學校の方の成績も、一年二年と、惡くなるばかりであつた。

　家庭に於いてばかりでなく、支那人の子は學校へ行つても常に虐げを受けなければならなかつた。

　當時私の學校には新堀と稱する我鬼大將がゐて、權を恣にふるまつてゐた。他人に、併呑され、屈服することを好まなかつた私は、彼の家來とならなかつた爲に、大將の新堀と、その部下とからありとあらゆる迫害を蒙つてゐたのである。石や草を襟から背中に入れられたりすることは殆ど毎日といつていゝ位であつた。或る時は、私に取らせまいとして

帽子を、高い樹の枝に引つ掛けたりしたこともあつた。本を手の屆かない屋根の上にあげてしまはれたこともあつた。また或る時は、靴の中に虫を入れておかれたりしたことさへもないではなかつた。けれども私は、たつた一度も、それを悔しがつて涙を流したこともなければ、悲しくて泣いたりしたこともなかつた。況んや、そんなことを受持の教師に申告しようなどと思はなかつたことも事實である。

子供の政治にも遷り變りがあつた。我鬼大將の權力は、いつの間にか、暴君の新堀を離れて理智的な井上の手に遷つていつた。事實に於て、井上は、新堀よりは遙かに文明的で、化學的で、また打算的で、部下から税を取り立てることを知つてゐる位の頭腦をもつた男であつた。

或日のこと、私もこの井上から「金十錢を獻納しろ」と申し付けられたのである。私は、井上の命令に從はないと怖ろしいと考へた譯でもなかつたが、或るちよつとした好奇心の勢で、その日學校から歸つてから、祖母が用箪笥の中に藏つて置いた十錢銀貨を一個盜み出して、机の抽斗に隠して置いたのであつた。祖母が、「用箪笥の中の十錢銀貨が紛失してゐる」と云つて騒ぎ始めたのはもう夕暮時分であらうか。

「お前たちは知るまいね？」と質ねられた姉と兄とは、同じやうに、「私は知りません」と答へた。「正二郎は知らないかい？」祖母の眼は白く光つた。「知りません」と私は云ひ放つた。

けれども、最初から私の上にかゝつてゐる嫌疑の雲がどうしてそんな位のことで霽れようぞ。祖母の嚴重な捜索の手は、私の机の抽斗にまで延びて來たのであつた。私の机の抽斗の中からその十錢銀貨が發見された時、さうでなくてさへ、姉や兄ほどには氣に入られてゐなかつた私の上へ、家中の者たちの眼が、異様な光を放つたことは勿論である。私は、遂々泥棒として受持教師の許へ訴へられたのであつた。

「よしツ。俺は何處までも支那人として終つてみせるぞ」

私のこの反抗的氣持が、叛逆者のそれではなく、温かい心持から湧き起つた反抗心であつたことは後に到つて解る時があるであらう。が、兎に角私は、遣る瀬ないやうな氣持をもつていよ〳〵支那人としての覺悟を定めなければならなかつた。と同　に又「支那人らしくあつてはならない」といふことにも氣を付けなければならなかつた。

この十錢の問題の爲に、私が一家の者の信用を失したことは、今後の私の處世上最も大きな損失であつた。それは、いつまでも〳〵私の身邊に附き纏うて、することなすことの上に様々な禍を與へて行つたのである。どうしたならば、私はこの失つた信用、否、それ以上の信用を取り戻して、今までの自分を乘り越ゆることが出來るであらうかといふことも考へなければならなかつた。その時分、一家の主權は、病弱な母親よりも、何事にもうるさく思はれる程嚴格であつた祖

母の手に多く占められてゐたのであつた。

六

餓鬼大將が檜山と代つてからであつた。今まで、如何やうな壓迫にも、侮辱にも、報はうとしないで、いつもじつと、我慢に我慢をして來た支那人の子が、彼のもつてゐるほんたうの力量を示すの日が到來したのである。餓鬼大將の仲間どもが、いろ〳〵の締盟を結んで對他策を講じつゝあるのにも拘らず、私一人は、常にそれらの圏外に留まつて一度もそれに加擔をしなかつたことから、豫て叛逆者と見られてゐた私は、或る日運動場の眞中に於て、子供心の、大將の權勢に媚びようとする心持、統領に忠義をして賞められようとする心持、さうした寧ろ、愛すべき稚氣をもつた彼ら檜山一派の部下共のために喧嘩を賣られたのであつた。

「澤田！君は何故僕らと一緒に遊ばないのだ？」檜山の部下の一人は、私の前にと進み來たつて斯う云つたのである。

「僕は他人の家來になることが嫌ひだ。僕は虎の威を借る狐の仲間入りをしたくない」默つてゐても無事には濟みさうな形勢もみえなかつたし、どうせ賣られた喧嘩だからと思つて、私も斯う買つて出たのであつた。

「何を生意氣なッ」と云ふよりも早く、既に申し合せてゐた彼らは、一齊に飛びかゝつて來て私を組み伏せてしまつたのである。子供とは云へ、五六名もの下敷となつて拳骨の雨を見舞はれてゐた支那人は、今日こそ俺の本當の大力を見せてやるぞと有りつたけの念力をこめて敵の數名を跳ね飛ばし、最後に殘つた大將の耳と鼻と口の中に指を突き込んで、力まかせに引つ掻いたのであつた。私を押へつけてゐた彼が、だん〳〵その手をゆるめていつたのを見ると、流石の日本の大將もひどく弱つてどうすることも出來なかつたものと見える。もう彼の部下の中に、尚私もに手向つて來やうとする勇者は一人もなかつた。この時位私は溜飲の下がつたのを覺えたことはない。さうしてその時の愉快さは未だに忘れることが出來ないのである。

今日のこの勇敢な戰績によつて、彼らの態度は翌日からがらりと一變したのであつた。餓鬼大將としての勢力が、漸次私の手に傾いて來つゝあることも容易に認められたのであつた。然し私は、その權勢を自分の手に把握することを好まなかつた。近づいて來る甲乙を、親しまなければならない友達とは思つても、その友達の上に何等かの權威を揮はうとは考へなかつたのである。それは、自分の周圍を征服し盡して、王者とはなることが出來ても、王者としての氣持をもつことを好まなかつたからである。——新堀、井上、檜山の三君を始め、その部下であつた、今は各々立派に成功してゐるであらう人々が、その時分の私のことはよく知つて與れてゐるで

むらうから、私にこれ以上をこゝで云々するの必要を認めないで置かう。——この氣持は、現在の私の實生活に於ても、かくれなく表出してゐるのを、心ある人は見て知つてをられることゝ思ふ。

七

此の出來事によつて「我れ支那人に非ず」との自信が、私の心の奥深くから勃々として湧き起つて來たのは事實である私は、その時からもう、今までのやうに消極的な支那人としてゞはなく、飽くまでも積極的に、日本人として、日本を征服し、さうしてこれまでの自分のやうに、世界各國からあらゆる虐げを受けて來た支那及び支那人の味方となつて行かう。俺は何處までも強く生きなければならないといふ明るい晴々とした氣持に變つたのである。

世界の地圖を擴げて見ると、支那は東洋の大部分を占めてゐる大きな國である。山岳もなければ、河川もないやうな、眞黄に色彩られた廣々としたあの大きな支那！私には生涯忘れることの出來ないであらう懐しい國名をもつた支那！

「俺は、これからあの支那のやうに大きな舞臺に立つて、全世界に活躍をしなければならない」今は、支那人としての意識から離れて、日本人としての自覺を呼び起しつゝあつた少年の心には、さうした大きな希望が一ぱいに滿ち輝いてゐたのであつた。然るに、その學業はと云ふと、依然として總尻の總尻であつたことは云ふまでもない。

學年末になると、姉と兄とは、毎年、賞狀をもらつて歸つたが、私は一枚の修業證書の他に何一つ持つて歸るものがなかつた。家庭に於ても、年々の成績の如何により、親類中の人たちから、成績の良好であつた者のみに對して、賞與品を出すのが慣はしとなつてゐた。さうして姉と兄とがいつでも半紙十帖づゝも與へられるのに反して、私はたつた一帖しか授與されたことがなかつたのである。然し私は、それを少しも妬ましくも思はなければ、得意然たる姉や兄やを羨ましく思つたこともなかつた。「同じだよ」と云つて、僻み心を起させまいとする慈愛心から、母が渡して與れる一帖の半紙を、それは姉や兄がもらつた半紙の十分の一しかないといふことは承知してゐながら、同じだけのものとして受け取つて行く自分の心持を、何だか誇らしくさへ感じたのであつた。

或る年の夏の宵のことである。夕餐が終ると、姉と兄との姿がいつの間にか見えなくなつたのを私は知つた。どうやら祖母も外出したらしい樣子であつた。私はひとり、二階の部屋に横になつて、階下で母が爪彈してゐる三味の音をきゝながら、青白く冴えわたつた月夜の空を眺め入つてゐた。

《月夜の美感や幽渺言ひ難し、されど、一點の明なるは、そが吾人に及ぼす感情の悲哀の一面に傾けることなり。而し

て凡そ色相の誘起する感情は不定なるものなるを以て、是の場合に於ても悲哀は不定の悲哀なり、たゞ何となくうらかなしきなり。而して月光の青きは吾人の意慾と共に、是の意慾の主體たる「我」をも没するを以て、其の悲しみや、我執の悲しみに非ずしてたゞ何となく悲しきなり、悲しむもの〻我れなることをも打忘れ、我れは唯悲しき世界其の物の一分身なるが如く覺ゆるなり。譬へば妙なる音樂に聞き惚れたる人の、樂しみ外にありて我れその中に在るが如く覺ゆると同じかるべけむ。然してこの悲しみは素より實なる、確かなる、悲しみに非ず、そが漠然として定かならざるは、月の光の底暗きが如く、其の淡きは月の光の夢の如きにも似たらむかし」

今日の私であつたなら、飽きるまでに愛讀した樗牛のこの美しい文章の意などを、心ゆくまで味つたであらうけれど、當時の私は、しかも徹底的に讀書ぎらひであつた私は、樗牛といふ文人の名も、その人によつて書かれた文章をも知つてゐようはずがなかつたのである。然し、そんなやうな心持を抱いてゐたことだけはわかる

その時不圖、私の耳に聞えたのは、ポン〳〵、ポン〳〵と、どこかで打ちあげてゐるらしい爆竹の音であつた。何氣なく東の方を眺めると、薄明るい宵空の中に、綺麗な火の粉が流れ舞うてゐる。起きあがつて戸外を見れば、涼しさうな浴衣を着た人たちが、大勢、列をつくつたやうにぞろ〳〵と、東へ〳〵と歩いて行く。附近の家〻の物干臺や屋根の上には、澤山の人が昇つてゐて、稱讃の聲をもらしては拍手喝采を繰り返してゐる。兩國の川開きの夜であつたのである。

「祖母は、姉と兄とを連れて花火を觀に行つたのだな」私は直ぐとさう悟ることが出來たのであつた。

みんな同じやうに可愛くなければならぬ肉身であるのに、如何に學校の成績が惡いからとはいへ、姉と兄だけを連れて行き、私を一人殘しておくとは、あまりに聞えない祖母ではある。母も亦母である。正二郎も一しよに連れて行くやうにと、一言の口添へぐらゐして呉れたらよささうなものなのに、あまりにも情ない仕打である。——一人家に殘された少年は、その淋しい心に何を考へたであらう?

「俺はやつぱり三井寺に捨てられてゐた支那人ではないのだらうか、そのために斯うして何時でも一人除け者にされるのではないのだらうか」私は過去を振り返つてみて、復たさうも考へたのであつた。否、考へずにはゐられなかつたのであつた。

「そんな馬鹿なことがあるものか。俺は今、日本を××して日本の×たらうとしてゐる日本人である。けれども俺は學問といふものが嫌ひだ。王たらむとするには學問が要る。祖母たちは俺を×たらしむべく、必要なる學問の道に親しましめようとして、今教訓を與へてゐるのである」私は、斯うした

温情的な見方によつて、除け者にされた今日の自分の心を慰め、また前の考へをも打ち消さうと力めたのである。

然しながら、いくら然うであつても、年にたつた一度の川開きではないか。子供の小さな心を樂ませるには最も恰好な催しものとして欣ばれてゐる花火の晩ではないか。どうせ行くのなら、私も一しよに連れて行つて呉れてもよささうなものであるのにと、秘して行つた祖母たちの行爲を恨んでみたり、心事を憐むでみたりもしたのであつたが、それと同時に感得し得たことは「取り殘されたもの〻偉大さ」といふ眞理であつた。今の私は、支那及び支那人の味方たらんとする心に變つてゐる。虐げられて來た支那人として、日本及び日本人に反抗して行かうとして來た時代とは、少しく立場が異つてもゐる。

「祖母たちに報うのには、全人類に對して捧げなければならないところの愛をもつてすることだ」やがて私は、さうした心の神秘を深く味ひ知ることが出來たのであつた。

七

御徒士町から、同じ下谷の稻荷町に引越したのは、私が尋常四年の時であつた。稻荷町の家は、下谷圖書館の地下室をつくる爲に掘り出した土をもつて地上げされた上に新築した日本造りであつたが、その圖書館の土の上に建られた家に住まふやうになつたといふことは、後年私が讀書狂となつて、圖書館でのみ日を暮すやうになつたことから思ふと、地上の神秘によつて與へられた暗示ではなかつたらうかとも取られないではない。でも、私は、その頃はまだ矢つ張り學問が嫌ひであつた。それに反比例して私の膽力は据はり腕力は日一日と秀でゝ來るばかりであつた。從つて喧嘩も強くなつて、大概の者にはもう負けを取るまいと思はれるほどの自信も出來て來た。檜山の後を繼いで、押しも押されもせぬ一方の我鬼大將となれるだけの手腕と威望とを兼ね備へてはゐたけれども、勸められても私は、たゞ徒らに大將となることを、拒絕したのであつた。前にも云つたやうに、大將となることよりも、大將となつて威を振り廻すことを好まなかつたからである。相撲で勝つて「恐ろしく強いぞ」と多くの、今は私に媚を呈しかけて來てゐる友達等から驚嘆されることはあつても、四年の間にたゞの一度「今年は成績がよかつたねえ」と云つて、母や親類の人々から賞讃の辭を惠まれたことは未だに於てなかつたのである。

讀書も算術も習字も嫌ひであつた私が、僅かに繪を描くことの好きになつたのは此の頃からであつた。文部省の主催で全國小學校兒童の繪畫習字展覽會が開かれたのもこのころであつた。同級の生徒たちは、一々先生に見てもらつたり、直してもらつたりしては、一生懸命に書き直し描き直して出

したのであるが、私は、ほんの氣まぐれに一本の柳の木を描いてそれを出品したのであつた。

或日のこと、校長の面前に呼び出されて、「澤田君！貴方の柳は、畏くも皇后陛下のお氣に召して宮内省へ獻上を仰せつかりましたぞ」と傳達された時、私はどのくらゐ驚いたか知れなかつた。碌に習ひもせずに描きなぐつた繪が、人々の眼に止まらうなどゝは夢にも豫期してゐなかつたのであつた。況んや、畏くも時の皇后陛下、昭憲皇太后陛下よりお賞めのお言葉を賜らうなどゝは――今日新國劇のマークとなり、私の紋所となつてゐるあの「柳蛙」を知らるゝ人は、その因緣來歷を首肯されることであらう。

算盤の出來なかつた少年、字が書けなかつた少年――さうした學業の豚兒は、僅かに一枚の繪を描いたばかりに、一躍にして校内の覇者となることが出來たのである。

この豫期しなかつた出來ごとによつて、私は、「學ばずとも俺は異常な人間である」といふ自信を得たのであつた。母や祖母も「正二郎は畫家にしよう。當人も畫家になりたがつてゐるらしいから」と話し合つてゐることなどがあつた。然し私は、繪を習ふことが厭になつたので、それつきり繪を描くことは中止してしまつた。それでも、自己の偉大さを偉大さたらしむるには、何か一つ優れた武器をもつてゐなければならない。――さう考へた私は、學年末に歌はせられた螢の光の歌の感化によつて、讀書を好むやうになつたのである。

私は起きると毎朝、聲高らかに、恰も弟子坊主がお經を讀むやうな具合に聲を張りあげて讀書するのを日課の一つとした。或る日、三谷校長や各教師の前で、讀書を申しつけられたことがあつた。その時私は、一氣にして一冊の本を讀んでしまつたのであつた。これまで、何を讀ませられても、一度として滿足に讀み了へたことのなかつた私の今日の上手さを見て、各教師たちはどんなに不思議がられたことであらう。

あとで聞いたのであるが、一度、私の家の前を通りかゝつて立聞きされたことがあるといふ三谷校長は、「澤田君は、毎朝一生懸命に讀書してゐるから、斯んなに上手なのです」と賞讃の辭を述べられたのであつた。この校長の一言によつて今までの豚兒は、級中にも面目を施し、各教師からも稍認められるやうになつたのである。一方この話を聞いた家庭に於ても亦、長いこと支那人として冷遇され、十錢の泥棒として信用地に墜ちてゐた少年は、祖母や母より、兎に角驚異の眼を以て見られるやうになつたことも實際であつた。然し、人々の腦裡に深く刻み込まれた先入觀念は、さう容易に取除き得られるものではなかつた。叛逆人の如く見られて迫害され、學業の豚兒として侮辱されて來た私は、今一躍にしてこの殼から脱け出さうとすることの容易でないのを知つたのである。又、強いて脱け出さうとも思はなかつたのである。

八

　私が十二歳の春を迎へた時、姉は女學校に、兄は中學校に通つてゐた。六歳にして小學校に入學をさせられた私は、今年はもう中學校の入學試驗を受けなければならなかつた。私は、開城中學の受驗生として應募した。そして入學試驗を受けてみた。

　及第者の發表があつたのは四月の十日頃であつた。生徒溜所の板壁に長々と貼り出された一百餘名の連名の中に、自ら大天才をもつて任じてゐた自分の名前を、私は譯もなく見出し得たであらうか。不幸にして發見することは出來なかつたのである。涎くりとして侮辱され、支那人として虐げられ、泥棒として迫害された過去の事實をよく知つてゐる下谷小學校ならいざ知らず、未だ何にも解つてゐる筈のないこゝの中學校までが斯うしたハンディキャップを附けるのかと思ふと私は、世の中のもの〻すべてを呪ひたいやうな氣持にさへならざるを得なかつたのである。高くて手が屆かなかつたればこそ幸であつたけれど、私は、私の名前を見出すことを得なかつた連名表を引き裂いてやらうと思つて延びあがつた時のすがたを省ると、今日、自分の良心に對しては恥ぢ入りながらも、亦、あゝした元氣をもつてゐた當年の若さを、懐しいやうにさへ思はれるのである。

　しかし其の日は、私はそのまゝ上野の公園へ行つて、嘗てまだ何の邪氣をももつてゐなかつた時代には、姉や兄と一しよに來て鬼ごつこなどをして遊んだ、動物園の前の櫻の木の下で、今を盛りと咲き誇つた櫻花の色香に醉うて、心に何の苦勞も無ささうに、笑ひさざめいてゐる人々の陽氣さを眼前に眺めながら、抑へ切れぬ悶々の情を抱いて一日を沈み暮したのであつた。

　家へ歸つて母に何と告げようか。——さうしたことなどで尠からず心を痛めながら、悄々として稻荷町の家へ歸つて行つたのは、長い春の日の陽脚が、今にも最う西山に踏み入らうとしてゐるの頃であつた。

　私の家には、私と一しよに同じ中學の入學試驗を受けて及第した親戚の子供が遊びに來てゐた。さうして私の顏を見ると、いきなり飛んで來て「正ちやんお目出度う」と云ふのである。

「お目出度うと何がです?」親戚の子供の祝辭を、私は、私を侮辱したもの〻やうに誤解したので、半ば憤怒の色をさへ見せて斯う反問したのであつた。

「何がとは?——試驗にパッスしてさ。——いや、ほんたうにお目出度う」

「僕は落第ですよ。君が及第したからつて、さうからかつちやいけません」

尾瀬敬止譯

勞農ロシア詩集

（四六判上製）
定價二圓
送料十七錢

最新刊

日本の新しき男女は嵐の如く本書に來る

「おお、ボリシエヰキはわたしを墓へ！　はげしい風、さむさも負けぬブールジヨアは十字路で、鼻をカラーにうづめる」と歌ふ革命の都には白い粉雪が降る、風が捲く、　ワニカとカチカは居酒屋で寒い黒い牆外をすかしながら友僚と私語く、胸にはまだ生々しい手傷をしながら。　此詩集は蓋し全國の青年たちに嵐の如く迎へられるであらう、永らく詩のなかつた我國の青年たちは此詩を抱いて始めて血の出るやうな叫びを擧げることも出來、そして靜かに又花と雪との間に元氣な微吟がつづけられやう。

心臓を貫く勞農露國青年の此意氣を見よ

社會學、倫理學、美學、教育學等の精神科學の基本たるのみならず、廣く教育、優生、司法、工業、商業、交通機關、軍事の諸方面にそれが應用の氣運の澎湃せるの際、何人も一本を手にして各自の研究を精緻にしその考察を深刻ならしむべきてある。

吉、夫れ最近興りつゝある精神動作學、行動學、產業心

自の

賀川豐彥著

本書は幾十萬の諸
師の生活に光りと、親

める前

姉の生活に光りと、親みと、愛着とを齎らす。

定價貳圓參拾錢
◇送料十七錢◇
◇四六判上製天金◇

發行所
東京芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

「だつて、正ちやんの名前も出てゐるぢやないか」
「馬鹿なことを云つちや困る。僕、今日見に行つて來たんです」
「僕だつてたつた今見て來たばかりだ。確かに載つてゐます。だからお祝ひに來たんです」
　私の名前が載つてゐた。しかも實際見て來たものがあるといふ。眞實であらうか。今日私はあんなに綿密に見ても發見することが出來なかつたのに、親戚の子供である私の友達は確かに見屆けて來たといふのである。若し、私の見落しであつて、ほんたうに載つてゐるとしたら何の邊くらゐであらう。上の方であらうか。それとも下の方であらうか。何れにもせよもう一度行つて見更めて來なければならない。――私はさう考へながら、玄關の踏板を踏み割つたのにも氣がつかず、神田淡路町の學校まで、一散走りに飛んで行つたのであつた。
　なるほど私の名前が載つてゐた。しかも一番最後に、他の及第者の名前よりは殊更に肉太く、何だか、新らしくさへ書き足されたかのやうに書いてあつた。兎に角も私は、たとひ順番が最終尾であつたにもせよ、及第者の一人として、百餘名の列の中に加はることは出來たのであつた。
　然し、ほんたうに考へてみると、果してこれが私の爲に幸福であつたかどうか――？「校長に賴み奉つて、やつと及第者の部に入れてもらつたんだ」私の保證人が、校長と知己の間柄であつた爲めにか、斯ういふ噂をしてゐる者のあるのを私は知つたのである。そんな馬鹿なことがあるものかと信じてはゐても、他人の情を蒙つて生きてゆくことの嫌ひであつた私は、一層のこと、このまゝ退學してしまはうかと思はないこともなかつたが、これと同時に又、その反動として、「よしツ俺の實力を見せてやるぞ」との反撥心が湧き起つて來たのも事實であつた。

九

　一學期の終りの時、親戚の者らは皆十二三番の位置であがつてゐたのに、私一人が、六十數名の中の三十七番といふ中位以下であつた爲に、私は又笑はれなければならなかつた。「次の學期には必ず諸君より上になつてやる」私は二學期中發勉強に勉強し暮した。果然二學期の試驗には、八十七點といふ得點をもつて第二番の高位を占めることが出來た。「さあ見ろ！」私は云ひ知れぬ欣びと誇りとを抱いて、門松の立ち並んだ、押し詰まつた暮の町を得意揚々と歩いて家に歸つて行つた。と、又人は「それはカンニングだ」と云ふのであつた。何處まで私は、迫害と侮辱とを受けなければならない人間に生れて來たのであらう。
　自分の眞實の力に對して、ほんたうにこれだけ報はれない

時ほど淋しいことはないであらう。然し父、翻へつてよく考へてみると、却つてそれが快よいことかも知れない。

「馬鹿野郎！俺の力を知らないのか」私は私を笑つた者を冷やかに嘲つて返した。さうして今度は再びもとの三十七番、また終尻に戻るべく怠け出したのであつた。

「他人の作つた學問を學ぶことは何でもないことだ。自分自身のものを創造することこそ、至難ではあるが、最も力強い最も必要なものである」私は斯う想ひ到つた時に、「俺はこれから何によつて身を立てようか、」と考へなければならなかつたのである。

　私は、父が臨終の際に母に云つたといふ言葉を思ひ出した。そして、少年時代には誰にでもよくありがちの、軍人にならうと希望した。私が軍人になることに對しては、母や祖母も不賛成ではなかつたやうであつたから、先づ私は、陸軍中央幼年學校の入學試驗を受けてみることにした。けれども、天は飽くまでも私を、普通な境遇――平凡な軍人――で終らせようとはしなかつたのである。即ち、性來子供にしては比較的強度の近視眼であつた私は、體格檢査に於て早、一も二もなくはねられしまひ、軍人としての望みも、遂に斯うして失つてしまつたのであつた。時に私は、開成中學の二年生であつた。

　同じクラスの學生たちは、下谷小學校の友達とは違つて、何處となく輝きをもつた者たちのみであつた。洋館などの建ち並んだ附近の町々は、子供の私の眼にも、非文明的な、穢い下谷の町よりは、ずつと廣くて、明るい文化の色を帶びてゐるのが見えたのである。事ごとに、希望を疎止され、光明を見失うて來た私は、復び、鬱々たる心を抱きながら、陽々と照り輝く大道を、毎日、下谷から神田へと通はなければならなかつたのである。

――（つゞく）――

各國の主婦氣質と臺所調べ

潤達なアメリカ婦人と實質的な臺所

日本女子大學教授 井上秀子

世界で一番高等教育を受けた婦人の多いのはアメリカです。殊に中產階級の婦人は殆ど高等教育を受けてをります。それは彼國では教育の機會均等が、實際的に行はれてゐるからで、例へばステートユニヴシテーなどは、月謝も無用（洲の租税で持つ）ですから、能力さへあれば、教育のチャンスは極めて自由な譯です。それにアメリカの女子大學では、一般的教育を主張すると一緒に、職業的教育を授けてをりますから、學校を出てから主婦になる前に、それ〲の方面に職業的經驗、實際的生活の經驗を持つ婦人が多い譯で、このことがアメリカの主婦に一つの特色をつけてをます。即ち彼國の主婦が常識に富んでゐるのは、結婚生活に入る前に、實生活に接近してゐたからで、買物でも接客でも、なすべきことを當然になし終せてゐるといふ感じがします。又科學的智識を持つてゐますから、それが日常生活に現れて、育兒にも臺所にも應用されてゐますから、その家庭生活は極めて合理的で、科學的で、經濟的に出來てゐます。

殊にアメリカ婦人の實行的である點は、他國の婦人の一歩を讓るところで、學理上で得た智識はどん〲實地に結びつけてゆくといふ偉さは、せつかくの智識も、頭の中だけで腐らせてしまふ日本婦人などとは比較になりません。

アメリカの主婦が實行的なのは、一方では彼女達の向上心を實證してゐるもので、アメリカ婦人程讀書好きであり、博學を愛し、見聞を尊ぶ有樣は他國では見ることが出來ないと思ひます。

その一つの理由は、社交界に立つても、ひけをとりたくないといふアメリカ婦人氣質からもきてゐるのです。

一口に言へば、アメリカの主婦は快活な事務家で、實際的で積極的な點が特長だと思ひます。それから缺點を言へば、しとやかな溫雅なところや、忍耐強いところの無いことでせう。實際アメリカの婦人には不快を忍ぶなどといふことは堪へられないことなのですが、その代りに非常に積極的で、不快なところや不滿な點はどん〳〵設備を變へてゆくといふ風です。又不自由や不潔を憎むことの烈しいアメリカ婦人だけに、彼女達の仕事はすべて規則正しく、建設的で、組織的だと思ひます。これに比べてドイツの主婦は、一般に家庭的で、消費節約が巧みで、よく働く點で優れてゐますが「寺と臺所と子供に注意せよ」といふのを生活の標語にしてゐるドイツの主婦に比べたなら、アメリカの主婦は、教育が普及してゐるだけに素養があり、高い大きな理想の實現に努めてゐる點で、一層人格が高められてゐると言へませう。

かういふ風に快活な事務家であつて、素養もあり、積極的なアメリカの主婦の頭と手で經營されてゐる臺所が進步的なのも當然なことで、最も便利に、經濟的に、衞生的に出來てゐるのには感心します。食物の上にも、器具機械の上にも、科學の應用が行屆いてゐて、最小の時間と勞力とをもつて最大の效果をあげようとしてゐるのが、アメリカの臺所の第一の特長だと思ひます。又なるべく人力を省かうとしてゐますから（アメリカは勞銀の高い國です）當然、機械を利用することが多くなり、盛んに改良を加へて、今日では電力の利用が普及してゐて、切るのも燒くのも煮るのも一切機械の利用です。全く世界中でアメリカの臺所程機械を使用してゐるところはありません。

又衞生的な點でも優れてゐます。私は今度の歐米旅行で殆ど世界の食物を食べてみましたが、アメリカでは一飯二十五錢の食物と、一飯五圓の食物とを比べてみても、價格の差は決して實質の差でないといふことは私共の最も注意を要することです。献立を複雜にして手數を加へてゐるといふ相異だけで、衞生上からみたら、二十五錢の食も五圓の食も健全食としての實質に變りがないといふことは、とりも直さずアメリカの臺所の健實さと、衞生的であることを表白するものでせう。これらは英國などでは到底見られぬことで、墮落しても衞生に惡いものは賣らないといふ點で、アメリカには感心しますが、その根抵の所以は臺所が衞生的で、主婦も下女も科學的知識に富んでゐるといふよりほかにはありますまい。

その次にアメリカの臺所の特長は、設備をよく整へて、場所をとらないことで、この點ではフランスもイギリスも遙かに及ばないと思ひます。それからアメリカの主婦の料理ぶりについて言つてみますと、フランスやイギリスでは、材料や

調味料を複雜にして、他から味を加へるといふ風ですが、アメリカ婦人の料理は單純だが品質をえらぶといふ風です。品質の優れたものをえらんで、その肉なり野菜なりの持前の味をひきたゝせてゐるのがよく、科學的に滋養分を失はぬやうに料理をして、單純ではあるが、學理的に不合理のないのはみあげたものだと思ひます。

要するところ、アメリカの主婦と臺所の特長は、彼國では教育の機會が均等されて、家政を研究する婦人が多いところから來てゐるのです。最近英國でも一つ出來ましたが、それまでは世界中で、大學で家政學をいれてゐるのはアメリカだけでしたから。家政學の普及とその價値が、最もよく發揮されてゐるのがアメリカ婦人の家庭生活だと言へます。

五千倍の物價騰貴と獨逸主婦の切り盛り

稻垣守克

獨逸家庭のお臺所！　或意味に於ては現在の獨逸の家庭にはお臺所がない。生活難の極度に達した場合を想像すれば此意味がやゝ明になる。中流階級の一ケ年の收入が一着の服を作るに不足する。靴の底を修繕するのにも月給の四分の一を拂はねばならぬ。衣服などは考へて居られぬ。ともかく腹に入れるものを買はねばならぬ。飢を凌ぐ爲めのみにも最も安いものを上手に買はねば生きて行かれぬ。――そう云ふところには家計もない、主婦の切り盛りもない。蟇口の底を拂いて馬鈴薯の腐りかけたのを漸く買ふ。それが今日の獨逸のお臺所だ。之を日本に持つて來て見れば今日の狀態に於て月收二十圓位で一家族食つて行かねばならぬことに相當する。幸にして家賃は月收の十分の一或は二十分の一で濟むことが多いが、殘りの十七八圓で一ケ月食ふと云ふことになるのである。

即ち物價の騰貴に對して收入が伴はないからである。物價騰貴の速度は戰後特に昨年より本年にかけて甚だしく、本年二月十日の調査に依れば、生活必要品の價格は戰爭前即ち一九一四年に比して平均五千百倍となつた。左に物價騰貴の狀態を示して見やう。

獨逸物價騰貴表

百二十匁の小賣値段（一マルク平時約五十錢）	一九一四年（單位マルク）	一九二二年十二月十日	一九二三年二月十日	一九一四年に對し何倍の騰貴か
腸詰	一、〇〇	九二〇、〇〇	四六〇〇、〇〇	四六〇〇
牛肉	〇、九〇	五六〇、〇〇	四四〇〇、〇〇	四八八九
豚肉	一、〇〇	九〇〇、〇〇	五二〇、〇〇	五二〇〇
豚脂	一、〇〇	一六〇〇、〇〇	七四〇〇、〇〇	七四〇〇
バタ	一、二〇	一七〇〇、〇〇	七四〇〇、〇〇	六一六七
人工牛酪	〇、五〇	一一〇〇、〇〇	五四〇〇、〇〇	一〇八〇〇
卵（一個）	〇、〇四	七八、〇〇	四二〇、〇〇	一〇五〇〇
コーヒー	一、二〇	二六〇〇、〇〇	一〇〇〇〇、〇〇	八三三三
馬鈴薯	〇、〇三	一〇、〇〇	四〇、〇〇	一三三三
扁豆	〇、三〇	三二〇、〇〇	九〇〇、〇〇	三〇〇〇
豌豆	〇、二五	三〇〇、〇〇	七五〇、〇	三〇〇〇
隱元豆	〇、二五	三〇〇、〇〇	七五〇、〇〇	三〇〇〇
米	〇、二五	三八〇、〇〇	九〇〇、〇〇	三六〇〇
燕麥粉	〇、二五	二五〇、〇〇	六〇〇、〇〇	二四〇〇
砂糖	〇、二〇	一〇〇、〇〇	三七五、〇〇	一八四五
パン（無切符）	〇、四五	五〇〇、〇〇	二二〇〇、〇〇	四八八九
パン（切符にて）		二八五、〇〇	六〇六、〇〇	一三四七
鹽	〇、二五	二七〇、〇〇	一一〇〇、〇〇	四四〇〇
石油（五合五勺）	〇、三〇	六〇〇、〇〇	二七〇〇、〇〇	九〇〇〇
靴墨（一箱）	〇、一〇	一二〇、〇〇	四〇〇、〇〇	四〇〇〇
石鹼（一個）	〇、一〇	一五〇、〇〇	一〇〇〇、〇〇	一〇〇〇〇
卷煙草（一本）	〇、〇二	一〇、〇〇	四〇、〇〇	二〇〇〇

今日の獨逸の家計を數字を以て現はすのは無意味である。毎日マルク相場が變動し、毎日物價が騰貴し、毎日收入が變ずる。物價は昨年末から今年二月の初旬まで一ケ月餘の間に六倍も騰貴した。今日は一ドルが三萬マルクだが明日は四萬二千マルクになる。又三萬五千マルクに下る。良人の收入に對する主婦の切盛り！　それもやはらかい春の風の吹く國に通用の話である。良人の全收入は腐つた馬鈴薯を買へば無くなつてしまふ。其馬鈴薯も運惡ければ中々手に這入らない。

どうして生きて行く？　腹一つぱい食べることは殆んどない。餓を我慢するのは通例のことゝなつた。それが昔一等國であつた獨逸民族の今日の普通の生活だ。收入だけではとても食へぬ。室内に在るものを賣る。今日は額にかゝつてゐる繪を、明日は椅子を、ピヤノや着物や指輪は既に三四年前に賣つてしまつた。それが獨逸の昔の中流上流の家庭の今日の有樣である。

普通の家庭は二人以上の子供を養ふことは殆んど不可能だ。娘も十五六になると働きに出る。そして兩親に食費を拂ふ。五つ六ツの小さい子供でさへも物の値段の話をする。靴は買へない。子供は瘦せて行く。赤子は死ぬ。子供を生まぬやうに努力する。

獨逸の女は皆職業婦人となつた。職業を持たぬ女は例外となつた。男子は戰爭に行つた。其代りに女子が働いた。女子

の能力が認められた。戰後は生活難益々激しくなつた爲め殆んどすべての女が男子と同樣の地位を占めて働くやうになつた。若い娘も勞働に出る。幸にして良緣を得て結婚しても男子に對して奴隷的地位には立たぬ。男子も女子の社會的地位に對して敬意を拂ふ。女子自身も何時離婚しても再び獨立して行く自信がある。

家族を一擔してゐる者は、如何にして收入を增さんかの他何物もない。家計、お臺所は主婦の慰安であつた時代は昔の夢だ。今日は家計は心配と恐れの連續である。家具を賣り拂つた時明日はどうして食はふかゞ問題だ。家事は從つて減少した。臺所に火をおこすことも消費だ。新しい衣服、シャツ類など思ひも寄らぬ。時々破れたるところを繕ふのでさへも糸を買はねばならぬ。少しばかりの糸が何百何千マルクする。

主婦の考へは儉約に始まり儉約に終る。料理も昔の料理は通用しなくなつた。バタ、牛乳、卵子、うどん粉、其他良い物を用ふることは不可能だ。そこで新しい料理の本が出來た。廢物利用の極端を示したもの、それが今日獨逸の主婦の料理本である。日本のお臺所などで捨てるものを獨逸の主婦に見せるなら爭つて貰つて行く。

ベルリンの市街を夕方近く鞄をかゝへていそ〳〵歩いてゐる女、少しの例外を除いては恐く娘であり主婦であり獨立婦人である。鞄を抱へてゐるのは職業よりの歸り途なることを示す。鞄を抱へずにのそ〳〵歩く女はあやしい女と疑はれる。六十歳になつた老母でさへ爲替相場の新しい暴落——即ち物價の暴騰——と同時に職を求めて家を出る。戰前までは工業主であつた數百萬の富豪の老人も今日は商店の帳面係りとして每朝八時から出勤する身となつた例は私の知人の間にさへもある。

戰前即ち一九一四年のプロレタリアの生活最少限度は一週間二十八マルク八〇フエンニツヒであつた。然るに本年の一月になつてから十五日までの間に於ける一週間の最少生活費

食費	九四六三マルク
家賃	三〇〇マルク
炭と瓦斯	三〇七〇マルク
衣服	一〇五三九マルク
其他	七〇一一マルク

は右合計三萬三百八十三マルクである。二月の十日に至つて此數字は七萬五千六百五十八マルクとなつた。右は夫婦と小學校生徒位の子供が二人ある家庭を基礎にした數字である。

こゝで一寸注意して置きたいことがある。此頃獨逸から來る品物が安い。又獨逸で生活すると安いからと云つて日本の留學生など多く獨逸へ行く、それは日本の金がマルクに對して相場がいゝ、即ちマルクが暴落してゐるから外國人にとつ

ては易いのである。例へば今述べた數字を見るに、戰前一週間の生活費は二十八マルク八十フエンニツヒと云ふのは當時日本の十四圓四十錢を意味してゐる。又今日七萬五千六百五十八マルクとは約當日日本の四圓に當る。即ち日本人にとつては、今日獨逸で暮すことは戰前に比し數倍安くなつたことになる。

食物市場で値を聞いては通り過ぎ、通り過ぎて遂に何物も買へないのが普通の主婦である。どしどし買ひ入れて行く女は不正成金の妻に非ざれば外國人の妻だ。今日はどこどこの屠殺場で安い肉を賣ると云ふ通知があると、數ケ月肉の顏を見たことのない家庭の主婦達が、前の晩から屠殺場の石の敷いてある廣場に寒い冬の夜を徹夜して待ツてゐる。市街から若い男が木の屑を車に乘せてベルリンに來る。主婦どもは平生から蓄へて置いた馬鈴薯の皮を袋にぶらさげて何百人となく此車の側に列をなす。石炭は高い。毎日高くなる。冬は室を暖められない。餘程工面のよい家でも精々一室を暖め得られるのみ。獨逸の冬は寒い。止むを得ず晩は早く寢床に這入る。一週間に一度肉が膳に上ればいゝ方である。其肉の大きさも母指位である。コーヒーは、何度も湯をさして味のないやうな薄いコーヒー。砂糖などは殆んど用ひられない。お茶は補助茶で、茶の葉ではなく他の木の葉が大部分だ。パンも馬鈴薯其他の混ぜ物が其大部分を占めパン粉は極く少量で食べすぎると胃腸を害する。此黑パンと馬鈴薯とが主食物だが戰前のやうな美味な黑パンは見られない。白パンを食べるのは醫者の證明書を持つ金持ちの病人か外國人か不正成金のみである。

昔の獨逸を顧て見やう獨逸の食物の特徴とも云ふべきものは腸詰、馬鈴薯、煮た果物、酸く漬けた胡瓜、豆類、鹽鯡である。炙り鵞肉も贅澤の部類に屬する獨逸の自慢の料理である。日曜日は特別に色々の料理をこしらへるので主婦は非常に忙しい。鹿、鴨の炙り料理、其他生菓子の料理に主婦が得意になる日である。月曜日は日曜の料理の殘りを利用する。水曜と土曜には多く洗濯女、掃除女が來る日なのでシチユーの如き安くて量のあるものを造る。金曜日にはお魚が出る。一週に二度肉を食べる水曜と土曜には主婦は朝七時から市場に出かけて一週間分の野菜などを買ひ込むのを普通とした。

獨逸の主婦は家庭的女である。社交界向きではない。家庭的にお客をするのは非常に好み、客に對して最も愛想のある主婦である。從つて知人の婦人同志五人十人集ツて色々話をしたり研究をしたりする。其れも主として家事上の事に關し互に智惠を交換し合ふ爲めである。之を「小さい輪」と名付けてゐる。馬鹿に倹約だ。衣服其の他日用品を出來るだけ自分で工夫する。日本人なら出來上ツたものを買ふところだが、獨逸主婦は布地を買ツてそれに細工する。特別に優れた趣味

皿を持つてゐる。小さい布の一片も捨てないで之に簡單な刺繍をして何かに役立たせる。廢物利用に對して天才だ。パンの固くなつたのも一寸挽いて粉にして料理に用ふ。室内の椅子、机其他の家具配置に特別の注意を拂ひ、每日のやうに家具の置きどころを變へ、室内の樣子を新しくして喜んでゐる。掃除が好きだ。室は恰も裝飾箱の如くとは其理想だ。誰やらが云ツた言葉だが日本人の清潔は理論的のみであつて科學的でないさうだ。して見ると獨逸の主婦の清潔觀は日本よりも多少科學的か。米國人が獨逸の主婦を見て笑ツて云ふところに依ると（一）好く縫ふ、（二）好く菓子を燒く（三）酸漬の野菜。此三つである。子供を愛することは甚だしい。五六人の子供を持つことが普通だつた。主婦は母親として子供の教育に力を入れた。又特に讀書を好む。此學問の國だけあツて婦人の勉學心が強い。芝居と音樂とを愛す。家庭に於てはピヤノは殆んど付き物である。主婦は子供に對して同時にピヤノの先生である。

自然を愛する。花は咲かずとも夏の日曜には家族一同バタパンに腸詰の肉を挾んで郊外に散歩する。日本の家族がぞろぞろ出かけると金がかゝるが、獨逸の倹約主婦の率ゐる一隊は電車賃と各人コーヒー一杯の費用で濟む。時にはそれさへ倹約する。庭があれば理想だが庭がなくともバルコニーには必ず花をつくる。窓にも花の鉢を必ず置く。又大概三階五階と云ふところに住んでゐるので疊一枚位の板の上に、土を載せてそれを臺所の窓の外につき出さしたものが、獨逸主婦の野菜畑だ。スープに入れるとてエゾネギ、オランダ芹、赤蕪などが空中高く作られてあるわけだ。まさか軍國主義的籠城の爲めでもないだらう。

英國のホームはフラットへ

北澤秀一

英國人のホームは字義通りにホームであつた。ホームと云ふ字はいろ／＼な意味に用ひられてゐるけれども、それが家庭と云ふ意味に用ひられる時、如何にも暖かさうな感じと、樂しさうに家族の團欒してゐる光景が見えて來るのである

が、彼等の古き家庭はたしかにその意味に於けるホームであつた。

ソサイテー・ピープルと呼ばれてゐる上流階級の家庭に就ては、私は全く知らない。然し所謂俸給生活者の家庭に就て私の知る限りでは——さう云つた處が二年や三年の短い滯在期間に、澤山の變つた家庭を知る事は出來ないけれど——その形式も內容も次第に變つて來つゝあるやうに見える。

今でも古風な家へ行つて見ると、其處の客間にはその家の歷史を語るやうな繪畫や家具が並べられ、這入つて見た丈でも家庭と云ふ感じがする。そして奧さんに會つて見ると如何にも落ちついてゐて家庭的である。然し是等の奧さんと話して見れば、一通りの事なら何でも話す事の出來る教養を持つてゐる。私達が此の階級の奧さん達に會つて見て驚くのは、如何にも其の話題が廣汎で趣味の豐富な事である。話題が廣汎で趣味の豐富な點から云ふと、あらゆる階級の婦人を通じて、それが古風であつても新しくても、富んでゐても貧しくても、唯その意見を異にするだけの相違で、よく語る點に於て何處の奧さんも一致する。勿論お喋舌りとさうでない人はあるけれど、政治談が出れば政治を語るし、文學談が出れば文學を語る。殊に音樂や運動に就て語らない奧さんは一人もないと云つて好い位である。少くとも私の知つてゐる限りでは。——もう一度斷つて置くが、私はかなり奧さん達を知つてゐる積りであるが、それにしても今其の名を擧げて數へ得るものは漸く十人內外であるから、僅かに十人位の奧さんを通じて、英國の奧さん達はなどゝ云ふ資格は絕對にないかも知れぬ。然し日本にだつて私のよく知つてゐる奧さん達はせいぜい十人か二十人位ゐしかないけれど、それでも凡その見當は付く。其の意味に於て英國の奧さんと云ふものも是等の少數の人々を通じて凡そ見當が付くやうな氣がするのである。若し私の知つてゐる奧さん達がよく話しても、其他の大部分の奧さん達が沈默家であるならば、私の觀察は全然誤つてゐるのであるが、英國に暫くゐた人に話して見ると、何れも其の觀察が一致する處を見れば、私の觀察が全然誤りでもないやうである。

私はロンドンにゐる間よくピカデイリーのライシアム・クラブへ招待されて行つた。之は職業婦人のみに依つて組織された英國一の——米國にそれよりも大きなのがなければ世界一の——婦人俱樂部で會員數千名を有し、其の中には科學に關するもの、藝術に關するもの、技術に關するものすべて十幾つかの部門があつて、それ等の仕事に携つてゐる女性が集つてゐる。中には未婚婦人もゐるが、多くは既婚婦人である。勿論此處へ集る女性は職業婦人であるから、普通の奧さん達と違ふと云へば違ふかも知れないが、それにしても會合の席上に於て、或は個人的に會つて見ても實によく話すので

私は驚いた。實際英國の奥さん達はよく話す。少くとも私の知つてゐる奥さんで、それから此のライシアム、クラブの會員で、話題を持たない爲めに手持無沙汰で困つたやうな奥さんは殆んど一人もなかつた。

それよりもう一つ、私達が英國人の家庭へ行つて愉快に感ずる事は、是等の奥さん達が何れも音樂のたしなみを持つて居ることである。あらゆる奥さんがと云ふ譯には行かないが、多少教育を受けた程度の奥さんならば、大抵ピアノを彈くか歌を歌ふ。だから晩餐に呼ばれて行つて其處に五六人集まれば、食事の濟んだあとで、奥さんがピアノを彈けば娘が歌つて彼等自ら樂み、客をもてなすのは決して珍らしい事ではない。それは必ずしも富んだ餘裕のある家庭に於てのみではなくて所謂安月給取の家庭に於ても常に見られる現象である。

こんな風に普通の奥さん達が何の話でも出來、音樂のたしなみまで持つてゐるのは、云ふまでもなく平生の教養が多いからである。それ等の教養を持つてゐるのは、ふだん本を讀んだり音樂の練習をする時間が多いからである。少くとも過去に於ては多かつたからである。けれど之よりは其の傾向が奥さん達の教養する時間が特に乏しくなると云ふばかりはなく、全體の家庭的傾向がだん／＼變つて行くのではないだらうか。そんな風潮を隨所に見る事が出來る。其の最も主なる原因は女中の拂底から來た。

殊にあの大戰以後女の仕事が增加し、外へ出て働く女が多くなつてから、普通の家庭で女中を得る事は非常に困難になつた。家庭の力から云へば——此處では最も數の多い中流の家庭に就て云ふのであるが——經濟的の壓迫に依つて女中を置く餘裕がなくなつたのと、女中の力から云へば女中奉公などをするよりもつと愉快な仕事があるので、多くの家庭では女中なしで暮さなければならなくなつた。だから私の知つてゐる家庭の大部分では、何れも女中なしに暮らしてゐる。勿論日本などゝは違つて家の構造と勝手場の設備がよく出來てゐるので、是等の奥さん達は自分の手に家事一切を引き受けて料理もすれば洗濯もする、自分で買物にも出懸ける、其の上子供があれば子供の世話までして、よくあんなに出來ると思ふほどやつてゐる。中にはその忙しい間に本を讀んでゐる奥さんもある。

然しこんな風に女中なしで暮さなければならなくなつたと云ふ事實は、如何に奥さん達がよくやつてゐるとは云へ、全體から見て、所謂家庭の生活樣式に變化を與へつゝある事は明かである。フラツト生活をする者の多くなつたのはそれだ。フラツトと云ふのは米國で云へばアツパートメント、日本で云へば貸間であるが、客間と寢室の外に湯殿も勝手場も附いてゐる點に於て普通の貸間とは違ふ。要するに女中を使ふ事が出來ないので、なるべく其の生活を簡易にする爲め、今ま

で獨立した一軒の家を持つてゐた家族がフラットへ這入る傾向がだんだん多くなり殊に子供でもない若い夫婦は殆ど悉くフラットを借りて其處に自分達の巣を造らうとする。

其の家庭がフラットにあらうが、何處にあらうが、其の內容に於ては全く變りがない譯であるけれど、生活樣式の變化がやがて、いろいろな意味に於て家庭の內容にも變化を與へるのは自然の結果である。たとひ自分達の家庭が大きな建築物の一部にあつた處でホームたる點に變りはないとしても、外見からの精神的影響を感じないとした處で、何となく假り住ひと云ふ感じがしないであらうか。それよりもフラット生活をしやうとする根本的精神が——出來得る限り生活を簡易にしようとする根本精神が、其の主婦をして何となく非家庭的たらしめる。私は今其の可否を論じようとするのではない、唯其の傾向を語らうとするばかりである。兎に角生活を簡易にすると云ふ事は、家庭の仕事から煩はされないやうにすると云ふ事で、ある程度まで手を省くと云ふ事は勿論有效であるが、それを越えるとやがて非家庭的になつて來る。さうして得た時間を教養の爲めに費す主婦もあるであらうが、さうばかりは行かない。フラットに住んで簡易な生活をしようとするのは、既に經濟的に缺陷を有するからで、さうして得た時間を利用して外へ出て働かねばならぬ主婦も次第に多くなつて來た。こんな風に主婦も亦主人と同じやうに外へ出て働くとすれば、其處に從來の家庭的氣分がだん／＼なくなつて行くのは云ふまでもない。

勿論之は都會に於ける傾向で、又都會に於てもフラット住ひをしてゐる家族と云ふものは全體の何割あるか正確には知らないけれど、それが新しい傾向であり、今後ます／＼增加しようとしつゝある事はたしかである。こんな風にして英國人の誇りであつたスヰート　ホームも次第に其の內容を變へ、其の主婦氣質もだん／＼變つて來るのではないだらうか。

家政に無關心な支那の主婦

太田宇之助

英國婦人には英國婦人の特色があり、獨逸の主婦には獨逸の主婦の特徴があり、米國の女には又米國女の特色があるやうだ。然らば支那の婦人にはどうした特色があるか。支那の女の主婦氣質といふのはどんなものかと問はれると一寸返答に困る。支那は今や政治的にも社會的にも全く改造の道程にあつて謂はゞ內亂狀態にある。であるから婦人にしても舊式の婦人と新しい時代の婦人との間にはそれこそ霄壤の差があつて一口には云へない。

今日の支那の主婦の大多數はやはりまだ舊式の支那婦人であつて因襲と陋習に捉はれたまゝである。支那では中流以上の家庭では大抵コックにアマを置いてゐて主婦が臺所に出て料理をしたり家の掃除をしたりすることは少ない。それといふのが支那では人が多く勞銀が低廉で中流の家庭でよく數人の召使を置くことが出來るのと一つは支那人は非常に見榮を張るもので雇人の如きも多きを誇りとするので主婦が自身で臺所事や雜用をするのを何だか恥辱のやうに考へてゐる。それだから料理人が勝手に市場へ買出しに行くのである。それに支那の料理人と來てはその他の使用人もさうであるがコンミッションを取る癖があつていつも買物の上前をはねやうとする。主婦の心掛けといへばまづこの上前をはねるのを監視する位いのものである。元來舊式の支那婦人は相當の家庭に育つてもあまり學問をさせられないで無學のものが多い。女子教育が頗る等閑に附せられて來たもので女はたゞ室內にあつて化粧や裁縫刺繡位いで過してゐればよいものとされて來たので事實一日の用事はそんなものに過ぎない。とても家政とか料理などを研究して見たりするではなく之に與かるやうなことは一體に少く交際なども殆んどないと云つてよい。それ程だから勿論計數の觀念に乏しく所謂內助の功などを望むことは六ケしい、支那婦人は家庭內にあつては一般に權力が強くて隨分と夫君を尻に敷き給ひ決して弱いものではない。それに例の家族主義に禍ひされて大家族で始終姑などとのいさかいがあり家庭內に引込んでばかりゐるから嫉妬心が強く

なり夫婦喧嘩が可なり猛烈に行はれることが甚だ多い。であるから支那の女は一般に主婦としては先づ不適當なものと謂つてよからう。尤も主婦としては支那にはわづらはしいばかりの年中行事の數々の營み、宗敎上の樣々の形式的の勤め等に可なり手數がかゝのと自身の粧身には極めて凝るものであるから衣服の手入れや髮や化粧には非常に時間を要するのである。下流の家庭の主婦はと云へば勿論自ら家事一切をやつてのけるのであるが支那の三流所となると家は形ばかりで掃除をする程のことはなく食事と云つても自分で市場へ材料を買ひに行くのではあるが何でも一食分を買つて來るので買ひだめはしない。例へば鹽一錢、醬油二錢、肉一片、野菜一把と云つた風に買物をして來るのである。いくら支那の貧民だつてそれ程までにしなければならないといふのではなくてつまり多少でも買溜めといふことが出來ないのでこんな小買ひをなすのは不經濟ではあるが、結局彼等にはこの方が經濟的になるので、それ程に彼等は世帶能力といふものが低いのだ。

前述の中流の家庭の主婦は大抵料理人や下婢を置いてゐるがそれでも自ら臺所事や家庭の瑣事に手を下してする者もある事は隨分あつても決して切盛りの上手といふことは出來ない。日本留學生出身の支那人で時々日本婦人を妻としてゐるのに遭ふことがある。そしてそれ等の家庭を見て之を他の支那の家庭に比して見ると確かに日本婦人の家庭の方が引きしまつてゐて能率が上つてゐるやうである。一般に支那人は日本婦人と結婚することを喜び又その家庭生活は幸福のやうである。これといふのが日本の婦人は支那婦人に比してドメスチックで家事に對して甲斐々々しくよく働くし假令料理人を抱へてゐても自ら進んで臺所に出て夫君の好む料理を研究して之を作ることに興味を有して居り、一家の經濟の切盛りといふやうなことも支那婦人に比して遙かに巧妙であるからである。私の知つてゐる支那人に嫁いでゐる一日本婦人は中流以上の家庭にあるのであるが好んで支那料理を研究して常に夫君の嗜好に適するものを作るし、よく家庭内を整頓してさつぱりした室内裝飾を施し自分の服裝は全然支那服を用ひてゐるがそれも自ら考案して高價なものを作らないで氣の利いた衣服を作り裝身具などに金を使はないと云つたやうな遣口で夫婦は極めて圓滿である。これなどもその一例で日本婦人が支那の家庭の主婦となる時は大いにその家庭の能率が上るやうである。

新敎育を受けた支那人婦人は右の舊タイプの婦人とは全く生活內容が異つてゐる。舊婦人は殆んど出せず交際せず引込でばかりゐるに反して新婦人は盛んに社交界にまで活動する。家庭の婦人としてはやはりどうかと思はれるがそれでも學校では賢母良妻主義の方針で割烹、裁縫、育兒などを組織的に敎へるのであるから隨つて舊式婦人が全くハウス、キー

ピングに無智であり冷淡であるに比して家政に興味を持ち又遙かに巧みである。支那でも近頃家計簿とか育兒日記帳と云つたものが若い主婦の間に盛んに用ゐられるやうになつて來たのは之を證するものだ。しかし支那の女子教育は漸く最近に盛んになつたもので支那全國の二億の婦人の數に比すれば殆んど九牛の一毛と謂ふべきで殊に今日家族の主婦となつてゐる數に至つては更に僅少であるがこの僅少の婦人が支那の先覺者として支那の家庭の改良に當らなければならない。實際支那人の生活改善は日本以上に急務であつて長い歴史によつて拔くべからざる程に深く家庭内に根ざしてゐる種々の陋習を改めんとするには容易な努力では出來ない。今日支那で最も活動してゐる團體は基督教女子青年會であつて之等の分子が中心になつて家庭日新會又は家庭改良運動會などを組織して盛んに生活改善の宣傳を行つてゐる。一昨年十二月かに上海に家庭日新會が展覽會を開いたがそれには家屋、家具の改良に關する陳列品、衛生に關する參考品、榮養に關する出品物、衣服改良に關する參考品、其他育兒、家庭教育、家庭手工藝、家庭豫算統計及び簿記に關するもの、家庭各種儀式、結婚式葬儀の改良說明等十門に分つて具體的の說明を施してゐた。又別に上海女子基督青年會の社會服務研究會といふのが同時に家庭改良運動展覽會を開き連日名士を聘して家庭改良の演說會を開き展覽會場は（一）は小兒の健康及び幸福に關するものとし婦人及び子供の改良服などもこの部に陳列し（二）は住宅及び家庭の裝飾に關するもので家庭の新娛樂品などもこの部に陳列し（三）は家政及び器具に關するもので新案の模範的臺所の模型などが出品された。それから別室では家庭改良に關する書物を蒐集して參考に陳列し餘興には女學生の芝居があつて巧に家庭の幸福を數へる筋のものを演じた。その他處々で婦人の節約に關する運動が行はれた。丁度日本の婦人界でも一時節約が流行したやうなものであるが支那婦人の節約運動は主として婦人の飾物を節約又は廢止するを主とするものである。御承知の如く支那婦人は衣服の外に耳輪、指輪その他の身廻りの裝飾品に金をかけることが非常なものでその弊害が最も甚だしいので斯くは最先にこの節約運動が起るのである。

　支那では何分にも勞銀が安くて容易に料理人下婢等を充分に置き得るし又食物の材料が極めて低廉であるから家庭の主婦としても切りつめた生活をする處を痛切に感じないから知らず知らず家政に對して放漫となり雇人任せになり勝ちである。であるから支那の主婦が本當に目醒めて眞劍に家政の切盛をやるやうになるためには女子教育と相俟つて支那に於ける生活が今日のやうなのんきなものでなくもつとせち辛く苦しくならなければならぬと思ふ。

（終り）

お月さまとピエローの歌が思ひ出させるフランスのクイジン

武林文子

まんまるな月が臺所の東の窓にあか〳〵と上るのをみつけて、私は涼爐の火にのせた金盥の湯の中の皿を、先きに布のついた皿洗ひの棒でくる〳〵洗ひながら、

「Au cl ir de l. lu e——!」

とよく歌つた、フランスの子供の誰もが好いてよく歌ふといふこのお月さまとピエローの唄を!

「Au clair de la lune」

は何よりもよく私に、小一年住んだ巴里の、ポール、ソーニエールのアパルトの五階の臺所を思ひ出させる。

子守よりもお臺所の好きな私は、大抵晩餐の後の洗ものも自分で臺所に出て行つて働いた、そんな時にブルターニュ產の女中のジョセフインは、まだ裾の長いキヤツシ・マイヨーを着せた赤坊のイヴオンヌを抱いて、私の洗ものをするのをみながら、

「Au clair de la lune」

Au clair de la lune
  Mon ami Pierrot,
Prête moi ta p'ume
  Pour ecrire un mot!
Ma chandelle est morte,
  Ie n'ai plus de feu:
Ouvre moi ta porte
  Pour l'a mour de Dieu!
Au clair de la lune
  Pierrot répondit:
"Je n'ai pas de plume,
  Je suis dans mon lit;
Va chez la voisine,
  Je crois qu' elle y est,
Car dan la cuisine
  On bat le briquet.

とよく合唱をしたものだ。

侯爵夫人である筈のない私、外交家夫人である筈のない私、たゞもう變り者の半哲學者の氣まぐれ者の半文士さんに、ふと都合よくくつついて行つただけの私は、もとより無爲の太夫數盛の妻君で、今日は三越明日は帝劇といふはけに、巴里のマガザンやテヤートルを贅澤にプロメナードして暮せる身分では無論なかつた、

「私達のは洋行でなくて生活ね、巴里に住めば八百屋の小僧だつて朝來ると、ボンジユー、マダムつて云ふわ。」

女運が惡くて、かういふ無學な薄べらなことを云ふ女を妻君に持つた、ボルシエキキの好きな半哲學者は

「へえ、洋行でなくて生活かね、フフン。」とくすぐつたさうに笑つた。

それで私は洋行はまるで話せない、けれども生活のことならこれでちつとはお茶が濁せる。巴里のアパルトマン生活は法のやすい今日でも小人數でまづ一ヶ月三千法は要る、着道樂で喰道樂でその上に遊び好きなフランス人殊に巴里人は、一方でこまかく算盤を彈きながら、出來るだけ美しい着物を着て、うまいものを喰べて、その上日曜や祭日にはシネマやバレーや芝居や、それから郊外の散策などそれ相當におもひ〳〵の場所へ、家族こぞつて出かけて行く。巴里のプチイ、ブルジヨアのする生活をエトランゼーがそのまゝするのには、どうしても五千法なくては遣つて行けない。

そこで、私達の遣つてきたアパルト生活が、必ず巴里のプチイ、ブルジヨアの生活振であると一口には云はれないかもしれないけれど、でもそれはエトランゼーとしてはかなりその國の人になりすました生活ぶりであつた。私達は風呂とエレベーターとそれから冬になると暖房の來る家具附きの五階の六室を一月九百法で借りてゐた、もしフランスの人が家具なしでさういふ家を借りるのだつたら年に二千法も取られないで借りられるさうである。フランスのお臺所ときかれると、私は結局そのアパルトで暮した一年足らずの生活について書くよりほかにない。

巴里のアパルトマンのお臺所は、恰度巴里人それ自身のやうに、小じんまりと氣が利いて出來てゐる、エプロンをかけて臺所へ出さへすれば、料理が何んでも手輕に順序よく出來るやうな仕組に、殆んどどこの家でも大なり小なり略似通つたかたちに造られてゐる、調法で便利で手輕な臺所として、私には巴里のアパルトの臺所が一番氣に要つてゐる。

それから毎日の食事の取り方に就いても、フランス人の遣り方は衛生的にも經濟的にもよく考へられたものゝやうである。

フランス人の三食はどこの家でもまづ朝のプチイ、デジヤネーから始まつた。

私達は每朝、臺所で女中の挽くコーヒーの豆の音と、それと一緒にほつて來る香ばしいかほりで眼をさました、やがて寢床へその挽きたてのうまいコーヒーと一緒にパンとバタとが運ばれる、それが每朝のプチイ、デヂヤネーであつた、大概の人は皆寢衣のまゝでコーヒーを呑んでパンを嚙つた。每朝味噌汁に玉子やお香んで暖かい御飯をたらなく喰べ馴れた日本人には、このボープルな朝食には初めのうち尠からず飽き足りなく思はせる、けれども馴れるとこれも懷こいフランス人の主婦の拔け目のない氣の利かせかたの一つであつた。私達はひもじい腹を抱へて、大抵どこの家でも間違ひなく用意される十二時のデヂヤネーのテーブルにむかつてみて、始めてそれが思ひ知られた。

晝食には、その空腹を一ぱいにして猶充分なほど、どこの家でも御馳走がたつぷりテーブルに運ばれて、それは數よりも分量に於て充實したもので、お晝は大抵オルドーブルに、鳥や肉や魚の料理、それからマカロニ或は野菜に、食後のチーズや果物や菓子といつたやうな風に、家庭はもとよりレストランでも餘り澤山に取つて食べる人は少なかつた、その代りそれらは澤山に特に家庭では味に充分注意を拂つた、日本だと料理屋の物は何んでも御馳走だとされてゐるがフランスではプテイ、ブルジョアの家庭の、料理に心がけのある主婦のつくつたものほどおいしい御馳走を、レストランでは一寸喰べることは出來ないものに考へられてゐる、從つてさうした主婦たちは自分たちのつくる家庭料理にめい〳〵相當自信を持つて、日曜の散策に外へ出てもあんまり好んでレストランの食事をやたらにしたがらない。

晩餐は大抵どこの家でも極簡單にすまされる、晩餐には極つてポタージかコンソメのスープがつく、それから柔かな玉子料理や小鳥、コキール ゼリーやのやうなものゝ野菜の柔かに煮たものゝ、すべて一日の働きを終つて安息のなかに靜かに身を置く人のために、軟かな消化のいゝ食物が、適度に加減して運ばれてゐる。いつの時代にどういふフランスの主婦がかういふ獻立の習慣を作つたものか知らないけれど、その食事の進め方はほんとうに要點を得た、如何にも無駄のない小氣の利いたものだと感心させられる。

よいパンとよいバタとよいチーズと、それから他に數のない上等の葡萄と、その葡萄からしぼられる結構なブドー酒を殆んど水同樣に臺所で用はれるフランスの主婦は、料理人として世界一の幸福者であつた、彼女等は當然な上等の材料で、小器用にそれから巧く無駄をはぶいて臺所を切りまわした、そして無暗と一流のレストランへ高い料理などは喰べに出掛けない代りに、臺所をきりつめた經濟から出來るだけア ラ・モードの着物や帽子をふやして行つた。女中なども大概の家は雇ひきりのボンヌを置かないで、時間制度のファ

ンム・ド・メナージを使つた。

ファンム・ド・メナージは日本のいはゆる日雇ひ女で、たゞそれが時間制度になつてゐた、一時間二法（なかには一法や一法半で雇はれるのもあつた）で、雇はれた時間內はずいぶんこまめによく働く、その代り時間が來ると遣りかけの用事でもさつさと投り出して置いて行つてしまふ、かういふ女は二時間或は三時間くらいづゝ一日に三四軒も働いて廻つた大抵は亭主や子供持ちで、朝早く自分の家の用をすませてしまふと、それからお得意さまを順々に働いて廻つて、亭主の歸る時間が來ると又大急ぎで家へ歸つて、それからこんどは自分の家の食事の支度をする。さういふ女はどうしてなか〱眞劍だつた、まるで豪い政治家のやうに一分一秒を惜しむで身を働かした。そこで彼女等は經濟的な家庭の主婦には女中以上に調法がられた、拔目のない主婦になると大變にうまく使つて一法半のファンム・ド・メナージを四法にも有功に追い使つた、そして大抵二時間くらいでメナージからクイジンから一日の家の用事をすつかり片附けさせた。

フランスの家庭の大抵の女主人は日本の家庭の主婦達のやうに、朝から晩まで他愛のない家の用事に追ひ廻されて、一日中動き通しに動いてゐるなどゝいふのは餘りなかつた、よほど子供の多い家でゞもない限りは、午後二時頃までには一切の用をすまして自分の身體になつた、そして子供を公園につれて行くか、裁縫をするか、讀書をするか、お友達の家を訪問に出掛けるか、でなければ主婦達の誰もが好きなマガザンへ買物かた〲プロメナードに出掛けて行くか、とにかく自分自らの時間といふものを作つた。

ボンヌと呼ばれる女中は大抵一月百法から百四五十法の月給で雇はれた、彼女達も朝八時から夜八時まで働くと「Bone nuit Madame.」とさつさと自分の與へられた室へ引揚げて行つて了ふ、それから日曜と祭日の午後は定つてプロメナードに放して遣ること、女中によつては室代と一緒に葡萄酒代を拂つて遣らねばならないことも、主婦は勘定に入れて置かなければならなかつた、彼女達は食事の時葡萄酒の代りに水を呑まされた場合には、別に葡萄酒代を主婦に請求する權利を持つてゐるとみえる。私は曾てその eau を l'eau と聞き違へて、お風呂代だとばかり思つて、どこまでも日本人だと大笑ひされた。

分秒を惜しむでよく働くファンム・ド・メナージにくらべて、田舍から掘り出して來たボンヌはお話にならない程役にたゝなかつた、そんなのにぶつかつたら、便利で氣の利いた巴里の臺所もだいなしだつた。主婦は一月女中のした臺所の後始末に追ひ廻されてゐなければならない、そこで巴里の奧さん達は餘り彼女等を歡迎しない。

私の家にブルターニュから來てゐたジョセフインも御多分

に洩れない一人だつた。彼女は毎日一リーブル宛買ふバタを半分以上一人でなめた。彼女が來てから臺所のお鍋や金物類はちつとも光らなくなつた。コーヒー茶碗やお皿はみる〳〵皆片輪者になつて行つた。かういふ場合にフランス人の家庭だつたらすぐに主婦がボンヌに辨償を命じる。

「ジョセフイン！あのね、茶碗やお皿はこわしても仕方がないけど―bébé だけはどうかこわさないやうにしておくれ。茶碗やお皿はこわしてもすぐ買へるけど―bébé はこわれるともう一寸は買へないからね」

私はよく、しやれでなく本氣で、イヴオンヌを抱かせてある彼女にかう云つてきかせた。

お月さまとピエローの歌をうたふと、私はいまでも巴里のポール、ソーニエールのアパルトの臺所と一緒に、あの鬼がら燒とあだ名を附けた、バタ肥りのジョセフインの顏が眼に浮ぶ。

臺所から解放された勞農的主婦氣質

布施勝治

一

主婦は臺所の責任者ではあるが、しかし臺所はなるべく料理人や女中に任せて、干渉をしない。臺所へは顏も出さないやうにする。何事も大マカに見て、細かいことにはアレこれと口ばしを入れない……と云ふのがロシアー無論舊いロシアーの主婦氣質であつた。

大概中流以上の家庭では女中は臺所係り（即ちコツク）と座敷係り、（子供があれば子守）とに區別され各々その分擔をきめて置く。各自の分擔がハツキリきめてあるために、コツクが病氣しても女中は代つて料理をしてやらうとしない。客でもあつて、女中が目の廻る程忙がつても、子守は決して女中に手傳つてやらうとしない……といつたやうな不便もあるが、その代り、各自自分の分擔に對しては責任觀念が深く、又それ〴〵自分の專門については相當經驗をもつて居る。中々熟練したものである。從つて他の干渉を厭が

り、萬事獨斷でやらうとするのも已むを得ない。殊に料理係りの女中は主婦が臺所へ入つて來て、料理の指圖などするのを甚だしく嫌ふ。子守に至つては一旦自分が引きうけた子は母親の手に渡すことさへ好まない。母乳で育てる子は仕方がないが、さもない子は子守一人で全然その子を獨占してしまふ。あまり屢々母親に渡すと自然その子が母親の方へばかり行きたかつて、子守によくなづかぬ。子守になづいてくれぬと守がしにくゝなる。それだからどこまでもその子を獨占して、誰の手にも渡すまいとする。日本あたりの子守がなるべく子守を母親にまかさうとするとは同日の談でない。

二

一方主婦——奥方の方でも臺所の雜事一切を女中やコックに任せきりにして下の方へはなるべく出ない。一々細いことに干渉をすると輕く見られる。下品に見られる。上と下とをハッキリ區別をたてゝこそ、その家の主婦の品位が認められる。それに反して無暗に臺所へ出て、自ら庖丁をとつたり、煮炊きする主婦は、しみつたれだとか、下品だとか云はれてケナしつけられる。

勿論雇人に萬事を任せきりにすれば、コックや女中は買物のうはまへをはねるであらう。八百屋や牛肉屋と結託して儲けるやうなこともあらう。臺所を治外法權地と心得て勝手なことをする。時には主人の材料で知人を招いて酒宴を催すことなどさへある。料理女中で口をもとめる時に、臺所を一切任せきりにしてくれるか何うかを條件とするものがあるのもそこである。しかし左樣な細いことは大概大目に見てやる、知つても知らぬ振りする、些々たる事には口ばしを入れない……のが主婦としての德であるとする。而してかういふ主婦にはおのづから女中やコックが悅服して忠勤を勵む。長くつとめて他へ鞍替をしない。結局買物のうはまへをはねるぐらゐの損は埋められる。……といふあたりが少くとも革命前のブルジョア家庭に於ける主婦氣質の最も廣く共通した特徴であつた。

三

中流以上の家庭の食事は品數は少ないが、各皿の分量が多く、又食事の度數が中々多い。普通朝、晝、夕食の三度の正餐の外に（但し朝食は多く茶、パン、卵位で簡單にすませる）晝食と夕食との間と、就眠前との二度に中食をする。三度の正餐は云ふまでもないが中食も隨分ゆつくり長くかゝつてやる。

中食にはお茶を出す。但しお茶を出すと云はずに「サモワールをたてる」と云ふ。それはロシアではお茶を出すに、必らずサモワールを用ひるからである。

あの銀色した美しい形のサモワール！ジー〳〵音を鳴らせ、湯氣をたてゝたぎるサモワール！を卓上に置いて、その周圍に主客が集まり、ザクースカとパン、もしくはお菓子や果物をたべながら、四方山の話を始める。いかにも賑々しい。いつとはなしにゆつたりした氣分になる。正餐よりもなんだか落着いた心持ちになる。正餐だと皿數に限りがある。どんなに御馳走が澤山であつても、それからそれと皿をかへて行く。何んだか忙しい。メニウーがおしまひになると、いやがおうでも一先づ食卓を離れなければならぬ。然るにサモワールを圍んでの中食は茶を何杯と限る譯でなし、皿をそれからそれとかへる譯でなし、話のつきるまでゆつくり茶話が出來る。サモワールのお湯がさめるまで長談義が續けられる。

サモワールからの茶の出し方は、一寸見たところ、何でもないやうだが、そこには矢張り若干のコツがある。下手に出しては折角のお茶もまづい。お茶の出しやうで、その家の主婦の技倆がうかがはれる。

大概サモワールには同じ質の金屬でこしらへた小さい「茶出し」がついて居る。そして先づこの「茶出し」に茶を入れ、お湯をさして、サモワールの煙筒の上に置く。すると煙筒から出る熱氣でいゝ具合に濃い茶が出來る。この濃い茶をコップに少しづゝ入れ、それにサモワールからの熱湯をつぎたし、お客の好みによつて濃淡を加減する。

日本あたりでは、濃からうが淡からうが「茶出し」から出た儘の茶を、そのまゝでのむか、牛乳をさして加減するが、お湯をつぎたすことをしない。しかし元來紅茶は牛乳を入れては味を失つて了ふ。またあまり濃い茶は味がない。ロシア人は茶にレモンを入れることを好むが、めつたに牛乳を入れない。恐らくは紅茶をのむにロシア人程上手な國民は他になからう。

ロシア人は概してコップで茶をのむ。そのコップも八角や十角の角形を好み、縁が厚く、且つその切り口の眞つ平らなのを珍重する。かうしたコップになみ〳〵とお茶を注ぐ。日本では八分目もしくは六分目位しかつがないのが常であるが、ロシアでは一ツぱいにつがねばならぬ。さうでないと少しづゝつがれた人は貧乏する？と云ふ迷信がある。又更らに甚だしい御幣かつぎになると二杯目のお茶をつぐ時、必らず一杯目の殘りをすてずに、その上へつぎたす。それをすてゝしまふと金が儲からぬ？といふものがある。それ故ロシア人のお客を接待して二杯目のお茶を出す時は、新らしくつぎかへませうか、それともこの上につぎたしませうか、と尋ねた方が間違はない。

四

かくしてサモワールはロシア人の家庭には缺くべからざる什器の一つで、ロシア人は如何に貧乏してもサモワール丈けは手ばなさぬ。生命の次ぎの大切な家財として居る。あの家にはサモワールがないと云ふことはその家が極度に貧乏だと云ふことを意味する。從つて又サモワールとロシア人の主婦とは到底はなすことが出來ぬ。如何に無愛想な主婦でもこのサモワールをもつてすれば、相當にその客を懇々しくもてなすことが出來る。愛想のよい主婦に至つては、格別の御馳走をせずとも、サモワールだけで、十分お客を歡待し、十分の滿足を與へる。殊に食事の合ひ間のお客を接待するに、サモワール程重寶なものはあるまい。

臺所には顏も出さず、料理庖丁を手にしたことがなく、それを又誇りとする貴族式主婦ですら、卓上のサモワールからは、多く自ら茶をついでお客に一々すゝめる。これが又お客に對する何よりの好意の表示であつて、客からしても誠に氣持のよいものである。

臺所へは顏を出さないなど、高くとまつて居る奧方でもサモワールを傍に置いて客をもてなす主婦となつては、何だか急にやさしくなり、くだけてしまふ。何となく人をひきつけ、ゆつたりとした氣分を持たせる、なつかしいやうな感じを與へる……茶話の話題はどこでも同じことで、先づその日の新聞に表はれた出來事から始まる。それがつきると多くは話頭を藝術問題に轉ずる。上品ぶる主婦は特にこゝに力を用ひる。芝居、役者、創作等の批判をする。如何にも藝術に通じて居り、藝術眼を以て居るかのやうにしやべりたてる。藝術の議論に花が咲いて、興に乘するとやがて主婦自ら何か特意な藝を演ずる。令孃のある家庭では令孃をしてやらせる。獨唱、彈奏、舞踊等何んでも遠慮なくやる。その邊は中々ハキ／＼したもので、はにかんだりひつ込思案など決してしない。客がもとめれば直ちにそれに應じ、得意なところをデモンストレートする。彼等の多くは何か一つぐらい藝をもつて居る。それだけ彼等との交際はにぎやかで面白い。

三

元來ロシアの富豪貴族ほど非打算的でケタ外れな暮らしをしたものはなからう。同じ富豪でも米國式の成金とは全く趣きが違つてどこまでも大盡風を吹かせる。客を招いて晩餐會なり、園遊會なりを催うすにしても、始めから豫算などをたてゝ、勘定づくで行くやうなケチなことはしない。思ひ切つて華美に、思ひ切つて大袈裟なもてなしで、客をアッと云はせる。催うしがすんだあとで、いくらかゝつたか。それしきですむぐらいならも少しはり込んでもよかつたに…と云つたやうな調子で、どこまでも打算を超越し、ケタ外れであつた。ユスポフ公家や、シュワーロフ伯家あたりではその臺所

はまるで一流のホテルの料理室そのまゝの觀があつたとさへ云はれて居る。

小村壽太郎がロシアで公使をして居た頃、とかくヒータースバーグの交際社會にもてないので、ある時本省から一年分の俸給を前借して思ひ切り大袈裟な晩餐會を催うふし、それで漸やく日本公使の存在を認めさせたと云ふ話がある。それ程ロシアー殊にロシアーの上流交際社會は贅澤、否な豪奢を極めたもので、しかもその大部分は主婦ーー何々公爵夫人とか伯爵夫人など云ふ連中の虚榮氣質から出たものであつた。

六

しかし顧へばそれはもう六七年前の昔の夢となつた。わが家の臺所を料理人や女中に任せ切つて大盡風を吹かせた貴族富豪の主婦ーー奥方達は今や、臺所どころか所謂天下の政治をさへあげて、おさんどんに任さねばならぬことになつた。

ロシアの革命も三月革命のやうなナマぬるい所で止まつたら大したこともなくてすんだらうが、十月にはレーニン等の巨腕が動き出して社會革命が起つた。そして社會一般の舊組織、舊制度が根柢からデングリかへされたばかりでなく、革命の波動は同時に各自の家庭までおしよせて來た。

昨日まで多勢の女中やコツクを使ひ廻して居たのが、今日は自ら臺所へ出て立ち働かねばならぬ。平常から臺所や、その他の雜事に慣れて居たら、かうしたハメに陷つても、それ程苦痛を感ぜずにすむところであつたらう。しかるに例の放任主義、任せ切り主義の舊い主婦氣質が、今日の境遇の激變に禍して、一層の悽慘味を加へた。

ピアノを彈じたり、繡をかくことしか知らなかつた彼等の纖手には料理庖丁も輕くはない。それだけならまだしもであるが、戰爭と革命にはいつでもつきものゝ缺乏、饑饉、流行病等の災厄がひききりなしに起つて來る。生活難とは何の意味かを知らなかつた彼等の頭上にあらゆる生活難が一度にふりかゝつて來た。極端な非打算的、ケタ外れの豪奢生活から萬事缺乏づくしの乞食生活に急變した。衣類や什器などは新らしいものを新調どころか、先祖傳來の家財は頻々として相つぐ家宅捜索の度每に沒收される。漸やく沒收を免れた殘品をつゞくりあはせて何うにかかうにかその日の生計をやりくりする。共産制度がしかれて食料品が一切切符でわりあてることになるや、昔のブルヂョア階級にはジノキエフの所謂「霞を嗅ぐだけのパン」しか配給されぬ。それではとても糊口が出來ぬから何とかして、手をかへ品をかへて、何とかしてか、腹につめるものをかき集めねばならぬ。

ピアノ、一臺を麥粉一布度とかへる。先祖傳來の古畫と寶一依とひきかへる。その中にもうひきかへるものがなくなる。飢ゑたるものは食を選ばずで、とても人間の口へは入るまい

と思はれるやうな粗末な材料でもかまつて居られぬ。しかしそうした食料は原形のまゝでは人間の咽喉を通らぬ。

そこで、何でもかでもひき臼にかけて粉にする。なる程粉にしてくへば大概のものは咽喉に入る。卅哀れな主婦連の苦辛は筆紙に盡されぬどころでない。かうなつては臺所へは顔も出さず、何事も任せきりにする。買物のうはまへをはねる位は見て見ぬふりすると云ふふるい主婦氣質は藥にしたい程も出されない。全力をあげて臺所のやりくりに傾倒せねばならぬ。

七

この時に當つて新らしい支配階級、即ち勞働者や農民の主婦等は何うして居るか。レーニンは革命の劈頭に「おさんどんに天下の政治を教へよ」てふ標語を出した。云ふまでもなく社會革命は男子の力だけでは徹底せぬ。女子の協力も必要だ。革命を臺所にも及ぼせ!と高唱したものである。

近頃レーニンの代理として勞農政府の首相の椅子を占めて居るカーメネフの夫人はトロツキーの妹で、私が一九二〇年の夏モスクワで夫人を訪うた頃は陸軍省の政治宣傳部の一課長であつたが、私はその日一時間あまり「女子解放の徹底論」を聞かされた。即ち「ブルジョア國の男女同權はたゞ法律の上で女子の政治的權利を認めるだけに止まるが、それだけでは結局女子は矢張り男子の下風に置かれる。男女の同權は家庭より始めねばならぬ。先づ女子を臺所、子守、洗濯から解放せねばならぬ。即ち共産食堂、育兒院、洗濯所等を幾多開設して所謂共産的家計法を實施する。この設備が完備すると、たとへば三十の家族が一ツの共産團體を作つたとすると、三十人の主婦の中の一人が食堂係り、一人が子守係り、一人が洗濯係りといふやうにわりあてる。するとあとの二十六七人は、他のもつと生産的な公益事業に、男子と同樣、家事を顧みることなしに、朝早くから晩おそくまで、從事することが出來る。自然女子は男子と、實際社會上同等の地位に進むことが出來る。…のみならず食事も、育兒も、洗濯も、大規模で合同し、且つ夫々熟練したコック、子守、洗濯專門家の手でやることだから、おのづから經費がやすくなり、好い成績が得られる……云々」といふのであつた。

八

レーニンの高唱した「おさんどんに天下の政治を教へよ」てふ標語も、カーメネフ夫人等の提唱した共産的家計法や家庭に於ける男女同權論も、何かにつけ實行主義のボリシエギキーは之れを耳に聞いたり、口に唱へたばかりではなく、事實に於て勇敢に實行を試みた。驚くべき大努力をこの方面に注いだ。戰爭と革命で國力が疲弊の極度に達した折柄にもかゝわらず、あきめくら征伐と稱してはおとなの教育を獎勵否

な、強制する。各地に種々の講演會を開く、産兒院や育兒院を設ける。少くとも革命當初の三年間は素晴らしい勢で猛進した。

かくして政治と云ふものには寸毫の理解も持たなかつた「おさんどん」等は忽に政治を教へられる。たゞに書物の上のみでなく、實地について教へられる。否な、もう已に自らその局に當らねばならぬ。サウエートの選擧は誰がするか。いふまでもなくブルジョア以外の國民は擧つて選擧權をもつて居る勞働者や農民の妻女も有權者として選擧に參與せねばならぬ。男子の多くが戰場やその他の公務方面へ出て留守にして居る時は、選擧場はいつでも女子の方が却つて男子より頭數が多い。「おさんどん」等の政治的責任は決して輕くない。その夫や兄弟にして勞働を厭やがつたり、徴兵を忌避したりするものがある場合は、その夫なり、兄弟なりに拳骨をはめろ……「臺所からの解放」どころか、亭主や兄弟のお目付役に當らねばならぬと云ふやうに教へられ、まるで變つた新らしい主婦質氣が革命によつて生れて來た。

舊いブルジョア主婦が贅澤や虚榮からして臺所を振り放したのとは趣きが違つて、勞農の主婦は自ら男子と同樣國家の政治や經濟の局に當らんがために「臺所から解放」を受けやうと云ふことになつて來た。

九

しかし何事もいよ／＼やつて見ると中々思ふ通りには運ばれぬ。流石のボリシエヸキーも革命の三年目頃には少々疲れて來た。それに一九二〇年ポーランドで赤軍が敗北して以來、ボリシエヸキーは「世界革命」の夢からさめてガツカリ氣拔がしたやうに士氣が沮喪した。否な士氣が衰へたと云ふよりは、今まではあまりにユートピアに走り過ぎた。今後はどこまでも現實主義で行かなければならぬと云ふことを深くさとつた。そこで國防と經濟復興のために全力を傾倒したために教育や社會的設備の方面に對する經費は極度に削られる。その中に一九二一年から一九二二年にかけての大饑饉が始まる。愈々行詰つてつひに新經濟政策なるものが實施される。商賣が自由になる。金の世の中が一部分復活する　それにつれてネプマンと稱する新らしいブルヂョアが發生する。而して彼等の妻女はやがて昔のブルジョアを氣取り金力にまかせて再びもとの貴族式主婦　質を發揮する。女中やコツクを雇ひ入れて臺所その他つまらぬ家事には手をふれまいとする。

今度もこの勢ひで進むとすればロシア人の家庭にはネプマンの新「奥樣」連の金の力で臺所を人任せしにして顧みないと云ふ舊いブルヂョア的主婦氣質と、勞働者や農民の「おかみ」達のその奉ずる主義の信條として、臺所から解放を受けやうとする新らしい勞農的主婦氣質とがます／＼面白い對照をなしてゆくことであらう。

文化生活より觀たる育兒法及兒童衞生

醫學士　岡田道一

『三千世界に子を持つた親の心は皆一つ』と昔政岡が愁嘆場でくどき泣いたがその眞情のみは今に至る迄少しも變りないが文化の程度は日進月歩の今日餘程、昔と今とはちがふものである。そこでそれ等の文明のお蔭を受けてどの位子どもに對する衞生法が進歩したかを考へて見るに主婦たるものの頭が左迄變らぬ以上大して昔よりもよい方に異つたといふの實際の證據は見えぬ。それもその筈まだ〳〵新らしい文化生活に適應するやうな智識を持つた所謂女學校出の母親ばかりの時代になるにはまだ少しの間があり矢張女大學流に形式一遍に育つて來た女性が間違つた育兒、誤つた兒童衞生を行つて平氣で居る現在である。以下一二の氣の附いた點だけを拾つて注意するに止めたい。斯くの如き事は知つてる人から見ればまことに別りきつた事であるが、まだ〳〵こんな事柄でもひろく宣傳が足りぬため實行をされてない事はざらにあるので、口を酸つぱくして幾度でもお話しする事は決して無駄ではない。否益々その必要があるので子どもを健全に育てる事が將來の日本をます〳〵強くする所以であるのに、現在の日本では赤ん坊の死ぬ數に於て世界一といふ不名譽を得て居るのである。それに實際小學校に年々入つて來る子どもの身體を檢査して見ても歴然と母親の不注意があらはれて體格改良どころか年を逐ふて改惡にすゝみ、鳩胸、扁平胸、脊中後彎といふやうなものが殖えて貧血、腺病の兒童が多くなつて來たとは寒心せざるを得ない、それから病氣は母親の手一つで防げるとすればこの國民を生み育てる母親の方々に宜敷くお頼み申すといふより仕方がないのである。

（一）運動に就て

體育といふは赤ん坊の時代から必要である。體育といふと學校でする體操だけがそれの如く思はれて居るのは大なる間違ひである。赤ん坊が生れるとオギヤーと聲をあげるのは深呼吸のはじまりで、即ち體育の第一歩である。それ故この第一聲の大きなのを以てよろしとする。赤ん坊の泣くのも笑ふのも皆その身體に適した運動である。

『例へば立て、立てば歩めの親心』その要求はよいがその赤ん坊をして餘り早く立たせやうとするのはいけない。例ひ匍ひ匍ひするのは矢張自然の要求に從つてするのである。夫れ故九尺二間の家よりも充分赤ん坊が匍へる丈けの廣さの家屋たるを要する。文化生活は段々日本流の駄々廣い家を狹めて西洋間の狹くて上層に高い家屋に住むやうになるだらうが、これは上の目的の子どもを匍ひ匍ひさせるには適さない。然しいかに廣い家に住んで居ても矢鱈に抱いたり負ふたりするのはいけない。殊に子守などに不注意に負はすのはよくない。若し一方ばかりにのみ抱く時は脊骨が曲りそれが習慣となると脊椎彎曲といふやうな結果になる、又子供を脊中に脊負ふため子供の身體の自由が束縛され運動が妨げられて子供は足を廣げる結果俗にいふわに足といふものになる。

然らば子供の運動に何がよいかといへば、赤ん坊には時々四肢とか腹部の筋肉とかを平手で摩擦してやるのが一番よい即ちマッサージである。これをすると非常に赤ん坊はよろこぶものである。これ等母親の手をかけて身體の各部を日々摩擦してやれば子供はその快感と愉樂によつて神經を强め、血行をよくして行く事が出來る。それから同じ赤ん坊の運動法でも泣いて少しづつ搖するのは宜しいが、上下に甚しく動かすのは宜しくない。子供の泣いて止まない時よく昔流の母親又子守はひどく上下に動かすが、それは腦のためにも内臟のためにも宜敷くない。この點で西洋流の搖籃の如きも害があるのである。

それから段々成長するに從つて子どもは各種の運動をさせるがよい、三四才の幼兒に向つては音樂を以て遊戲させる律動式の運動がよい、これは日本の樂器では到底駄目で西洋のピアノ、オルガンを以て一齊に踊るやうなダンスが最も適當である。

七八才即ち小學校に入學の頃になつてもまだ身體は柔軟であるからあまり烈しい運動は出來ない、跳躍など又競爭遊戲などは宜しくない。

九歳ごろから水泳が許される、これは運動としては一番によい方法で男女とも奬勵してよいので段々と方々にその設備が完成されつゝあるがそれ等の設備が出來て危險さへ防止出來れば水泳といふものは斯の獨逸文豪ゴスレル博士が『水泳は理想的體育法なり』といはれた言葉の通りである。

十歳十一歳の頃からは男兒は力を强める運動を女兒は背部腹部の筋肉を强める運動をなすのがよい。

フートボール、スキー、自轉車などは十三、四歳以後の男女によろしい。殊に私の推賞したいのは夏期に於ける裸體の體操や運動である、これは日光と新鮮なる空氣が皮膚に働くから新陳代謝も上に非常によい。又腺病質皮膚病等のものに一種の理學療法にもなる。一夏、弱い兒童を田舍に連れて行き眞つ裸で遊ばせれば必ず少しくらゐの瘰癧や貧血は治るものである、この點を利用して病弱兒は田舍へ、郊外へと連れ出すべきである。

(二) 衣服に就て

子どもの衣服は文化生活の影響として段々洋服に移りつゝある、これは衞生上から觀て非常に良いと思ふ、和服では袖や袂があり袴があつて自由に運動が出來ない、從つて運動不足となつてそれ等の子どもは弱くなる、又洋服には胸を締める紐のやうなものも、又帶のやうなものもないから胸郭の發達をさせるに都合がよい。それで鳩胸、扁平胸などは日本人に多いといふのは日本服でそれ等の胸を知らず識らずにこしらへるのではあるまいか。

それから赤ん坊の襁褓は日本では四角な布片を用ゐるがこれは運動を妨げるからいけない、これも西洋流に三角の襁褓の方がよろしい。

又赤ん坊に限らず一體に日本の子どもといふものは厚着をさせるのが習慣であるが身體の新陳代謝は暖か過ぎる衣類を着ると妨げられるのである、近頃の日本の子供の多くが襟卷をしたり矢鱈に外套を着せたりするのは感心した事ではない。

なる丈子供には薄着させよ、子供には下着にリンネルのシャツさへ用ゐて居れば上着は出來る丈數を減した方がよいのである。厚い毛織のシャツを着たり首に毛をまきつけたりするそのために皮膚は軟かくして風邪に冒され易いのである。

（三）食物に就て

昔から『腹が減つて死ぬ者よりは食ひ過ぎて死ぬ者が多い』といはれて居たのはその通りである、赤ん坊の時から不注意の母親のため食べ過ぎさせられて大事な消化器を傷める事は有り勝である。

世の多くの母親が一齊に注意して子供に規則正しく授乳せしむるほかにその分量を現在よりも少しづつ控え目に與ふるといふやうにすれば現在の子供の病氣はその一割はたしかに減ずる事と思ふ。

赤ん坊の食物に就ては何といふても人乳が一番である、これは一方には母親の怠惰からと一方には文化生活のお蔭で段々牛乳が宣傳されて逆に赤ん坊の衞生にぐらついて來て日本では太古から『母親は自ら其乳を以て己が子を養ふもの』といふ信條が段々破れて來た、人の子は人乳で牛の子は牛乳で養ふべきものである。

然し母乳も滿一年位經つてからは段々離れさせなくてはいけぬ、それからはお粥（主に澱粉）と牛乳とを與へるやうにするのがよい、又メリケン粉と水飴と牛乳とを一所にした『マルツ汁』といふやうなものを與へるのもよろしい。

次に段々脂肪類を與へる事が必要である、それには卵の黄味を飮ませるのがよい。卵の黄味には鐵やレチチンの外、ヴイタミンなどの物質が多く含まれて居るからよい。

最近の文化の賜物は食物に殆どヴイタミンといふことが分つてそれを用ゐて子供を適當に發育させる事が出來る事である。

もしヴイタミンAの不足な食事を與へると動物實驗によれば完全に角膜乾燥症や夜盲症を起し營養不良となつて生長が止まるのである。又せむしなどは骨のかたまりかたの惡い病

氣でこれは體内のカルシューム缺乏から起るのであるがヴイタミンAといふものはこれの貯藏係といふべき役目をする、このヴイタミンAを含む食物は

肝油、バター、卵黄、クリーム、ホーレン草、トマト、青のり、淺草のり、にんじん

等である。

次にヴイタミンBといふのはこれが缺乏すると脚氣を起すので乳兒に多い脚氣（聲が嗄れて乳を吐いたり、青い便を出す病氣）は母乳にヴイタミンBの不足から起る、この場合母親はなるべく次の食物を食する必要がある。

玄米、半搗米、大小豆、豆乳、牛乳

それからヴイタミンCといふものがある、これは小兒に多いヂフテリアは體内にCヴイタミンの缺乏した時多く起るとされてある。又Cヴイタミンが甚だしく缺乏すると小兒ではベーロウ氏病といふて關節の病になるのである。

オレンヂにはCヴイタミンが多く含まれて居る、英國の小兒はこのオレンヂを食ふからして健康を保たれて居た、然し先年歐州大戰爭中英國では兵器輸入の關係上一時オレンヂの輸入を禁じたので英國の醫者はやつきとなつて騷いだといふ。我國でもかゝる程ヴイタミン攝取に就て國民保健に注意するものは少ない、それで小兒には殊にヴイタミンCを與へるのがよいこれを與へるといろ／＼の病氣に罹る事が少くなる即ち免疫性を與へるのである。ヴイタミンCの含まれる食物としては

キヤベツ類、オレンヂ類、トマト、青菜、林檎、いちご、杏、枇杷、

その他野菜類の多くのもの等である。

（四）住居に就て

衞生上によい住居は文化程度と共に向上していろ／＼の施設で設立されつゝあるが要するに採光、通風、暖房の裝置が衞生によい家たるを要する。

日當りのいゝ空氣の流通のよいといふ家でなくてはいかに立派な家でも何もならない。むしろ子供の健康にはバラック建の田舍家の方がよろしい。それから部屋の温度は攝氏十七度から二十三度位迄をよしとして同一温度をいつ迄も保つやうにしなくてはならぬ。

温室法としては暖房法が一番理想的で火鉢やストーヴ、瓦斯を用ゐる時はそれ等から出る有毒の瓦斯は始終これを室外に驅除しなくてはいけぬ。

又室内があまり乾燥しないやうに常に水蒸氣を室内に發散せしめなくてはいけぬ。

育兒を充分にしやうと心懸ける母親はこんな分り切つた話のやうな事でも一つとして實行しないで居てはならぬ。いかに寒いからといふて濛々と火鉢の火氣の立つ中に西洋窓をすつかり閉め切つてその中に子供を寢かして置くなどは積極的の罪惡である、それ等は時々窓を開くといふ考へ（衞生上から割り出された根本上の）さへあれば子供は一層丈夫に發育すべきものである。

（終り）

合理的な家庭の經濟生活

女子大學教授 中村榮代

合理的な家庭の經濟生活それは誰れもが望んでゐる生活であり、又誰れもがしなければならない生活であります。從つて其の方法は千差萬別でとても僅かな誌面には云ひつくす事は出來ないと思ひますが、先づ其の方法中の二三に就いて云つて見ますれば

第一合理的な家庭の經濟生活をするためには生活の標準を決定しなければなりませぬ。

第二には第一に基づいて一家の豫算を立てる事が大切であります。

第三には一度たてた豫算は必ず斷行して見なければなりませぬ。

第四には立てた豫算を如何に運用するかと云ふ事を考へねばなりませぬから、次にそれをくわしく述べて見度いと思ひます。

生活の標準

吾々人類の欲望は人智の發達や文化の進步に比例して其の數と量とを增加しますから其の欲望を適當に滿足せしめて、幾分でも文化的の生活に近い生活をしやうとすれば、其の欲望滿足に適當な丈の所得がなければなりませぬ。然るに、物價の騰貴は滔々として其の上る所を知らないやうな強い經濟的の壓迫を受けつゝある今日、私共の所得は如何でありませうか。限りない欲望の增加には、正比例しないのは勿論でありますが物價騰貴の率にさへ比例する事は出來ない狀態にあります事は誰れもが實際に味つてゐる所であります。其の爲め吾々國民の大多數は生活の不安に脅かされ、種々ある惱みを惹起すの止むなきに至つて居るのであります。かゝる狀態にある吾々は如何にして經濟的に、しかも合理的な最低限度の文化生活を營んだらよろしいのでありませうか。勿論其の人自身の所得、職業、性質、知識、道徳心、宗教心等の程度に依つて同じ地方に住む人々でさへ一致した生活の標準は見出し難いのであります。まして所變れば品變るで住む地方を異にし且文明の程度を異にしてゐます場合には、一層の相違はまぬがれ難いのでありますから、生活の標準を見出す事は至難の事であるとさへ云へばそれ迄でありますが、吾々人類は他の動物と異つて人としての共通性も模倣性も持つてゐますし、又一定の秩序組織の下に同化し得るものでありますから、一貫した標準を見出す事はそれ程困難な事でもないのであります。殊に今日の樣な經濟狀態にある吾々としては、國民としての生活の標準を其の收入の額に依つて決定するといふ事が尤も至當であらうと思ひます。換言すれば其の與へられた收入に依つて尤も合理的に尤も經濟的に、滿たすと云ふ事を生活の標準にしたいと思ひます。

豫算の立て方

以上述べた樣な標準に依つて生活しやうとすればどうしても豫算を立てて生活し

なければなりませぬ。一國に豫算が必要である樣に一家にも其の生活を營むに當り、限りなき吾々の欲望を或る程度迄滿足せしめる爲めに收入（特に所得）を種々の消費項目に適當に配する事が必要であります。即ち消費の種類とか性質順序等を明かにして、整理すると云ふ事は非常に大切であります。而し如何に整理された豫算でもとかくに狂ひが生じ易いものでありますから、其の所得全部を消費しつくす樣な見積りでなく、幾分かは内輪に見積り此の餘裕を取つて置く事が必要であります。

豫算は一年中の定まつた所得に依つて立てるのが普通で臨時收入は決して加入してはなりませぬ。

（一）豫算には如何なる項目を立てたらよいか、數へあげれば限りがないと思ひますが其の項目は出來る丈簡單な方がよろしいので、且つ其の效果も多いのであります。其の主なるものを次に示して見れば、

（イ）食物費　凡ての食品代・炊事用瓦斯電氣薪炭代・炊事用具・水道代
（ロ）被服費　反物及び其の他の裝飾品代・洗濯代・染物代・裁縫代等。
（ハ）住居費　家賃・地代・修繕費・電話料等
（ニ）教化費　子女の教育費・新聞雜誌代等
（ホ）常備費　保險・一般の預金・税金・使用人の給金・醫藥代等
（ヘ）臨時費　娯樂費・其の他の臨時費等

（二）所得に如何に按配したらよいか、如何に經濟的に生活するとしても吾々が生きて行く以上食べる事と着る事と住ふ事とは缺く事が出來ませぬ。故に所得の大部分を食物費に、それから被服費や住居費に割り當て、其の殘りを教化費とか、常備費、臨時費に按分するのが普通であります。今家族四人（夫婦と子供二人位）位で年收千二三百圓位の人があるとしてそれを按分して見れば、

食物費　三〇—四〇％
被服費　一〇—一五％
住居費　二〇—二五％

位を適當とします。年收八百圓の家庭とすれば、

食物費　四五—五〇％
被服費　五——一〇％
住居費　一〇—一五％

位とすればよろしいかと思ひます。そして教化費や、常備費、臨時費等としては、殘りを適宜に按分すればよろしいのでありますが、大體から云へば、收入が增加するに從つて、食物費や被服費や、住居費の百分率は少くなり、他の費目に對する率が比較的多くなるのでありますが、收入が減ずるに從つて前の三項目の中、特に食物費の率は非常に大となり、後の項目に對する率は漸次小となるものであります。

（三）立てた豫算は必ず斷行する事。折角立てた豫算は家族の理解を得て斷行し月末や年末には充分の注意を拂つて其の結果を反省し、將來を戒しめなければなりませぬ。

豫算は如何にして運用するか

前述の樣にして、收入を各項目に按分しても、之れが運用が適當でなければ、吾々の生活は其の効果を收める事が出來ないのであります。即ち食物費や被服費や、住居費等の效力を最も經濟的に收めやうとするには、一家の家計を司つてゐる主婦が充分に

覺醒して、次の樣な條件に留意しなければ比較的少い、しかも限られた費用を以て限られない欲望を滿足せしめ、生活を改善する事は出來ないのであります。

(一)食物費の效力を尤も經濟的に見、合理的に運用する方法。いたずらに節約をして其の滋養を省く事のみに苦心する許りでなく、積極的に次の各條件に注意する事が眞の合理的節約となるのであります。

(1)人は凡そ一日に何程の食料を必要とするか
(2)人體には如何なる成分が必要か
(3)各食品の成分は如何なるものか
(4)各食品の滋養價と市場價格との區別
(5)出來る丈少い價格を以て各々の保健に適する獻立をつくる實習をする事
(6)比較的短時間を以て、榮養に適した消化のよい嗜好に適した調理法を研究する事
(7)調理器具とか臺所の改築をなし、時間の浪費と、勞力の徒勞を省き主婦の能率をあげる事

(二)被服費を尤も經濟的に見、合理的に運用する方法

(1)衣服の材料、及び地質に對する化學的、及び物理的の基礎知識を養ふ事
(2)衣服の買入法に對する注意を怠らぬ事、即ち衞生上、經濟上趣味上、充分の考慮をなし、普通服としては木綿とか毛、訪問服としては毛とか絹、禮服としては主に絹を擇ぶが如きは其の一例であります。
(3)衣服の手入方法を研究して、其の耐久力を増し、經濟的の效果を收むる事
(4)二重生活を全廢し、男子及び子供は洋服に、止むなき女子は在來の日本服の數を制限して數少くとも衞生上經濟上社交上其の目的を達し得る樣に研究する事、かくする事は單に直接經濟的の利益あるのみならず、裁縫や、手入や、洗濯等に費す時間、及び費用を省き、その上それ等の衣服を納むる容器の數を減じると同時に、其の場所を縮少する利益、其の他精神的の利益等をあげれば限りがないほどです。
(5)裁縫術の研究をして、家庭に於ける婦人の能率を積極的に増進するやうに計る事

(三)住居費を尤も經濟的に又、合理的運用する方法

今迄述べた住居費は主に借家であれば家賃、自分の持家であれば地代とか、修繕費、其の他を意味してなしたのでありますから、こゝに云ふとすれば、其の運用法は餘りない樣にも思はれますが、假令直接必要でなくとも、婦人自ら建築の材料とか、様式、間取、造作、採光、暖房保温等に對する一般的知識を養ひ、新しく建築をなす場合は勿論、假令それが借家にしても、押入の工夫、室內家具の配置の工夫、玄關を應接間とする工夫等をなし、狹い家でも廣く住む事の出來るやうに、又裝飾や配色等に留意して心理的に實際よりは住み心地よくする事も必要であります。

以下各費目についても出來る丈根本的の知識を養ひ、合理的に運用する事が、眞の經濟的生活となるのでありますから、其の場しのぎの節約よりは、科學的な研究的態度を基礎にして、家事を處理する事が、眞の合理的經濟的生活法であると思ひます。

讀者欄

有島武郎氏を擧げた中川しげ子さんに

松下八重

私はあなたのお考へが間違つてるとか、有島さんを本當に理解しないとか云ふことで之れを書くのではありません。貴女は貴女のお考へ、私は私の考へがあるのですから。たゞあなたのお考へに依つて思ひついた私の考へを書いただけですからどうぞそのおつもりでお讀み下さいませ。

私もやはり有島さんを崇敬する一人です。そして貴女のお説の中、或一部分をのぞいては、私も全くだと一々うなづきながら讀んだ程同じ感じを持つてゐます。たゞ或一部、それは「或女」に對しての御批評に就て私の考へを書いてみたかつたのでございます。

貴女のお友達が「或女」を讀んでから、有島さんが厭やになつたとおつしやつた、そして貴女も厭になりはしなくても、强いてあの葉子と云ふ女を「死ぬ前の心からの悔に依つて彼女の恐ろしい罪も許されはしないだらうかと思はれてほつと救はれた氣持さへする。」とおつしやつて、無理に道徳的な女として肯定してゐらつしやる、それが私には非常に物足りなく思へます。

「或女」は有島さんの著作集の中で忘れられない物の一つです。丁度あの本が出た時から四年の間幾度繰り返して讀んだか知れません。それだけにあの葉子をたゞ表面からばかりでは見られなくなりました。そりや始めから考へれば間違つた方へ進んだ女かも知れません。けれど本當に生きた女だと思ひます。自分の心のまゝに、周圍の壓迫に苦しみながらも、それを切り拔けて意の儘に進むことの出來た一生だと思ひます。いくら表面は道徳的であつても、自分を殺した生活に何で意義がありませう。そりや葉子が自分の心の儘に進む爲には、多くの犠牲を作つたかも知れません。昔の否今の道徳がそれを惡いと思はせるのでせう。

葉子が初戀の人、木部との生活をあのまゝ續けたら世間は別に妖婦よばはりもしなかつたでせう、でも一旦きらひになつた男と無理に一緒にゐなくてはならないと云ふのはあんまり窮屈ではないでせうか、きらひになつたと同時に木部と別れてしまつたのは、さすが葉子だと思ひます。

中川さんはあの木村に大變同情しての樣です「彼女を包むいまはしい噂の數々に心を亂しながらも、なほ信と愛とに燃えて異郷の地に淋しく狂ほしく彼女を待つ夫」とか、「木村の持つ力强い愛」とかおつしやつてです。そりや木村は可哀さうかも知れません、だけど葉子を疑つてゐながらも强いてそれを信じまいとしてゐるその態度がいやです。本當に葉子を愛してゐるなら何故葉子の不信を怒つて、日本へ來ないのです。第一木村は葉子が自分を愛してゐるか否かさへ分らない男ぢやないんですか。葉子のあとを追つて來て、その心を確める樣な心でなくては、强い愛とは云はれないと思ひます。木村の滿足を思つて葉子が結婚するのだつたら、それは低能者の行爲ぢやないでせうか。世間の人はさうした犠牲的の精神を褒めそやすかも知れません、少くとも木村に同情してゐる人は。でも其が出來なかつたのが葉子の偉い所です。

倉地と葉子。何て氣持のいゝ二人でせう。倉地は粗野な中にも、云ふに云はれない纎細な情の燃えてゐる人、本當に男らしい男だと思ひます。「俺には女はお前一人より無いんだからな。離縁狀は横濱の土を踏むと一緒に嬶に向けてぶつとばしてあるんだ。」何と力强い言葉でせう。愛されてるものにとつて、何を云はれるより滿足な言葉ではないでせう。若しこれが木村だつたとしたら、限りなく葉子を愛してたながらも、葉子を捨て

る事は出來ず、ただ一人で苦しんでゐるといふ樣な狀態にあるのではないでせうか。倉地の云ふ一言々々は、さすが葉子がほれた男だけあると思はせる程力がこもつてゐます。「よし。それで分つた。木村：：木村からも搾り上げろ、構ふものかい。人間なみに見られない俺達が、人間並に振舞つてゐてたまるかい。葉ちやん：：命、何と强い言葉でせう。惡魔的と云へば云へ、惡の爲には凡てを犧牲にするその心が、いぢらしい程眞面目ではないでせうか。かうした融け合つた二人の戀は、木村等傍へも寄りつけない程純眞なものだと思ひます、アメリカまで行つて又引き返してきたあの決心、あれだけの强い心が多くの日本の女の中に幾人あるでせう。煮えきらない態度ばかり多い中にあれだけでも胸がすく樣です。又道德的に見て貞操云々も、倉田さんのお言葉をまねて云へば、「愛してゐない男に身をまかせるのは、賣淫に等しい」と云ふのですから、葉子の場合、木部を離れたのも、木村と結婚しなかつたのも、貞操の無い女とは云はれないだらうと思ひます。とにかく表面の行爲のみが道德的だとて何になりませう。又今の道德そのものゝ標準さへもあやしいんですから。とにかく葉子はあなたのおつしやるそれ程惡い女とも思はれません。でもあゝした型の女にしたのもよく考へればやつぱり世間が惡かつたのではないのでせうか。葉子が十四の時、おぼろげながら神といふものを戀しかけた時、不圖思ひ立つて角帶の樣なものを絹糸で編みはじめた。それが出上る頃、教師に見つかつて、その用途を問ひ正した結果帶の色から察して男に送るものとして葉子をせめた。葉子の淸い心は、さうしたくだらない周圍からの壓迫の爲に、見事に破られてそれに對する反抗心は忽ち葉子を一變させてしまつた。」かうした事實のあつたことを御承知だと思ひます。今の日本の社會はみんなこれぢやないんでせうか。くだらない道德の制裁がかへつて貴い人格を傷つけるのぢやないのかと思はれます。

　とにかく葉子は捨て難い女です、女としての美しさと意地とを發揮した氣持のいゝ女です。これをどうから云ふのは、一種のそねみと妙な因襲的な道德觀念とを持つた人達の見方だと思ひます。

あなたは「木村の持つ力强い愛、古藤の持つ正しい理性、岡の純な感情、それ等のものだけが讀者の胸にいつまでも輝かしく殘るのぢやないでせうか」とおつしやつてですが、私の思ひますには、倉地と葉子の强い眞面目な愛こそ殘れ、其他の人達はたとへ讀者の胸に殘つたとて、その影は極く淡いものではないでせうか。

　最後にこの小說をお書きになつた有島さんをその前以上に偉い方だと思つて居ります。繪島丸上で倉地に對して戀を感じながらも、それを拂ひながら、さうした心を憎みながら何かの折につけて倉地の注意を牽から、向ふから戀させ樣とする、そのチャーム的な態度をとる處など、とても他の小說に見られない巧みさが現はれてると思ひます。凡てに渉つてよくも微細な女の感情をあれまで盡して書かれたことゝ、たゞそれだけでもお禮を申し上げたい樣にうれしうございました。

　あの作を讀んで有島さんがいやになつたといふ人の氣が知れません。男に踏みにじられてたら泣いてばかり居る樣な女の多い中で、別に肩をいからして理窟を云ふのでなく、女としての美を失はずに、あくまでも其プラウドを保ち續けてゆくそこに何とも云はれない女としての嬌さが思はれるのでございます。

　前に書くのを忘れましたけれど葉子は死ぬに別に悔悟してはゐないと思ひます。たゞ手術の前に死を考へた時、一寸自分の步みは間違つてゐたと思つただけで又すぐ元の葉子に歸りました。そして罪の子としてゞなく、あくまでも美と誇とに滿たされた女王として死んで行つたのだと思ひます。

　大變長く書きました。若しお氣に障つた言がありましたらお許し下さいませ。

谿深く（當選短歌 賞金拾圓）

水鳥川春帆

みづみづし谿を狹めて生ひ繁る瑞木若葉は陽に輝よへり
ひそかにも風吹き來ればなにの木の花とも知れず谿に匂へり
まみあげて見やる尾の上の空はれて谿にあまねき皐月のひかり
晝ふかく陽は沁み透るこの谿の青葉のなかに駒鳥の啼く
谿ふかき木の間にひそみ駒鳥の遠く近くに啼きかはす聞ゆ
駒鳥の啼きひそまればいづこにか水音きこゆ眞日煙る谿に
瑞枝さす杉の木の間に湧くものか水音淋しく谿にひゞけり
夏山の繁みを洩るゝ水音の步みつかれし身に親しさよ
水音の絶え入るばかり靜けきに心は澄めり谿をゆきつゝ
谿越えて眞上の杉に移り來し駒鳥の聲ほがらかにきこゆ
行き行けど谿なほ深しかへりみる峰の青葉に白き雲居る

佳作

○　長富余子
かりそめの乙女心の許されてより添ひみればいや戀しけれ

○　西平克子
抑へたる强ぎる力よ脚はやくうみ一面を蔽ふ雨雲

○　村瀬千代
草いちご咲き出でければ我が太郎米の磨ぎ汁かけ廻るなり

○　川村和子
省線の電車過ぎゆき暫くの靜けきに散る雨後の櫻は

○　丸山政子
嬉しさに涙は落つる兒の病ひ日にけに癒えて笑顔みすれば
いかばかり母は待つらむ夕されば友と別れて歸り來る子よ

○　春の人
眞白くも雪は積みけりあかときの雲の上なる伊豫の山脈

○　柴田清惠
歸ります黄昏時の靴音を日毎に聞けど胸のときめく

○　笠原やま子
をちこちの家に鳴き交す鷄の聲聞きつゝ寂し並の炬燵に

○　須藤多香子
寢ね足りてふと眼ざめたる吾兒の眸の海のやうなる靜けさに見ゆ

○　三國朝子
母失せし家をめぐりて栗咲けりあまた咲けるが悲しかりけり

○　たき子
もの炊んと厨に入りし束の間を淋しらに召すみ聲かなしき

○　大川鈴路
さし出づる陽を照りかへし石楠の細葉は搖るゝ露こぼしつゝ

○　横田千世
霧脚の疾きうつろひのひまに見し淺間の頂忽ちかくれつ
霧いつかはれて月の照る淺間山なだれの窪は大き影つくる

○　安田良子
朝晴やま澄める池の水の面に影を落してあやめ咲くなり
池の邊に鋏ならして立ちにけり露に濡れ咲くあやめ切らんと
この朝髪結ひ終へて縁に立ち咲けるあやめに見入るすがしさ
露じめる袂くわへて池の邊に探りつゝあやめ切り飽かぬかも



室伏高信

◇東京市長問題

後藤新平が東京市長をやめました。いやなら勝手にやめるよりほかにない。後藤新平はいやで東京市長の職をやめたであらうか。いやなら初めからならない筈であつたでせう。成りたくもあり、いやでもある。そこにヘエゲル流の矛盾の闘争があるであらう。特にこの人において矛盾の闘争が水際立つて見えるではないでせうか。その矛盾の争闘がファウストのそれのような人間性の根本においての戦ひであるといふてゐるのではないのです。こゝに後藤新平なる一個の現代人が詩人でなくて政治家である理由が存在します。かくして彼の矛盾の闘争は第一義的ではないが、政治家としての彼のうちには明らかなる矛盾の闘争が横はる。矛盾の闘争と云ふことが政治家としての彼の生活原理だと云ふことができるのです。東京市長になりたくもあるが、いやでもある。この二つのテエゼとアンチテエゼの中間にぶら〳〵してゐるのが後藤新平なのである。

なぜ東京市長になりたいか。総理大臣の候補者の一人とまでいはれてゐる人が東京市長になりたいと云ふところに後藤新平のよき方面を見られるであらう。なぜなら彼が市、特に大都市、中央都市、世界都市の任務についてぼんやりながらにせよ何ものかの理解に達してゐることを示してゐるからであるのです。

都市は文明の場所です。世界都市は文明の独裁者であるのです。文明の場所であるからまた政治の場所であるのです。

政治の場所であるから政治家の場所であることも勿論であるのです。東京市長は若しその市長がその地位によく適した人でさへあるならば、東京市の地位をそのあらゆる外的生活において日本の中心たらしめることができる筈であるのです。何故なら日本は文明の日本であるからであるのです。文明の日本とは大都市の日本であることを意味してゐるからであるのです。後藤新平は文明における世界都市の意味を可成りによく理解してゐたかに見えた。しかし彼が東京市長の職を辭するのに日露問題を口實にしたことによつて彼の都市理解も矢張り一のアマチュア的のものであることを暴露したかに思はれます。

日露問題を私は小問題だと云ふてゐるのではないのです。東京市長の職が、文明（特に私は文明と云ひます）政治家にとつてはそれに優るとも劣らない重要さをもつてゐると云ふてゐるのです。

後藤新平を繼ぐものは何人であるかまだ分つてはゐない。が東京市長たる資格は總理大臣級の人であることである。東京市の自治を口にするもの、あることを私は聞く。一内務大臣の階梯から東京市を獨立せしめようとすることには何人にももとより異存はありますまい。しかし東京市についてよくお考へ下さい。そこは東京市民だけの東京市だと誰が言ひえられますか。東京市は日本の全體を代表します。經濟的には日本の全體を攝取します。東京市が日本のためにあるといふよりは日本が東京市のために存在すると云ふた方が正しいのです。だから東京の問題が日本全體の問題であり、日本全體の問題として東京市の問題を見るべきだと云ふのです。私は今日の東京市にとつてはこうした立場から市長が選まれなければならないと考へてゐます。

しかし誤解してはならない。私はたゞ現在の東京市の任務を言ふてゐるのです。私は東京市を謳歌してゐるのではない東京市が今日の日本でかくのごとき地位を占めたこと、即ちそこが政治的にも經濟的にも中心であり、且つ「文化」といはれるものさへそこから製造される現代社會の病弊をこゝに見なくてはならないと私は考へてゐるのです。何故なら、東京市の厖慢なほどの擴大は同時に地方生活、そしてほんとうの人間生活の疲弊を意味してゐるからであるのです。

◇日露問題

後藤新平が東京市長をやめたのは日露問題で多忙だと云ふことにある。外務大臣の云ふべきことを後藤新平がいふてゐる。それだけ今の外務大臣が無能だといふことにもなる。またそれだけに後藤新平が日露問題に骨折つたと云ふことにもなる。政府と政府との交渉が行詰つた以上、そして日本の政

府が探偵政治以上に出でることのできないこと今日のごとくである以上は、何人かゞ中間に立つて斡旋することも必要であらう。その意味において後藤新平の行動はたしかにどこか政治家らしいところがある。

日露通商と、ロシヤ承認の問題は今日では別々の問題とされてゐる。既に數種の國家はロシヤ政府を承認しないで通商を開いてゐる。しかも今日のロシヤでは外國貿易は國家の專賣であるからロシヤとの通商は非公式なるロシヤの承認であり、またロシヤ承認問題を早晩惹起することも必然である。

各國は何故にロシヤを承認しないであらうか。表面の理由はロシヤの共産政府が眞のロシヤ人民の政府でないからだと云ふことにある。私は決して一部の人々の禮讃するように今日のロシヤ政府を眞にロシヤの人民政府だとは思はない。しかしそれはたゞロシヤだけではないのです。××××、アメリカだつて、英國だつて、世界のどこにだつて眞の人民×××ぞがある筈はない。×××常に階級または政黨のうへに立つてゐる。そしてその要部は警察と軍隊なのである。だから今日の資本的階級國家がロシヤの政黨國家を人民國家でないなぞと云ふのはめかけざるがはなかけざるを笑ふ以上の滑稽であるのです。

如何に資本國の政治家がめかけざるでもこの位ひのことが分らぬ筈はないでせう。それなら何故ロシヤを嫌ふのか、嫌ふのではない。恐れるのです。資本主義の足もとが恐ろしいのですロシヤとつき合ふことによつて共産主義が日本に輸入されことを恐れるのです。

恐れるのは當然です。資本主義は恐れるよりほかにない××××××××××。日本もまた資本主義國となつた以上は世界とともに資本主義の必然のシックザアルをうけなければなりますまい。しかもその裁きの日がきたるにしても、それはロシヤからでもなく、世界のどこからくるのでもない××××××××の中から生れるのです。

ロシヤと通商を開くことによつて日本の經濟狀態が直ぐにも回復するように論んずるのはあまりに欺僞的です。日本の高い物價をもつてして、そしてロシヤの今日の疲弊をもつてして、どうして盛んな貿易ができましよう。今のロシヤには日本の物價を購買する能力がないと云ふのです。英露貿易の最近の經驗がよくこれを裏書きしてゐます。しかしそれがやがては日本のためにもロシヤのためにも經濟回復の一因となるであらうことを私は疑ふものではない。

◇商工黨の創立

商工黨が大阪で發會式を擧げました。それは實業同志會と名づけてゐますが、名前の如何にかゝはらず純粹の商工黨で

あるのです。今日までもこれに相當するものがないことはない。康申倶樂部と云ふのがそれであるのです。主として御用實業議員の集りであるのです。

資本主義の國では實業議員はみな御用議員であるのです。御用議員だと云ふても實業家が政府に盲從すると云ふのではないのです。それは中世紀のことである。現代では政府と實業家との間に意見の懸隔、利害の衝突はない。ある筈がないのです。今日の政府は實業家の政府です。加藤友三郎のやうな軍人が首相であつても同じことであるのです。內閣とはマルクスもいふたとほりに今日では資本家のエクセクウテイフコミテエであるのです。內閣の最高政治は永田町で決定されるのではなくて主として三菱ケ原で決定されるのです。內閣も政黨——政友會、憲政會、革新倶樂部、康申倶樂部既成政黨の凡てのものが主としては資本家の大小委員會であるのです。婦人參政同盟なぞもそれであるのです。だから資本家は枕を高くして寢てゐてもいゝのです。利潤は勞働者が血と汗とで稼いでくれます。政治家が競爭して彼等の利益と地位とを擁護してくれます。だからこの際新しい資本黨なぞができなくてもいゝわけであるのです。

それにもかゝはらず實業家の間にまた一つの新らしい資本黨ができた。資本家の階級意識がいよ〳〵明確且つ挑戰的になつたことを示してゐます。從來の政黨は資本黨でありながら小ブルジョアや農民にも媚を賣るべき必要があつたために資本黨としての階級的立場が時々はぼんやりするように見えたこともあつたのです。資本家的資本家にはそれでは充分な滿足を與へないこともありませう。そこに純然たる都市商工黨の生れる必要があつたといへるでありませう。

既成政黨はこれによつて直接に何ほどかの影響をうけるに相違ありますまい。特に都會に比較的多くの地盤をもつてゐる憲政會がその影響をうけるでありませう。しかも何れの政黨が如何ようの影響をうけようとも既成政黨の地盤が引つくり返らうとも、それはたゞ資本家內部の御家騷動であるに過ぎないのです。三井が三菱に代つても、安田が三井に代つてもそれ〳〵平民には何のかゝわりもないことであるのです。

たゞ一つの忘れることのできない影響が考へられる。資本家がかくのごとくに都會階級的挑戰の態度に出でる以上、それが農民黨と勞働黨（または無政府黨と社會黨）との成立を早めるであらうと云ふことである。かくして階級鬪爭がマアクスのいふたように政治的性質を帯びてくるようになるでありませう。

◇職業婦人の運動

昔プラトオが要求したとほりに女が男のすることをするよ

うになつた。ある學者のいふたごとくに如何なる生物學者も職業を解剖したゞけではそれが男であるか女であるかを知ることはできない。女が男のしてきた職業に入ることは當然すぎるほど當然なのである。しかも女が職業に入ることは女が財的に男から解放されることである。こゝに女の獨立、女の解放の基礎が與へられてゐると考へられるのである。

將來の社會において職業婦人が要求されるや否やの問題はこゝにはいはない。今日の資本國では（ロシヤのような半國家資本主義のものでも同様である）女の獨立の道は女が勞働するかまたは職業をもつよりほかにない。知識なき女は勞働（トレエド）を、知識ある女は職業（プロフエッション）をもつべきである。これによつて財的に獨立しまたは半獨立する女は、男の專制から一部または全部脫却することができるであらう。こゝに男女の間における根本問題である性問題のうへにも男女の間に平等または半平等。自由または半自由の道の開けるであらうことも事實である。

しかも現實の問題としては職業婦人の道は遠い。彼女等は一方には資本家と戰はねばならぬ。この點において彼女等の運動はもとより一つの勞働運動である。しかも彼女等の運動はたゞそれだけではない。彼女等は男子のフエロウ・ウワアカアスと戰はねばならぬ。何故なら彼女等が若し社會的に男子と平等であるべきだとしたら彼女等の生活のための報酬も男子のそれの以下であつてはならない。それにもかゝわらず女のうくるところの報酬は一般に男子のそれよりも以下である。

今日では職業男子でさへも纔にその生活のペエア・ネッセシテイを滿たすだけである。それが資本主義の原則なのである。男よりもより以下の報酬をうけつゝある女勞働者または職業婦人が自らの生活を獨自に支へることのできないのは當然である。こゝに職業婦人の危機がある。一方に良人の經濟的保護をうけず、他方には生活の獨立が不可能である。その生活の不足を如何にして補ふべきか。それが男子によつて補はれなければならないとしたら婦人の人格的獨立、從つて性的獨立も不可能に終らねばならぬ。

こゝに職業婦人運動の目標は二つである。資本家との戰ひ男子に對する絶對的平等の要求。この二つがそれである。日本の婦人運動がその政治屋運動から職業婦人運動にまで向はうとしつゝあることはたしかに一つの進步である。

創作

出世五人男（長篇小説）……宇野浩二
蜘蛛の國の話（童話）……藤森成吉
黑谷夜話（長篇小說）……中里介山
ピノチオ（童話）……佐藤春夫
山吹（劇本）……泉鏡花

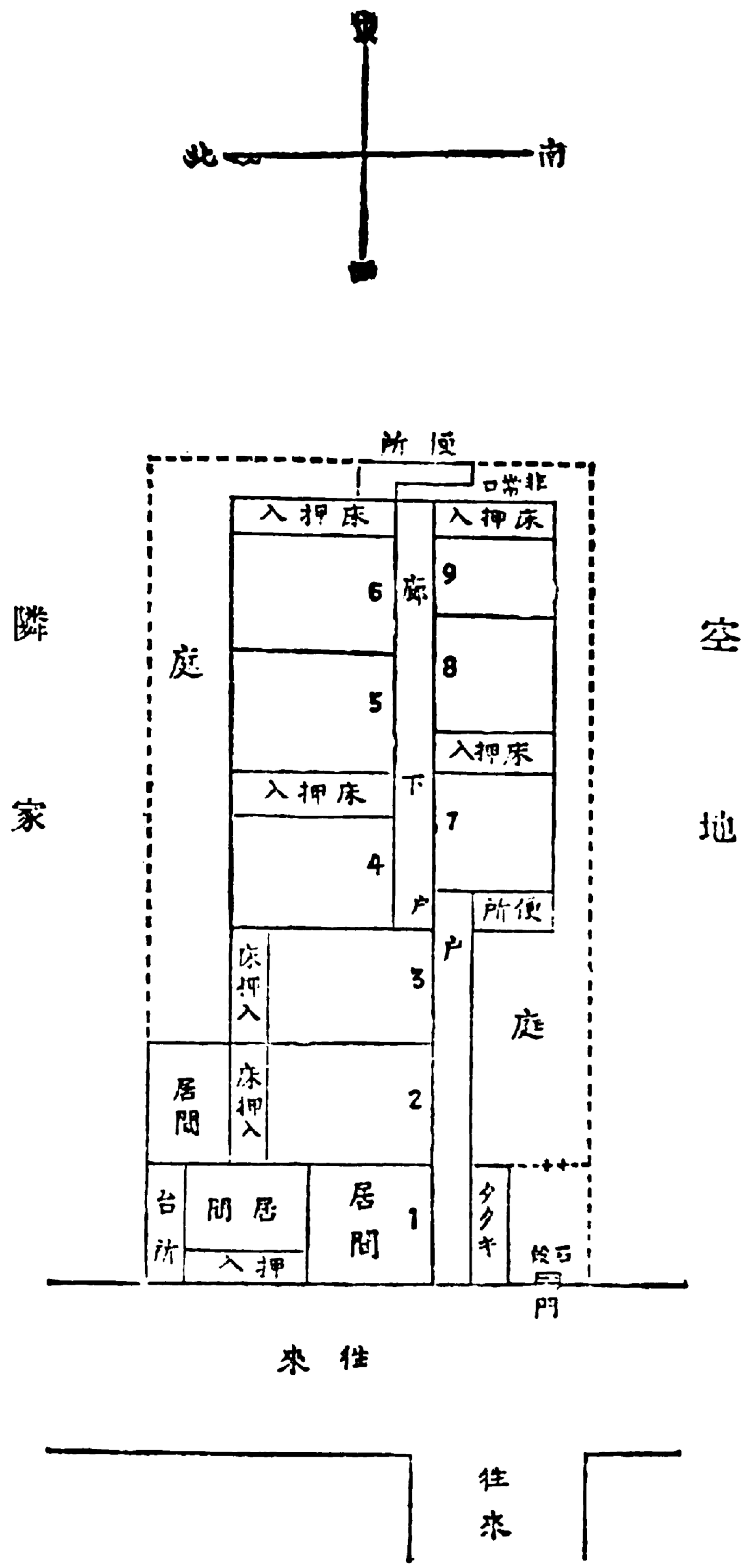


出世五人男（長篇小説）

宇野浩二

如何にも小説作者として智慧のないことではあるが、最初に次のやうな場面を持出す不作法を許していたゞきたい。これは小石川區外高――町の、とある裏通にある素人下宿屋の間取圖なのであるが、或年の二月の中頃に、この小説の主人公でもあり、又他の意味では主人公になり損なつたところの、赤木阿珂丸がこの家に引越して來たのである。

或電車の終點停留所を下りたところで、場末らしいごた〳〵した繁華な商店の並んでゐる通を暫く行つて、左に折れると突然目先が變つて幅の廣いなだらかな坂道にかゝるのである。それは多分都會と田舍との分れ目のしるしであらうか、それ迄の賑かな稍々狹い通の赤黑い土の色と比べて、この閑靜な打開けた坂道のところからは土の色も全く變つて見えた、それは粉のやうに眞白であつた、だから、天氣が三四日もつゞくと、そこを行く車の轍や、人や馬の足元からは、白い砂ほこりが大砲からのやうに吹き上つた、無理もないので、この道を眞直に十町も行くと、人はいつの間にか青い大根畑や、榛や栗の林に會ふだらう、でなくても五町も歩いて、



それから一二町裏通に這入ると、彼は同じやうな景色に接するだらう、そして今言つた素人下宿屋の位置は右の場合のやうな町外れにあつたのである。

もう少し詳しく言ふと、その表通に、校舍の十倍もあるかと思はれる大きな寄宿舍とそれに相當した庭を持つた女學校があつたが、そこ迄行く少し手前に、さういふ新開町に應々見られる、家全體は古いのに、それだけが新しい木口の硝子戸の嵌まつた雜貨店と、今一つはその邊には不調和な黒塀を廻らした旅館とに挾まれた細い横町があつた、その路次は一町足らず行つたところで、表通と並行してゐる裏通に依つて丁字形に横切られてゐた、その突當り、即ち丁字形の結び目に當るところに、今言ふ我等の素人下宿屋が存在してゐたのである。

それだけを新規に建てたらしい小さな門があつて、門の柱に取付けられてある丸い軒燈と、その軒燈の直下に釘付けにされてある表札とには、各々『入井』といふ名字だけが記されてあつたが、どういふ譯か、それ等の丁字形の道の面――從つてその門の立つてゐる面よりか、肝腎の建物のある地面が三尺程も低くなつてゐた。だから、例の横町の方からやつて來てその家を眞正面に見たものは、全體が平家建であるその家の内容が、一枚の門の塀に隱されてゐる譯で、それは例へば芝居の書割のやうに神秘なものに見えた、無論それが後の方に一列に、曳船のやうに小さな部屋の行列を從へてゐる素人下宿であらうとは思はれなかつた、恐らく中産を持つて、小綺麗に住んでゐる老夫婦か、寡婦かの控家に最もよく見做された。だが、反對に、南の方から裏通を歩いて來て見た光景は、それとはすつかり違つたものであつた、といふのは、その家の裏側から南隣にかけて、可成り廣い凸凹の草原の空地がひろがつてゐたが、往來とその空地とは三尺程の土地の高低がその境界を印附けてゐる外に、何の塀も圍ひもなかつたので、人は空地を越して、船のやうに細長い不細工なその家の側面を望むことが出來た。それはタールを塗つた亞鉛板の屋根を被つてゐて、而も出來るだけ低く建てゝある上に、それの建つてゐる地面が空地同樣往來より三尺も低いので、言はうやうなく慘めに見えた、そして更に一層その家を慘めに見せる爲のやうに、その邊にあるその家の外の家々は皆脊の高い二階建であつたり、或ひは先に言つた大きな女學校の寄宿舍であつたり、殊にその家の裏の方を見渡すと、空地につゞいて畑があつて、それは一旦は空地の面よりも一層低く低く、なだらかな傾斜を畫いて下つてゐるが、或點から一つの谷を形造つて、反對に向うの方へは稍々急な傾斜を見せて、ゆつたりとした大きな丘をなしてゐた、そしてその丘は一部分は畑で他の大部分は例の女學校の寄宿舍の庭になつてゐたので、その天鵞絨のやうな芝草の面の彼方此方に、西洋館の外觀を持つた或ひは二階建或ひは三階建の建物が、まるでハイカラな築山かのやうな趣を見せてゐるのである。その外、その慘めな下宿屋の近くには櫻の並木、榛の林、――それ等が悉く不都合にも大木であつた。――それから高い半鐘臺。

だから若し我等の赤木阿珂丸にしても初めにこの裏通の方から來たのだつたならば、恐らくここを通る多くの人々と同じやうに、「よくもまあこんなに人間の住家を豚小屋に似せて造つたものだな。下宿屋か貸間屋でもあるんだらう。如何にも！ どんな謙遜な人間だつて、自分自身が住む爲の用に、こんな粗末なそしてこんな殺風景な家を建てるものはあるまい。……一と間、二た間、三間と、――然しあの取附きの玄關と厠らしい部屋は多分家の者の居間だらうな。……はて、その次のところから急に壁や木口の色が變つてゐて、而も少し此方の方へ出つ張つてゐるやうだが、はゝア、後からあれだけ建て増したんだな。それが又一と間、二た間、三間と矢張り三間だな。それにしても、どういふ種類の書生がわざ〳〵好んであんな部屋々々に住んでゐるのだらうか。さだめしあゝいふ部屋に下宿してゐる者に限つて亂暴で、大酒で、あのひよろ〳〵の蟋蟀の籠のやうな家の床板や壁やに、三日にあげず穴や破目をこしらへる程騷ぐことなど決して珍しい出來事ではあるまい。……」斯う言つて嘆息したであらう。

その時まで、彼は神樂坂の近くの三十幾つもの部屋のある下宿屋に半年ばかり暮してゐたのである。彼は早稻田大學の文科の學生であつた。ところで、その同じ下宿屋に彼の同級の友人が四人もゐた。彼等は學生の身分であることを無視して月のうちに一週間も學校に顏を出す者は中で最も勤勉な者に數へられた、そして夜は大抵二時三時頃まで起きてゐて、朝は十二時前に床を出る者は稀であつた、誰かが誰かの部屋を訪問し、或ひは誰かの部屋に誰かも誰かも集つて、寄ると文學と女と戀の話を戰はした、或ひは煙草を吹かして酒を飮んだ。我が赤木阿珂丸も初めはそれが面白くて、さういふ境遇を味はない勤勉な者たちを愚か者のやうに思ひ做してゐたが終には然し一日一日とさういふ空氣に閉口を感じ出した。言ふのは、元來が彼は妙に内氣な男で、三人以上の友達が集まつて學生たちに有勝の闊達な談笑を交す席に同座すると、無論最初のうちはそれに調子を合はすことが出來たが、少し長引くと次第に何とも言へぬ負擔と疲勞とを感じるのが例であつた、次に彼自身決して健全な思想の持主ではなかつた癖に、前の晩どんなに夜更かしをしても、朝は必ず七時に目を

醒まして、それからはもう眠り入れない性分があつた、それやこれやが彼をこれ迄の下宿屋に居堪れなくさした上に、彼の持前の飽き性が手傳つて、彼は次第にそれ等の友達に飽き、雰圍氣に飽き、文學や女や戀の話に飽き、果てはどうやら文學にさへも厭氣がさしつつあつたのだつた。何は兎もあれ、こんな騷々しい周圍から暫く逃れて、もつと閑靜な下宿を見付けて、一人で寢たり起きたり、讀んだり空想したり、そして誰からも煩はされない所へ引越さう。――斯う思ひながら、彼は或日ぶら／＼と散歩の足を延ばして、折から東京の空にはゴー／＼と空風が鳴る頃で、例の眞白な砂煙の立つ廣い阪道を上つて、さて雜貨店と旅館との間の路次を突當つたところで、『入井』といふ軒燈の出た門の塀に、「貸間あり」と貼られてある札を發見したのであつた。

彼は思ひ切つてその引戸になつてゐる門の戸を潜つたところが、一歩中に足を踏み入れようとして、思ひがけなくそこから石段が始まつてゐたのに面喰らつた、が、更に驚いたことには、その石段の高さだけ門の位置が高みになつてゐたので、その戸を開けて中に首を突入れた瞬間に、眼下にその家の全體が――その豚小屋のやうな粗末な細長い建物の全體が見渡されたので、彼はその不樣な印象にがつかりして、餘程そのまゝ案内を乞はずに表に引返さうかと思つた。が、彼は先程から可成りの疲勞を覺えてゐた、といふのは彼の極端な内氣な性分の爲に、斯うして貸間探しにもう二十町近い道を歩いてゐながら、或處では尋ねて見ようと思ふ家の玄關に人間が突立つてゐて、彼の方を迂散さうな目で睨んだので極りが惡くなつたり、又他の處では「貸間」と書かれたその文字の書體が變に亂雜に見えたので、どんな人間がそれを書いたのだらうと想像して恐れをなしたり、その他五六軒も一々それ／＼の理由で這入り損ねてしまつてゐたので、心持と足と二つながら這々の體だつたのだ、だから、今では家の體裁とか、部屋とか、そこに住んでゐる人間とか、さういふ條件を考へる前に、何でも彼でも早く宿を極めてしまひたいといふに焦つてゐたのである。それにも拘らず、外にせい／＼二三人の下宿人が居る程度の、文字通りの素人下宿屋だらうと思つて飛込んだその家が、そんな體裁だつたので、彼は心の

中で「しまつた！」と強く後悔した、そして實際、誰も彼を見るものが居なかつたら、そのまゝこそ〳〵と後戻りして逃げ出したかも知れなかつたのであるが、その時、彼の立つて居る場所から見通しになつて居る廊下に、小柄ではあるが、はツとする程美しい、丸髷の女が玄關の方に向つて歩いて來るのと顔を合はしたのである。彼女は多分便所からでも出て來たものらしかつた。

阿珂丸は何といふ理由もなしに顔を赤くして、ぴよこりとその方に向つてお辭儀をした。だから、無論もう後に引返す譯に行かなくなつたので

「あの、部屋を見せてほしいんですが」と聲をかけてしまつた。

彼女はそれに一寸頭を下げて會釋をしておいて、ちよこ〳〵走りで玄關――と言つても廊下の上り口のところ迄出て來ると、そこで初めて、

「入らつしやいませ、明き部屋ですか。さあ、どうぞ、………六疊ですが、餘りいゝ部屋ぢやないんですよ、」と丁度そこへベルの鳴る入口の格子を開けて這入つて來た阿珂丸に向つて言つた。その聲が少し皺枯れた、田舍訛りのある、此方の好感を打壞すやうなもので、彼は稍々落膽したが、近附いてもう一度見直しても、その顔の美しさは矢張り彼の第一印象を決して裏切らなかつたので、心の中で、これはどうも、どうしても、どんな部屋を見せられたところが、斷れないなと思つた。彼は靴脱も何もないタタキから、一直線に部屋々々に通じてゐる廊下に上つて、その丸髷の女の後から附いて行つた。彼女は彼の眷戀にも、少し小柄過ぎるやうであつた。それに、後から見ると髷の根が緩んでゐると見えて傾いて蹈け氣味であつた。そして斯ういふ家に不似合にも、お召の着物を引きずるやうに着てゐる恰好が、多分お妾でゞもあるのだらうが、稍々だらしなく見えた。が、それ等のどれもがこの際の阿珂丸には一つの魅力であつた。

さて、案内されたのは入口から直近くの第三號といふ部屋であつた。廊下に面した部分が四枚の障子である外は、一方

が灰色の壁で、一方は隣室と半分づゝに分けられた床と押入で、雨の日は随分暗いだらうと思はれる。全く箱の一方に障子を嵌めたやうな味氣ないものであつた。然し先程から述べたやうな心理狀態にあつた我が赤木阿珂丸は、それを批判してゐる餘裕を全く失つてゐたので、型の如く間代と食料とを尋ねることも、手附の金を渡すことも、殆ど夢中の間に行つて、その場で早速借りることに定めてしまつたのである。すると、その時、

「花子、花子！」とお上は居間の方に向つて叫んだ が、返事がなかつたので、手をたゝいて、もう一度「花子、花子！」と呼んだ。

阿珂丸は話も一通り濟んだので、さよならを言はうと思つてゐた丁度その時に、このやうにお上が用あり氣に手をたゝいてゐるので、立ち兼ねてもぢ／＼してゐた、と共に、彼女が今呼んでゐる花子といふ言葉が、ふと彼の好奇心を刺戟した。何故と言つて、花子といふ名で呼ばれる女中を想像することが出來なかつたので。おや、花子……花子といふのはこのお上の妹でゞもあるのか知ら？ 若しさうだとすると……と彼は考へた。が、妹は妹でも案外十三四歲の小娘かも知れない。……

「花子！ ゐないのかい、お蘭、お蘭！」とお上は勘走つた聲で呼びつゞけた。その聲が皺枯れてゐる上に、調子が餘り上品でないのが阿珂丸に少しづゝ幻滅を感じさせた。が、彼は考へつゞけた。ほうら、お蘭といふのが女中の名だ。花子——花子といふのはこのお上の妹か、或ひは親類の娘かに違ひない。どんな女だらう……

すると、そこへ廊下に足音がして、

「お呼びかい？ 花子は今奥の方へ行つてるんぢやないんですかい？ お蘭は使に行つて留守なんだが、何か用事ですかい？」と言ふ、思ひの外の姿が廊下に現はれたのである。それは腰の曲つた、見るからに痛々しさうな老婆であつた。どうもその言葉附から推すと彼女はお上の母親らしくもあつたが、お上の着物と著しい對稱をなして、乞食のやうな襤褸

を身に纏つてゐるのと、三歳位の、これも亦汚らしい赤ン坊を負ぶつてゐるのとが、彼女の惨めさを一層引立てゝ見せた。

「まあ、お婆さんかい、」とお上は顔を顰めながら、「お茶がほしいんだが、花子を探しておくれよ。花子にお茶を持つて來さして頂戴な。」

「いや、僕は、ぢやあこれから歸つて、今夜か、若しかすると明日の午前中に引越して來ますから。」と阿珂丸はおど〱しながら言つた。彼はその老婆の現れた時から一層この家に厭氣がさしかゝつて來た。事に依つたら、少し位の手附金位犠牲にしても、引越て來ることは止めようかとさへ思つた。そして形ばかりに引止めるお上に挨拶して立上つた。と、彼が部屋を出合ひ頭に、奥の方から、それが花子に違ひなかつたところの、二十歳がらみに見える、何方かと言ふと女學生上りのやうな體裁の女と、ぱつたり顔を合はした。彼はそこで再び狼狽して、夢中で頭をぴよこりと下げた。

「入らつしやいませ、」と女の方では馴れた調子で挨拶を返した。

「花子、あんなに呼んだに何處へ行つてたんだよ？」とその時阿珂丸の後から突然お上の斯ういふ聲が起つたので、花子ははッとした樣子だつた。

が、阿珂丸は一切夢中であつた。何故と言つて、若し彼女等が姉妹であつたところが、それは少しも似てゐなかつたが、花子も亦美しい女だつたから。彼女はお上と違つて大柄で、何方かと言ふと太り肉で、お上が面長であるのと對稱して丸ぽちやであつた。そして又お上の蓮葉な風の反對に垢づいた木綿の着物を着てゐた。それにも拘らず彼女が十人並以上の標緻を持つてゐることは誰にも分つた。が、實を言ふと、赤木阿珂丸はその時はそんなにはつきり彼女の樣子を觀察してゐる餘裕を持たなかつた、唯打たれたやうにはッとしただけであつた、そして汚れた紺絣の被布を着てゐたことを見たゞけであつた。被布、――それも昔の老人のそれのやうな、或ひは水兵服のやうな、首の後に垂れが附いてゐたのをち

らと見て變に思つたので覺えてゐたのである。
が、言ふ迄もなく、花子を見た瞬間から、先程迄の彼の考は一變して、阿珂丸は矢張りこの家に來ることにしようと心で決めた。「ぢやあ、今夜か、明日の午前中かに……どうぞ宜しく」と彼ははにかんだ、優しい聲で言つて、二人の女に後から見送られてゐる意識で、出來るだけ氣取つた恰好で、その家を出たのである。

その翌日から赤木阿珂丸はこの大井の家の下宿人となつたのであるが、彼が最初にこの家を訪問して歸る時、二人の女に見送られて、『はにかんだ優しい聲で、出來るだけ氣取つた恰好』云々と私は書いたが、その態度がそれからずつと彼がこの家に住んでゐる間中つゞいたのである、この事は彼の人生を調べるのに見逃すことの出來ない一つの特徴であることを私は言ひたいのである。それを考へると、私はいつもだんだら筋を聯想するのが例であつた、だんだら筋といふのは、旗の竿とか、祭の柱とか、馬の手綱とかに使はれる、紅白にせよ、黑白にせよ、あの一筋づゝ交替になつて列なつてゐる染模樣のことである。だが、突然こんな突拍子なことを言ふのは、唯に讀者の頭を混亂に陷れるばかりであらうから、それを簡單に說明して言ふと、彼は母の腹から生れた時から五六歲までの間は、手に負へない我儘な、强情な、そして亂暴な子供であつた、すると、それから小學校に這入る迄の一二年の間は急に病身者のやうな、溫順しい、意氣地のない性質に變つたやうに見えた、ところが、學校に行くやうになつた時分から、又々やんちやんな少年に後戾りしたのである、それが尋常科から高等科に移る時に、家庭の都合で學校を變つたことが動機となつて、それを境目にして、忽ち神妙な少年になつてしまつた。ところが中學校に這入つた時から、又もや暴れ者の組に這入つて、小學校時代の友達に目を見張らしたことがある――と、大體斯う言つた風で、實際規則正しく、彼は何か彼かその境遇が變ると共に、神妙からやんち

やんへ、やんちやんから神妙へと移り變ることに定つてゐた、私が彼の人生をだんだら染と形容したのはそれを意味するのである。

これは一見甚だ奇異な現象のやうには見えるが、その理由は割合に簡單で、言ふのは、彼の氣弱と、それが必然的に持つてゐる反抗的氣象と、それから神經質と、敏感と、飽き性とがこんがらがつて形造られたものに違ひなかつた。例へば彼が尋常小學校を卒業した春に、風引から肋膜と心臟との病氣を起して、半年ばかり寢てしまつたことがあつた。丁度その病氣になる前に、彼の家が同じ市の中ではあるが、一里ばかり離れたところに引越したので、自然今までの學校へ通ふのにもそれ以上の道を歩かねばならなかつた、當時は未だ今日のやうに電車のなかつた時分だつたので、生れ質そんなに丈夫でない彼には隨分とそれが重荷に感じられた、そのうちに今言つた病氣に罹つたのである。病床を離れたのは十月のことであつたが、彼は出來ることなら、學校を一年遲れたくないと思つたので、引越して行つた先の近くの小學校へ、或日祖母に連れられて、轉校と入學との許可を受けに行つた。すると、その兩方の頰より遙かに長く突き出た厳めしい口髭を生やしてゐる校長が言ふには、「今からやると言つても、もう後十一、十二、一二三と五ケ月しかない。それに尋常科から高等科へといふ大きな變り目の時だから、とてもその五ケ月の間に遲れた學科を取戻して、外の者たちと肩を並べて進級するといふことは難かしいと思ふ……。」が、彼の祖母が答へて「それは萬々承知して居ります、勿論落第は覺悟の上のことで、唯これからその五ケ月を家で遊ばしておくのが無駄だと思ひますし、本人も退屈だと申しますので、御厄介でも若しそんな無理な事がお願ひ出來ますものなら……」

そんな風にして彼は新しい小學校の、突拍子もない中途から入學したので、同級の生徒たちの間に交つて妙に調和し難い孤獨に陷つた、學校がさうであつたばかりでなく、彼の家が先にも言つたやうに他所から引越して來たばかりのところで、而も半年もの間そんな病氣で引込んでゐたので、たまたま外に出ても、見知らぬ子供たちばかりが樂しさうに遊んで

ゐるのである、自然彼は家に籠つて學校の本かお伽話の本でも讀んでゐる外はなかつた、それに元々學課の方はこれ迄もよく出來た方だつたので、中に英語とか珠算とかいふこれ迄全然知らなかつた課目などがあつたが、それもどうやら斯うやら獨學で勉强して、同級の者に追つくことが出來た、そして翌年の三月には落第どころか、優等の成績をおさめて教師と級友たちとを驚かしたものである。(自分が僅々五ケ月の間にやつて、而も級中で三番の成績を得たのに、外の十二ヶ月もかゝつて、碌な成績をとらない五十人の生徒はどういふ頭を持つてゐるのだらう、而も怠けてゐることから言ふと、自分だつて少し勉强したのは初めの一ケ月で、後は主に當時の冒險小說を讀んでゐたのだ。――これが彼がその後他人を輕蔑する惡癖の附いた最初であつた。)更に彼が彼等を驚かしたことは、さういふ變つた境遇の爲に、元來が容易に人に親しめない性質の彼は、始終人々から離れて運動場の隅にしよんぼり一人で立つてゐる習慣になつた、自然、級友たちも彼を敬遠して、稀に彼の傍に寄つて來て物を言ひかけることがあつても、全然自分たちの日常語とは違つた、子供らしくない叮嚀な言葉遣ひで、それもほんの一言か二言か言ひかけるに過ぎなかつた、そして彼も同じやうな言葉で口數少なく應じねばならなかつた。そしてそれが中學校に這入るまで、三年の間つゞいたのである、初めは彼自身も窮屈であつたに違ひなかつた、が、いつとなくそれが彼の自然になつてしまつた。

だが、內心では矢張りどんなにか窮屈を感じてゐたと見えて、やがて中學に入學して、周圍の顏が變ると共に、赤木阿珂丸はその日から忽ち禮服を脫ぎ捨てたやうに變つてしまつた。それから五年の間、中學生としての彼は、猛勉强をする者を輕蔑し、教師に柔順な者を嘲笑し、そして彼自身はと言ふと、學校の脫け休みをしたり、女の話をしたり、柔道や野球の運動に凝ることを見えにして、好んでさういふ仲間の者を選んで交際した。だが、中で一つ、彼が苦心して彼等に隱さなければならぬことがあつた。それはさういふやんちやんな中學生の流儀として、悉く武張つた事に趣味を持たねばならなかつた筈であるのに、その頃から彼は密かに文學に心を取られてゐたので、學校を脫け休みして仲間の者と野原を

駈け廻つたり、ベースボールをしたりする附合ひと共に、後の半分をそつと市立の圖書館に出かけて行つて、星や月を歌つた新體詩や、男女の戀愛を題材にした小說を讀むことであつた。そんな時、

「おい、赤木、昨日は君は何處へ行つた？」と仲間に聞かれると、

「うむ、昨日か。」と彼は狼狽を隱しながら答へた。「昨日は一寸單獨行動を取つたんだよ。いづれ成功した上で惚氣でも聞かすから待つてろ。」

「少年か、それともドオターかい？」

「眞言秘密だ。そのうち分るよ。」

やがて中學校を出て東京に來たのであるが、すると彼は今迄の中學生流の武骨を裝つてゐた着物をさらりと脫ぎ捨てて、遺憾なくセンチメンタルな文學書生になり切つたのである。——即ちこれ等の例でも分る通り、私が彼の人生を表面上から見て、それをだんだら染に譬へた所以である。そして彼が神樂坂の下宿から高——町の入井の家に引越した時がつまりそのだんだら染の一つの變り目だつたと見ることが出來るのである。

阿珂丸は然し學校に出なかつたことは、以前の神樂坂時代と少しも變らなかつた。が、變つたのは、こゝでは彼は同宿に一人も知合ひの人を持たなかつたことと、それに宿の家の人たちに對してそんな風に最初に固くなつてしまつたので、小さくなつてその箱のやうな部屋の中に閉ぢ籠つてゐたことであつた。郵便を入れることも火種の催促をすることも、そんな事はお蘭に命じたらいい譯なのであるが、それすら遠慮されたばかりでなく、自分の姿をあのお上や花子や、その外この新しい家の人々の目に晒すことが、彼等が何と批評するかといふやうな事が氣になつて、風呂に出かけることはおろか、便所に行くのに廊下へ出ることさへ甚だ臆劫に考へられた。その癖、便所は彼の部屋から何處へ行くよりも最も近い位置にあつたのだが、何といふ變な建物であらう！ といふのは左側の角になつてゐる部屋と、反對の右手の隅にあつた

便所との間に、一枚の開き戸が附いてゐた、お胤にその譯を聞くと、「臭がしないやうにでせう、よく知りません、」と切り答へなかつた。ところで、そこから奥の方へは、その便所の前を左に折れて、直に又右に曲つて、その兩方に部屋々々を持つた一本の廊下が通じてゐるのであるが、その廊下への出口にも亦一枚の戸が附いてゐた。(間取圖參照)。然し、結局この奇異な構造は彼にとつて幸したことには、この開き戸の爲に、彼は便所に行くのに殆ど人に見られる氣遣ひがなかつたが、それだけ又不都合をも伴はない譯に行かなかつた、と言ふのは、わざ／＼便所へ來たものでなくても、例へば女中のお胤などが、この全く別の建物のやうになつてゐる奥の間へと行くのに、一度戸を開けて、又次のを開けて、そしてそこから向うの廊下へは床が一段低くでもなつてゐるのであらうか、とんと一つ強い足踏の音を立てるのが常であつた、そしてそれを一日のうちに幾度阿珂丸は聞かねばならぬか知れなかつた。實際、彼が或時便所へ行つた次手に、試みにそつと彼の方へではない戸を開けて、奥の方を窺つて見たところが、果してそこから向うは一段床が低くなつてゐるのを見出した、それが丁度夕方の時刻だつた爲か、廊下も、そしてその奥の兩側の部屋々々も變に朦朧として、薄暗くて、何となく神秘がかつて見えた。そこには毎日職工のやうな洋服を着て學校へ通ふ往復の度に、彼の部屋の前を乾度何か口の中で獨言を呟きながら通る學生や、或ひは默つて、然し特別にめき／＼と廊下を踏みしめて歩く癖の學生や、さては毎日日が暮れると、それは阿珂丸が神樂坂にゐた時分にその友達としたやうに、同宿の友達同志が一室に寄り合つて、飯の時に酒でも飲むのであらうか、その後で唄をうたつたり、拳を打つたり、躍つたりして騒いでゐる連中や――要するに世間にざらにある氣質の學生たちが住んでゐるに違ひないと見えるのに、その光景はさういふ普通の人間が住んでゐる所のやうには見えなかつた程だつた。

　だが、不思議に見えるのは、外の者から言ふと、却つて赤木阿珂丸であるかも知れなかつた。彼が來てから一週間にもなるのに、彼の隣室の二號の部屋にゐる、彼と同じ學校の工科の學生でさへ、未だ彼と顔を合はしたことがないのであ

る。それも無理はないので、彼は一寸廊下へ出る時でも、暫く障子の隙間から外の樣子をうかゞつてからでなければ、絶對はづみに姿を現さなかつた。――「あの人は風呂へ行つたことがあるか知ら？」と或晩帳場の居間で丸惣のお上がお花に言つた。「さあ、一度だか、夜遲く手拭を持つてお出かけになつたことがあるやうに思ひますけれど……」「學校へは未だ一度も行かないやうだね。文科だと言ふから毎月小說でも書いてゐるか知ら？」すると、お倫が傍から「朝から晩まで寢床の中で何か書いてるか讀んでるかしてますよ。」「何しろ變な、水見たいな人だね。風呂に行かないところなんか怪しいよ、」とお上が言つて、そこで女たちは顏を合はして笑つた。

實際、阿珂丸は毎日々々仕樣がないので、廊下に面した障子の方を枕にして、寢床の中にもぐり込んでゐた、さうすると、廊下を步く足音がすぐ頭の先を踏んで來るやうに響けて、殊に根太の惡い建物のことで、何か書き物でもしてゐる時は一時ペンを止めねばならぬ程であつた、と言つて、その方角にしか明り取りの窓がなかつたので、枕の位置を變へる譯には行かなかつたのだ。ところで、阿珂丸の實際を言ふと、彼は帳場の居間での噂の通り、讀んでゐるのはさういふ小說の類の本であつたが、書くことは全然違つたものであつた。――小說など書く奴は鬼に喰はれてしまへ！　小說などを書いて何になるものか、天下國家を益するどころか、自分一人の口を糊することさへ出來ないものらしいではないか、と言つて、そんなら俺は何をしようか、と彼は考へた。そして「俺は何をしようか、」と枕元の原稿紙の中に書いた。同じ斯ういふ道樂商賣をやる位なら、畫かきの方が餘程いゝな、と彼は考へた。すると「畫かき、」「畫工」「畫師」「美術家」などといふ字を無數に並べ始めた。さうだ、俺は中學時代には組の中でも最も畫が巧いと目されてゐた、實際俺には多少畫才があることは確かだ。然し畫家と言ひ小說家と言ひ、引つくるめてつまり藝術家といふものは、成る程、俺が志を立てゝ國を出る時に親類の誰彼が意見して言つた通り、全く不生產的な、有害無益な存在に違ひない。もつとも國家や社會に有害無益であることは俺に大した痛痒ではないが、その爲にそれだけの報酬を受けて、つまり乞食と隣同志のやうな生

活をしなければならなくなると、これは堪へものだぞ、金が欲しいな、金が……「金、金、money, Geld, l'argent」などと原稿紙の上に走り書をつゞけた。

　或時は彼は同じ原稿紙の上に頻りに算用數字を並べて、不思議な計算を始めてゐることがあつた。それは一年餘り前のことで、彼が國の方の或友人と養豚事業を計畫したことがあつたが、半年ばかりその事で頭を惱ました末、結局はお流れになつてしまつたが、それ以來彼は文學に厭氣がさして來ると、その時の、今でも彼が有望な事業だと信じてゐるところの、素晴らしい勢で繁殖して行く豚の計算をすることを樂しんでゐるのである。先づ最初に數疋の牡豚と二十疋の牝豚を買ひ入れるのであるが、それが平均一疋で八疋づゝの仔を生むといふのだから、忽ち二八、百六十疋になるのである、それが半年に一度づゝ產をする上に、生れた仔豚も一年半經つと仔を生み初める、それが矢張り半年目毎に一疋が八疋づゝになつて行くのである。ところで、事業としては、生れた仔のうちで六疋を賣り物にして、二疋を繁殖用にとつておく、中で牡一疋に牝を何疋の割合にするとか、計算は次第に面倒になつて行くのであるが、それが面倒であるだけ、それだけ智慧比べの遊びのやうな愉快さを彼は覺えた、そして半年目に一疋が八疋づゝ八疋づゝと、無限の末廣がりに殖えて行くこの計算は又無限につゞく譯であつた。が、幾ら愉快であると云つても これを二時間もつゞけてゐると、目と手とが次第に疲れて來て、その結果はいつの間にかペンを置いて寢てしまふのが習慣であつた。――だが、どうして彼のやうな、一見詩人か畫家のやうに髮の毛を長くした、女のやうに優しい物腰の、この溫順しい下宿人が、そんな計算に時を潰してゐようとは想像し得たらう？　彼がそんな時、若し廊下に花子かお蘭かのものらしい足音がすると、必ず念の爲にその計算書の原稿紙を他の原稿紙の下に隱して、何喰はぬ顏をして、「拜啓、その後は御無沙汰、」と新しい原稿紙に書き始めた。そしてその足音が彼の部屋を素通りにした時には、彼は再び先の計算書に戻ることもあるし、又彼女等の一人が實際に食膳を運んで來るか、郵便でも屆けて來るかして、彼の部屋に這入つて來た時は言ふ迄もなく、そのまゝ素通りした時でも、

それを機會に「その後は御無沙汰、」の後に、さあ、誰に出さうかな、と一寸その宛先を考へてから、手紙の先をつゞける事もあつた。

が、そんな暫く事にも、或ひは讀む事にも飽きて、枕に頭を載せて仰向きになつてゐる時は、ふと隣の二號室の男は實に靜かな男だな、といふやうな事を考へた。多分工科などの學生に有勝な、外に考を散らす何の趣味も持たなくて、學科の勉强の外には唄一つうたふ能もない男なのであらう、と思つた。が、その男に就いての思案はいつの時でもそれ切りで、その次には定つて、彼がこの家中で顏を見知つてゐる數人の人たちのことを、そのうちで女中のお蘭だけは傍に置いて、美人のお上とお花に就いて、長い間かゝつて想像することを好んだ。然し想像だけではこれも決して或程度以上に進むことが出來なかつたが、或日、女中のお蘭にふとした機會で、然し彼はその時隣室の學生が確に留守中であることを知つてゐた、だからそれは決して偶然ではなかつたかも知れないが、兎に角、割合に樂な調子で、

「君、花子さんはお上さんの妹なの？」と聞くことが出來た。

「いえ、私もよく知りませんけど、從姉妹だつてことです、」とお蘭は答へた。

「あの赤ン坊はお上さんの子？」

「いゝえ、それも私よく知らないんですが、花子さんのぢやないんですか。」

「ぢやあ、あのお婆さんは？」

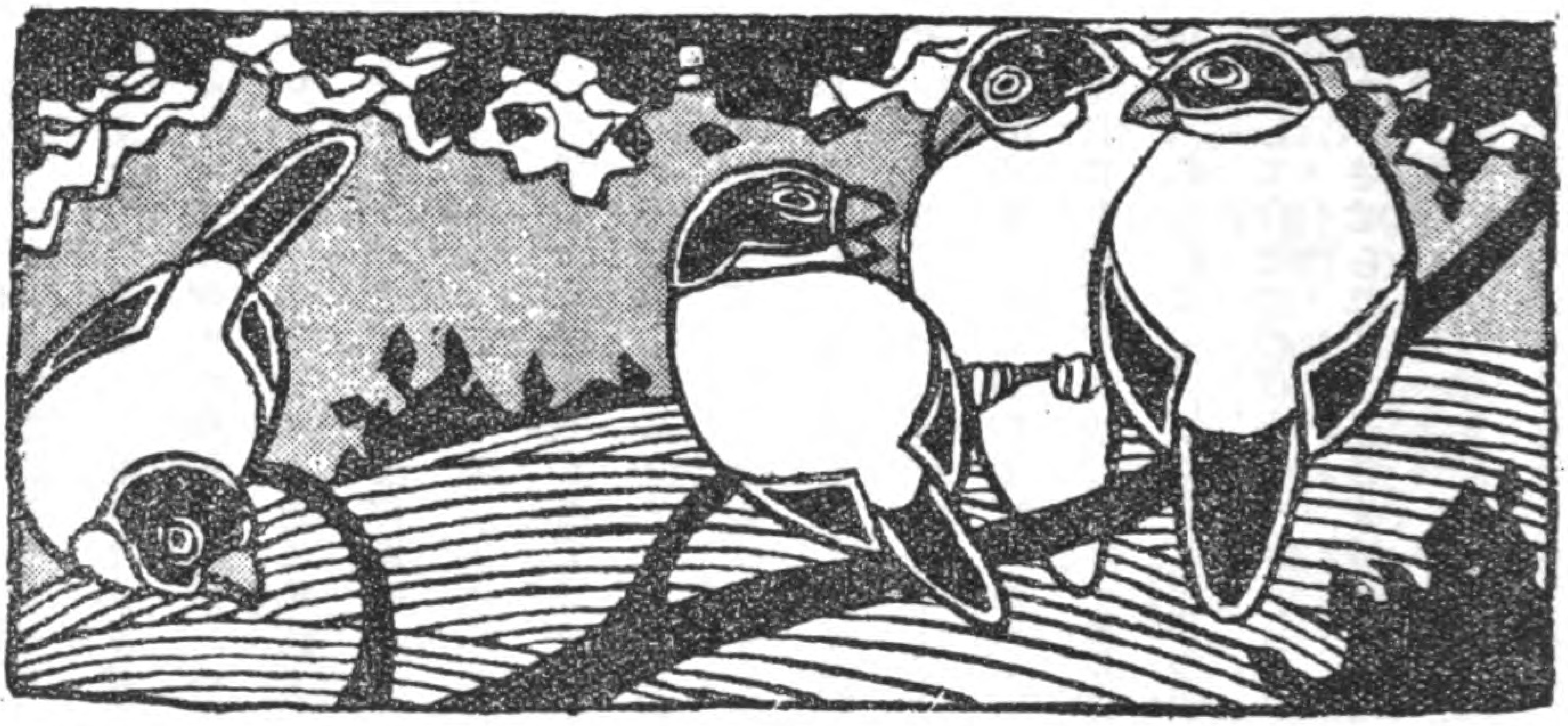
「あの人はお上さんの叔母さんです、花子さんのお母さんです。」

「ぢやあ、君は？」と阿珂丸は餘り眞面目な調子でこんな事を尋ねてゐたのに氣が付いたので、氣分を輕くする爲のやうに、最後にこんな風に言つて見た。

「私？　私は唯の女中です、」とお蘭は氣取つた樣子で笑ひながら答へた。

が、この問ひも全然出鱈目のものではなかつた。と言ふのは、花子がいつも垢染みた木綿の着物を着て、白粉氣のない顔をしてゐるのに、お蘭は不斷でもまがひ物ながら銘仙の着物などを着て、そのしやぐまのやうな縮れ毛の髪を恥ぢもしないで、鼻の低い丸い顔を眞白に化粧してゐるばかりでなく、どういふ譯か、夜になつて用事が暇な頃になると、屢屢例の奥の部屋で酒を飲んで騒いでゐる連中の中へ交りに行く樣子だつた、而もそれがお蘭だけかと思つてゐたら、或晩などお上もそこへ行つてゐたと見えて、十二時過ぎに醉つ拂つたお上がお蘭に介抱されながら、例の便所の前の戸をばたんばたんと激しく音させて、奥の方から阿珂丸の部屋の前の廊下を通つて、居間の方へ歸つて行つたことがあつた。そして、そんな時、外の部屋の客が用事があつてベルを押すと、相變らず粗末な裝をした花子が、浮かぬ顔をして「お呼びですか」と聞きに來るのが常であつた。——實際、何から何まで風變りな下宿屋に違ひなかつた。

（つゞく）



蜘蛛の國の話

藤森成吉

有名な蜘蛛の國のお話をしませう――。

昔々、蜘蛛の國の九百九十九代目の王様の御代のことです、お妃とのあいだにお生れになつた十何人かの澤山の可愛い王子や王女さまが、どうしたわけか、あとからあとからみんな歿つてお了ひになりました、そのたんびに、子煩惱の王様とお妃とは、御自分もお歿りになるかと思ふほど、悲しがつて、めつきり老けて白髪におなりになりました。

たうとう一番おしまひのお子様が歿つた晩、お二人は立派な御殿の一番奥にある神殿の前へ行つて、金の蠟燭立てに星のやうに蠟燭をお點けになつて、一緒に泣きながらお祈りをなさいました。

「貴い神さま、どうぞ、私たちにもう一度子供をお授け下さいまし、たツた一人でよろしう御座います、私たちは死んでも少しも構ひませんが、もし誰も後繼ぎがありませんと、どうして大事な人民たちが此の後くらして行けませう、それを思ふと心配で、私たちはどうしても安心して眼をつぶられません」――。

きつと、お二人のまごころが神さまにわかつたのでせう、すると、その明けがたになつて泣き疲れてうとうととねむつてゐるお二人の前へ、神さまが老になつてお現はれになりました。

「そんなに後繼ぎが欲しければ、西北の方角の、金色の柏の木の下の、今年十六になる子供をつれて來て王子に立てるがいい、その子こそ、ほんとに萬代までのお前たちの國を建てるだらう。」

そう仰つて、神さまは霧のやうに消えておしまひになりました。

王さま達は、眼がさめて大へんお喜びになつて、早速御家臣にいひつけて、神さまのお告げどほりの子供を探させました、すると、ぢき金色の柏の木が見つかりました、子供と云ふのは、その木の下の穢らしい小屋に住んでゐる、年とつた貧乏な百姓夫婦の中の、たつた一人の男の子でした。

御家臣たちは、早速その子供を用意の白馬の上へ叮嚀に乘せて、御殿へ連れて來ました、百姓夫婦も子供も──子供の名は「金目」と云ひました、──大へん別れるのを悲しがりましたが、王さまの……おまけに神さまのお言葉だと云ふので、どうするわけにも行きませんでした。

何しろ貧乏な百姓の子で、學校へも行けずに毎日お父さんやお母さんの手傳ひをしてゐたもんですから、金目はどこもかも日に焦けて、おまけに垢で眞黑でした、が、御殿へつくと一緒に、金目はすぐと御殿の中の水晶でこしらへた湯殿の中へ入れられて、匂ひの高い香水の湯ですつかり身體を洗はせられ、髪の毛を綺麗に梳かして、貴い油をつけられました。さうして今までのぼろシャツとは打つて變つた、眼のさめるやうに眞赤な、まはりへ黄金色の飾べりを取つた絹の着物に着かへさせられて、王さま達の前へ連れて行かれました、王様は、金目の髪をお撫でになつて、その上へ眼も眩むばかり澤山の寶石を飾つた冠をお被せになりました、と、雲のやうに並んだ御家臣たちは、それを合圖にみんな三度「萬歳」をとなへました、──さうやつて、金目は一飛びに蜘蛛の大王國の後繼ぎになりました。

金目は、何もかも夢のやうな氣もちでした、いや、夢よりかまだ大變な、何だかわけのわからない事でした、今まで繪のほかには見たこともないやうな立派な御殿、美しい部屋から飾りつけの道具、着物、持ち物、さうして食べ物と云つたら、そんなお料理がこの世界にあることさへ金目の知らなかつたやうな毎日の御馳走、それから澤山の賑やかなお附きの御家臣、音樂、踊り、繪、儀式、……さう云ふ中で、二月ばかりはまぼろしのやうに經つて了ひました。

金目は、そのうちだんだん馴れて來ました、怖かつたものが怖くなくなり、いろんなことがほんとに氣に入つて面白くなりました、それに、王さま初めみんなは大事にしてくれますし、何か欲しいと思ふものがあれば、どんな物でも一言云へばすぐ持つて來てくれますし、ほんとに昔お父さんやお母さんからきいてゐた極樂と云ふ處は、ここの事を云つたのぢやアないか、とまで思ひました。

が、さうやつてうれしく思ひながら、金目は何だか一つ物足りないものがある氣がしました、それは、これ、と云つてはツきり云ふことの出來ないものでした、ふだんは忘れてゐながら、何かの時ふツと、その「わけのわからないもの」は、丁度輝いたお日さまへ雲がかかつたやうに、金目の心を急にさびしくしました。

ある日のお午過ぎのことです、空の眞靑に晴れたいいお天氣でしたが、丁度その午後或る宮中の儀式があつて、王子も列らなければいけないことになつて居りましたので、金目はそとへ遊びにも出られずに、晴れの衣裳を着たまゝ衣裳室の窓へ倚りかかつて、何げなくそとを眺めてゐました。

と、その高い窓の向ふは、大理石の塀を越して丁度御殿そとの往來になつてゐましたが、そこへ一團りになつた穢い四五人の子供がやつて來ました、子を見ると、それは金目がまだ田舍にゐた時分、散々いろんなことをして一緒に遊んだ友達でした。

「おい、おい、みんな達!」

向ふの方ではちつともこつちに氣がつかずに通りすぎやうとするのを見て、金目は大聲で窓から呼びました、その聲で子供たちはびつくりしたやうに上の方を見ました

「どこへ行くの、君達は。」

金目はつづけてききました、その時、金目はもうすつかり、昔の氣もちになつてゐました、儀式のことも何も忘れて、みんながどこかへ行くと云へば、自分もすぐと飛び出してゆくほどのつもりでした。

「…………。」

ところが、子供達は、まるで云ひ合はせでもしたやうに誰も一言も返事をしませんでした、そうして、何かひどく怖いものでも見たやうに、みんな一齊にバタバタと駈け出して、あとも見ずにどこかへ行つて了ひました。

金目王子は、それを見てびツくりしました、一たい、みんなどうしたんだらう、昔は散々一緒にあそんで、誰一人自分をこはがるやうな顔をした者はなかつたのに、——それとも、もうみんな自分を忘れて、誰かちがふ人間と見ちがへちやつたのかしら、だが、自分は一向忘れちやアゐないに、をかしいなア、……そう思つて、王子は何だか自分一人取りのこされたやうな氣がして、ぼんやりしてゐました。

と、つづいて、往來を又一人白髪のお爺さんがやつて來ました、お爺さんは、眼ざとく金目王子を見つけて、下から窓の方へ向つて最敬禮をした、そうして、默つて向ふへ行きかかりました。

金目は氣がついて見ると、それは、もと金目がお父さんお母さんの家にゐた時すぐ隣りの家に住んでゐたお爺さんでした、やつぱり貧乏でしたが、ほんとに親切ないい人で、おまけに話上手で、よく暇の時は金目たちにいろんな面白い話を聞かせてくれた、金目の大好きなお爺さんでした。

「おや、どうしんだらう……お爺さん、お爺さん！。」

金目は、昔とはまるで變つたお爺さんの様子を見て、あきれ返りました、そうして、あわてて呼びとめました。

と、お爺さんは又ヒョイと、立ちどまつて、こつちを向いて、叮嚀に最敬禮をして、黙つて行つて了ひました。

おぢいさん、いつの間にか氣でもちがつたのかしら、昔なじみの僕へ向つて、まるで普通の御殿の人達でもするやうな、あんな鹿つめらしい、よそよそし、お辭儀なんかして、おまけに、こつちから呼びとめるのもきかずに、ずんずん行つたりして、……さつきの友達と云ひ、おぢいさんと云ひ、今日はほんとに變挺な日だなア、――金目は、なんだか堪らなく淋しいやうな氣がして來ました。

その時、往來にごろごろと荷車の音がして、今度は一人の田舍々々した百姓女がやつて來ました、都へ野菜でもつけて賣りに來て、今歸つて行くところらしく、その引ツぱつてゐる空車の上へは、青い風呂敷包みがたツた一つ載ツかつてるきりでした。

「おや、あれは村はづれの糸おばさんだな。」

そう金目が思ふ拍子に、糸おばさんの方でもひよいツと上の方を見あげたので、二人の眼がぴツたりかち合ひました。

「おや金公………。」

おばさんはそう云ひかけて、急に途方にくれたやうに黙りました。

「糸おばさん、久しぶりだツたねえ、村の人はみんな相變らずかい。」

前の連中とちがツて、今度は向ふの方から先きへ然かも昔呼んでくれてゐた言葉そツくりで聲をかけてくれたおばさんを見て、金目王子は何とも云へないなつかしさがコミあげて來ました。

「コツちは相變らずだが、……おお、お前さんはえれえ變つたなア、まるでへえ、おらアたちたあ違つた人間になつちまつたね。」

おばさんは、つくづく感心したやうに云ひました。

「おばさん、よかつたら中へ入つて遊んで行かないか。」

「どうして、おらにそんな事が出來るもんかね。」

「どうしてよ。」

「昔の金公ぢやアなく、今はへえ、お前さんは王子さまだもの、へえ、おら達の仲間ぢやアねえもの。」

「そんなことがあるもんか、僕ア昔どほりの金目だよ、おばさん。」

「と、とんでもねえ………。」

そう云ふと、おばさんは急いでごろごろと車をひいて行つて了ひました。

金目王子は、その遠くなつてゆく車の音をきくと、パタツと或るものへぶツつかつた氣がしました、そうして、急に火のやうに眞赤な上衣を脱ぎ棄てると、蝗のやうに衣裳室から飛び出して、階段を駈けおりて、庭の門をくぐりぬけて、跣足で一散に自分の田舍の家の方へ走つて行きました。

×　×　×　×　×　×

それツきり、金目王子はもうどうしても二度と御殿へ歸りませんでした。

そのうちに王様もお歿りになりましたので、蜘蛛の國の御殿には王さまと云ふものがなくなり、國一番の大金持ちだつた王様のお持ち物は、みんな人民の中へ平均に分けられ、それに從つて、國ぢうの金持ちもなくなつて、みんなが誰も平等にしあはせに一緒にくらすやうになりました。

これは「金目王子の話」と云つて、蜘蛛の國では誰知らぬもののない、名高い「古典的な」昔話です。

夏の夕日のほのめく頃、もし庭か林の隅に立つて、靜かに耳を澄ませておいでになれば、涼風にゆられながら銀色絹の寢床の上で子供に話をしてきかせてゐる蜘蛛のお母さん達のこの昔話を、きつとお聞きになられる事でせう。

（兒童用演劇稿）

12、2



黒谷夜話

中里介山

一夜を鳥羽の戀塚で明かした鎮西の樂光房は其の翌朝またつく〴〵と考へた。

黒谷に法然上人を訪ねる前に高尾山にのぼつて文覺上人を叩いて見やうか知ら、法然上人に就ては今まで名聲のみを耳にして絶えて缺點といふものを聞いてゐない、高尾の上人は戀に狂ふて人の妻を奪うてこれを殺したのである。生れるからにして大法の器を身に備へた上人よりも、人間の罪業の血を嘗めつくした遠藤武者盛遠その人が、われには更になつかしいのではないか。

いや〳〵、法爾自然の器と稱へるのは、たゞそともの皮相だけをながめた渇行者流のいふところで、黒谷の上人は高尾の上人のやうに、現はれたる惡業こそなけれその内心の邪惡は、それに幾倍越すものであつたか知れない。四十三の歳までは、惱み〳〵苦しみ苦しみ通しの生涯であつて、どうにも斯うにも仕方なく〳〵、溺るゝものが藁を摑む心が、盲さがしに一切經を引かき廻して偶然その手に觸れたものが善導大師の觀經疏で、この盲龜の浮木が偶然にも淨土一宗の柱となつたのだ。して見れば、人の妻をこそ奪はず、人の命をこそ取らず、日本第一の那智の瀧に

紛れ込んで前代未聞の荒業といふことも爲さなかつた其の人の内心は有ゆる邪淫と殺人と、業苦とに侵染されつくしてゐたものに相違ない。誰か罪なくして救を叫び得る、法然上人の心胸を開いて見せてもらひたいのは其の四十三までの血肉だ。

彼の上人が今まで幾人の女性を犯し、幾人の人を殺し、幾度那智の瀧に打たれたかといふことを見せてもらひたい。文覺上人の振舞は歴々として誰の眼をも蔽ふことが出來ないほどに强烈である、彼の黒谷の上人の犯せる罪は人が知らざる故にこそ、いよ／＼深いものではあるまいか。

斯くて此の出家はふら／＼と京都の町へ迷ひ込んだ。黒谷へ行つたのか、それとも高尾へのぼるつもりか、ふら／＼と京都の町に呑まれて姿が見えなくなつた。

それとほゞ同じ位の日に、東の方から馬に乘つて京都の町へ入り込んだものがあつた。馬は可なりの逞ましい馬であるが乘つてゐる人は極めて小さい。これは熊谷次郎の從者として東海道を同行して來た小兵太である。

小兵太は騎馬で三條橋の袂までやつて來て、きよろ／＼と京都の天地を見廻しながら呟いた。

『おれは長者の女御殿から立つて頼まれて斯うして京都へやつて來たのだ、本來、守護の役を仰せつかつてゐながら、女を殘して置いて、おれが上つて來るといふのは心元ない事だが、あの女が死ぬの生るのと云つて泣いて頼むから、つい斷りきれずに京都まで御使者の役に立つたわけだ、さて、これから如意ケ嶽の麓とやらに隱れてゐるあの姫の戀人をたづねるのだが、見廻す處、屛風のやうに山々が立て圍んでゐるが、如意ケ嶽とは一體どれだ、誰かに聞いて見やう』

小兵太は馬から飛び下りて、道を通る人に如意ケ嶽をたづねると、少し後ろへ振り返つて東山の奥に當る最も高い峯がそれだと聞いて成程と合點し、再び馬には乘らずに馬の口を取つたまゝで指し敎へられた方角へ進んで行つた。

目と鼻の先のやうに敎へてくれても如意ケ嶽の麓までは可なりの道のりがある。幾時かの後やう／＼に尋ね當てた。

木立の中を分けて行くと閑寂なる一小寺の庭へ出た。

『頼もう。羽林の君がこのあたりに佗住居をして居らるゝの由承つて尋ねて参りましたが、若しや御存知ならば案内を願ひたい』

寺の小坊主が破れた軒の下から出て來て

『あなたは、どちらからお出でになりましたか』

『東海道の手越の宿の長者の家から、たつての頼みを受けて、羽林の君へおとづれを致したのでござる、直々に其の御消息をお申渡致したいと思つて参りました』

『はい、羽林の君は當寺においでなさいます、しかし、只今はおいでになりません、程なくお歸りにはなりますが』

『どちらへ参りました』

『此の山上へ、おひとりで散歩にお出でになりました』

『此の山上へ、これは如意ケ嶽といふのですな』

『えゝ、如意ケ嶽です、羽林の君は、こゝへお出でになつてから、風雨さへ無ければ毎日一度づゝは必ず此の如意ケ嶽の頂邊まで御参詣になるのがきまりです』

『成程、それでは此の如意ケ嶽を上つて行きさへすれば羽林殿にお目にかゝれるわけですね』

『さうです』

『では、やつがれが此れから一つ上つて行つて直接にお目にかゝりませう、突然に罷り出でゝも驚きなさるやうな事はないでせうなあ』

『えゝ、お出でなさいまし、此の頃は何事にも御用心をなさいませんから、知らない人が突然にたづねても厭がられるや

うな事はありますまい』

『では、山へ上りませう、濟みませんが此の馬をそこらへ繫がして置いて下さい』

『何處へでも』

『有難う』

小兵太は大きな櫻の幹に馬をつないで置いて單身如意ケ嶽へと上つて行つた。やがて頂上へのぼりつめると早くも何かの社の前の大きな石に腰かけて、鏡をながめてゐる品の高い一人の若い人を認めた。小袖に袴ばかり着けて烏帽子もかぶらずにゐたが、年の頃は廿幾つかの公卿さんで氣品のある面やつれした風情で、不意によつて來た小兵太の姿を、やゝ動搖の色でながめてゐたのであつた。

『御免なさい』

小兵太はその前になつて衿を改めたつもりで粗雜な坂東言葉を幾分か愼んだものであつた。

『何ですか』

『あなた樣は若しや羽林の君と仰有るお方ではございませんか』

『はい、お尋ねの人かも知れません、何ぞ御用ですか』

『やつがれは東海道手越の驛から參りました者です、彼の宿の長者の女から、強つての賴みを受けておとづれを此處に齎しました』

『ナニ、手越の長者の女から』

面やつれした若い公卿さんの頰に花のやうな色がさした。小兵太は懷中から一封の書を取り出して手渡した、若い公卿さんは悦ばしさうに其れを受取つたが、さりとて取る手をおそしと封を切つて見るでもなかつた。受取つたまゝでやはり

落着いて小兵太に話しかけた

『これは大儀でしたね、あの女は無事でゐますか』

『えゝ、まあ無事と云つて宜いでせう、併し無事といふだけで随分可哀相な境涯です』

『さうですか、今は手越にはゐない筈と思つてゐました』

『鎌倉の三浦殿へ預けられる筈なさうでしたが、やつぱり手越に歸らねばならなくなつた事情がありました』

『誰につれ戻されました』

『えゝ、それには一條の物語がございます、やつがれの主人と、やつがれと二人して東海道を辿り返して參りました』

『そなたの主人と、そなたとで……してそなたの主人といふのは誰ぢや』

『坂東に名ある勇士として知られて居ります熊谷次郎直實と申します』

『おゝ、その熊谷が、そなたの主人か、して、熊谷とそなたと、どうして明石を鎌倉からつれ戻つたのです』

『鎌倉からではございません、東海の足柄の麓で、ふと事件に引かゝつて、浮島ケ原へ來て、彼の女が、我々共の手に救はれたと申すやうな次第でございます、その次第を、もう少し委しく碎いて話りますと……』

小兵太は主人と共に鎌倉を抜け出して足柄の夜道をした事から、遂に浮島ケ原で天野の四郎の手から、明石の姫を取り戻して長者の家へ送り届け自分が守護の役目を仰せつかつた顚末を一通り物語つた。

『あゝ、さうであつたか、有りさうな事ぢやとは思ふてゐたが……』

若い公卿さんはホツと息を吐いたが、また眉根を曇らせて遣瀬ない色を漂はせ、

『さうして、彼女はあの宿にひとり殘されてをりますか、そなたに代る人が誰か彼女を守つてゐるのですか』

『えゝ、その事です、誰も然るべき人と云つては心當りが無かつたから、やつがれも、どうしても出抜け兼ねたのを、彼

女が、どうあつても、あなた樣へお消息を上げなければ、生きてゐないと云ふ悲しみ方が、あんまりお氣の毒ですから、つい見るに見兼ねて臼を飛ばして參りました、御用が濟めば、直にまた飛んで歸ります』

『いえ、間違ひはありますまいが、相手が相手だから……』

『御尤もです、執念深い事にかけては蛇のやうな奴だ、思ひ込んだら、何處までも仕返しをする奴だと、皆んな怖けをふるつてゐます、それだから、やつがれの主人熊谷も、篤とやつがれを見込んで殘されたのです、長者の家の者達も一にやつがれを信賴してゐるのですから、留守中、萬一の事があつては、全く以て此の小兵太の面目が立たない次第ですから、實はこゝへ來ても氣が氣でないやうな譯です』

『いや、それだけの用心さへあれば、さほど心配することはありますまい、折角、來たものだから都見物をしてお返りなさるがよい』

『さうしては居られません、此處で御返事を承つて直ぐ歸りたいものです』

『併し……此の手紙は、わしは見ない方が宜いと思つてゐます、見ないでたゞ宜しくと申傳へて下さい、わたしの生活ぶりは、そなたから今此處で見る通りの事を云つて下されば宜しい、夜はあの寺で書を讀み、晝は此の山へのぼつて都の空をながめてゐるだけです、暴力の來つて動かすことのない限りは此の境涯に滿足してゐます』

『それでは、やつがれの役目が立ちませぬ、賴んだ人の不滿足が思ひやられます』

『寂靜、恬淡、無爲を、ひたすらに樂んでゐると傳へたらそれに越した滿足はない筈ぢや』

『處が、彼女の求めてゐるのは、どうやら其れではござりませぬ、人間を戀しがつて悶えてゐるのが、ありありわかります』

『兎も角も、折角の使者のお役目に對し寺へ歸つて、返事を認めて差上げることに致しませう』

『どうぞ、左樣に願ひます』

『まあ、悠くりとなさい、そなたは此の都へ初めて上つたのですか』

『はじめて參りました』

『それでは、こゝから一通り都の天地をよくながめてごらんなさい』

『此處はながめの宜い處ですね、成程、山々に圍まれた間に繪のやうな建物が幾つも聳えてゐる……』

今まで人を見て景を見なかつた小兵太は此處に至つて洛中の天地に見とれた。

『すばらしいものだな』

王城の春に驚歎を禁ずることが出來ない。

『君の爲に、都の案内をして上げやう、これから眞直に少し外へは入つた所が九重の禁裡だ、あれから帶のやうに南へ流れて行くのが鴨川の流れだ、この山の下一帶を東山といふ　此の北の方を北野といふ、王城の地の左を青龍といひ右を白虎といひ前を朱雀ととなへ後を玄武と呼ぶことはそなたも知つてゐるだらう』

『左樣ですか』

『音羽の山、淸水……平家榮ゆる頃、太政入道の御所であつた六波羅の館はついそこぢや』

『はゝあ、六波羅の御所といつたのは其處ですか』

『燈籠大臣と云はれた小松殿の館はあの邊で名殘の小松が今も生えてゐる』

『山科の里、鹿ケ谷、比叡山』

『成程』

『遠く向ひの山が愛宕、森に隱れて見えないが廣澤の池といふのがあれにある、それから嵯峨野、嵐山、大堰川の水上、

大秦、梅津、桂川、松尾の明神、鳥羽、山崎、石清水、深草の里、醍醐、伏見、木幡、宇治……北野へ來ると雙ケ岡、御室、栂尾、高雄……』

『京の一條二條と申しますのは、どの邊ですか』

『禁廷の御前を烏丸の彼方まで、一條、二條、三條、四條…………九條まで』

『で六波羅河原と云ひますと』

『二條三條の最寄々々の鴨川の岸をその名によつて呼ぶのです』

『どれを聞いても、その一つ〳〵の名に、やつがれ共が關東で聞いてゐた土産話を思ひ出させないのはありません、此の都を眞中にして平家と源氏とが修羅の爭ひをしたのかと思うと劍戟の音が、たつた今此處まで響いて來るやうです、あの建物やこの社の間に兵火が盛んに起り、あの森やこの河原の間から旗差物が靡いた時の光景を思ひ起して、心なきやつがれの血が湧き立ちさうです』

『そなたは、まだ若い、それに東で名立たる武人の許に育つたから、それで兵戰の昔を思ひ出すも無理はないが、われ等はただ痛ましい事を知るのみぢや』

『いや〳〵、やつがれとても、徒らに興がるのではございません、強いのみ聞いてゐた保元平治以來の都のありさまを今日はじめて見たものですから、自然と胸が騷ぎ立つたのです、やつがれの親戚故舊には、保元平治この方、屍を關西の露にさらしたものが多いのです。それからまた戰から歸つて、夜な〳〵此の地の戰語をして聞かせる者が多いのです、その時に聞き覺えてゐた名前の多くが、こゝで目のあたり實際に現はれましたから、斯うして心がはづんでなりませぬ、何となく武者振ひが致しますのは、昔この地に屍を晒らした親戚故舊の者の魂魄が今もさまようてゐて、やつがれの心を唆るのかも知れません』

『山河は依然たるものだが人間の事は變る、取り分けてわしが物心を覺えてからの此の廿年は餘りに變り過ぎてゐる』

『あなた樣は平家の盛んな時と、その亡びた時と、源氏の世になるまでの變遷をよく御存知でせうな』

『知つてゐます、あの鹿ヶ谷に寄り合つて大政入道を亡ぼさんとした人達が捕はれて、或は斬られ或は流された騷動も子供心によく覺えてゐます、流人のうち成經と康頼卿だけが許されて俊寛僧都一人が鬼界ヶ島に取り殘された事、大政入道が數多の公卿の官職を奪ひ法皇を鳥羽殿に押込め奉つた事も、平家が一旦、都を福原にうつして、此の都が一時淺茅ヶ原となつた事も、源三位入道がそむいてやがて宇治の平等院の扇ヶ芝の露と消える間もなく、兵衛佐頼朝が伊豆から起り木曾の冠者が信濃より起り、此の都に亂入したことから天下の形勢は急轉したが、斯うして高い處から見下ろした光景は別段變つたこともない、三十六の峰が一つ崩れて消え失せたといふわけでもなく、鴨川の水が北へ向つて流れ出したといふわけでもない、今後何千年の間も此の山河は變るまい、此處の谷、こゝの森で臣が君を困しめ、子が親を殺し、叔姪相伐ち、強者が奢り、弱者が虐げられてゐた、併乍ら、此處へのぼつて動かない山河をながめ、夕陽の沈む西の空をながめゐると云はん方なき悠久と靜寂の思ひに打たれてしまふ、法然上人ならずとも、本當に此の世は穢土で一瞬の間、彼の淨土は無量壽の世界で無量の光明がかがやくことを思はずには居られない』

若い公卿さんは、小兵太の爲の好意ある案内が、自家の感慨に變つてしまつたのを氣がつかないで恍然として今更らのやうに西の空をながめてゐる。暫らく撫然としてゐた小兵太は何か急に思ひ立つたやうに

『もし、あなた樣は只今、法然上人の名をお呼びになりましたやうです』

恍然として感慨の世界に彷徨してゐた若い公卿さんは

『法然上人――』

にその名前だけを繰返して相變らず王城の天地をうつとりながめてゐる。

『それ〴〵、もう一つお聞き申したいことがあります、黒谷といふのは何處ですか。京都の黒谷といふ處、それを聞いて置きたいものです、此處から見ると黒谷は何處になりますか、見えますか、此處から其の黒谷が……』

『黒谷……おゝ、それはあの鹿ヶ谷の此方に眞黒になつてゐる森、あれが黒谷の森です、法然上人の念佛の道場があの黒谷にあるのぢや』

『それです〴〵、その黒谷の道場です、そこにやつがれの主人がゐます』

『え、黒谷に、そなたの主人が……あゝ、そなたの主人は熊谷直實であつたな』

『さうです、主人はその法然上人について道をたづねるのだと云つて鎌倉を立ちました』

『むゝ、それは意外な事を聞きます、わしはまたそなたの主人が都へ上つたのは鎌倉幕府の命を受けて、大番勤仕の爲に、でも來たものと思つてゐました』

『さうではございませぬ、出家入道の心持で鎌倉を飛び出してしまつたのです』

『さうして今、あの黒谷に來て居られるとは意外の事を聞きました』

『西への鎧にまさる紙衣、風の射る矢の透らざりけり、とたゞ一首を書いて、やつがれに屆けて吳れたゞけで、あとの消息は一向に參りませぬ』

『では そなた黒谷へたづねて見るがよからう。實はわしも月に三度は法然上人の講莚につらなる爲に黒谷へ行くのぢや、一緒に行かうではないか。』

『有難うございます、併し、よしませう、やつがれはまだ完全に任務を果してはゐないのですから………頼まれた役目を拋り出して來てゐるのですから、主人をたづねるのは遠慮しなければなりませぬ』

『要らぬ遠慮ではないか』

『遠慮と申すよりも意地でせう、坂東武者の習ひで、親討たるれども子は助けず、子は討たれても親がかまはぬおきてゞす、眼前に主人がゐても、その義でなければ會ふことを好みません、兎も角も、何はさて置いても、一刻も早く、やつがれは東海道へ歸らなければなりません、お返事を賜はりたく思ひます』

『では、そなたの意に逆らはず、わしは自分の心を形ばかりしるして上げるとしやう、山を下りませう』

『どうぞ願ひます』

羽林殿と小兵太とは相伴ふて如意ケ嶽を下つて程なく彼の古寺に着いた。

寺へ歸つて見ると寺の庭は相變らず閑寂を極めてゐたが、ふと小兵太の顔色がさつと變つた。

『あつ！しまつた』

山へのぼる時に櫻の大樹へつなぎ留めて置いた馬がゐない。手綱をむすんで置いた馬が見えなくなつてゐるのは、誰か解いて連れ出したものがあると感づくより外には氣の廻しやうがない。此の閑寂な古寺に人ありとすれば、最前の留守居のあの小坊主位なものだらう、しかし、あの小坊主のおもちやには荷の勝つた駿馬である。

羽林殿を駈けぬけて小兵太は驀然に庭の後ろ前をかけ廻つて見たけれども、たづぬる馬は影も形もない。

『しまつた、馬を盗まれた』

此の場合小兵太の胸にギツクリと思ひ當るのは、西へ入つても東へ出ても、おれの縄張りうちだから、影になつたり形になつたりして必らず此の仕返しをして見せると力んだ天野の四郎の捨ゼリフだ。多寡をくゝつてはゐながらも、なほ非常な用心を要すればこそ、自分が頼まれてゐる。では、自分が此の地に入り込んだ事が早くも彼の同類に知られて、出し拔かれたのか、さうだとすれば此の馬一匹よりも心にかゝるのは手越に殘して置いた姫の身の上だ、自分が此處へ來た事を知つてゐる以上は、その使命のほども見拔いてゐるに相違ない、それが知れてゐる以上は、すつかり裏をかゝれてゐる、

任を重しとする小兵太が狼狽し狂奔するのも無理はなかつた、その事情と心中を推しはかつて羽林殿も亦安からぬ思ひをして胸をさわがすのも無理はなかつた。併し、さすがに小兵太の狼狽も狂奔もその程度を越すことは無かつた。

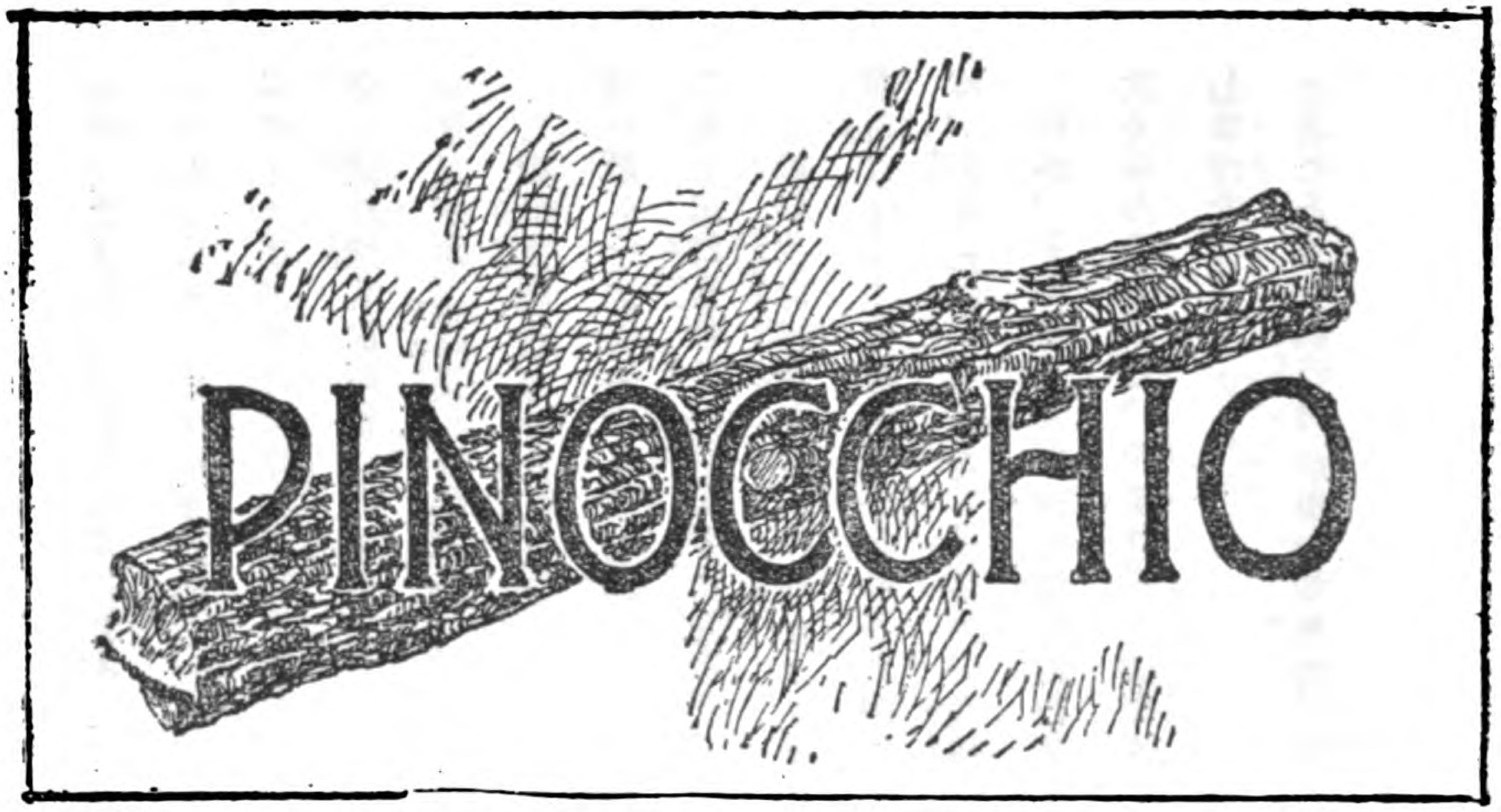
『宜しうございます、あの馬は、やつがれの友達です、遠く離れても叫べば歸つて來る馬です、歸つて來ないまでも、我我主從の外には、容易くは手なづけられない馬ですから、一旦は盗まれても やがて盗んだ奴が持て餘すに定まつてゐる二つ蹄のあとを追つかけて見やう、必らず取戻して來ます、その間にお消息をお記し下さいまし』

小兵太は斯う云ひ捨てゝ、草むらの間に馬の蹄のあとを探り〳〵何方ともなく馳せ去つてしまつた。

殘された羽林殿は屆けられた手紙の封を切らうとはしなかつた。寺の一間へ入つて經机の上にみちのく紙をのべて筆を執つて靜かに書きつけたのは

　　かりそめの色のゆかりの戀にだに
　　　逢うには身をも惜しみやはする

多分、この歌一首のみを以て彼の情に答へるつもりだらうと思はれる。



ピノチオ（童話）

佐藤春夫

10

ピノチオが操芝居の小屋へはいつて行くと、そこで端なくも一事件が持ち上がつて、それが大波瀾の起るもとになつた。

まづ諸君は、はや芝居の幕が開いてゐて狂言は始まつてゐたものと思つてくれ給へ。舞臺ではハリキンとプルシネロとが立廻りをしてゐた、――操芝居でおなじみのやり方通り、棒ちぎれでもつて猛烈な打ち打擲をやつてゐた。見物は一心に聴きとれてゐた。みんなは操人形どもが脅し文句を並べるたびにドツとばかり笑ひどよめいた。操人形どもはといふと、これはまた正眞正銘の人間たちじやないかと思はれるほど、ごく自然のままな脅かしの身振りをして芝居をしてゐた。

突然、ハリキンが科白を言ひ止めた。彼は見物席へ向き直ると、ずつと後の方にゐる誰かしらを指ざしながらまるで科白の口調で叫び出した「あゝら不思議や、わが眼のまどひか、夢なるか現なるか？　あれなるはまさしくピノチオ

…………」

「や、まさしく。あれはピノチオ！」と、プルシネロが言つた。

「ほんとうだ、ピノチオだわ！」と、女優のローザが舞臺裏から隙見をしながら金切聲をしぼり上げた。

「や！　ピノチオだ！　ピノチオだ！」一座中の操人形が一せいに飛び出して來て口々にかう囃し立てた、みんなで舞臺を跳ね廻りながら。

「ピノチオ、來給へ、さあ此處へ。」と、ハリキンが叫んだ「來給へ、さうして、木を分けた兄弟の僕等に腕を投げたまへ。」

この情愛のこもつた誘ひを受けて、ピノチオはいきなり飛び上つた。芝居小屋の後部から特別席までたつた一つ飛びで飛び越してのけた。も一つ特別席で飛び上ると今度はぴよつこり、音樂指揮者の頭の上へ乘つかつた。さて彼は、其處から直ぐに舞臺の上へ飛んで上つた。

一座の男女俳優からこの時ピノチオの受けとつた數々の接吻、抱擁、情のある言葉、親身な愛のあふれた眞心から出た讚言、――それはとてもとても想像すら及ぶものじやない。それこそ人の心を感動させる情景だつた。それだのに見物は、狂言が中止されたと見ると、我慢がならなくなつて來て口々にわめき出した「芝居をやれ、芝居をやれ。」

だが、そんなことが何の足しになるものか、――操人形の方ぢや科白を續け出すどころか、却つて騷ぎを激しくしたくらゐのものだ。おまけにピノチオの身體をみんなで肩の上に擔ぎ上げると、歡呼の聲を擧げながら舞臺裏へ引上げてしまつた。

ところで、興行師がやつて來た。大男で、誰だつて彼に睨みつけられては一たまりもなく震え上らずにはゐられまい。彼は、墨のやうに眞黑な髯を持つてゐたが、それは足もとまで垂れ下つてゐるので歩くたんびにひどく擦れる。口の大きさと言つたらそれこそ竈そつくりだし、眼はまたまるで赤硝子を嵌め込んだ提燈のやうだ。おまけに彼は、狼の尻尾と

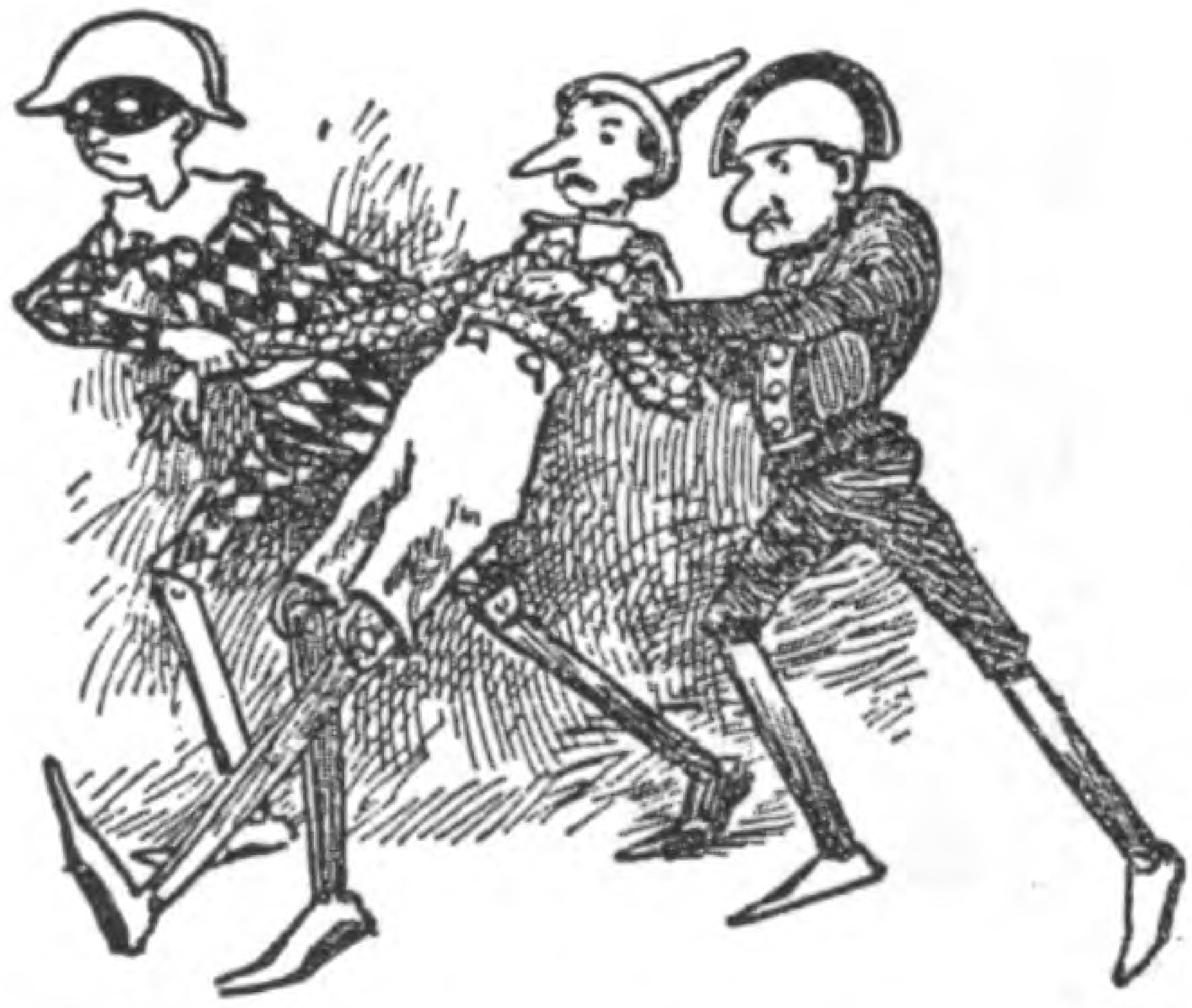
蛇とを綯ひ合せた大きな鞭を手に携へて頻りにピユウ〳〵と振り廻してゐた。

思ひもかけず興行師の姿が見えたので、操人形どもは一せいに默り込んでしまつた。誰ひとりとして息をつく者もない。いやはや、この場に諸君が居合はされたら、蠅の歩き廻る音だつて聞くことが出來たらう！　操人形の役者どもは可哀さうに、男も女も、めいめい木の葉つぱのやうに震えてゐた。

「何をしに來た？　何故こんな騷動をおツ始めた？」彼はピノチオに問詰めた、ぐツと睨めつけながら。その聲はまるで風邪を引いた人食鬼の聲のやうに響き渡つた。

「僕のせいじやないんです。嘘じやないんですよ、世界一の小父さん！」

「口答へはならんぞ！　うん、今夜この始末はつけてくれるわ。」



操人形どもは芝居をやりつゞけることになり、興行師は厨へ行つてしまつた。彼は丁度今その厨で、一匹の羊を串ざしにして晩御飯の仕度をしてゐるところだつたのだ。ところで　その最中に料理に使ふ薪木が斷れてしまつてゐた。彼は、折から持役を演了つてゐたハリキンとプルシネロとを呼びつけて、から命令した「あの操人形を引ずつて來い、いいか、しつかり釘づけにして置いたからな。奴はどうやら上等の乾きつた木で出來てゐるらしい。燒肉にはさだめしお誂へ向きの火が出來上るだらうて。」

ハリキンとプルシネロとは最初のうちもぢもぢしてゐた、が、主人の眼で一睨みされると、忽ち縮み上つて命令のままになつてしまつた。直ぐさま彼等は兩腕でピノチオを引かかへて厨へ引つぱつて來た。ピノチオは水から上げられた鰻のやうに身をくねらせながら、夢中になつて叫びつゞけた「よう、お父さあん、お父さあん、助けてよう！　僕、死ぬのは

厭だよう！ よう、死ぬのは厭だよう！」

『火を喫ふ男』――これがそも／＼この興行師の名前であつたが、彼はその胸から兩足へかけて眞黑な髯が一面に、丁度エプロンのやうに掩ひかぶさつてゐて、見るからにもの凄い樣子をしてゐた。が、その實彼とても、肚の底は別段に惡い男でもなかつたのだ。ピノチオが彼の面前に引きずり出されて、「死ぬのは厭だよう！ 死ぬのは厭だよう！」とわめき立てゝゐるさまを見ると、彼はそろ／＼不憫を催して來た。しばらくの間は彼はそんな心持を押へつけてゐたが、たうとう堪え切れなくなると途方もない嚔を一つした。

その音でハリキンはやつと氣をとり直した。今までしほれ返つて柳の木のやうに身を屈めてゐたが、いくらか元氣づいて來て、彼はピノチオにもたれかゝると小聲でそつとささやいた「占めたぞ、君！ 大將が嚔をしたよ。君が氣の毒になつて來た證據さ。もう君も安心さ。」

これで見ても分る通り、憐れみの心に誘はれては泣き出すのがまづ人間の通例の情なのだが、この火を喫ふ男に限つてさうぢやなかつた。その代り、彼は自分の心持がやさしくなつたことを人に知らせるのに嚔をする癖があつた。

嚔が濟むとしかし興行師は、やはり氣むづかしげな顔付きでピノチオに向つてから怒鳴りつけた「泣き止めろ！ お前が泣くとわしは胸が苦しうなるわ。何だかムヅムヅするやうで、まるで……クシュー クシュ……」そこで彼は二へん目の嚔をした。

「お風邪の御用心！」と、ピノチオが言つた。

「うん。ところでお前のお父さんやお母さんはまだ生きてゐるのか？」と火を喫ふ男が訊ねた。

「え〻、お父さんなら。だけど僕お母さんなんて見たこともないな。」

「ふうむ。それぢやお前の父さんはさぞ歎くことだらうな！——お前が火の中へくべられたりすれやあ。氣の毒な爺さんだ！ わしはお前の父さんが可哀さうに……クシユー クシユー クシユ……」そこで彼は三べん目の嚔をした。

「お風邪の御用心！」と、ピノチオが言つた。

「うん。ところでわしの身にもなつて見て貰ひたいものだて。お前も知つての通り、肉を燒かうにもわしにはもう薪木が無いのだから。お前さへくべりや、全く素晴らしい火が出來をつたものをなあ、ところが、わしはお前が不憫になつて來たわい。辛抱しなくちやなるまいて。うん、お前の代りにわしの一座の誰かを一人くべてくれるわ。こら！番兵ども、進め！」

命令をすると木の番兵がふたり、頭に軍帽腰に佩劍といふ服装で立ち現はれた。



と、興行師は喘息病みのやうなゼイゼイ聲をしぼつて言ひつけた「ハリキンを呼べ。しつかつと縛へろ。それから火のなかへ投げ込んでしまへ。わしは肉がうまく燒きたいのだ。」

可哀さうなハリキン！ 彼はまあどんな氣持だつたらう——それは諸君も察してやつたがい〻。突然彼は、俯伏せに床の上に打倒れてしまつた——だつて、恐しさのあまり彼の兩足はすくんで自分の上體を支へることを御免蒙つてしまつた。この上もなく痛ましい此場の樣子に、ピノチオはガバとばかり興行師の足もとに身を投げた。さて、火を喰ふ男の長い眞黒な髯が涙で濡れるまで激しく泣きむせびながら、彼は聲を顫はして訴へた「おゆるし下さいませ、火を喰ふお方さま！」

「そんなお方さまは此處にはゐない。」興行師は素つ氣もない調子で答へた。

「おゆるし下さいませ、お侍さま！」
「お侍なんか此處にはゐない。」
「おゆるし下さいませ、お大名さま！」
「お大名なんか此處にはゐない。」
「どうかおゆるし下さいませ、將軍さま！」

自分が「將軍さま」とまで呼ばれたのを聞くなり、興行師は急に唇のまはりを引きつぼめて擽つたさうにしたが、それからは大分もの優しくなり話がし易くなつて來た。彼はピノチオに言つた「うむ。何が望みだ？」

「あの、可哀さうなハリキンをゆるしてやつて下さいませ。」

「わしは、特別にお前を助けてとらせた。が、肉をうまく燒き上げるには誰か一人火にくべなくちやならぬわ。」

「そんなことなら、」と、ピノチオは昂然と言ひ放つた、急に突つ立ち上ると、パン屑の帽子を片傍に投げ棄てながら。――「そんなことなら、僕だつて僕の本分の何たるかは心得てゐる。さあ來い、番兵、僕を縛へて火のなかへ投げ込んでくれ。うん、これや斷じて正常な處置じやないぞ！ 苟めにも僕の親友ハリキンが僕の身代りに立つなんて……。

高い調子、勇ましい語勢で言ひ放たれたこれらの言葉は、その場に居合はす操人形といふ操人形を一せいに泣き出させてしまつた。番兵ども――皆と同じ木製の彼等までが、やはり二匹の仔羊かなぞのやうに泣きぢやくつた。

●●●●●

火を喰ふ男はといふと、最初のうちは彼はまるきり冷やかで意固地で、氷のかけら同然の樣子をしてゐた。が、そのうちだんだんに心を動かされて來たとみえて嚏をする徵候を示しだした。四回かそれとも五回ばかり嚏をしたあとで、

彼は兩手をピノチオにさし出して、さて言つた「なか〳〵勇敢な子供だ。こちらへ來い。そしてわしにキッスするのだ。」

ピノチオはすばしこく駈け寄つて、まるで栗鼠みたやうに興業師の髯へよぢ登ると、彼の鼻のあたまの丁度眞中に當るところへ實に見事なキッスを一つした。

「私はこれでもうよろしうございませうか？」とハリキンが訊ねた、それは〳〵かぼそい、やつと聞きとれるほどの聲音で。

「うむ命冥加な奴だ」と、火を喰ふ男は答へた。さて彼が溜息を吐きながら、頭を振りながら言ひ添へた、「俺は今夜の晩飯は生煮で我慢をすることにした。だが何だぞ、この次からわしの計謀を狂はせる奴があればその分には置かないぞ！」

ハリキンが助かつたと聞くと操人形どもは一せいに舞臺の上へ駈けて行つた。まるで大祭日のやうに明りといふ明



りを一つ殘らずともすとみんなして飛んだり跳ねたり踊つたり。その夜は夜通し踊り明したことであつた。

あくる朝、火を喰ふ男はピノチオを自分のそばへ呼びつけてから言つた「お前のお父さんは何といふ名だ？」

「ゲペット。」

「商賣は何してるんだ？」

「貧乏してるの。」

「どつさりお金を儲けないか？」

「うん。儲けるのだよ、いつだつてポケットに一錢もないほどなの。だつてねえ、僕にＡＢＣ讀本を買つてくれるので、御自分の上衣を賣つちやつたのだもの！、それはつぎはぎだらけだつたの。でも、讀本を買ふだけのおあしにはなつたのだよ」

「ふびんな男だ！、わたしは大さう氣の毒に思ふぞ。さあ、金貨が五つだ。早く行つて、これをお父さんに渡すのだ。い

ゝか、わしからよろしくと傳へてくれ。」

ピノチオが、そこで、興行師に幾たびとなくお禮を言つたことは言ふまでもない。彼は一座中の操人形どもと互に次から次へと抱き合ひつこして別れを告げ　さていよ〱氣も狂はんばかりに喜び勇んで自分の家へかへることゝなつた。

ところが、まだ半哩とは行かぬうちにひよつこり出逢はしたのが、片足の利かない狐と兩眼の見えない猫とだつた。狐は跛だつたから猫にすがつて歩いてゐた。さて猫は盲目だつたから狐に案内されてゐた。



「お早うございます。ピノチオ。」狐はさう言つた、恭々しげにお辭儀をしながら。

「君、どうして僕の名前を知つてゐるのさ？」と、操人形は訊ねた。

「私、坊つちやんのお父さまにはごくお心安く願つてるんです。」

「お父さんには何時逢つた？」

「昨日、お宅の門口でお目にかゝりましたて。」

「何をしてゐらつした？」

「シャツ一枚で、寒さに顫え上つてらつしやいましたよ。」

「お氣の毒に！、でも今日からもう顫え上つたりなどなさりやしないさ。」

「はてね？」

「だつてさ、僕、大金持になつちやつたんだもの。」

「君が！、大金持！」と、狐は言つた。そして大聲で笑ひ出してしまつた。猫も笑つた。が、彼はその笑ひの見つからないやうに兩方の前足で髯をしごいた。

「何が可笑しいのだい？」とピノチオは言つた、吃驚して。――「僕だつて何も君たちを羨しがらせたくはないのさ。でもちやんとここにあるんだもの、ほうらね、ピカピカする金貨が五つ。」

そこで彼は火を吹ふ男に貰つた金貨をポケットから取り出した。金貨の音に、狐は思はず跛を引いてゐた方の足を伸ばした。猫は思はず兩方の眼をカッと見開いたが、それはまるで綠色のランプでつくりだつた。が、何しろほんの瞬く間のことだつたので、ピノチオの方では何事も氣がつかなかつた。

「そこで坊つちやん、」と、狐が言つた「あなたはそれだけのお金で何をなさる御計畫です？」

「第一に先づ、」と、操人形は答へた「僕、お父さんに上衣を買つてあげるんだ。その上衣つてばね、表が金で、裏が銀でボタンはダイヤモンドなのだよ。それから僕、僕自身のためにABC讀本を買ふの。」



「あなた御自身のため？」

「ああ、さうだとも。僕、學校へ通つてこれから勉強するんだもの。」

「私を御覧なさいよ！」と、狐が言つた「あんまり勉强に凝つたばかりにたうとう足を一本失くしてしまひましたがね。」

「私を御覧なさいよ！」と猫が叫んだ「あんまり勉強好きだつたばつかりにたうとう眼を兩方とも潰してしまひましたがね。」

するとそのときに一羽の梟が皆のそばへ飛んで來てから言つた「ピノチオ、惡い仲間の言ふことを聽いちやいけない。いづれは後悔するのですよ。」

梟がかう言ひ終るなり、いきなり猫は飛び上つて梟の脊中を引捕へた。梟が「あツ！」といふ暇さへもないうちに、猫

は彼を羽根ぐるみムシヤ〳〵と喰つてしまつた。さて、猫は口を拭つて眼をつぶるとまんまと元の盲目になりすました。

「可哀さうに！」と、ピノチオは言つた「何故そんなにひどい目に逢はせるんだ？」

「なんの、ちよいとたしなめてやつただけでさ。奴さんだつて今度目からはもう氣がつくでせうよ、他人の仕事には嘴を入れるものじやないつて。」

それから少しばかり歩いたところで、狐が突然立ち止つて操人形に言つた「坊つちやん、あなたはそのお金を倍にしたくはありませんか？」

「え？何だつて？」

「お金を増やしたくはありませんか？たつた五つぽちのその金貨を、十にも？百にも？千にも？」

「きまつてるよ、そんなこと！君、君はどうしてそんなことが出來るの？」

「ほんの容易いことなんです。お家へ歸るのを止して私どもについてらつしやいな。」

「でも、何處へつれてつてくれるの？」

「『梟の國』へ。」

ピノチオは暫く思案してゐたが、やがてきつぱりと言ひ放つた「いやだ。僕は行かないよ。お父さんが待つてらつしやるんだもの。僕が昨日歸らなかつたので、どんなに心配して泣いてゐらしつたか知れやしないもの。僕はね、いけない子だつた。そして物言ふこほろぎがね、『我儘な子は世の中へ出たつて滿足に暮らせやしない』つて言つたのだけど、ありや本當だつた。僕、ちやんと身に覺えがあるんだもの、現に昨夜だつて、火を吹ふ男の許で僕、それや危なかつたんだもの。

ブルルルルル！僕、考へてさへゾッとするのさ。」

「じやあ、」と、狐が言つた「あなたはお家へ歸るんですね？いゝとも！お歸んなさい。だがね、それこそあなたにと

つちや大變な損ですぜ。」

「さうとも。あなたにとつちや大變な損ですぜ、」と、猫が言つた。

「まあとつくり御思案なさい、ピノチオ、あなたは巨萬の富を取り逃がさうとしてるんですぜ。

「巨萬の富を、」と、猫が言つた。

「坊つちやんの金貨、五つのが明日は二千になるんだがなあ。

「二千に、」と、猫が口添へした。

「でも、どうしてそんなことがあるんだらう、これがそんなに殖えるなんて？」と、ピノチオは訊ねた、驚きのあまりぽかんと口を開けて。

「それやかうなんですよ、」と、狐が言つた

「まづ梟の國へゆくとね『不思議野』といつて魔術の畑があるのは御存じですか。そこの地びたへ小さな穴を掘つて、その中へ、坊つちやんはまづためしに金貨を一つほり込んでみるんですね。そして穴の上へ土を被せて、泉の水を二しづく三しづくかけてやる、上へはぽつちり鹽を乘つけて、さて寢床へ行つてぐつすりと寢さへすれやいいのだ。するとそのうちに、夜のうちに、金貨に芽が出て花が咲きます。そこで明日の朝、坊つちやんが畑へ歸つてゆくと、さあそれこそ何が見つかることでせうね？言はずと知れた、それ、金貨の鈴生りになつた木が見付からうといふものです！」

「それじや僕が五つとも植ゑたら、」とピノチオはすつかりのぼせ上つて言つた「明日の朝、どれくらゐ見つかるの？」

「そんな勘定なら何でもない、」と、狐は答へた「坊つちやん指でだつて出來ますさ。金貨一つがそれぞれ五百になるんです。だからしてそれに五をかけて、そら、五五ノ二千五百。」

「やあ、いいな！うれしいな！」と、ピノチオは叫んだ、雀躍して喜びながら。——

「そんなにどつさり金貨が僕の手にはいつたら、僕、そのうち五百だけ君たちにあげるよ。そして、あとの二千はお父さんに持つて行くんだ」

「われわれに下さる！」と、狐は氣でも惡くしたやうに、鼻であしらふやうな口調で言つた「いや、どうかもうそんな御心配は！」

「いや、どうかもう！」と、猫が言つた。

「われわれは、」と狐が言つた「ただもう他人さまをお金持にしたいばかりにかうして骨を折るんですぜ」

「ただもう他人さまをね」と、猫が言つた。

「何といふいゝ人たちだらう！」と、ピノチオは思つた。そしてお父さんのことも、お父さんの新しい上衣のことも、さてはＡＢＣ讀本のこともう け ろ り と忘れ果てゝしまつて、彼は狐と猫とに言つた「さあお出で。僕は君たちといつしよに行くよ。」



山吹（劇本）一幕二場

泉鏡花

序

山吹の花の、わけて白く咲きたる、小雨の葉の色も、ゆあみしたる美しき女の、眉あをき風情に似ずやとて――

時。　現代。

場所　修善寺温泉の裏路。

同　下田街道へ捷徑の山中。

人。

洋畫家。島津正（四十五六）

小糸川子爵夫人縫子。もと料理屋「ゆかり」の娘、おぬひ（二十五）

門附の人形使。邊栗藤次（六十九）

ねりものゝ稚兒。童男、童女二人。よろづ屋の亭主。馬士一人。ほかに

村の人々、十四五人。

候。

四月下旬のはじめ、午後――

第一場。―場面。―一方八重の遲櫻、三本ばかり咲滿ちたる中に、よろ

づ屋の店見ゆ。鎖したる硝子戸に、綿、麩、太、端もの類。生鮮物あり。起爆散、清暑水など、いろ〳〵に認む。一枚戸を開きたる土間に、卓子椅子を置く。ビールサイダーの壜を並べ、莚かぶり一樽、焼酒の瓶見ゆ。此の店の傍すぐに田畝。

一方杉の生垣を趁く、下石垣にして其の根を小流走る。石垣にサフランの花咲き、雑草生ゆ。垣の内、新緑にして柳一本道を覗きて枝垂る。背景勝手に、紫の木蓮あるもよし。

よろづ屋の店と、生垣との間、逕をあまして、あとすべて未だ耕さゞる水田一面、水草を敷く。紫雲英の花あちこち、菜の花こぼれ咲く。逕をめぐり垣に添ひて、次第に奥深き處、孟宗の竹藪と樹の大樹あり、此の蔭より山逕をのぼる。

人形使　お旦那―お旦那―もう一杯注いで下せえ。（狭き土間、貧しき卓子に向つて腰掛けたる人形使―邊栗藤次、鼻の下を横撫をしながら言ふ。うしろ向のまゝなり。）

萬屋。（店の硝子戸の内より土間に出づ。）何もね、旦那に（お）の字には及ばないが、（苦笑して）親仁、前刻から大分明けたではないか。……然う飲んぢやあ稼げまいがなあ。

人形使。へ、へ、最う今日は稼いだ後だよ。お旦那の前だが、これから先は山道を塒へ歸るばかりだでね―ふらりふらりとよ。

萬屋。親仁の、其のふらり〳〵は聞くまでもないのだがね、塒にはまだ刻限が早からうが。―私も今日は、恁うして一人で留主番だが、湯治場の橋一つ越した此方は、此の通りひつそり閑で、人通りのないくらゐ、修善寺は大した人出だ。親仁は此から稼ぎ時ではないのかい。

人形使。されば、此の土地の人たちはじめ、諸國から入込んだ講中かな、媼、嬶々、爺孫眞黒で、丁とはや護摩の煙が渦を巻いて居るやうな騒ぎだ。―此の、時々ばら〳〵と來る梅雨模樣の雨にもめげねえ群集だでね。相當の稼ぎはあつたゞが、もうやがて、大師樣が奥の院から修禪寺へお下りだ。―遠くの方で、ドーンドーンと、御輿の太鼓の音が聞こえては、誰も此方人等に構ひ手はねえよ。庵を上げたい世物のゝ、ちや、ぢやん、ぢやんも、音を潜めただからね―橋を此方へ、はい、あばよと……はゝ、―晩景から、また一稼ぎみつちりと稼げるだが、今日の飲代にさへありつけば、

此の上の欲はねえ。――濯り込つたにした處で、往生寂滅をするばかり。（ぐつたりと叩頭して、頭の上へ硝子杯を突出す。）―しお旦那、もう一杯、注いで下せえ。

萬屋。船幽靈が、干杓を貸せと云つた手つきだな。――底ぬけと云ふは、これからはじまつた事かも知れない。……商賣だからいくらでも賣りはするが。（呑口を捻る。）――親仁、また其處等へ打倒れては不可いよ。

人形使。往生寂滅をするばかり。（がぶりと呑んで掌をチウと吸ふ。）別して今日は御命日だ―弘法様が迷に金ぴかものゝ自動車へ、合乘にお引取り下されますてね。

萬屋。弘法様がお引取り下さるなら世話はないがね、村役場のお手數に成つては大變だ。ほどにして置きなさいよ。（店の内に入らむとす。）

人形使。（大な嚔して）お旦那、もう一杯下せえ。

萬屋。弘法様の御祭だ。芋が石に成つては困る。……もの惜みをするやうで可厭だから、ま ゝ よ、いくらでも飲みなさい。だが、いまの一合たつぷりを、もう一息にやつたのかい。

人形使。これまでは雪見酒だで、五合一寸たちまちに消えるだよ。…これからがお花見酒だ。…お旦那、軒の八重櫻は三本揃つて、…樹は若えがよく咲きました。滿開だ。―一軒の門に此のくらゐ咲いた家は修善寺中に見當らねえだよ。―此を視めるのは無錢だ。酒は高價え。いや、しかし、見事だ。あゝ、うめえ。

萬屋。くだらない事を言ひなさるな、醉つたな、親仁……

人形使。これと言ふも、酒の一杯や二杯ぐれゐ、時たま肥料にお施しなされるで、弘法様の御利益だ。

酒屋。詰らない世辭を言ひなさんな。―全く此の邊、人通りのないのはひどい。…前刻、山越に立野から出るお稚兒を二人、大勢で守立てゝ通つた切、馬士も見掛けない。―留主は退屈だ―あゝ太鼓が聞こえる。……

（此の太鼓は、棒にて荷ひつりかけたるを、左右より、二人して兩面をかはるがはる打つ音なり、ドーン、ドーンドーン、ドーンと幽に響く。）

人形使。筆篳篥が、紋着袴だ。―消防夫が揃つて警護で、お稚兒がついての。あとさきの坊様は、香を焚かつしやる、御

經を讀まつしやる。御輿昇ぎは奥の院十八軒の若い衆が水干烏帽子だ。—南無大師遍照金剛ッ！道の左右は人間の黒山だ。お捻の雨が降る。…村の嫁女は振袖で拜みに出る、銚鉦の湯からは婆樣が裡體で飛出す—あはゝゝ、やれさて此が反對なら、弘法樣は嬉しかんべい。

萬屋。勝手にしろ。罰の當つた。(店へ入る。)

人形使。南無大師遍照金剛—(ちびりとのみつゝ、ぐたりと成る。)

夫人。(雨傘をすぼめ、柄を片手に提げ、手拭を持添ゆ。櫛卷、引かけ帶、駒下駄にて出づ。其の遲櫻を視む。)まあ、綺麗だこと—苦勞をして、よく、こんなに(間)……お禮を言ひたいやうだよ——あゝ、眞當に綺麗だよ。よく、お咲きだこと。(徐くて、小流に添ひつゝ行く。石がきにサフランの花を見て心着く。)あら鯉が、大な鯉が、—(小流を覗く)まあ、死んでるんだよ。(やゝ長き間—衝と避けて、立留るゝ時、其の石垣に立掛けたる人形つかいの傀儡目に留る。あやつりの竹の先に、白拍子の舞の姿、美しく蕩たけたり。夫人熟と視て立停る。無言。雨の音。)あゝ、降つて來た。(非翁と大きくしるしたる番傘を開く。)まあ、人形が泣くやうに、目にも睫毛にも雫がかゝつてさ。……(傘を人形にかざして庇ふ。)

人形師。(短き暖簾を頭にて分け、口大く皺深く、眉迫り、ごま鹽鬚硬く、眞赤に醉ひしれたる面を出し、夫人の其の姿をじろりと視る。はじめ投頭巾を被りたる間、おもて柔和なり。いま頭巾を脱いだる四角な顔に、白髮長くすく〱として面凄じ。)

畫家。(薄色の中折帽、うすき外套を着たり。細面にして瘠く瘦す。半ば眠れるが如き目ざし、通りたる鼻下に白き毛の少し交りたる髭をきれいに揃へて短く摘む。おもての色やゝ沈み、溫和にして、然も威容あり。旅館の貸下駄にて、雨に掛念せず、ステツキを靜につき、一度櫻を見る。)

人形使。(此の時また土間の卓子にむかうむく。)

畫家。(夫人の身近に、何等の介意なき態度)はゝあ、操りですな。

夫人。先生—ですが、あの、此は私のちやあございませんの。

畫家。(はじめて心着きたる狀にて、)何うも、此は失禮しました。いや、端から貴女がなさると思つた次第でもありません。

一寸今時珍らしかつたものですから——近頃は東京では、場末の縁日にも餘り見掛けなく成りました。…これは靜でしやうな。裏を返すと辨慶が大長刀を持つて威張つて居る。…其の辨慶が、もう一つ變ると、赤い鬠卷をしめた蛸に成つて、踊を踊るのですが、これには別に然うした仕掛も、からくりもないやうです。—（覗き／＼、濟まして夫人のさしかざしたる番傘の中へ半身。）純、これは辨姫ばかりらしい。あゝ、人形は名作だ。—御覽なさい凄いやうです。…誰が持つて居ますか。…何うして、こんな處へほうり出して置きますかね。

夫人　人形つかひは彼處で（輕く指さし、聲を低くす。）お酒を飲んで居るやうですの。…然うらしいお爺さんが見えました。

畫家　うまいでしやうな、屹と…一つ使はせて見たうございますね。

夫人。およしなさいまし　先生。…大層醉つて居るやうですから。

畫家。如何に、醉つ拂つて居ては面倒ですね。あゝ、しかし、人形は名作です—歸途にまた出逢ふかも知れない。（半ば呟く　貴女、失禮をいたしました。（冷然として山道の方へ行く。）

夫人。（二三歩あとに續く　。先生、あの…先生—どちらへ？

畫家。（呼びはじめて心着く。）いや（と輕く言ふ。間）…先生は弱りました。が、町も村も大變な雜沓ですから、其の山の方へ行つて見ます。—貴女は、（おなじく眠れるが如き目のまゝ）つひ、お見それ申しましたが、おなじ宿にでもおいでなのですか。

夫人。えゝ、ちき（お傍にと言ふ意味籠る。）ですが、下階の奥に。あの…

畫家。其は何うも—失禮します。（また行く。）

夫人。（一步續る。）先生、あのこゝへ入らつしやりがけに、もしか、井菊の印半纏を着た男衆にお逢ひなさりはしませんでしたか。

畫家。あゝ、逢ひました。

夫人。何とも申しはいたしません？…

畫家。（徐に腕を拱く。）さあ…あの菊屋と野田屋へ向つて渡る…渡月橋とか云ふのを渡りますと、欄干に、長い桿に、簑を掛けたのが立てゝあります。―この大師の市には、盛に簑を賣るやうです。其の看板だが、案山子を職に擧げたやうでをかしい、と思つて、ぼんやり――最も私も案山子に似ては居ますが（微笑む。）一枚、買ひたいけれども、荷になると思つて見て居ますと、成程　宿の男が通りかゝりました。

夫人。え、、さうして…

畫家　あゝ然うです。（拱きたる腕を解く。）「其處に奥さまがおいでゞす。」と言つて行き過ぎました。成程…貴女の事でしたか。お連に成つて一所に出掛けたとでも思つたでせう――失禮します。

夫人。まあ、先生。…唯今は別々でしたけれど、昨夜おそく着きました時は、御一所でございましたわ。

畫家。貴女と…

夫人。えゝ、

畫家。存じませんな。

夫人。大仁で。…自動車はつひ別に成りましたんですが、…おなじ時に―

畫家　私は乘合でしたがな―然やう…お一方、仕立てた方があつた樣に思ひますが、それは、至極當世風の髮も七三で…（と半ば言ふ。）

夫人。其の女が…（やゝ忙しく）其女が、先生、宿へ着きますと、すぐ、あの、眉毛を落しましたの。（顏を上げつゝ、興とはなじろむ）髮もこんなにぐるぐる卷にしたんです。

畫家。はゝあ、（いぶかしさうに、しかし冷靜に聞くのみ。）

夫人。先生。（番傘を横に、うなだれて、さしうつむく。頸脚を狀く。）宿の男衆が申したのは、他所の女房と言ふ意味ではないのです。（やゝ昂奮しつゝ）貴女の奥さまと言ふ意味でございました。

畫家。(かくても、もの靜に)と、仰有ると？

夫人。昨晚、同じ宿へ着きますと、直ぐ、宿の人に――私は島津先生の―あの私は…(口籠る小間。お寫眞や、展覽會で、陰ながらよく貴方を存じて居ります―「私は島津の家内ですが」と宿の人に―「實は見付からないやうにおなじ汽車で、あとをつけて來たんです」辻褄は些と合はないかも存じませんが、然う云ひましたの…其の次第は「島津は近頃浮氣をして、余所の婦と此處で逢曳をするらしい」…

畫家。私が。

夫人。貴方が、あの、そして假に私の旦那樣が、

畫家。それは少々怪しかりません。(苦笑する)

夫人。堪忍して下さいまし。先生。――「座敷を別に、こゝに忍んで、其の浮氣を見張るんだけれど、廊下などで不意に見附かつては不可いから、容子を變へるんだ。」と然う言つて、……いきなり鏡臺で、眉を落して髪も解いて、羽織を脱いでほふり出して、帶もこんなに(なよやかに、頭を振向く)あの、蓮葉にしめて「後生、内證だよ。」と堅く口留をしました上で、宿帳の御名のすぐあとへ……あの、申譯はありませんが、おなじくと……

畫家。(微に眉を顰む。しかし寛容に)保養に來る場所ですから、そんな惡戯もいゝでせうな――失禮します。

夫人。あれ、先生、お怒りも遊ばさないで……

畫家。綺麗な奥さんに惡戯をされて、――却て喜んで居るかも知れません。――しかし失禮します。

夫人。どうしませう、先生、私……惡戯どころではありません。

畫家。惡戯どころでないと言ふは？(此の時はじめて確と言ふ。)

夫人。(激して、やゝ震へながら、)後生です。見て下さいまし。貴方に見て頂きたいものがあるんです。(外套の袖を引く、れる力に、畫家を小流の緣に引戻す)一寸御覽なさいまし。(鯉を指す、死したる鯉、此の時いまだ畫家の目につかず。)

畫家。おゝ、此は酷い。――此は悲慘だ。

夫人。先生、私は、こゝに死んで流れて居ます、此の鯉の、ほんの死際、一息前と同じ身の上でございます。

畫家。(無言…)

夫人。(間)私には厳しく追手が掛つて居ります 見附かりますと、いまにも 捉られなければなりませんものですから、——途中でお姿をお見上げ申し、お宿まで慕つて参つて、急の思ひつきで、失禮な事をいたしました。一生懸命なのです。そして一寸の間に、覺悟をしますつもりで居ります。——肩を落して、形をかへて、貴方の奥さまに成つて隠れて居ましても、人出入の激しい旅館では、些とも心が落着きませんから、恁うして道に迷つて居ります。何うぞ、御堪忍なすつて下さいまし。……夢にも悪戯ではないのですから。

畫家。いたし方がありますまいな。

夫人。(もの足りなさに、本意なげにて、)無理にもお許し下さいましたか。……其の上尚ほお言葉に甘へますやうですけれど、お散歩の方へ……たとへ後へ離れましても、御一所に願へますと、立派に人目が忍べます。——貴方(弱く媚びて)何うぞ、お連れ下さいましな。

畫家。(きつぱりと。)其は迷惑です。

夫人。まあ。——いゝえ、お連れ下さいましても、其の間に、唯(更に鯉を指す)此の姿に成ります覺悟を極めますだけなんでございますもの。

畫家。それは不可ませんな、御事情はどんなであらうと、此の形になつては仕方がありません。

人形使。(つんのめりたるが猛然と面を擡げ)お旦那、もう一杯下せえ。お旦那。

畫家。(此の声を聞く。敢て心に留めず。)私一人としては こんな姿にお成りなさるのだけは堅くお留め申します——失禮をします。(衝と離れて、山手に赴く。)

夫人。(畫家の姿、槻の樹立にかくれたる時、はら〳〵とあとを追ひ、また後戻りす。見返りつゝ)はかないねえ——(わが声に、思はず四邉を視る。降らぬ雨に傘を開き、身を隠すが如くにして、悄然と、畫家と同じ道、おなじ樹立に姿を消す。)

人形使。お旦那、もう一杯下せえ。

萬屋　ちよツ困らせるぢやあないか。（ついで與ふ）

人形使。そのかはり、へ、へ、今度はまた月見酒だよ。雲がかゝると満月が忽ちかくれる。（一息に煽切る）ああツ、うーい。……御勘定……（首にかけた汚き大蝦蟇口より、だらしなく紐を引いてぶら下りたる財布を絞り突銭する）弘法様も　月もだがよ、錢も遍く金剛を照すだね。えい。（と立つ。背高き痩脛破股引にてよたよた。酒屋は委細構はず、さつさと片づけて店へ引込む。）えい。（よたよた。やがて人形の前までよたよたよた。）はツ、靜御前様。（急に恐入つたる體にて、殆ど土下座をするばかり。間。酔眼を鯉に見向く。）やあ、兄弟浮かばずにまだ居るな。獺が啣えたか、鼬が嚙つたか知らねえが、わんぐりと歯形が殘つて、蛆がついては堪らねえ。前刻も見て居りや、野良犬が嗅いで嗅放しで失せをつた。犬も食はねえとは此の事だ。おのれ膾にもなる奴が、前世の業か、死恥を曝すは不便だ。—俺が葬つて遣るべい。だが、蛇塚、猫塚、狐塚よ。塚と言へば、これ突流すではあんめえ。土に埋めるだな、土葬にしべい。（半ばくされたる鯉の、肥えて大なるを水より引上ぐ華奢に見ゆ。）引導の文句は知らねえ。怨恨あるものには祟れ、化けて出て、戸錢を、うんと取れ、喝？（財布と一所に懐中に捻ち込みたる頭巾に包み、腰に下げ改つて跪る。）はツ、靜御前様。（咽喉に巻いたる古手拭を伸ばして、覆面す—さながら猿轡の如くおのが口をば結ゆ。此の心は、美女に對して、熟柿臭きを憚るなり。人形の竹を高く引かつぐ。山手の方へ。）えい（よたよた。よたよたよた。）

夫人。（樹立の蔭より、半ば出でゝ此の體を窺ひつゝあり。）

人形使。えい（よたよた。）えい。（よたよたよた。）

夫人。（次第に立出で、あとへ引かへし状にすれ違ふ。尚ほ其の人形使を凝視しつゝ。）爺さん、爺さん。

人形使。（丈高く、赤き面にて、じろりと不氣味に見向く。魔の如し。）

夫人。（大膽に、身近く寄る。）私は何にも世の中に願はなし　何の望みも叶はなかつたから　お前さんの望を叶へて上げやう。寶石も澤山ある。お金も持つて居ます—失禮だけれど、お前さんの望むこと一つだけなら、屹と叶へてゝげられやうと思ふんだよ。望んでおくれな。爺さん。叶へさしておくんなさいな。

人形使。（無言のまゝ睨むが如く見詰めつゝ、しばらくして、路傍に朽ちし稻塚の下の古繩を拾ひ、ぶらりと提げ、じり〳〵寄る。其の繩、ぶる〳〵と動く。）

夫人。あゝれ。（と退る）

人形使。（ニヤリと笑ふ。）

夫人。あゝ蛇かと思つた。――もう蛇でも構はない。何うするの――何うするのよ。

人形使。（ものいはず、皺手をさしのべて、唯招く。招きつゝ、あとじさりに次第に樹立に入る。）

夫人。何うするのさ。何うするのよ。（おなじく次第に、かくて樹立に隱る）。

（舞臺小時空し。白き家鴨、五羽ばかり、一列に出でゝ田の草の間を漁る。行春の景を象徴するものゝ如し）

馬士。（樹立より、馬を曳いて、あとを振向きつゝ、出づ。馬の背に米俵二俵。奉納。白米。南無大師遍照金剛の札を立つ。）あゝ氣味の惡い。眞晝間何事だんべい。いや、はあ、こげえな時、米が砂利に成るではねえか。（眉毛に唾しつゝ、俵を探りて米を嚙む。）先づ無事だ。（太鼓の音近く聞ゆ。）――弘法樣のお庇だんべい。あゝ氣味の惡い――いづれ魔ものだ、あゝ怖え。

――（廻る。）――

第二場――場面――

一方やゝ高き丘、花菜の畑と、二三尺なる青麥畠と相連る。丘のへりに山吹の花咲揃へり。下は一面、山懷へ深く崩れ込みたる窪地にて、草原。苗樹ばかりの桑の、薄く芽ぐみたるが篠に似て參差たり。

一方は雜木山、就中、かしの大樹、高きと低き二幹、葉は黑きまで枝とゝもに茂りて、黑雲の渦の如く、かくて花菜の空の明るきに對す。

花道をかけて一條、皆、丘と丘との間の細道の趣也。遠景一帶、伊豆の連山。

畫家。（一人、丘の上なる崖に咲ける山吹と、畠の菜の花の間高き處に、靜にポケット、ウヰスキーを傾けつゝあり。――鶯遠く音を入る。二三度鶯の聲。遠音に河鹿鳴く。しばらくして、立ちて、聊かものに驚ける狀す。尚ほ窺ふよしゝて、花と葉の茂に隱る。）

夫人。（傘を片手に、片手に繩尻を控へて――登場。）

人形使。（猿轡のまゝ蝙蝠傘を横に縦に十文字に人形を脊負ひ、うしろ手に人形の竹を持ちたる手を、其の繩にて縛められつゝ出づ。肩を落し、首を垂れ刑所に趣くものゝ如し。然も蹌へる足どり、よたよたとして先に立ち、山懐の深く踏み入りたる小暗き方に入り来り、さて両腕を解けば繩落つ。實はいましめたるにあらず、手にて掴く装ひたるなり。人形を傍の一木に立掛け、跪いて拝む。かくてやゝ離れたる處にて、口の手拭を解く。御新造様。そりや、約束の通り遣つて下せえ。（足手を硬直し、突伸べ、ぐにやぐにやと眞俯向けに草に俯す。）

夫人。眞個なの。爺さん。

人形使。やあ、嘘にこんな眞似が出来るものでえ。それ、遣附けて下せえまし。

夫人。眞個に打つの？

人形使。血の出るまで打つて下せえ。息の留るまでもお願えだよ。

夫人。眞個かい、眞個に打つのかね。

人形使。何とも最う堪らねえ、待兼ねますだ。……

夫人。……あとで強請られたつて、それまでの事だわね。―では、約束をしたものだから、眞個に打つてよ。我慢をおし。

（雨傘にて三つ四つ。と續け状に五つ六つ。）

人形使　堪えねえ、些とも堪えねえ。

夫人。（鞭打ちつゝ。）これでは―これでは―

人形使。駄目だねえ。（呪ながら捻向く。）これでもか、これでもか、と遣つて下せえ。

夫人。これでも、あの、これでも。

人形使。そんな事では、から駄目だ。待たつせえまし。（布子の袖なし、よごれくさりし印半纏とゝもに脱ぎ、痩せたる胸脇を露出す。よろりと立つて樹に其の身をうしろむきに凭りつく。振向きて眼を瞬りながら、傘を引被いて、骨と柄になせえまし。それで

は、婆娑々々するばかりで、些とも肉へ應へねえだ。
夫人。（ため息とゝもに）あゝ。
人形使。それでだの。打つものを、此の醉拂ひの乞食爺だと思つては、些とも力が入らねえだ。―御新造樣が、おのれと思ふ、憎いものが世にあるべい。姑か、舅か、小姑か、他人か、緣者、友だちか。何でも構ふ事はねえだの。
夫人。あゝ。
人形使。その憎い奴を打つと思つて、思ふ状引拂くだ。可か、可かの。
夫人。あゝ。
人形使。それ、確りさつせえ。
夫人。あゝ。あいよ。（冗戯しつゝ、びり〳〵と傘を裂く、ために疵つき、指さき腕など血汐滲む――取直す。）――畜生――畜生――畜生――畜生――
人形使。うゝむ（幽に呻く。）うゝむ、然うだ、其處だ。些と、へい、應へるぞ。うゝむ、然うだ。まだ〳〵。
夫人。此でもかい。此でもかい、畜生。
人形使。そ、そんな、尻べたや、土性骨ばかりでは埒明かねえ、頭も耳も構はずと打叩くんだ。
夫人。畜生、畜生、畜生。（自分を制せず、魔に魅いられたるものゝ如く、蹈りかゝり、飛び上り、髮亂れ色あをざむ。打つて打つて打ちのめしつゝ、息を切る。）あゝ、切ない、苦しい。苦しい、切ない。
人形使。うゝむ堪らねえ、苦しいが、可い鹽梅だ。堪らねえ、いゝ氣味だ。
畫家。（土手を傳はつて路地に下る。騷がず。しかし急ぎ寄り、遮り留む。）貴女、―奧さん。
夫人。あら、先生。（瞳を睜くとゝもに、小腕しびれ、足なへて、崩るゝ如く膝を落し、半ば失心す。）
畫家。（肩を抱く。）ウヰスキーです――。清涼劑に――一體これは何うした事です。
人形使。（びくりびくりと蠢く。）

画家。（且つ此を見つゝ）何うした事情だか知りません。けれども、余り極端な事をしては不可い。

夫人。（吻と息して）私、何うしたんでございましやう。人間界にあるまじき、浅間しい事をお目に掛けて、私何うしたら可いでせうねえ。（ヒステリツクに泣く）

画家。（止むことを得ず、手をさす＝脊筋を撫づ。）気をお鎮めなさい。

人形使。（血だらけの膚を、半被にて、拭き、喘ぎつゝ草に手をつく。）はい、……此は、旦那様でございますか、はい。

画家。此の奥さんの……別に、何と言ふではないが、一寸知合だ。

人形使。はい、其のお知合の旦那様に、爺から申上げます。はい、えゝ、くどい事は、お聞きづらうございますで。……早い処が、はい、此の八ツ目鰻の生干を見たやうな、ぬらりと黒い、乾からびた老耄も、若い時が一度ござりまして、その頃に、はい、太い罪障を造つたでござります。女子の事でござりましての。はい、ものに譬へやうもござりませぬ。欄間にござる天女を、蛇が捲いたやうな、いや、奥庭の池の鯉を、蟒蛇が食ひ破りましたさうな儀で。……生命も血も吸ひました。――一旦夢がさめまするに、其の罪の可恐さ。身の置所もござりませぬで。……消えるまで、失せるまでと、雨露に命を打たせて居りますうちに、――四国遍路で逢ひました廻国の御出家――弘法様かと存ぜられます――御坊様から、不思議に譲られたでござります。竹操りの此の人形も、美しい御婦人でござりますで、爺が、この酒を喰ひます節も、嘸ぞはや可厭であらうと思ひますで、遠くへお離し申して置きます。擔いで躍ります節も、酒臭い息が掛からうかと、口に手拭を噛みます仕誼で。……美しいお女中様は、爺の目に、神仏も同然にをがまれます。それにつけても、はい、昔の罪が思はれます。せめて、朝に晩に、此の身体を折檻されて、拷問苛責の苦を受けましたら、何ほどかの罪滅しに成りませうと。それも、はい、後の世の地獄は恐れませぬ。現世の心の苦しみが堪へられませぬで、不断常住、其の事ばかり望んでは居りますだが、木賃宿の同宿や、堂宮の縁下に共臥りをします、婆々嬶々なら何時でも打ちも蹴りもしてくれましやうが、それでは、念が届きませぬ。はて乞食が不心得したために、お生命までも、おうしないに成らつせえましたのは、美しいお方でござりましたもの。矢張り、美しいお方の苛責でなうては、血にも肉にも、些とも響かぬでござります。――

又此の希望が、幽靈や怨念の、念願と同じ事でござりましての。此の面一つを出したばかりで大概の力は遁げますで。……よく〳〵の名僧知識か、豪傑な御仁でないと、聞いてさへ下さりませぬ。――此の老耄が生れまして、六十九年、此の願望を起しましてから、四十一年目の今月今日。――たつた今、其の美しい奥方様が、通りがゝりの乞食を呼んで願掛は…つ、一ヶ條何なりとも叶へて遣らうとおつしやります。――未熟なれども、家業がら、佛も出せば鬼も出す、魔ものを使ふ顔色で、威しては見ましたが、此の幽靈にも怨念にも、恐れなされませぬお覺悟を見抜きまして、さらば、お叶へ下されまし、と豫ての念願を申出でまして磔柱の罪人が引廻しの狀をさせて頂き、路傍ながら隱場所の、此の山崩れの窪溜へ參りまして、お有難い責折檻、苛責を頂いた儀でござります。……旦那様。……もし、お美い奥方様、おありがたうござります。おありがたうござります。

夫人。（はじめて平静に）お前さん、痛みはしないかい。

人形使。何の貴女様、此の疼痛は、醉つた顔をそより〳〵と春風に吹かれますも、觀音様に柳の枝から甘露を含めて頂きますも、同じ嬉しさでござります。……はたで見ます唯今の、美女で以て夜叉羅刹のやうな奥方様のお姿は、老耄の目には天人、女神を其のまゝに、尊く美しく拜まれました。はい、此の疼痛のござりますうちだけは、骨も筋も柔かに、血も二十代に若返つて、樂しく、嬉しく日を送るでござりませう。

畫家。（且つ傾き、且つ聞きつゝ、冷静に金口煙草を燻らす。）お爺さん、煙草を飲むかね。

人形使。いやもう、酒が、あか桶の水なれば、煙草は、亡者の線香でござります。

畫家。喫みたまへ。（眞珠の飾のついたる小箱のまゝ、衝と出す。）

人形使。はツ此は――弘法様の獨鈷のやうに輝きます。勿體ない。（差出して、畫家の金口から吸ひつける。）罰の當つた――勿體ない。此の紫の雲に乘りまして、ふわ〳〵と……極樂の空へ舞ひましやう。

夫人。爺さん、もう行くの。……打たれたばかりで、眞個に可いのかい。

人形使。たとひ桂川が逆に流れましても、此に嘘はござりませぬ。

夫人。何か私に望んでおくれ。何うも私は氣が濟まない。

人形使。此の上の望と申せば、まだ一度も、もう二度も、御折檻、御打擲を願ひたいばかりでござります。

夫人。そして、それから。

人形使。はあ、其の上の願と申せば、此の身體が粉々に成りますまで、朝に晩に、毎日毎夜。お美しい奥方樣の折檻を受けたいばかりでござります。――はや醉も覺めました。もう世迷言も申しますまい。――些は遠慮がござりますが、眞夜中は、狸、獺、化ものも同然に とがめ人のござりませぬ、獨鈷の湯へ浸ります嬉しさに、たつ野の木賃に巣をくつて、しばらく此の山道を修善寺へ通ひましたが――今日かぎり下田街道を何處へなと流れます。雲と水と申したけれど、天の川と海の流れと分れましては、もはやお姿は影も映りますまい。お二方樣とも、萬代お榮えなされまし。――靜御前樣。

へい／＼お供をいたします。

夫人。お待ちなさい、爺さん（決意を示し、衣紋を正す。）私がお前と、其の滿川へ流れ込んで、十年も百年も、お前の其の朝晩の望みを叶へて上げましやう。

人形使。やゝや。（聲に出さず、顔色のみ）

夫人。先生。――私は家出をいたしました。他所の家内でございます。連戻されるほどでしたら、何處の隅にも入れましやうが、此のまゝでは身の置處がありません。――滿川に死た鯉の、あの淺間しさを見ますにつけ、死だ身體の醜さは、恁う成るものと存じましても、矢張り毒を飲むか、身を投げるか、自殺を覺悟して居ました。たゞお煩さゝの餘りでも、「こんな姿に成るだけは、堅く留める。」と、おつしやいました。……あの前刻のお一言で、私は死ぬのだけは留めましてございます。

先生。――私は、唯今では、名ばかりの貧乏華族、小糸川の家内でございますが。

畫家。あゝ子爵でおいでなさる。

夫人。何ですか、もう……――あの、貴方、……前は、貴方が、西洋から御歸り時分、よく、お茶間と御贔負を遊ばして。

入らしつて下さいました、日本橋の……(うつとりと更に畫家の顔を見る。)——お忘れでございますか、お料理の、ゆかりの縫の、縫ですわ。——

畫家。あゝ、然うですか。お縫さん……お姉さんの方ですね。綺麗なお孃さんがおいでなさると言ふ事を、時々風説に聞きました。

夫人。(はかなさうに)えゝ、先生は、寒い時寒いと言ふほど以上には、お耳には留まらなかつたでございましやう。私は貴方に見られますのが恥かしくツて、貴方のお座敷ばつかりは、お敷居越にも伺つた事はありませんが陰ではお座敷においで遊ばす時の 先生のお言葉は 一つとして聞き洩らした事はないくらゐでございます。奥座敷にお見えの時は、天井の上に俯向けに成つて聞きます。裏座敷においでの時は、小庭を中に、湯どのに入つて、衣服を着てばかりは居られませんから、裸體で壁に附着きました。其のほか、小座敷でも廣室でも 我家の暗をかくれしのぶ 身體はまるで鼠のやうで、心は貴方の光のまはりに蛾のやうでした。ですが、苦勞人の女中にも、わけ知の姉だちにも、氣ぶりにも悟られた事はありません。身ぶり素ぶりに出さないのが、眞個の我が身體で、口へ出して言へないのが、眞實の心ですわ。唯恥かしいのが戀ですね。——ですがもう其の時分から、ヒステリーではないのか知ら、少し氣が變だと言はれました。……貴方、お察し下さいまし。……私は全く氣が變に成りました。貴方が御結婚を遊ばして、あとまる一年、唯湧くものは涙ばかり、うるさく伸びるものは髪ばかり。座敷牢ではありませんが、附添たちの看護の中に、藻拔のやうに踠て居ました。死にもしないで、じれつたい。……消えもしないで、淺間しい、死なずに生て居たんですよ。

——我が身に返りました時、年紀も二十を三つ越す。廣い家を一杯に我慢をさして可愛がつてくれました母親が亡くなりました。盲目の愛がなくなりますと、明い世間が暗く成ります。いまゝで我まゝが過ぎましたので、其の上の我がまゝは出來ない義理に成りました。それでも、まだ我がまゝで——兄姉たちや、親類が、確な商人、もの堅い勤人と、見立てゝくれました縁談を斷つて、唯今の家へ參りました。

姑が一人、小姑が、出戻と二人、女です——夫に事ふる道も、第一、家風だ、と言つて、水も私が、郊外の住居ですか

ら、釣瓶から汲まされます。野菜も切ります。…夜はお姑のおともをして、風呂敷でお惣菜の買ものにも出ますんです。――其を厭ふものですか――日本橋の實家からは　毎日のおやつと晩だけの御馳走は、重箱と盤臺で、其の日其の日に、男衆が遠くを自轉車で運ぶんです。が、さし身の角が鈍つたと言つては、料理番をけなしつけ、玉子燒の形が崩れたと言つては、客の食べ餘を無禮だと、お姑に重箱を足蹴にされた事もあります。はじめは、我身の不束ばかりと、怨しいも、口惜いも、唯謹で居ましたが、一年二年と經ちますうちに、よく其の心が解りました。――夫をはじめ、――私の身につきました、…實家で預ります財産に、目をつけて居るのです。いまは　月々の其の利分で、…然う申しては如何ですが、内中の臺所だけは持つて居るのでございますけれど、其の位では不足なのです――それ妹が見合をする、從妹が嫁に行くと言つて、私の晴着、櫛笄は、其のたびに無く成ります。餞くれのつかひもの、お交際の義理ごとに、友染も白地も、羽二重、縮緬、端ものは殘らず拂はれます。實家へは默つて居りますけれど、簞笥も大抵空なんです。――……

……………………………………。それで主人は、詩をつくり、歌を讀み、脚本などを書いて投書をするのが仕事です。

實家。其は弱りましたな。けれど、末のお見込はありましやう。

夫人。いゝえ、其の末の見込が、私が財産を持込みませんと、いびり出されるばかりなんです。咳をしたと言てはひそひそ、頭を痛がると言つては、ひそひそ。姑たちが額を集め、芝居や、活動によくある筋の、あの肺病だから家のためにはかへられない、と言ふ相談をするのです。――夫はただ「辛抱を　辛抱を。」と言ふんですが、其の辛抱をしきれないうち、私は死で了ひませう。つひ此の間も　かぜを引いて三日寢ました。水をのみに行きます廊下で　今度などが汐時おや。……養生と言つて實家へ歸したら。」姑たちが話すのを、ふいに痛い胸に聞いたのです。

實家。それは薄情だ。

夫人。薄情ぐらゐで濟むものですか。――私は口惜さに、かぜが拔けて、あらためて夫に言つたんです。「喧嘩をしても實家から財産を持つて來ます。其のかはり　唯一度で可うござんす。お姑さんを貴方の手で、せめて部屋の外へ突出して、

一人の小姑の髱を掴んで、一人の小姑の横そつぽうを、ぴしやりと一つお打ちなさい。」……と――
人形使。(じりじり乗出す。)其處だ〳〵、其の事だ。
畫家。は〻〻痛快ですな。しかし穏でない。
夫人。(激怒したるが、忘れたやうに微笑む。)穏でありませんか。
畫家。先づ。……其處で。
夫人。きさまは鬼だ。と夫が申すと、いきなり私が、座敷の外へ突飛ばされ、倒れる處を髱をつかまれ、横そつぽうを打たれました。――其の晩――昨晩……其の晩の、夜は却つて目につきますから、昨日家出をしたんです。先生……金魚か植木鉢の草になつて　おとなしくして居れば、實家でも親類でも、身一つは引取つてくれませう。私は意地です、其は厭です。……此の上は死ぬほかには、行き處のない身體を、其の行きどころを見着けました。(恍惚として向直る。)此のおぢさんと一所に行きます。――此の人は、婦人を虐げた罪を知つて、朝に晩に笞の折檻を受けたいのです。一つは世界の女にかはつて　私が其の怨を晴らしましやう。――此の人は、靜御前の人形を　うつくしい人を禮拜します。私は女に生れましたほこりと果報を、此の人によつて享けましやう。――此の人は、死んだ鯉の醜い死骸を拾ひました。……私は弱い身體の行倒れに成つた肉を、此の人に拾はれたいと存じます。
畫家。(或は頷き又打傾きや〻沈思す。)奥さん、更めて、お縫さん。
夫人。(うれしさうに、あどけなく哄ふ。)はアい。
畫家。貴女の其のお覺悟は、他にかへやうはないのですか。
夫人。はい、此のま〻、貴方、先生が手をひいて、旅館へお送り下さる外には――
人形使。然うだ、然うだ、其の事だ。
畫家。(再び沈默す。)
夫人。(すり寄る。)先生。

畫家。貴女、それは御病氣だ。病氣です。けれども私は醫師でない、斷言は出來ません。——貴女のお覺悟はよくありません。しかし、私は人間の道について、よく解つて居りません。何ともお敎へは申されない。それから私が手を取る事です。是非善惡は、さて置いて、それは今、私に決心が着きかねます。卑怯に回避するのではありません。私は自分の仕事が忙しい。いま分別をして居る餘裕が、——人間の小さいために、お恥かしいが出來ないのです。しかし一月 半月 しばらくお待ち下さるなら、其の間にまた、覺悟をして見ませしやう。

夫人。先生、私は一晩かくれますにさへ、顏も形も變へて居ます。運命は迫つて居ます。

畫家。御尤です——(顏を凝視さるゝに堪へざるものゝ如く、目を人形使に外す。)爺さん、屹とお供をするかね。

人形使。犬になつて、—(颯と夫人を抱き起し、其の腰の下へ四這ひに入る背に、夫人おのづから腰を掛けつ、倒れむとする手を、畫家たすけ支ゆ。)馬に成つてお供をするだよ。

畫家。奧さん、——何事も御隨意に。

夫人。貴方、そのお持ち遊ばすお酒を下さい。——そして媒妁人をして下さい。

畫家。(紙苞にて、罎を提げ、且つ酌する。)

夫人。(ウヰスキーを一煽りに、呀と息す。)爺さん、肴をなさいよ。

人形使。口上擬に、はい小謡の眞似でもやりますか。

夫人。いゝえ、其の腐つた鯉を、こゝへお出しな。

人形使。や。

夫人。お出しな。刄ものはないの。

人形使。野道、山道、野宿だで、犬おどしは持つとりますだ。(腹がけのどんぶりより、錆びたるナイフを抽出す。)

畫家。あゝ、奧さん。

夫人。此の人と一所に行くのです。——此のくらゐなものを食べられなくては。……

人形使。やあ、面白い。俺も食ふべい。

畫家。(衝と立ちて面を背く。)

──南無大師遍照金剛。──南無大師遍照金剛──遠くに多人數の人聲。童男童女の稚兒二人のみ先づ練りつゝ出づ──

稚兒一。（いたいけに）南無大師遍照金剛。……

稚兒二。（なほいたいけに）南無大師遍照金剛。……

（はじめ二人葉の切のさげ髮と、白丈長の稚髷とにて、靜にねりいで、やがて人形使、夫人、畫家たちを怪むが如く、ばた〳〵と驅け拔けて、花道の中ばに急ぐ。畫家と夫人と二人、言ひ合はせたる如く、ひとしくおなじ向きに立ちて、ひとしくともに手まねき、ひとしくともにさしまねく、此の光景怪しく凄し。妖氣おのづから場に充つ。稚兒二人引戻さる。）

畫家。いゝ兒だ。一寸賴まれておくれ。

夫人。可愛い、お稚兒さんね。

畫家。（外套を脫ぎ草に敷く。）奧さん、爺さんと並んでお敷きなさい。──

夫人。まあ、勿體ない。

畫家。否。その位な事は何でもありません。が貴女の病氣で、私も病氣に成つたかも知れません。──さあ、二人でお酌をしてあげておくれ。

（夫人人形使と並び坐す。稚兒二人恰も鬼に役せらるゝもの如く、かはる〳〵酌をす。靜寂、雲くらし。鶯はせはしく鳴く。笙篳篥幽に聞ゆ。──南無大師遍照金剛──次第に聲近づき、やがて村の老若男女十四五人、くりかへし唱へつゝ來る。）

村の人一。えゝ、まあ、御身たちやあ何をしとるだ。

村の人二。大師樣のおつかひ姫だ思ふで、故と遠く離れてろだに。

村の人三。うしろから拜んで步行くだに──いたづらをしては成んねえ。

村の人四五六。（口々に）來うよ〳〵。（こんどは稚兒を眞中に。）南無大師遍照金剛……（かくて、森に入る。）

夫人。（外套をとり、塵を拂ひ、畫家にきせかく。）唯一度ありましたわね──お覺はありますまい。醉つて居らしつて、手をお添へに成りました。此の手に──もう一度、今生の思出に、もう一度。本望です。（地に手をつく。）貴方、おなごり惜う存じます。

畫家。私こそ。（悄然とする）

夫人。爺さん、さあ、行かう。

人形使。えゝ、〳〵。然ようなら旦那様。

夫人。行かうよ。

（二人行きかゝる。本雨。）

畫家。（つか〳〵と出で、雨傘を開き、二人にさしかく。お持ちなさい。

畫家。雨ぐらゐは何の障もありません。

夫人。貴方は。

夫人。お志頂戴します。（傘を取る時）えゝ、こんなぢや。（凜々しく跣足に成り、片褄を引上ぐ、緋の紋縮緬の長襦袢艶絶なり。爺や手をぐいと曳く。）

人形使、（よた〳〵と成って續きつゝ）南無大師遍照金剛。

夫人。（花道の半ばにして振かへる。）先生。

畫家。（やゝ、あとに續き見送る。）

夫人。世間へ、よろしく。……然やうなら……

畫家。御機嫌よう。

夫人。（人形使の襟手を、脇に掻込むばかりにして、先に、番傘をかざして、揚幕。）

畫家。（佇み立つ。——間。——人形使の聲、揚幕の内より響く。

——南無大師遍照金剛——

（夫人の聲も、又きこゆ。）

——南無大師遍照金剛——

畫家。うむ、魔界かな、此は、はてな、夢か、いや現實だ。——（夫人の駒下駄を視る）えゝ、おれの身も、おれの名も棄てやうか。（夫人の駒下駄を手にす。苦悶の色を顯はしつゝ）いや、仕事がある。（其の駒下駄を投棄つ。）

雨の音留む。

圓地山修善寺の暮六ツの鐘、鳴る。

——幕。）

校正室より

◇春は既に昨日の忘れがたみとなり、今日は山ほととぎす啼く夏が立ちました。活動を喜ぶ我々の雑誌は日に日に目まぐるしく伸びて行く、五月號にも増して、本號は更に一層の充實と緊張味を加へました。

◇京都大學の山本宣治氏の女性性教育は堂々百枚に近い大論文です。現下澎湃たる性問題の根本について手にとる如く懇到に指示して下さつた勞を謝します。此問題に無智な女達が、今日まで如何程呪はしい事件を惹起し、そして自らを破滅させつゝあるかと思ひます時、若い女性達は勿論其の保護の地位にある人達が必讀玩味すべき有益な論文です。

◇宇野浩二氏の長篇小説「出世五人男」を、數ケ月に亘つて連載して頂くことになりました。現代に時めく五人男？それは誰と、誰とでありませう。兎に角現代人の要求する最も趣味多き一代傑作です。

◇女性改造主催第一回文藝講演會は愈々五月十三日慶應義塾大講堂に於て開催します、講演者の顔觸れ、講演の内容からいつても、空前の計畫です。更に第二回第三回と續けて、全國各地に及ぼしたいと思つて居ります(以上K)

◇岸田劉生さんの書ばなしは天下一品です、出來ることなら岸田さんにお願して印刷の方も監督していただいたら錦上花をますものがあつたらうと思ひます、ただ私どもはこの香り高い神來の藝術品に接してうなだるるのみです。

◇本誌に對して皆さんから熱烈な、そして眞面目な投稿を澤山いただきます、私などはそれを讀者の聲としてすこしも忽にすることはありません今後も、有益な投稿を歡迎します、ただ希くは總てのものが研究的であつてほしい、そして文藝品は洗錬に洗錬されたものであつて欲しい。

◇「空知川の岸邊」で忘られぬ人になつた私の獨歩、天下の獨歩――この人が逝いてから私は文壇に寂寥をおぼえた、それが氏の遺愛虎雄氏の追憶の一文によつて懐感また〱新になつた。元始的であつた當時の空知川も今は層樓兩岸に並立しておることだらう。(以上S)

女性改造定價表

冊數	定價	郵稅
壹冊	五十錢	壹錢五厘
六冊	參圓	郵稅共
十二冊	六圓	郵稅共

註文の注意

◇増大號其他定價變更に依る前金拂込み不足は不足金の拂込みを待つて發送す
◇◇◇註文は凡て前金とす
前金切れの際は發送を停止す
外國發送の註文は壹部郵稅拾六錢を申受く(但し支那を除く)
◇◇◇見本は發送せず
郵稅切手代用は壹割増のこと
拂込みは振替によらるるが最も便利なり

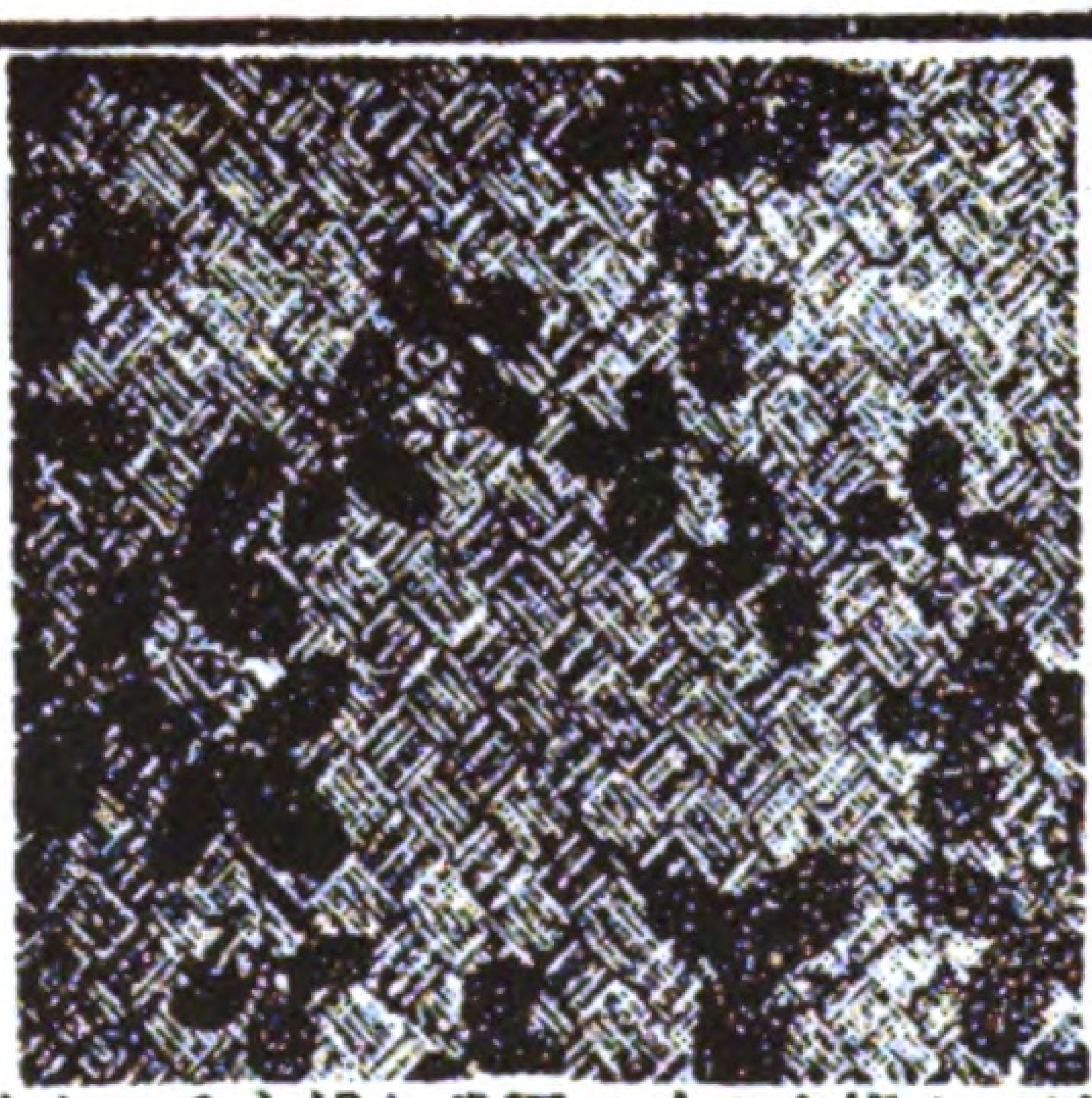
本誌一頁廣告料 一等百圓 二等七拾圓

◎本社廣告取次所 博報堂 弘盛舍 日本電報通信社

大正十二年五月十三日印刷納本
大正十二年六月一日發行
(六月號金五十錢)

編輯發行兼印刷者 東京市芝區愛宕下町一ノ一 平田貫一郎
印刷所 東京市京橋區[illegible]町廿七番地 株式會社秀英舍
發行所 東京芝區愛宕下町一ノ一 改造社
電話芝 一六三八 二八五四 四三〇三
東京振替 八四〇二

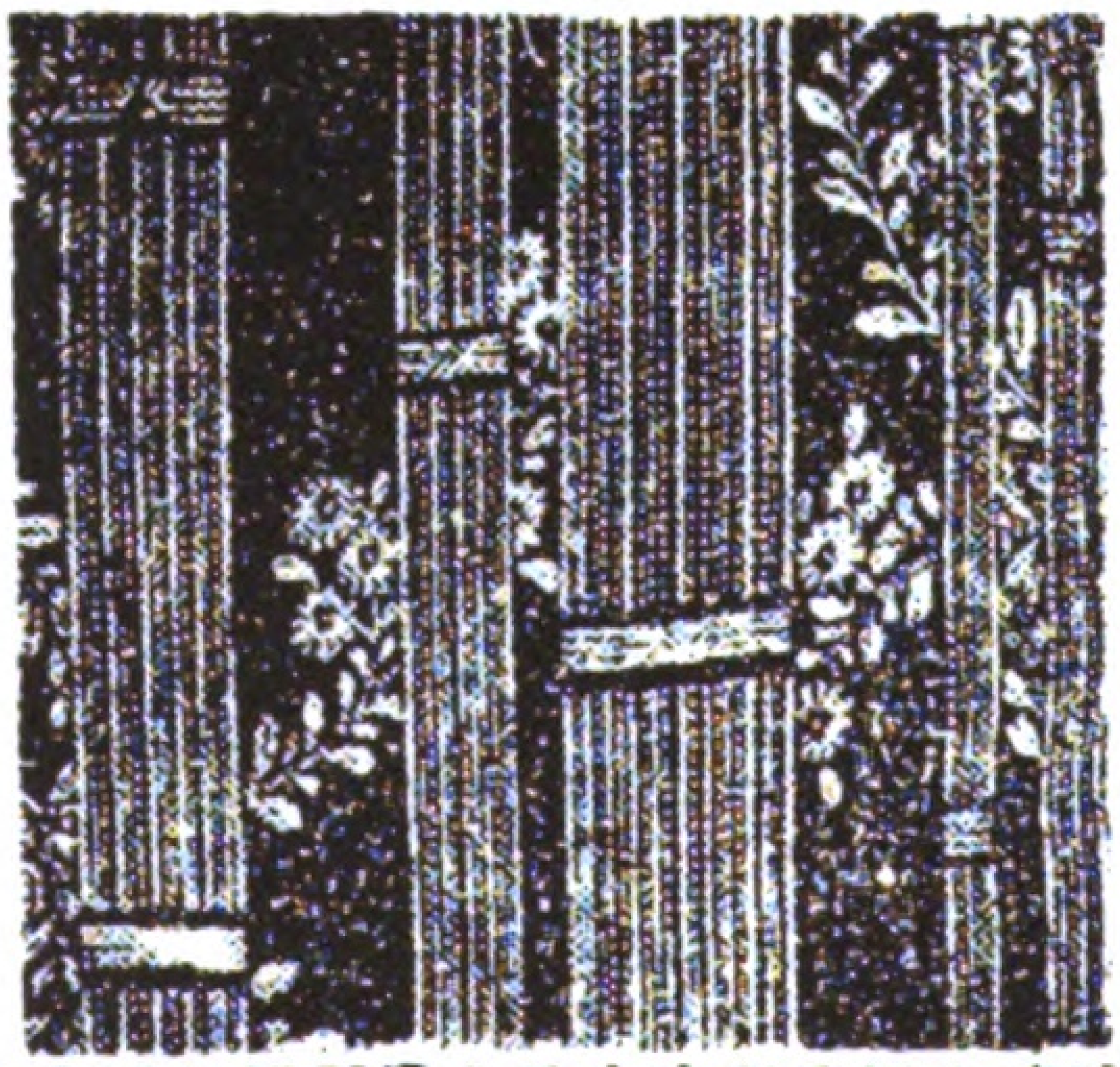
三越の中形浴衣



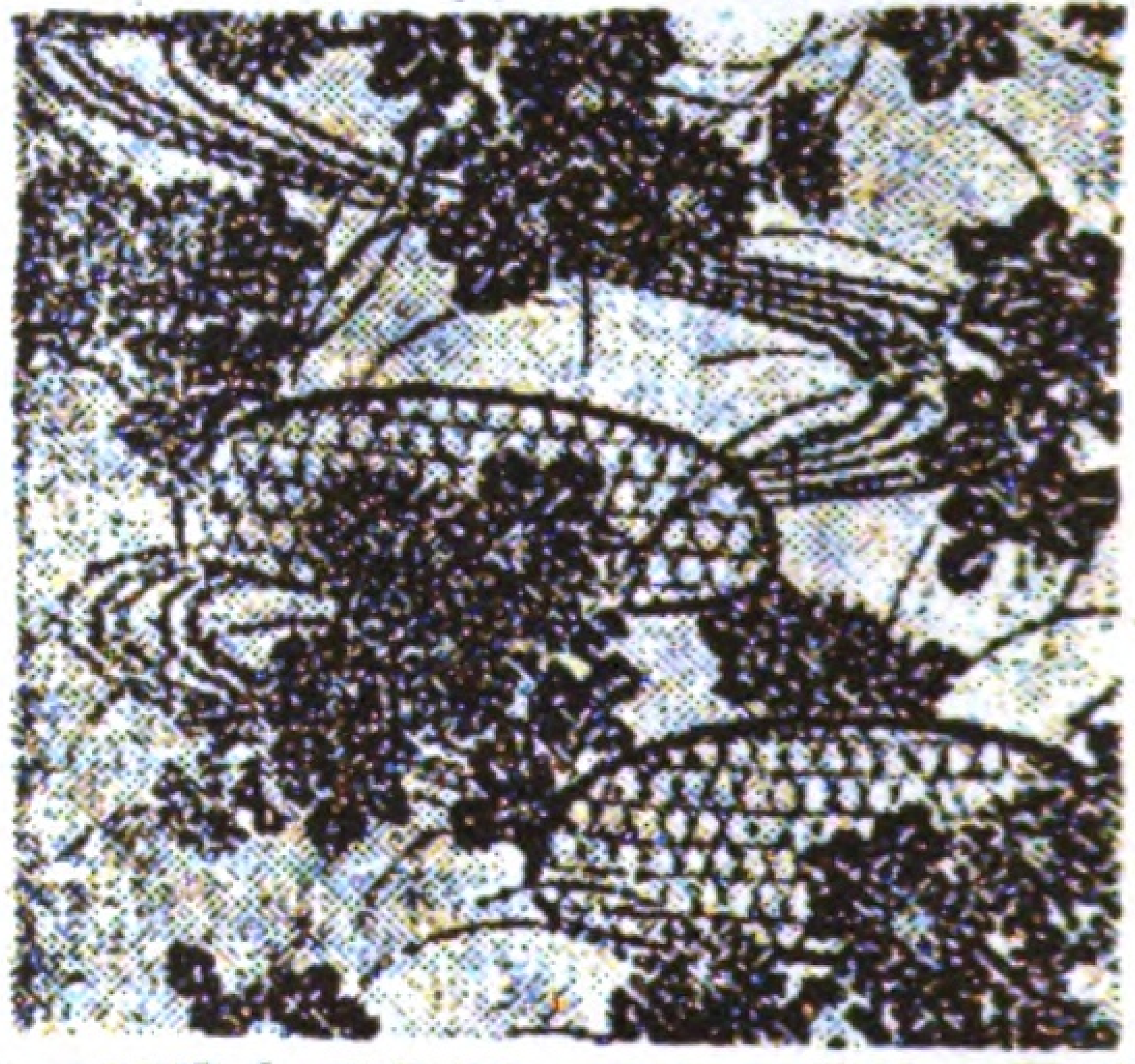
綿三本絽白上りに網代を抜きその上に萩を表はす若奥様向き一反三圓十五錢



地質は三本絽藤色地に百合は縹色と白上り十七八歳用で高尚一反七圓五十錢

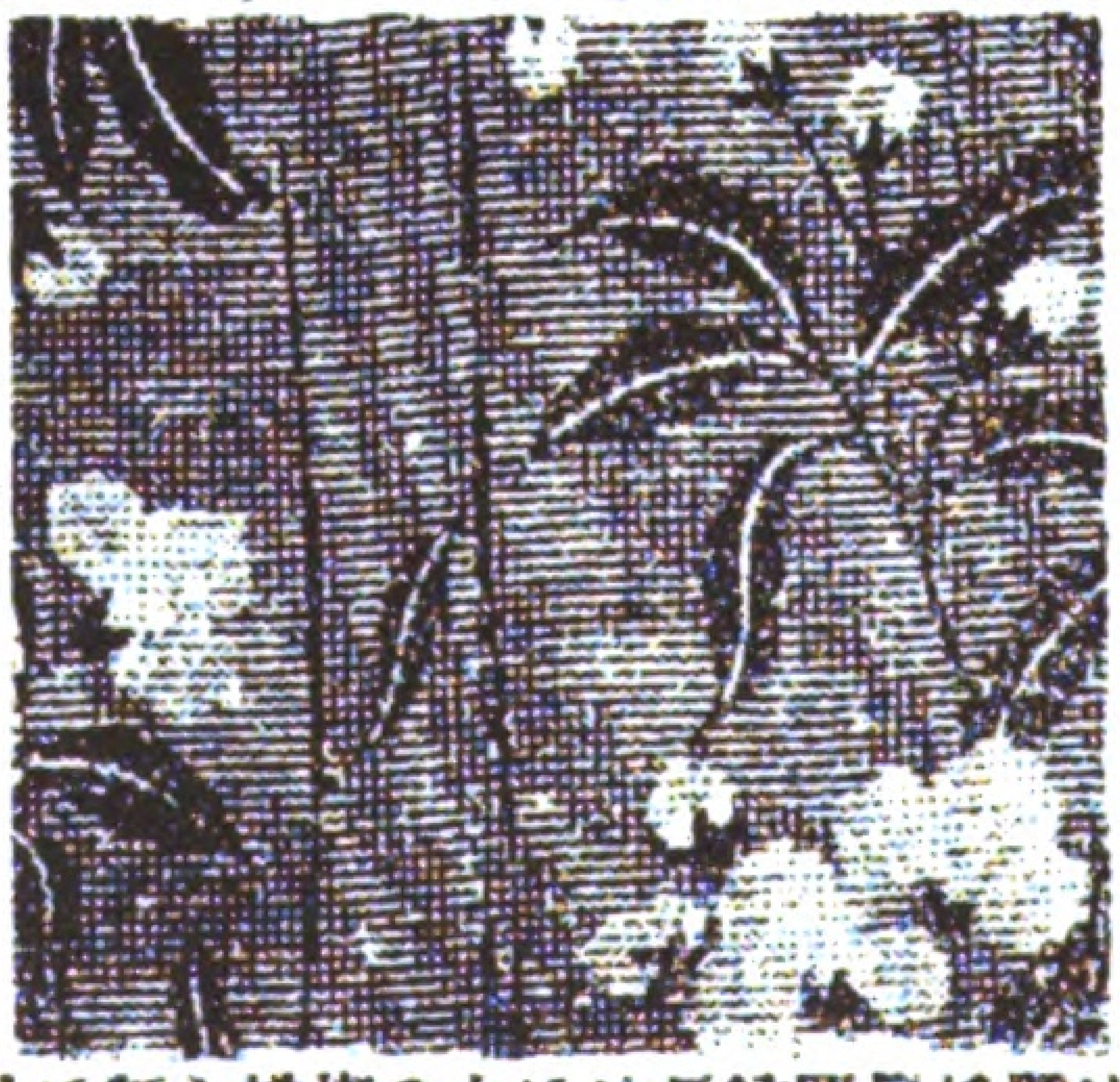


綿三本絽涼氣向十八九歳用紺地に白の垣根を縞風に大きく見せ一反六圓卅錢

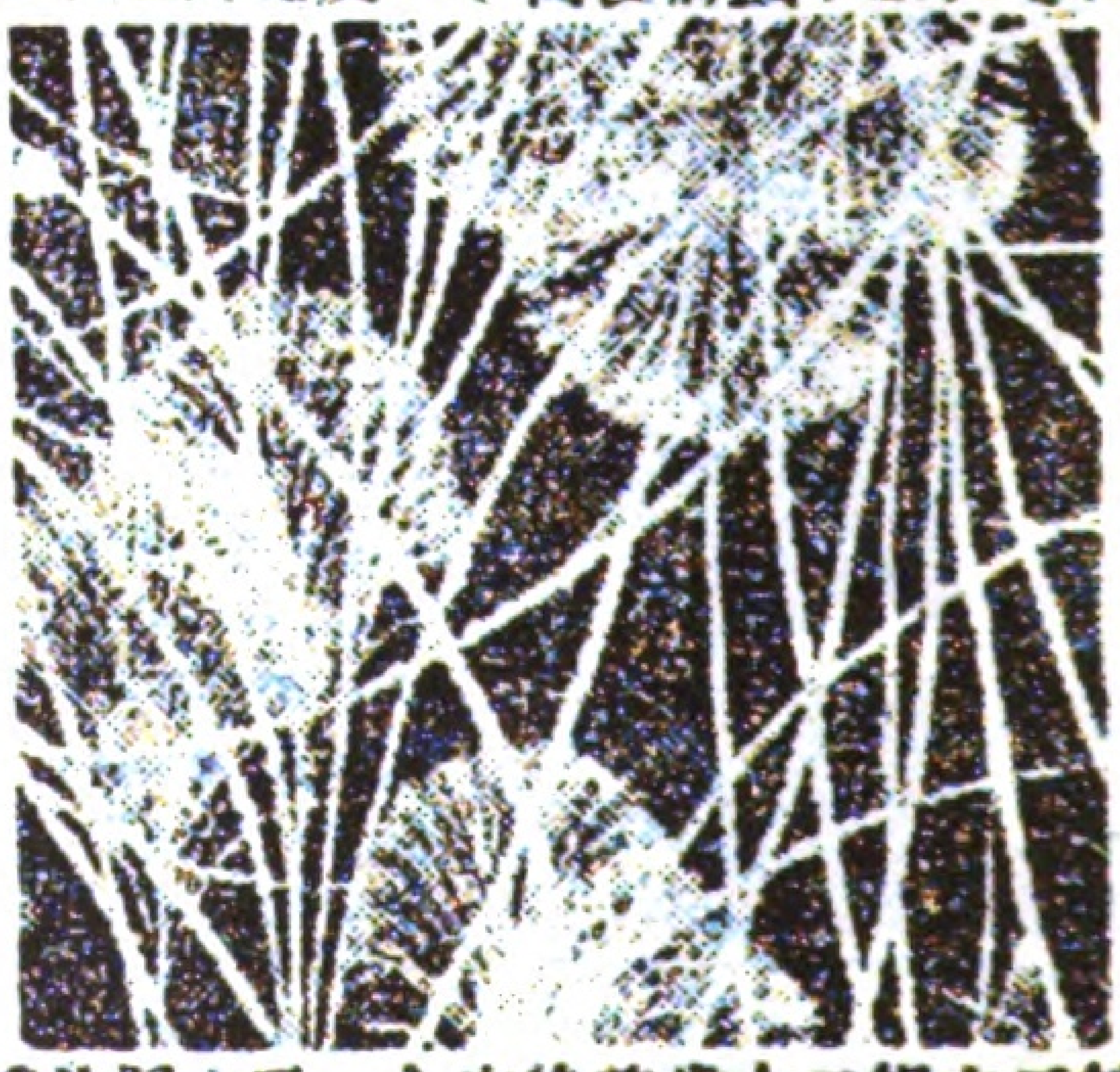


地質は綿明石白地に縹色で友禪風に表はしたる二十歳前後向き一反三圓五十錢

本年流行の中形浴衣は彩き陽な表はした立体的なものです、色は納戸地で、模様は主として草花、値段は昨年に比して、二割方安くなりました



地質は眞岡納戸地に白の模様を顯に見せて二十歳前後上品向一反六圓八十錢



絹三本絽二十歳前後向き一反六圓廿錢潤納戸地に薄を大きく白で現しました

◆◆地方よりの御注文は通信販賣部宛に願ひます◆◆

東京市 越 三越呉服店 駿河町

THE JOSEI KAIZO
A LADY'S MONTHLY REVIEW OF SOCIAL AFFAIRS, LITERATURE, EDUCATION, POLITICS, ETC. PRICE. FIFTY SEN A COPY.
OFFICE: KAIZŌ SHA, 1, ATAGOSHITA MACHI SHIBAKU, TOKYO.

大正十一年九月十三日第三種郵便物認可
大正十二年六月一日發行（毎月一日一回）
大正十二年五月十三日印刷納本
第二卷第六號
六月號
定價五拾錢（送料二錢）

